
クラスで世界大戦！？

S . S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラスで世界大戦！？

【NZコード】

N8986D

【作者名】

S・S

【あらすじ】

普通の高校生小嶋准一は日本史の特別授業ということでバーチャルの世界で日本・朝鮮半島・中国にまたがる大国を指導し、1900年から1945年までの歴史を体験することに。ただし、ただ史実どおりにやるのではなく、自分達で歴史を作り上げていく！その間で起こる2度の世界大戦、果たして彼は無事乗り越え、国を繁栄させることができるのか！？

プロローグ（前書き）

えつとお決まりの文句ですが、このお話はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

プロローグ

「…であるからして、この関数はこのような放物線を描く。この時
最大値は…」

退屈だな…。

俺はシャーペンを机に転がして窓から外を眺めた。
しかし、外を眺めても枯葉が風に舞つてゐるだけでなんの面白みもない。

そろそろ冬だな、母さんにコタツを出してもらわないといけないな
と思いつつ視線を黒板に戻す。

俺は小嶋准一、普通の高校2年生だ。

今は数学の授業中。

俺ははつきり言つてこの「数学」という学問のどかが面白いのかさ
っぱり分からぬ。

サインだのコサインだの意味の分からぬ記号が並び、無駄に多い
公式を覚える。

本当に勘弁してほしい。

こんなの大学受験に必要なかつたら授業をボイコットするといふだ。

15分後、ようやく数学の授業が終わつた。

俺はさつと荷物をまとめて次のクラスに向かつ。

今度は先ほどの数学とは違ひ授業が楽しみだ。
次は俺の好きな日本史。

授業が楽しい、待ち遠しいと感じるのは日本史以外には体育しかな
い。

この一つが授業に無かつたら俺は学校に来ないかもしない。

そして日本史の授業を受ける「地歴公民教室」に着くとドアに紙が貼られていた。

そこには、「今日は特別授業のため『視聴覚教室』に来るよ」と書いてあった。

またビデオが何かでも見るのかと思い何の疑問も思わず教室に向かう。

途中で同じ日本史を受ける奴と会い、教室変更を知らせて一緒に視聴覚教室に入る。

俺達は入ったとき、明らかに教室を間違えたと思った。なぜなら教室の様子が激変していたからだ。

いつもならただ机と椅子が並んでいて、前にちょっと大きなスクリーンがあるだけの閑散とした教室なのだが、今日は見たこともない大きな機械が全ての机の横にある。

しかも教室の前方には白衣を着た研究者っぽい変なおっさんが10人くらいいたし、自衛隊の制服を着た厳つい顔したのも数人いた。さつさと退散しよう、と教室から出ようとしたら日本史の永見先生が廊下から入ってきて、

「小嶋、どうした？忘れ物でもしたのか？」

と不思議そうに聞いてきた。

「あ、教室ここであつてるんですか？なんか様子がおかしいですか？」

と俺が言つと、

「やつだよ。ここ視聴覚教室だ。そ、席に着いてくれ。今日は面白い授業になるわ」

「す、じつをつかした声で言つ。

俺達は事情が飲み込めないまま座りされた。

しばらくして後から来た生徒が躊躇しながらもそれぞれの席に着き、チャイムとともに授業が始まった。

まず、永見先生が教卓の前で話し始める。

「えーと、今日は今までの授業とは全く違う授業をします。このたび、うちの学校は文部科学省と防衛省の特別指定を受け、ある新しい授業のモデル校となりました。その授業とは……、君達に近代の歴史を体験してもらいます。しかもただ昔の食べ物を食べてみたり服を着てみたりしたような、今までのものとは根本的に違います。あなたたちにバーチャル世界においてある国の主となり、その国を動かして歴史を作つてみてもらいます。それで史実とどれくらい違う世界となるのか比較してもらいたいのです。詳しいことはじつらの出島聰史氏に説明してもらいます」

先生がじつらに、と手を出すと後ろにいた白衣の男が前に出てきた。

ここからの説明は無駄に長い上に分かりにくかったので簡単にまとめる。

まず、俺達は1900年から1945年の世界で、ある国のリーダーとなりその国を動かしていく。

しかし、ただ国の政治をやつしていくだけではあまりにも史実とかけ離れるし、飽きたかもしれない途中で史実どおり世界大戦は自動的に2回起こす。

そして、俺達は基本的にその国の王となるので結構好き勝手できる。ただしあまり無茶をやると普通に反乱やクーデターが起きるので注意。

それと国の人々については俺達だけでは何をしていいのか分からないので、アシスタントが一人必ずついてアドバイスをくれる。

今回俺達は45年間も体験することになるが、これはバー・チャル世界に俺達の意識が飛ぶだけで終わってから意識が戻ってきたときにはわずか2・30分経っているだけらしい。

故事の「一炊の夢」と同じ状態だと。

あと他にルールとかもあつたがまたそれが出てきたときにおいでおいで説明をしていく。

何しろあのおっさんの説明は本当に長いし本気で意味が分からぬ。延々と20分も喋った挙句最後にこれにまとめておきましたんでと冊子を配りだす。

最初からそうじるーって感じだ。

「よし、それでは早速始めましょうか。おっと、その前にそれぞれ国を決めておかないとね。じゃあ前から順にクジを引いて下さい。そこに書いてある国、といつても勝手にくつつけたり分けたりしてあるから今の国とも当時の国ともかなり変わつて来るけどね」

そう言って永見先生が教卓の上においてあつた箱を取つて前から順番にクジを引かす。

何人かが引いていくとそれを後ろにいた白衣の研究員が受け取つて何かをパソコンに打ち込み始めた。

しばらくすると前のスクリーンに世界の白地図が現れ、決まつたと

ここには色が塗られて名前が表示される。

よく見るともともと決まっていたところがあり、そこには先生らの名前があった。

ぼーっと眺めているといつもの間にか自分の番が来ている。

あわてて前に書いてクジを引くとそこには「日本・中国」と書かれていた。

それを渡してスクリーンを見ると日本・韓国・北朝鮮・中国の地図が白から赤色に変わり、中国の真ん中あたりに「小嶋」と表示される。

「日本と朝鮮半島プラス中国全部…。でかい国だな」

俺は呆気に取られた。

これからバーチャルとはいえ10億以上の人を動かす立場になるのだ。

ここにきてものすごい不安に襲われる。

しかし、それとは裏腹に楽しみに思っている自分もいた。

おそらく自分だけではないが、今まで歴史を勉強するたびにこれをこつしていたらどうなったんだろう、こうしていたらもつと上手くいったらうと何度も思ったことがある。

それを自分の手で変えてもつといい歴史を作りたいという思いも出てきたのだ。

いつもして不安と期待の入り混じる俺達の45年間が始まった。

プロローグ（後書き）

いきなり授業でこんなことをさせたり日本の領土がやたらと大きかつたりと、かなり設定は乱暴ですがどうしてもこういう戦記ものを一度書いてみたかったのです。これからかなり長くなるかもしれませんがどうぞお付き合いください！感想、意見等も隨時お待ちしています！！

第1話 設定？

さて、ではすぐ始まるのかと思ったが45年間を始める前にやらな
いといけないことがあった。

この歴史作り（というよりゲームかな）の設定である。

まず、国名の設定からだ。

何にしようかいろいろ考えたがここは普通に「大日本帝国」でいく
ことにした。

次は自分の立場の設定。

日本の国家元首になるのだから俺はもちろん天皇ということにする。
ただ、1900年はまだ明治帝が史実では「健在」なのだが、ここは
早めに「お隠れ」になっていたので俺はその後を継ぎ、大正をと
ばして昭和天皇として即位することにした。

その次は国の内部について。

今回は複数の国がくつついて新しい国となっているため、様々ななと
ころでレベルがバラバラになっているのだ。
だからここは一番進んでいる史実の日本レベルに技術水準とか生活
水準をあわすこととした。

そして民族や言語の問題。

使う言語が異なると俺が理解しづらい。

一応自動翻訳もできるようになっているみたいだがすべて日本語に
統一。

民族も様々な民族が混じるといがみ合いの原因なので今回はすべて

日本民族に統一した。

さらには軍隊の編制まででてきた。
自動的にコンピューターがやってくれるとこうのもあつたが「」が
自分で考えてみる。

俺はもともとこうのは結構強い。

まあ、自分を戦争マニアとまでは思わないが太平洋戦争や日露戦争
についてはいろんな本も読んだし調べたりしているからかなりの知
識はある。

まあ、こういうのに興味を持ち出したのが小2の頃からだからもう
10年くらいいろいろ調べてきたことになるし。

さて、まずは海軍から。

海軍は別にこれといつてつかなかつた。

戦力は主なものは戦艦6、装甲巡洋艦6、一二等巡洋艦7、三等巡洋
艦8、駆逐艦32に水雷艇が56、他に通報艦が4隻ほどい。

ほぼ日露戦争直前の状態で駆逐艦と水雷艇が多いくらいだ。

これを俺は呉・横須賀・函館・旅順・上海・基隆・香港に分散して
配備した。

しばらく戦争はなさそうだし別に1箇所に固める必要もないだろ。

陸軍は国内を8つに分けた。

日本・朝鮮・満州・華北・華中・華南・新疆・西藏の8つでそれぞ
れに方面隊を置き各部隊をその傘下に入れる。

ただ陸軍部隊はすべて合計で102個師団と12個騎兵旅団、24
個砲兵旅団もありさらにそれに加えて国境警備隊が別枠であつて明
らかに多い。

戦時ならこれでも足りないかもしねないが、平時でこれだけあつて
もただの「」になるだけだ。

そのほか季候や地形に変化があった。

これは設定中に中国の地図を見たときに気づいたのだが、まず中国の新疆のほうにある大きな砂漠が緑地になっていたのである。普通の世界でいうタクラマカン砂漠やジュンガル盆地に広がる広大な砂漠が緑地になっていたのだ。

これはかなり大きい。

ここを開拓して農地にすればかなりの収穫があげられるはずだ。新たな穀倉地帯ができるかもしない。

また、他に大きく変わった点として西藏地域の標高が約1000メートルも下がっていたことがある。

本来3600メートルくらいの標高にあるラサ（西藏自治区の首都。こないだ暴動がおきたことで結構マスク）でもとりあげられていたりしたところが2000メートルちょっと下がっていた。

これで少しは暮らしやすい土地になるだら。

ただいいことばかりではなかった。
ほとんどの鉱山が地図に無い。

位置を変えられてしまってるだけならまだしも根本的になくされちゃたらかなりの痛手だ。

しかも探すにしてもこれだけ広大な国で探すとなるとちょっとややつではない。

かなりの金と時間がかかりそうだ。

最後に首都だが、東京は様々な問題を抱えている上に戦争で直接艦砲射撃や航空攻撃にさらされる恐れもあるし、地震も起こる。

俺は関東大震災なんて経験したくはないし、死にたくない。

そうそう、このゲームは自分が死んだら終わりだ。

まあ、よくあるパターンだな。

で、話がずれたが俺は西安を首都にすることにした。

ここは秦をはじめさまざまな王朝が置かれてきた都市である。

しかし地図を見る限りこの世界では人口3万人程度のかなり物静かなところになっていた。

本来首都は政治の中心地でありさえすればよく、交通の便さえ良ければ問題はない。

その点西安は多少奥地に入つてはいるものの黄河も流れているし、そのうち飛行機が出来れば問題はなくなるだろつ。

さて、設定は大体こんなものか。

まあ今後必要に応じて新しく設定しなおしたりするみたいなこともあるみたいだが、とりあえずこれでゲームスタートだ。

今度こそ、俺達の45年間が始まった。

第1話 設定？（後書き）

さて、これから実際に話を進めてこります。しばらく戦争はおきないのではつまらないと感じる方もいらっしゃるかもしませんが根気強くおつきあいくだれい。

第2話 アシスタンツ登場

「よし、みんな設定は終わったな。じゃあ始めるぞ。その機械の上にあるヘルメットを被つてくれ」

永見先生の合図で全員が恐る恐るヘルメットを被つた。俺も気味が悪いなと思いつつ素直に従う。

そして被つて数秒後俺の意識はどこかへ飛んでいった。

気がつくと俺はベットの中にいた。

一体どこだらうか、と思いベットから降りて開け放しになつている窓から顔を出す。

窓の外には大きな川が流れていて遠くにはかなり高そうな山々が連なつてている。

落ち着いたいとこだな、と思いしばらく眺めていた。

そして5分くらい経つたとき、ドアがノックされた。

「陛下。入つてもよろしくいらっしゃいますか？」

なんかかわいい声が聞こえた。

声は女の子っぽいけど誰だらう。

まあとりあえず入るように言った。

そしてドアが空いてそこから入ってきたのはなんと……。

めっちゃかわいい女の子ーではなかつた。

そこには2匹の犬である。

「陛下、私たちが陛下のアシスタントでござります。以後よろしく
お願ひします」

と、犬が喋った。

「え？ 君達がアシスタント？ 人間じゃないの？」

俺は面食らつた。

確かアシスタントは「1匹」ではなく「1人」って聞いていたのだ。
しかも動物達がアシスタントってものすごく頼りない。

「ええ。 今回のゲームではアシスタントは貴方様が今飼われている
動物達が登場して勤めることになつております。ご心配なく、普段
は人間に化けてますので。 それとちゃんと陛下をお助けしてまいり
ますので、どうかそんなに不安そうなお顔はなさらないで下さい」

と、もう1匹の犬が話す。

俺はあわてて顔を引き締めてたずねてみた。

「飼つてる動物？ つてことはお前らはジョンとクッキー？」

俺は犬2匹に聞いてみた。

2匹ともうなずく。

彼らは柴犬で赤い首輪をしているのがジョン、青い首輪をしている
のがクッキーだ。

こいつらは双子で3年前に知り合いのブリーダーからもらつた。
ちなみにジョンはオス、クッキーはメスである。

「ふうん、そういうや俺んちまだ飼つてる奴いるけどあいつらは登場

なし?」

俺んちには他に母さんが買つてるフェレットが1匹と妹が飼つてる
リスが2匹いる。

「ええ。全部呼ぶと動物園になりそなうので。早速ですがとりあえ
ず今の状況について」説明しましょう」

クッキーが喋り始めた。

大体の内容はこうだ。

昨日俺は天皇の宣下を受けたことになつていて。

そして今は西安の皇居にいる。

これから数時間後に内閣の閣僚が全員集まつてこれからについて話
し合つことになつているらしい。

現在の内閣は伊藤博文が首相でその他海軍大臣に西郷従道、陸軍大
臣に山形有朋、外務大臣に小村寿太郎などがいる。

政府の方針は史実どおり富国強兵。

前回の国会でも陸軍がさらに5個師団の増強を要求していただらしい。
ただ明治帝の崩御で国会が流れてしまいその話は立ち消えとなつた
ようだが。

そして現在の日本の国力だが、かなり弱いよつである。

軽工業は比較的成長しているが重工業はさっぱり。

昨年出来た八幡製鉄所が現在国内唯一の近代的な製鉄所。

造船業も駆け出しの段階でようやく初の国産軍艦が2隻ほど建造中
という状況。

ただ軍艦といつても三等巡洋艦の「対馬」と「壱岐」だ。

この2隻は3000トン弱の小型艦で日本にはまだまだ大型艦を建造できる力はないとのことだった。

ちなみに史実なら「松島」型巡洋艦の3番艦「橋立」が横須賀海軍工廠での建造だったがこの世界では「橋立」もフランスで建造されている。

それと国民の暮らしぶりだがまだまだ全体的に貧困層が多い。

特に小作農達は思い年貢に悩まされ一日を必死に生きているとのことだった。

労働者達も安い賃金でこき使われ日々が地獄。

公害も発生しているが政府と結びついた企業により揉み消されているらしい。

状況は本当に良くない。

ではこの状況を開拓するためにするべき」とはなんだらうか。

それは今すぐには思いつかないがとりあえず今日の御前会議で聞きたいこと、言いたいことは大体決まった。

閣僚達にいろいろ白状させてやろう。

天皇には「天皇大権」といわれる強い権限がある。

これは天皇は神聖で不可侵であり、文武官の任免・国防方針の決定・条約の締結・宣戦と講和などを議会を無視してできるというものだ。当然恐れ多くも天皇陛下の「」命令に逆らつたり、御前で嘘をつくことなどできないのだ。

まあどんなに上手く嘘をついたり言い逃れをしたりしてもクッキー達も御前会議に出てくれる（俺の副官として）ので嘘をついていたら分かる。

そしたらそいつは即刻クビだ。

まずは内閣の掃除から始めていこう。

第2話 アシスタンシ登場（後書き）

「意見」感想お待ちしております！！

御前会議は皇居内のある部屋で行われた。

俺がその部屋に入るともうすでに他の閣僚達は部屋に入つており、直立不動で俺が席に着くのを待つ。

俺は席に着くとどうぞ、と座るよつて促す。

そして全員が着席するとまずは首相である伊藤が挨拶を始めた。

「陛下、ご即位まことにおめでとひざります。我々閣僚達が全国民を代表いたしましてご即位のお祝いを申し上げます」

まずい。

このままだと長つたらしい祝詞が始まつてしまつ。

俺は伊藤の挨拶をさえぎつて本題に進もうとした。

「つむ。挨拶はもうそれぐらいでよいぞ。それより私はこのたび天皇の地位に就いたわけだが、諸君らの今までの政治についていろいろ疑問に思つてゐるところがある。それについて答えてほしい」

すると閣僚達は驚いてお互に顔を見合せたりしたが俺は気にせず話し始めた。

「まず一つ曰、今の国民は毎日本當に辛い生活を送つてゐるらしいな。一日一日を生きるので精一杯、といつもの達ばかりだというではないか。にもかかわらず諸君は私腹を肥やすのに一生懸命、または軍備の増強ばかり考えてゐる。なぜだ?」

先ほどより大きな動搖が起きたのが見て取れた。

「陛下、我々は私腹を肥やしてなぞおりませぬ。我々は日々国政に励み、国民がより幸せに暮らせるよう努めております。また、軍備の増強も周辺国の脅威から国民を守るためだけでござります」

伊藤博文が弁解する。

しかし、そんなことで納得は出来ない。

「嘘をつくな。そんな言い訳で納得できるわけ無いだろ。何が国政に励みだ。貴様らの中には企業とつるんで国民が苦しむのを見て見ぬふりをしてる奴が何人もいる！それと今周辺国の脅威から守るために軍隊を増やしていると言つたな。どこに脅威があるのだ。佐上一（ジョンの人間名）副官、資料を配れ」

それまで少しでも天皇っぽい喋り方をしようとしていたがつい元の言葉に戻ってしまった。

で、今言った資料と言うのは周辺国の軍備を表にしたものだ。ジョンに頼んで作つてもらつたそれには周辺国の艦艇・陸軍部隊の詳細な数が書かれていた。

これを見る限りこの日本の周辺には今のところ脅威になりそうな国などない。

極東ソビエト帝国（ロシアのうち東経105度より東側を領土に持つ国）がそこそこの陸軍を持っているが兵数は日本の半分ちょっと。海軍ははつきり言つてこのあたりでは無敵である。

そもそも戦艦を持つてゐる国が日本だけなのだ。

一番近い戦艦保有国は太平洋の向こう側にあるアメリカという状態である。

「よく読めーどの国が脅威になるか試つてみろ」

伊藤は蒼白になつてこゝに見つかる。

「俺は軍備は必要だし、この国を世界最強にしたいといつ気持ちも分からんでもない。けどな、物事には順番つてものがあるだろうが。國民を守るべき軍隊が國民を苦しめてどうするんだ」

と言つとそれまで腕を組んで考え込んでいた西郷従道が急に喋りだした。

「もつともでござります。自分は陛下のござ意見をお聞きして自分を深く反省いたしました。自分は何のために倒幕のために奔走していたのかを忘れておつたようです。皆が幸せに住める国を造り、そう思つてたくさんの志士が命がけで戦い、散つていつたのであります。が今の自分は昔の幕府と同じことをしつりました。ほんに恥ずかしかことでござります。仰せの海軍軍備についてはすべて自分の責任であります。いかよな处分でもお受けいたします」

鹿児島詫りでそう言つて立ち上がり深々と頭を下げた。

さすが西郷の弟だ。

俺は感心した。

普段は茫洋としていて木偶の棒のよつて思われていることもあるが、実際はかなり頭の切れる男で部下思い。

そういう人物評を聞いたことがあるが本当にそうだ。
彼にはまだやめられるわけにはいかない。

「いや、西郷さんにはまだやつてもらわねばならない。海軍の大掃除をやつてもらつからんのつもつでいてほしー」

そういうと涙を流して「はい…」と返事をして頭を下げた。

「さて、今後の軍備の方針だが……」

その後5時間にも及んだ会議でさまざまなことが決まった。
それらは実行に移されてから説明していくことにする。

さて、実際に国は動き始めた。

国民はこれをどう受け止めるのだろうか。

第一政府の中でも反対が根強いだろうし上手くいかわからない。
しかし間違ったことはしてないと俺は信じている。

そしてそれから1ヶ月後には実行に移されたのが「軍縮」である。

第3話 御前会議（後書き）

今自分の頭の中では第一次世界大戦を飛ばして太平洋戦争をどう戦おうかなと考えたりしていますが、なかなか上手くいきません。昨日も考えていたのですが頭の中で戦わせてみたらハワイ沖で日本の機動部隊はほぼ全滅しました……。

こないだの御前会議を受け陸・海軍がそれぞれで削減目標を定め、それが実行に移されることとなつた。

まず、陸軍は3年間で12個師団と騎兵2個旅団を削減する。削減される師団はほとんどが華中・朝鮮・日本の3つの方面隊の下部隊だ。

これらの地域は他国との国境もなく、治安も良いため兵力を削減しても大きな影響が出ることはないだらう。

これにより陸軍は3年後には90個師団、10個騎兵旅団、24個砲兵旅団となる。

また、陸軍とは別枠で存在していた国境警備隊4万5000名も順次縮小され、警察や陸軍に任務を移管し、5年後には完全に解隊されることとなつた。

そして海軍だが今回は旧式艦艇の除籍が行われた。その対象となつたのが一等巡洋艦の「嚴島」型3隻、いわゆる三景艦だ。

これらは日清戦争（この世界ではなかつたが）の際に清が保有していた「鎮遠」「定遠」の2隻の戦艦に対抗するために建造されたものである。

そのため、その2戦艦に対抗するためわずか4000トンの船体に32センチ単装砲を1基搭載していた。

しかし、その32センチ砲は実戦でまったく役に立たなかつた。

砲弾を装填するのになんと30分から1時間もかかり、黄海海戦では3隻あわせてもたつたの13発しか撃てず無用の長物でしかなかつた。

それどころか1908年、遠洋航海に出ていた「松島」が主砲火薬庫の爆発事故を起こし中国の馬公で沈没、この事故で士官候補生33名を含む223名もの死者を出す大惨事となつた。

敵艦を沈めるはずの主砲が自分を沈めたというなんともいえない皮肉な結果となつてしまつたのだ。

ところでなぜこの世界にこの三景艦がいるのだろうか？

対抗するべき清の戦艦もいないのに32センチ砲はちゃんと積んであるし。

まあ、この辺はただ史実にあわせただけなのかも知れない。

話を戻そう。

この3隻は現役を引退、「厳島」のみ練習艦として江田島の海兵学校に配備されるがあとは除籍して解体処分となつた。

他にも旧式の砲艦が3隻と水雷艇が16隻除籍され、測量等に従事していた木造艦も残らず除籍される。

これにより海軍は戦艦6、装甲巡洋艦6、一等巡洋艦4、二等巡洋艦8、駆逐艦32、水雷艇40、通報艦4となつた。

これらによつて多数の失業軍人が生まれることとなるが彼らのうち希望者はタクラマカン地域やジュンガル盆地の開発にあつることとされた。

他にも一般に広く公募し、小作農達にも積極的に参加を促す。

この開発計画は始めの5年ほど国に雇われて開発に従事すれば土地を与えられることになつてゐる。

焼け石に水かもしれないが、それでもなんとか苦しい小作農を助けようとした計画なのだ。

そして藩閥のみで上がってきた無能な将校の首切りだが、海軍は山本権兵衛に、陸軍は児玉源太郎にやらせた。

これにより海軍は96名、陸軍にいたつては120名もの人数がリストアップされた。

俺はそのリストを受け取ると、さすがにこれを山本達にやうすと軍部内の対立を招く恐れがあるので俺が一人一人を呼んで宣告する。結局この宣告を終わらすだけでも2週間もかかつてしまつた。

宣告すると涙を流すものまでおり、それを全て見ないといけないのでかなり辛い2週間だったが今は人員を整理し、余計な出費を抑えていかなければならぬのだと俺も耐える。

幸い、軍部内で対立などが起こることも無く無事に終了した。

さて、これで浮いた出費も大体がタクラマカン地域の開発につき込まれるためほとんど相殺されてしまう。

しかし、ただ金と資源を浪費するよりははるかにマシである。

俺はこれで軍縮にひとくぎりつけ、次の課題に向かった。

今度は「憲法改正」である。

第4話 軍備縮小（後書き）

この話から後書きで古今東西の名将達の名言を紹介していくつもりであります。毎回「い」意見・「い」感想お待ちしております!」だと（書いてる方も）面白くないので。

今回の名言は有名なこれ、

「百年兵を養うは、まだ平和を譲るためである」

—日本五十六連合艦隊司令長官

「なあ、憲法改正したいんだが『大日本帝国憲法』と『日本國憲法』がどこが違つた忘れたんだけど。パソコンあつたら調べてやれるのにな…」

俺は自分の部屋で大日本帝国憲法を簡単にまとめた資料を見ながら隣にいたジョンにぼやいた。

「はあ、パソコンですか。いいですよ、出して差し上げます。ただし、この世界の他の人に見せてはいけませんよ。それと兵器の構造などのページも見てはいけません。私がおそらく監視しながらなら使用可能というルールになつております」

ヒジョンが言った。

「そうだったんだ。そんなルールあつたなら早く言つてくれればよかつたのに」

ヒジョンは、

「ちゃんとルールブックには書いてあつたはずですよっしつかりと読んでくださいないと」

と言つてあぐびをした。

「まあ、何でもいいや。パソコン出して

「はい、どうぞ」

ジョンがワン…と一回吠えると机の上にポンとパソコンが現れた。

「そうそう、言い忘れておりました。当然17歳である貴方様は18禁のサイトを「」覧になることはできません。ブロックをかけておきました」

パソコンの出た机の上に飛んで言ひ。

「分かったよ。ちゃんと真面目にやるよ」

そしてそれから2週間ほどパソコンとにらめっこした結果大体の骨子が決まった。

まずは「天皇大権」について。

本来民主化を推進しようと思えば真っ先に削除しなければならないのがこの権力だ。

しかし、今回のゲームの場合自分が天皇であるため、ある程度はそれを残しておかないとまずい。

「象徴」になつたんじゃ もともとの目的が達成できなくなる。

そこで天皇を内閣の長として組み込み、天皇の提案であつても議会の承認がなければその法案・命令は実行できないことにした。

ただし、政府や議会の暴走を抑えるため議会が議決した法案であつても、天皇である俺が拒否すればその法案は無効にすることにした。つまりアメリカ等の大統領制でいう「拒否権」があるということだ。ということで今の日本国憲法でいう「国民主権」は残念ながら実施できなかつた。

まあ、仕方ないといえば仕方ないが。

次は「統帥権」だ。

昭和に入つての軍部の行動の根拠とされ、政府が軍部の独走を許してしまった原因となつたものである。

しかし、今回は天皇が俺であるため当然暴走なんてさせない。さらに前述のように天皇自体が内閣に組み込まれているため、必然的に軍部は内閣の意向に従わざるを得ない。

だからちゃんとシビリアン・コントロールが出来るでいるし、これはそのまま残すこととした。

そのほうが戦争中に口を出すのに便利だし。

そしてその次は「国民の権利」について。

本来の大日本帝国憲法では「法律の範囲内で」という限定的なものだつたが、この改正で「人が生まれながらにしてもつてゐる不可侵の権利」に書き換えられる。

これにより、信教・思想・良心・経済活動・言論などの自由が認められることとなつた。

男女についても「両性の本質的平等」が明記され、いわゆる男尊女卑の考えは憲法上否定される。

また、参政権も20歳以上の全男女に与えられることとなつた。

最後は「国会」について。

大日本帝国憲法ではなく貴族院と衆議院の2つが存在しているが、貴族院は選挙ではなく華族と呼ばれる特権階級から政府により選ばれており、民意とはあまり関係のないものであつた。

そこで今回は貴族院は廃止し、衆議院の一院制とすることにした。本来しつかりとした審議をするためには一院制が良いとされるし、ほとんどの国が一院制を採用している。

しかし、俺はもともとあっても変わらないと思つ。
基本的に現代の政治だつてそうだが、衆議院で通れば参議院でも通る。

ただ、今はねじれ国会とこうことで参議院で否決されるとも多いが、実際「衆議院の優越」によりその気になれば衆議院での再可決で法案は通るのである。

だつたら一体何のためにあるのか。

それにはつきり言つて国会議員なんてやたらと金をもらつてゐるに大した働きをしていない。

本会議中に寝る奴だつているのだ。

だつたら国会議員がたくさんいてもそれこそ完璧なじへつぶしだる。

だから俺は衆議院（定数480）のみの一院制を採用することにした。

他にも政教分離の原則が導入されたたりしたが、大体主な改正点はこんなものだ。

この憲法改正案は1901年1月16日に帝国議会で可決され、国民に公表された。

今回は国民投票は行われないが、この改正憲法が施行された7月16日以降に憲法改正があつた場合には国民投票による過半数の賛成が必要となる。

そして、この憲法に基づき様々な法案が制定・改廃されていった。

第5話 憲法改正（後書き）

「意見」感想お待ちしています！

今回の名言

「平和とは、悩んでいる期間であり、戦争とは、悩みを解消するために行動する期間である」

フレデリック大王

憲法の内容が国民に示されてから施行されるまでの半年間、多数の法律が慌ただしく整備された。

その数は大小50余りにもなるが、(クッキー) そのうち主なものだけ(クッキー) 説明する。

えっと、では、説明いたします。

まずは言論の自由に関連するものから…。

今まで政府により様々な形で言論の自由が抑圧されておりました。その主なものでいうと、誹謗、誹謗、新聞紙条例、集会条例などですが、全て撤廃されました。

これらは民権運動家達による政府批判を防ぐために制定されました。が、日本国憲法で言論の自由が認められた以上これらの条例は完全に違憲です。

よって国会審議では満場一致で撤廃されました。

次は政治に関連するものです。

今回の憲法改正により20歳以上の男子・女子全員に選挙権が与えられました。

これに伴い普通選挙法が施行されます。

これにより来年9月に予定されている衆議院選挙から国民の意思がはっきりと示されていくことでしょう。

また、他に次の憲法改正では国民投票が必要となるためそれに関連した国民投票法も施行されます。

また、政治家や官僚達への法律が強化されました。

公職選挙法の改正により連座制（選挙事務所等の役員が同法に違反した場合その候補者も失格となる制度）が導入され、罰則もより強化されました。

また、国家公務員倫理法や汚職防止法が施行され、横領等を犯した公務員や議員はその金額の大小を問わず執行猶予なしで懲役10年以上、場合によっては無期懲役といった極めて重たい刑が課されることとなります。

このほかにも男女平等を進めるために男女共同参画社会推進基本法などが現在審議中で、来月には可決される見通しです。

そのほかの分野では未だ低い就学率改善のため教育振興法や大学法などが成立していますが、財政状況が厳しいため今すぐ実行ということは困難と思われております。

憲法改正に基づく法案で主なものはこれぐらいですがそのほかにも多数の法案が成立しました。

まずは省庁の統廃合について。

人員整理や各業務のスリム化を目指す行政整理法が施行されたのに基づき、さまざまな省が統廃合され、1府11省制（陛下が前におられた世界と同じですね）へと移行されました。

軍部も海軍省と陸軍省に分かれていたのが国防省に統一されました。

組織としては国防省の傘下に陸軍庁・海軍庁や今回新設された技術開発庁等があり、その上に統合作戦本部がおかされました。

この統合作戦本部は陛下を本部長とし、陸・海軍の最高司令官や参謀達が集まり国防方針や部隊の配置などについて陸海共同で会議を行ふこととなつております。

技術開発庁も陸・海軍関係なく共同で技術革新をすすめていくようになっています。

そして次は工業に関するものについて。

現在我が国はまだ工業が育つておらず、武器も他国の兵器をライセンス生産できる程度です。

このままで1914年ごろに予想される第一次世界大戦を迎えた場合、我が国は非常に困難な戦いを強いられます。

そこで政府が工業、特に重工業に対し手厚い保護を与えるとともに技術革新を進めていくため産業振興法などが整備され、国内工業に対し技術面や資金面での支援を行っていくことになりました。

また、工業に押されて農業が衰退するのを防ぐため農業基本法・小作農支援法・農地改革法などが施行され、農業にも保護を与えてたり新技术を導入して生産の効率化を図つていくとともに小作農の救済も進められていくことになっています。

そのほか外国企業による国内の資源流出を防ぐため、国内鉱業保護法により外国企業の日本国内の鉱山開発を禁止しました。

これはデメリットも多数抱えていますが、他国政府系企業が日本の資源をその国へ持つていってしまい、日本国内に回らなくなってしまっては困るのでこのような保護法を導入しました。

（ただし国内企業が採掘したものを輸出するのは政府の許可があればOKです）

他国から反発があるかと思いましたが意外にも他国も似たような法があつたりして文句を言えなかつたようですが、要するにみんなケチだつたということですね。

以上が主な法案です。

いつもお忙なご話を聞かせて顶いたりありがとうございます。

第6話 法整備（後書き）

ぶつちやけ今回の話はあってもなくてもいいよつな気がしていれるかどうか悩んだんですがせつかく書いたので結局入れました。本当につまらない話ですが一応民主主義が進んでるということを伝えたかったのです。

今回の名言

「冷静な平和主義者であろうとするなら、新しい格言を基礎におくべきである。それは、君が平和を望むなら、戦争を理解せよということだ」
——リデル・ハート

さまざま法案が整備されてから数年経つた1905年、もうすでに改変の効き目が始めた。

国内総生産ののびは10パーセント近くにも達し、重工業は手厚い保護により鉄鋼などの生産は毎年すさまじい勢いで伸びている。また国内各地で資源探査が進められており、1902年4月には西蔵のタングラ（唐故拉）山脈で大規模かつ質のいい炭鉱が発見され、翌年操業を開始した。

しかもそこから100キロ北のユイシューといつどこまでこれまで大規模な鉄鉱脈が見つかり、ユイシューはタングラ炭田の石炭を使ってユイシュー鉄山群の鉄鉱石から鉄鋼を精錬する大規模な製鉄所がいくつも造られ、鉄の街として発展を遂げていく。

鉄道も急ピッチで敷設中だ。

他にも今年に入つて朝鮮半島中部にある春川^{チョンチョン}で推定埋蔵量1万トンともいわれる金鉱脈が見つかり、これから財政を潤してくれることが期待されている。

これらの鉱山は国が見つけ、国により開発が行われているが民間企業による探査も進んでいる。

三菱グループ傘下の三菱鉱業は満州で鉄や銅の大きな鉱山をいくつも発見し、実際に採掘を始めているし、新興企業の中で最も業績を伸ばしている田坂重工も華北で見つけたカイロワン炭田の開発に乗り出した。

農業分野ではタクラマカン地域の開発が順調で、小麦や米などの生産量も増大した。

ただ、それにより値段がだいぶ下がってきていて農家の家計を脅かし始めている。

そこで消費の増大を図るためにインスタントラーメンの開発を行わることにした。

簡単な原理は俺が知っていたので、それを教えて技術開発庁に軍の携帯食料として研究させたのだ。

もし開発が成功したら当然市販化する。

値段は大量生産させれば安くなるし、おそらく俺達がいた世界同様かなり売れるはずだ。

こうした順調な経済成長の中、1905年度の国防方針を決める会議が行われた。

出席者は主な顔でいうと国防大臣西郷従道を筆頭に海軍からは山本権兵衛や常備艦隊司令の日高壯之丞やうのじょう、参謀の島村速雄や秋山真之など。

陸軍からは桂太郎（現陸軍庁長官）、大山巖、児玉源太郎などが出席している。

また、技術開発庁からは技術開発庁長官長岡外史や研究員数名が顔を出した。

「さて、我が国は現在順調に成長を続けている。そろそろ軍備も増強したいと思うがそうもいかない。収入の増加に合わせて出費も増えているからな。だが、技術革新だけは進めていきたいと思う。いざ軍備増強を図つても一世代前の軍隊が出来上がつても困るし、技術は日頃からしっかり研究しないと伸びない。そこで今回は陸・海軍の新兵器開発について話をしたいと思う。私も考えてきてあるがまずは用兵者である君たちの意見を聞きたい」

俺がこいつ語つとまづ発言したのは秋山真之だった。

「はつ、では発言させていただきます。昨年頃、アメリカでは潜航水雷艇なるものが開発されたと聞いております。まだ詳細は掴んでおりませんがなにやら水中を走り敵艦近くまで忍び寄ると水雷を発射し、水線下に大きな打撃を与えるとのことです。我が国もアメリカよりその潜航水雷艇を輸入して研究し、開発を進めていってはいかがかと存じます」

さすが秋山だ。

俺が言おうとしていたことを先に言われてしまった。

史実でも潜水艦や航空機の発達を予想する報告書を出したとどこかで聞いたが、こちらの世界でも変わらずしつかりとした先見の明の持ち主のようである。

ところで、彼の言つ潜航水雷艇とはおそらくアメリカで開発された「ホランド」級潜航艇のことだろう。

「さすがだね。私が言おうとしていたことを先に言われてしまったよ。おそらく秋山君が言つた潜航水雷艇は排水量60トン強、全長約16メートルで速力は約6ノット、安全潜航深度24、5メートルぐらいだ。武装は45センチ魚雷発射管が1門で魚雷は3発搭載、あと水中ダイナマイト砲というものを2基持つてゐるがこれは気になくていい。これは水中で砲弾を圧縮空気で撃つものだが実用性に欠ける。輸入した後即撤去して構わない。今年中に輸入して研究してもらおう」

と俺がインターネットで得た手元の資料を見ながら言つて、

「はつ。しかし陛下、なぜそのような詳細の資料をお持ちなのでしょか?我々は米国でようやく実用化できる潜航水雷艇が出来た、

としか聞いておつませんが……」

秋山が不思議そうな顔で聞いてくる。

俺は返答に詰まつた。

無論、インターネットで調べました！なんて言えない。

「まあ、これは……、その、うん。天皇の機密、皇機とこうじで」

と苦し紛れに言つと、了解ですと言つて顔を正した。

「他にはないか？」

と聞くと児玉源太郎がさつと拳手する。
さつや、と発言を許可すると起立して喋りだした。

「はつ。私は航空機について意見を述べさせていただきます。近年、
アメリカではガソリンエンジンを用いて従来の滑空機「グライダー
のこと」を飛ばすことに成功したという話を聞きました。詳しく調
べたところ、その機は約1分の飛行に成功したことです。これ
も先の潜航水雷艇同様輸入して研究したいと思いますがいかがでし
ょうか？」

こいつも俺の言つことをとりやがつた。

彼も明治軍人の中では後世で高い評価を受けているが、その評価に
違わない能力の持ち主だ。

史実では2年後にこの世を去ることになつているが、こっちの世界
では少し早く逝つてしまつかもしれない。

さつやらこのごろ体調が思わしくないらしく、今日も無理をしての
出席らしい。

史実で彼を心身ともに苦しめた日露戦争は無かつたが、陸軍内の人

員整理を任せたのが彼の負担になってしまったのかかもしれない。彼のような優秀な人物を失うのは惜しいが人間には寿命というものがある以上仕方ない。

「君もまた私の言いたいことを言つてくれた。私のデータによると12馬力のガソリンエンジンを搭載して時速50キロ弱で飛んだらしい。距離は250メートルほど。このままで使い物にならないが1時間ぐらい飛べるようになればかなり有効な兵器になる。おそらく10年もあれば他の国は500キロくらい飛んで他国の領土に爆弾を降らせれるような飛行機を作るようになる。日本もそれに負けてはいられない。予算はしつかりとらせる。技術開発庁は職員を開発者、おそらくライトという2人の兄弟だと思うが、に派遣して構造を聞いて来てくれ。できれば2人を日本に迎えて研究したいから一応それも打診しておいて欲しい」

児玉と技術開発庁の研究員が頷き、開発庁の職員はメモを取る。他国領土に爆弾を降らす、と言つた時に反応したのは児玉のみだった。

まあ、航空機そのものを全員良く知らないし、後に世界がいたるところで航空機により焼け野原にされるなんて夢にも思わないだろうから仕方ないが。

「他にはないか？」

その後何人かが発言したが大して面白味もない意見で、革新的なものはなかつた。

そろそろ俺の意見も出して良さそうだ。

「では、私からいくつか提案させてもらおう」

第7話 1905年度国防会議・前編（後書き）

今自分で信じられないようなスピードで次々に話を書いています。その分誤字・脱字等もひどいですが春休みの間はこのスピードを維持していきたいです。新学期になつたら、むしろ新学期の3日前くらいから滞るかもしれません。宿題という天敵が待ち構えているので……。

今回の名言

「軍事力を育成するほど儲からないことはない。しかし、軍事力がなければ、もつと儲からない」
—古代ギリシャの格言

「ではまずは海軍の方から話そつ。今後の建艦計画だがやはり戦艦や重巡、じゃなかつた装甲巡洋艦等の大型艦建造を自国で行えるようにならなければならない。しかし、急に造れといつても難しいだろ。そこでとりあえず新型装甲巡洋艦2隻を建造したい。もちろん、今すぐではない。少々時間がかかるてもいい。しかし、以下の条件を満たすような艦を造つて欲しい」

と言つて俺は資料を配つた。

その紙には簡単な艦のスケッチとデータを書いておいてある。

そこに書かれた内容は、

- 1、主砲20センチ連装砲4基8門
- 2、速力23ノット以上
- 3、副砲は14センチ砲か12センチ砲を6門ほど
- 4、対水雷艇砲として40ミリ機関砲を10～20門
- 5、基準排水量1万2000トン以内
- 6、防御力はこの艦の主砲砲弾を1万メートルから撃たれても主要部分は無事であること

スケッチは主砲が背負い式で副砲はケースメイト方式。

艦橋が従来艦よりも高くなつており、煙突と大体同じくらい。

当時の艦橋はかなり背の低いものが多いがそれでは何かと不便なので。

もしこの性能が実現できればかなりの優秀艦になるとはずである。太平洋戦争時や現代の艦船を知つてしまつてゐる俺達にはそんなに

すごいとは思わないが、この資料を受け取った山本や秋山などはかなり驚いているようだ。

「これはまたかなり強力な艦ですな。果たしてこれを本当に実現できるのでしょうか？造船に関しては我が国はかなり遅れているといつしかありません。第一、先進国であるイギリスやフランスでも難しいのでは……」

日高が言つ。

当然こういう反応が来るとは思つていた。

しかし、やつてみなければわからないではないか。

「難しいといつことは承知の上だ。しかし、これを完成させることが出来れば日本の造船技術は大きく進歩するだらつ。それにも失敗してもいい経験になる。必ず将来役に立つ」

俺がそういうと日高も、絶対無理だろといつ顔をしたままではあるがとりあえず表面的には賛成した。

「ところで陛下、対水雷艇用は機関砲のみでありますか？」

秋山が不思議そうに聞いてきた。

確かに今各艦が搭載しているのはほとんどが7.6ミリとか47ミリの大砲である。

（機関砲を積んでいる艦もある。このじる小説内で出現率の高い「松島」型は37ミリ5連装機関砲を搭載していた）

俺がこれを機関砲に換えたのには理由がある。

まずは機関砲の方が下手な鉄砲数撃ちや当たるといつことで、水雷艇撃退には大砲よりも効果が上がると思ったからである。

実際水雷艇みたいな小さな艦に砲弾を命中させるのはかなり大変そ

うだし……。

そして二つめは後の対空機関砲の下地作りだ。
今から艦載機関砲の研究を進めておけば将来対空兵器としてかなり有利になると思つたからである。

いきなり対空機関砲の研究をしろといつてもピンとこないどころかまだ飛行機が飛んでもらいないので分からぬし。

「ああ、それは水雷艇みたいな小型艦に砲弾を当てるのは難しいだろう？だから連続的に撃てる機関砲で狙つた方が当たりやすいと思つたからだ。威力は落ちるがその分大量に撃ちこんで蜂の巣にしてやればいい」

「う」と秋山はしつかり納得した様子だ。

良かつた、間違つてなかつたと俺は少し安心した。

しかしこの機関砲、実際に水雷艇相手に効くのかどうかは俺は知らない。

まあでも水雷艇が戦場で走り回るのは基本的に第1次大戦までだし、もし効かなくても何とかなるだろう。

「それと防御の方がだが、今は砲戦の際彼我の距離が短いからいいがそのうち距離が伸びて砲弾は真上から降つてくるようになる。水平方向の装甲も強化していくよ」

俺はそう付け加えておいた。

第1次大戦でちゃんとコトランド沖海戦が起きるかどうかわからんないからこのことを気づかせておいた方がいい。
とは言つても身をもつて体験しないと完全に理解できないとも言えるが。

「さて、では陸軍に移ろい。まずは軍の編制についてだが、新しい兵制を考えてきた。聞いてほしい」

とこゝと今まで暇そうだった陸軍の面々が姿勢を正す。

「私が今回提案するのは『後備師団』制度だ。ただし、これは今は戦時に召集する兵達の部隊を指す言葉だが、私がいうのは名前は借りるが中はまったく異なるものだ。まず20歳から30歳までの若者を後備師団兵として募集する。しかし、彼らは平時は普通の生活を送る。ただし、年に2度くらい1週間ほどの訓練を受けさせる。そして戦争が近いと我々が判断した場合には召集して2・3ヶ月ほど訓練を行つた後現役部隊同様戦う、といつものだ。昔で言つて一領具足

みたいなもんだ。現役兵に比べ当然戦力としては落ちるが何も訓練してない兵を駆り出すよりはマシだろう。補充部隊としても使えるし、どうだらうか?」

と言つて先ほど同様資料を配る。

「なるほど。これは大変良い案ではないでしょうか。これなら平時の予算を最低限に抑えて兵員を確保できます。各方面隊に3個ほど置けばよいのではないでしようか?」

桂は賛成した。

「兵員はこれでも問題はありませんが下士官は現役を入れたほうがいいと思います。でないと戦闘力はかなり低下するものと思われます」

児玉が言つ。

「それはそうだ。そのように手配してくれ」

俺もそれはもつともだと思つ。

「陛下、後備師団を作られるのに私は賛成ですが、後備師団を編制した後わざがに年に2度訓練するだけでは訓練期間が足りません。ですので、編制した際に新兵に対して半年から1年はまず訓練を受けさせるべきでしょう。その後、社会に戻して有事に召集する、としたほうがいいと思ひます」

奥の方にいた藤井茂太少将が発言する。

彼は史実の陸軍第1軍参謀長を努めて活躍した男であり、彼もかなり頭の切れる男だ。

「なるほど。確かにそうだな。他に意見はあるかね？」

こつこつと提案してみて思つたのは俺の計画には穴が多いということだ。

もともと軍人じやないし、ちょっとよく知つてることだけで彼らの意見を聞かないと実行できないし、実行しても意味を持たない。

その後1時間ほど議論は続き、とりあえず実行する方針は決まった。細かいところは陸軍に任せる。

他にも俺は戦車についても提案しておいた。

これはとりあえず機関砲を防げる程度のものを開発させよ。自動車産業自体がまだ未熟であるため実際開発するのは無理かもしれないが。

このほかにもちょこちょこ言つておいた。

さて、この会議で決まったことがどこまで実行できるのだろうか？まだ時期尚早といったものもいくつか含まれているので実際失敗に終わるものもかなりあるかもしれないがやつておいて損はない。が現れた。

しかし、この会議の翌月に技術開発庁航空機研究班に大きな助つ人が現れた。

「ライト兄弟」である。

「意見」の感想、お待ちしております！どんなことでも構いません！

今回の名言

「勝利は戦いの伝統的な形式を改革しようとあるものに微笑む」
—ギリオ・ドーウ

第9話 飛べ！

「おい！それは本當か！？本當にあのライト兄弟が日本で研究すると言つたのか？」

皇居にある俺の部屋に俺の声が響く。

「ええ。日本政府が金を出すから日本に来て研究してほしいと言つたら快諾してくださいましたよ」

クッキーがこともなげに話す。

彼女には実際にアメリカまで行つて彼らに直接頼みに行つてもらつていたのだ。

「でかした！彼らが来れば我が国の航空機技術は大きく進歩する。世界最高水準になることは間違いないだろ？」

俺はクッキーに走りよつて抱きしめた。

（ちなみにこのときは犬の姿だった。人間になつたときならちよつとまづい。この子一応メスだから）

そして話は急に飛んで3ヶ月後、上海港にライト兄弟は到着した。

「Welcome to Japan! I am glad to see you.」

（日本へようこそ！お会いできてうれしいです）

俺は船を降りてきた一人に英語で話しかけた。
しかし、

「陛下自らのお出迎え、これ以上の喜びはありません。陛下の「」期待に添えるよう精一杯努力いたします」

と、日本語で答えた。

せつかく一生懸命英語で喋ったのに、と少しがつかりしたらジョンが耳元でさわやいた。

「陛下、外国語は日本語に自動通訳されます」

「あ、そうだった…」

俺は咳払いをして日本語で、

「あなた達に不自由はさせません。研究費等何か足りないものがあつたらすぐに言つて下さい」

その後一緒に昼食をとり、彼らは研究施設のある上海郊外へと移動していった。

俺はそのまま汽車で西安に戻る予定だったがせつかく上海まで来てので上海市内でぶらりと歩き回り、出店で売つてある小籠包しょうりょうぱくを買って食べたりしながら一日を過ごした。

俺は一般人になりすましていたので、警護の兵達は大変だった。買い物客でごつた返すメインストリートを俺がふらふら歩くため見失わないように必死だったようだ。

まあ、でも俺は久々の休日というか息抜きが出来てよかったです。

ただこの後俺が上海をふらついていたことがある新聞に載せられ、だからやめてくださいと言つたのに！とクッキーに怒られた。

さて、そんなことはどうでもいい。

ライト兄弟を研究者として迎え入れてから半年後、早速試作機第1号が完成した。

驚くべきスピードだがもともと彼らが日本に来る前から製作してしたものを作成させて、日本側の研究者一富忠ハラとも共同して若干の改良を加えたものだ。

しかし、俺としては日本で飛行機が初めて飛ぶ姿を見てみたい！ということでもまたまた上海まで出かけていった。

到着するとウイルバー・ライト（兄弟のうつり兄貴の方）が出迎えてくれた。

「陛下、わざわざのお越しいただきありがとうございます。必ずや実験を成功させます！」

冷静で生真面目という性格だと聞いたが本当にその通りだ。顔がすごいに緊張している。

彼は少し話すと実験の準備のため倉庫へ戻つていった。

そして1時間後、飛行機が倉庫の中から現れた。

「ライトフライヤー2号」と名付けられたその機は史実のそれと見た目は同じだった。

手元の写真（インターネットで拾つた）と比べても素人の俺では見分けがつかない。

ただ、史実では「ライトフライヤー2号」は1904年9月20日に飛んでいるがこちらではまだ飛んでいない。

自転車屋で生計を立てていたのだが、そつちの業績が悪化しそれど

ころではなくなつていたといつ。

だから日本政府の話を渡りに船と受けてくれたのだが。

ちなみに今回の実験には民間人はいないものの多数の軍事関係者や政府官僚が出席している。

中には全く関係ない部署の人間まででているが、やはり空を飛ぶといのは人類共通の夢、仕事がどんなに忙しくても好奇心には勝てなかつたようだ。

俺は失敗してもお咎めなんかないからな、と言つておいたがやはり失敗できないという緊張感が研究者達から感じられる。

今倉庫から出てきた機体を（昨日一晩中整備していたらしいが）まだどこかに不備はないかと端から端まで見回していた。

緊張がピークに達している様子のウィルバーが合図するとHنجンが点く。

操縦するのは弟のオーヴィル・ライトだ。

「いっでもいけるよ、兄さん！」

操縦席からオーヴィルが叫ぶ。

研究者たちの中で唯一緊張した様子がないのが彼だ。パイロットだから一番緊張するはずだが（生死もかかってるしつ）、ひょうきん者と知られる彼は緊張するどころかむしろとてもうれつきしている。

「よし、じゃあ始めやー。」

ウィルバーが叫ぶと飛行機はゆっくりと滑走を始めた。

ここJの研究所には長さ5キロ、幅50メートルの滑走路が作られている。

やたらとでかいがまだ当時の飛行機はまっすぐしか飛べないし、航続力は無いに等しいのでいつ落ちてもいいようにこうなっている。兄弟のライトフライヤー2号はしばらく陸を走り、その後ゆっくりと空へ舞い上がった。

周囲から歓声があがる。

実験は成功。

あとはそのまままっすぐ着陸すれば実験は終わる予定だった。しかし、ライトフライヤー2号は旋回をはじめた。

俺はあわてて手元の資料を見る。

そこには飛行機による世界初の旋回飛行に成功したとあった。陸にいるウイルバーや他の研究者達の顔を見ると皆満足そうな様子だ。

なるほど、今回の実験はただ飛ぶだけでなく旋回飛行の実験だったんだと今更だが思った。

ライトフライヤー2号は一周ぐるっと旋回するとそのまま着陸した。かなり離れたところ（2キロくらいうこうかな）に着陸したため俺達は全員走つて向かい。

（車があるが俺が走り出したため全員走つてついていかざるを得なくなつた）

ウイルバーは飛行機のそばに立つてオーヴィルにかけようと抱きしめた。

そして2人は俺に向かつて、

「陛下、『満足いただけたでしょうか？』

と聞いてくる。

「うん。想像以上だったよ。まさか旋回飛行までできるとはね。こ

これからも期待してるよ。また新しい飛行機が出来たら教えてくれ。
都合がつけば飛んでくるからな」

俺は本当に満足だ。

史実ならまだ飛行機なんて誰も知らないような日本に世界最高水準、
というよりトップの飛行機があるのだ。
ライト兄弟の母国アメリカはサミニュエル・ラングレーを中心に進め
ているが、うまくいってないようだ。
他国もまだようやく飛んだという段階。

自分の国が世界のトップにいるというのはやはり気持ちがいい。

ただこれからは本当に日進月歩で技術が進んでいく。
これからも油断せずに努力し続けなければならない。
他の工業水準もまだまだ劣つているしやらないといけないことも多
い。

俺は自分を引き締めて西安に戻った。

第9話 飛べ！（後書き）

昨日青春18切符を使って（往復12時間もかけ在来線で）大阪へ行つてきました。第一の感想は人が多い！それに電車も短いときは2・3分間隔！うちのほうでは20分、祖父母の家のほうでは1時間は間隔が空くと言うのに…。その電車も12両編成とかありますし。とにかく田舎者には驚くことばかりでした。

今回の名言

「もし、君が平和を望むなら、戦争に備えよ」
—古代ローマの格言

1906年2月2日深夜、呉で悲劇が起きた。
呉沖の柱島付近に停泊していた戦艦「三笠」が大爆発を起こし沈没したのだ。

この事故での死傷者は790名、史実の倍近くにのぼった。
死傷者がこれだけ多数に上ったのは、志布志湾での作業地訓練に向け明日出港を予定していたので史実と違い乗員が全員乗艦していたためと（史実は半舷上陸中）、史実同様付近の艦船の防火隊や陸上の消火隊が艦に入つてから2度目の大爆発を起したためだ。

「三笠」の乗員で助かったのは860人中たった120人。
艦長も爆発で命を落とした。

生存者もほとんどが重傷だ。

俺は真夜中たたき起こされてこの事件を知った。
うかつだった。

史実と違い日露戦争が無かつたためすっかり忘れていたのだ。

俺はすぐさま事故調査委員会の設置を命令した。

とは言つても原因は大体分かっている。

おそらく火薬の変質だ。

説によつては兵士の間ではやつていた火遊び（といつても別にねずみ花火を振り回していたりしたわけではなく、信号用のアルコールに火をつけて、それを吹き消してにおいを飛ばして飲むとかいうもの。俺には意味がよく分からぬ）が原因ともしているが。

まあとにかく事故調査委員会の報告を待とうとしていた時再び悲報が飛びこんだ。

今度は陸軍火薬庫が爆発したのだ。

それからわずか1週間後の2月9日、広島県にある川上陸軍弾薬庫で起きた。

別に今度は火薬の変質が起きたわけではなく、原因はすぐにはつきりした。

この弾薬庫の近くに原村陸軍射撃演習場があるのだが、そこで砲兵部隊が射撃演習を行つた際に弾薬を多く持つて来すぎていた。本来持つてきたら全て使い切るがそうすると次回の弾薬が減るため戻すことにした。

（1年間に訓練で使える弾薬量は決まつてゐるから）
しかし、平時は信管を抜いての運搬・貯蔵と決まつてゐるにもかかわらず、そのまま弾薬庫に戻そうとした。

その時に弾薬庫内で人為的ミスにより砲弾を落とさせてしまい、信管は当然反応して大爆発。

この弾薬庫は地下にあり、8つに分かれていたが隣の弾薬庫も誘爆したりして手がつけられなくなり結局丸一日中燃え続けた。

近くに若干民家があり被害を受けたが幸い死傷者は出ずくに済んだ。この爆発で基地の兵12名が死亡し、5名が負傷した。

他にも大日本製鉄福山製鉄所でも高炉爆発事故が2月1日に起きており死傷者120名余りを出している。

わずか1週間のうちに広島県内で立て続けに3件も多数の死傷者を出す爆発事故が起きたため3つあわせて広島事件と呼ばれるようになつた。

広島県民からすれば大迷惑である。

これらの爆発事故により広島には何か悪いものが憑いてるような噂

が流れ、今まで厳島神社を中心に結構観光客が来ていたのにこの広島事件のあと急激に減った。

しかも7日にはとじめをさす三原駅での無人列車暴走事故が起き死傷者54名。

そのためこの2月は前年の同じ月と比較して2割まで落ち込んでしまつ。

俺は（この世界では違うが）中国地方出身なのでその中心たる広島のこの状態をなんとかしたいと思い、俺が直接広島に行って広島をPRしてみたら少しは効いたようで翌月には観光客も平年並みに戻ってくれた。

俺としても外に出るいい理由になつたし、故郷の昔の姿も見ることが出来た。

（今とそんなに変わらない田んぼしかない田舎だつたけどね……）

そして俺はそのついでに作業地訓練中の艦隊を見て帰ることにした。作業地訓練とは軍艦が一箇所に集合してそこで集中して訓練をすることだ。

作業地は史実同様九州東岸の佐伯湾や南の志布志湾、四国宿毛湾であることが多い。

ただ、領土が広がった関係上台湾の基隆などでも行われる。後に艦艇の数が増えると各艦隊ごとに別々の場所でやるようになるが、今回は九州志布志湾に沈没した「三笠」や北洋警備に当たっている旧式駆逐艦など以外の主力艦艇はすべてここに集結している。

とこりでこの作業地訓練が行われる理由は経費節約である。本来訓練は洋上で航行しながら行つが最も効果的であるし、それが普通だ。

しかし、海の上を走るということは当然燃料を消費する。

平時に使える燃料は予算で縛られている（特にこの世界では軍縮の

影響で余計に削られている（ためそんなに贅沢に使うことはできない。
い。

そこで史実同様にこの世界でも作業地訓練を導入したのだ。
この訓練は停泊しながらするため石炭の消費は少ない。
(もちろん航行しながらの訓練もそれなりにしているが)

特に九州志布志湾は南よりの風が吹くと荒天でもないのに大きな波
が起き、1万トン以上の大きな船でもかなり揺れるので、航海中と
同じような訓練ができるらしく、砲術訓練に適した所だった。

俺は早朝まだ若干暗い中泊まっていたの都井村（こっちの世界では
1954年に合併して宮崎県串間市）の旅館を出て湾内が見渡せる
ところへ行つた。

かなり朝早くから訓練が始まっているらしいので早起きして行つて
みたのだ。

さすがにまだ早いか、と思つたがもう始まっているらしい。
各艦の砲身が上下左右に動いている。
しばらくその様子を眺めていると艦隊司令がやつてきた。

「みんな朝早くから熱心にやつてるね。私をはじめ国民が安心して
夜眠ることが出来るのも彼らが寝る間を惜しみに訓練に励
んでくれるおかげだよ」

俺は艦隊を見ながらそう言つた。

若干大げさに言つたがでも本当にこの朝の様子を見て頼もしく思つ
たのは本当だ。

「はつ。ありがとうございます。兵達も陛下のねぎらいのお言葉を
聞けば大変喜び、より一層努力を続けてこく」とでしょ？

こう言つたのは現常備艦隊司令東郷平八郎だ。

戦争が無かつたため抜擢されることもなく、舞鎮（舞鶴鎮守府）の司令を続けていたが、昨年暮れに日高が心臓発作でぼっくり逝ってしまったためその後任として山本権兵衛が引っ張りだしていたのだった。

しばらく俺達は黙つて訓練に励む艦を眺めていた。

史実どおり東郷は無口だ。

俺はやたらと喋るほうだが、なんとなく東郷に威厳というか一種のオーラがあつて話しかけられない。

やはりこういう人物が一軍を率いて戦う器量を持つているのだろう。

俺はその後2時間ほど飽きずに訓練の様子を眺めて志布志湾をあとにした。

この3カ月後、「三笠」沈没事故に対する事故調査委員会の報告が出され原因は火薬の変質であると報告された。

これにより史実から少し遅れるが火薬の取り扱いに関する規定が改定され、一定年限を過ぎた火薬は棄却されることになった。

ちなみに「三笠」は浮揚に失敗して除籍後解体されることなり、記念艦として保存されることもなかつた。

第10話 広島事件（後書き）

もつ少し事件名にネーニングセンスがあればよかつたんですけど、どうもひねれなくて…。まあ、この話自体の重要度はそこまで高くはないんで問題ないといえばないのですが…。

今回の宣言

「平時における訓練死のない訓練は、戦場における戦死のない戦闘と同じで、それは芝居である。訓練は平時の戦闘であり、戦闘は戦時の訓練である」

—エルヴィン・ロンメル

第11話 油田は何処に？

航空機の開発はこないだの実験の後も順調に進んでいる。

1907年5月2日には10キロ近く飛行することに成功した。

また、今年（1908年）4月頃には給炭艦「富古丸」に飛行甲板（正しくは木製の板を並べた平らなだけの甲板）を設置して、そこから発進して上空を1周して着艦しようと実験が予定されている。

ところでこれだけ飛行機が進歩している以上それを動かす燃料が必要である。

しかし、その燃料を産出する油田が一向に見つからないのだ。

一応1904年に西藏で1つ発見されたが規模が小さく、一応政府は開発したがあくまでノウハウを身につけるための実験程度のものだった。

中国で有名な油田といえば大慶や勝利、遼河の3大油田だが調査の結果石油鉱床なんて影も形もないことが判明した。

他にも新疆のタリム油田があるはずの地域を調査させたがこっちもさっぱり。

まさかせっかく中国が領土に入っているのに石油は輸入しなくてはいけないのか。

まだ石油の需要がほとんどないため輸入の量は大したことないが、現在ようやく芽を出し始めた自動車産業の成長とともに需要は急激に伸びていく。

しかも戦になれば平時は重油・石炭混焼缶でお茶を濁している艦艇は燃料を重油に換えなければならぬ。

それらのために油田の確保が急務だがそれが見つからない。だからあせつてあちこちに調査団を派遣しているのだ。

ところで石油以外の資源は順調に鉱床が見つかり採掘を開始、または予定している。

石油を調査しに行つた調査団が油田のかわりに他の鉱物の鉱脈を発見したりもしているほどだ。

主なものは濟州島（チエジュ島）で見つかつたバルラ銅鉱山（普通の世界では火山なのだがこちらでは火山がなくかわりに山が銅で出来ているいわれるほどの埋蔵量を誇る）や、朝鮮半島北部の長津の鉄鉱山など。

他にも亜鉛・鉛を産出する大鉱山が雲南省でいくつも発見されだし、資源の乏しいはずの日本でも大規模なニッケル・クロムの鉱脈が見つかつた鳥取県の若松鉱山の開発が進んでいる。

こうして各地で「ゴールドラッシュ」ではないが、鉱山開発がすさまじい勢いで進んでいる。

そんなに掘つても使うのか？というくらいに。

造船業も今活況に沸いている。

経済成長により輸出が増大したためそれを運ぶ船舶が大量に必要となつたのだ。

また、同じように発展しているインドやオーストラリアでは自国の造船設備が少なすぎるため日本に注文してきている。

このため日本国内では造船所の拡張や新設が活発に行われている。

黄海沿岸や瀬戸内海沿岸では多数の造船所が建設中。

現在ほとんどの造船所が5年、6年先ぐらいまでの受注量がありいかに効率よく建造するかということを業界で工夫しながら建造している。

これは後に大きな効果が出ることとなるがそれはまだ先の話。

また、海軍工廠もほとんど休みなく船を造り続けている。
と言つてもほとんどが日本海軍向けのものではない。

日本海軍向けには例の装甲巡洋艦2隻が建造中である以外は旧式化した駆逐艦の代艦を4隻造つてゐるだけだ。

で、どこに向けて造つてゐるかといつとインドやオーストラリア、東南アジア諸国向けだ。

この3年間で輸出したのは合計で装甲巡洋艦5隻、一等巡洋艦8隻、通報艦6隻、駆逐艦19隻、水雷艇30隻、哨戒艇22隻。大型艦はインドかオーストラリアのどちらかのみだが、一等巡洋艦は1隻タイに輸出している。

まだ国際的に評価の低い日本製軍艦だが、先進国の中に比べ安価であることやそこそここの性能であることでこれらの国々からすればいろんな意味でお手ごろであるため日本に注文したのであろう。
あまり高性能過ぎても使え無ければ意味が無いし。

そういうえば東南アジア情勢について説明してなかつた。

史実ではタイを除き植民地として列強の支配下に入つてゐる東南アジアの国々だが、この世界では普通の世界の現在と同じようにカンボジアやベトナム・インドネシアなどASEAN諸国が存在する（ASEAN自体は存在しないけど）。

ただブルネイとシンガポールはマレーシアに、東ティモールはインドネシアに、スリランカはインドに、それぞれ併合されてゐる。

日本はタイ・カンボジア・ラオス・フィリピン・ベトナムと経済的・軍事的に関係が深い。

そのほかの国はミャンマーがインド、インドネシア・マレーシア・パプア・ニューギニアがオーストラリアとそれぞれ関係が深い。
ちなみに生徒が国家元首になつてゐる国は上記のうち、タイ・イン

ドネシア・インド・オーストラリアである。

さて、話を戻そう。

重工業もこのような鉱業と造船業の活性化を受け毎年生産施設の拡張と新設が急ピッチで進んでいる。

毎年のように見つかる大鉱山のためにそれらを精錬・精製する工場はフル稼働状態だ。

これらに牽引され日本経済は年々超高水準の成長を続けている。

言い忘れていたが例のインスタントラーメンの開発は無事成功した。値段は少々高めだ。

屋台や食堂などで食べるかけそばが一杯3銭ほどだが、インスタントラーメンは1食5銭。

しかし、ものめずらしさとその便利さでたちまち国民の間に広がって行き、売り上げは予想を2倍以上上回る大ヒット。

そのため設備拡張や新工場建設による量産コストの低下で数年後には屋台のかけそばと同じくらいまで下がつていった（貨幣価値の変化で見かけの値段は上がつていく傾向にあるが）。

さらに他国にも輸出が始まり、アメリカでは一大ブームを巻き起します。

これにより当初の目論見通り小麦の消費は著しく増大。

生産量も毎年伸びているが消費量がそれを補つて余りあるほどで、逆に値段が上がりかけているのが再び懸案事項となり始めた。

しかし、伸びには限度があるし、タクラマカンやジュンガル盆地の開発も順調に進んでいるから生産量もまだ増える。

あとはそのバランスが上手く取れればいい。

といつても俺には到底できないので農林水産省などの専門職に頑張つてもうう。

さて、これで油田さえ見つかれば問題はないのだが…。
「石油の一滴、血の一滴」とかいづ標語が出ることのないようじでたい。

油田調査団、頑張れ！！

第1-1話 油田は何処に？（後書き）

「意見」感想をお待ちしています！

今回の名言

「原則をあざ笑うものは失敗する」
—アンリ・ジヨミー

1908年1月15日、俺は青島にいた。

今日はある艦の公試運転に立ち会つためだ。

その艦とはもちろん、俺が国防会議で提案した新型装甲巡洋艦「筑波」「生駒」の2隻である。

2隻は今青島沖を全速力で航行中だ。

煙を立て、白波を切つて海上を進む。

堂々とした力強さを感じる。

俺はやつぱいにな……とうつとりと見とれていた。

これがこの2隻の基本性能だ。

基準排水量	1万2540トン
速力	24・5ノット
兵装	主砲 25・4センチ連装砲 4基
副砲	なし
対水雷艇砲	40ミリ単装機関砲 20基
魚雷発射管	なし

まさに「ドレッジドノート」だ。

「ドレッジドノート」同様タービン機関を採用しており、速力も前級である「出雲」型の20ノットから大幅に伸びている。

副砲・中間砲を全廃して主砲のみにし、单一の大口径砲のみで構成されているのも同じ。

これは俺がインターネットをぶらぶらさまよつていた時にたまたま

「ドレッジドノート」のページを見て設計変更させたのだ。

設計側は大迷惑だつたと思うが、それが正しかつたことは「ドレッドノート」の就役で理解してもらえたと思つ。

また、設計者達や用兵者側の要望などで主砲口径が大きくなつたりと、俺の要求したことと変わつてたりもする。

これらのおかげで史実どおり1906年の暮れに就役した「ドレッドノート」のせいで建造中から旧式艦の烙印を押されることもなく、いつして期待の新鋭艦として日本海軍に編入されたのだ。

それと言い忘れていたがこの艦は今までの艦と違ひ魚雷発射管はない。

従来艦は戦艦でも水中魚雷発射管を持つてゐるし、「ドレッドノート」でさえ装備している。

しかし、当時の魚雷は射程の短い本当の短刀兵器だ。そんなもの積んでいても使うシーンはないし使うときとくのことはそれだけ接近しているということであり、間違いなく艦が沈みかけているところである。

被弾したときに誘爆する危険性こそあれ実用性はないに等しい。

それに今後も重巡（今はまだ装甲巡洋艦と呼ぶが）には積まない方針だ。

史実では重巡も搭載しており、実際活躍した戦いもあるが駆逐艦が進歩していき十分な水上打撃力を持つようになる。

わざわざ重巡にまで積む必要性はない。

ただ個人的には魚雷を装備して敵戦艦と戦う重巡達と云ふのはものすごく魅力的だ。

まさに漢の口マンといった感じだが個人の趣味で兵器を決めていいわけないので我慢する。

ところで、史実の「筑波」型と比べて足も速いし主砲の数も多いが、主砲口径が小さい。

史実のそれは30・5センチであるのに対しこれでは25・4センチだ。

船体も史実のと比べて一回りか一周りほど小さい。

これは戦艦よりもまずは手ごろなサイズの装甲巡洋艦で大型艦建造の経験を積まして起きたかったことと、様々な新技術のテストを兼ねていたということだ。

まあ爆風対策がまだしつかりしていないため、背負い式を採用したとき砲撃の爆風でいろんなものが壊れるかもしないからというもつともらしいものもあるが、ようするに2隻は試しみたいなもので失敗したとき大きいともつたいたいないからである。

「陛下、どうでしようか？陛下の言われた性能はほぼ満たすことができました。ただ、主砲口径を上げるなどして重量が増加したため基準排水量と速力を維持するため防御は対20センチ砲弾がどうか、といったところです。申し訳ありません」

眺めている隣りでそう言つたのは秋山だ。
今はもう大佐になつてゐる。

「いや、これで十分だよ。全てを満たすとすれば必然的に艦は無限に大きくなつていく。防御力が低いのは少し心配だが他の性能は文句なしだ。途中で設計変更させられて設計者達も大変だったと思うが本当にいい艦を造つてくれたね」

俺は十分満足していた。

「はつ、それを聞けば設計者達も喜ぶでしょ。ところで陛下、背負い式砲塔というのは便利なものですな。これなら前後は4門、左右は8門向けられます。ただ、設計者達によると砲塔を高いところにおくことにより重心のバランスが崩れて横揺れをおこし、砲の散

布界が広がってしまう可能性が高いということです。一応それに対する処置もある程度はしてあるということですが」

俺は驚いた。

背負い式にすれば砲を無駄なくいろんな方向に向けられるということしか考えてなかつたからだ。

まさかそんな副作用があつたとは…。

「そうだつたのか。いや、さすがにそこまでは知らなかつた。波の荒い日本海とかだと苦労するかもしれないな。技術者達の工夫でどれくらい抑えられるかが力ギだが…」

俺はため息をついた。

やつぱりまだまだ勉強不足だな。

まあ所詮平和な時代から来たド素人、全てを知り尽くしているわけではないので仕方ないといえば仕方ないが。

「そういうえば航空機を艦から飛ばす実験の準備の方はどうだ? 順調に進んでいるか?」

この実験とは前話で説明した「富古丸」からの発艦及び着艦実験のことだ。

「はい。その実験に使用する航空機はあと1ヶ月もあれば完成するらしいです。今回の設計主任は一富忠八技術少佐です。彼はウィルバー技術少佐達から教えを受け、それを発展させて艦上での運用について研究を重ねてきました。彼は自分の研究がようやく実を結びはじめていると張り切つております。必ずや成功させるでしょう」

秋山もうれしそうに言つ。

航空機に大きな期待を寄せている秋山は航空機開発の研究者達となり仲がいいようだ。

兄の陸軍中将秋山好古と一緒に何度も開発現場を訪れ研究を応援しているらしい。

「それは頼もしい限りだ。『富古丸』の改装の状況は?」

「はつ。陛下のじ命令に従い平甲板を艦全体に張るように改装を行つております。艦橋の撤去工事が若干遅れてはいますがあと2ヶ月ほどで全てが完了する予定です」

俺が指示したことについては「富古丸」に当初は前部甲板のみに設置する予定だつた飛行甲板を全通式にして艦橋を撤去し煙突を右舷にずらして設置することだ。

これにより見た目だけはそれなりに空母に見えるよつになつた。

しかし、本格的な空母を造るなんてのはまだ時期尚早。

肝心の航空機が現在ようやく10キロ飛べるかどうかといつたところなのだ。

今回の改装は海軍の連中に船での航空機運用について考えさせようというものである。

航空機は使い方次第では有効なものであるとこつことを見せておきたい。

だからこの実験は海軍兵学校の生徒達にも見せる予定だ。

「せうか。では予定通り4月の実験実施を日指して進めてくれ。船の上で航空機の運用という今までとは全く違う新しい領域の開拓を行う実験だ。楽しみにしてるよ」

これから海上航空兵力発展を立つ大事なこの実験は予定通り19

08年4月12日に行われた。

第1-2話 新型装甲巡洋艦（後書き）

高校2年生になりました！勉強がもうやばいです…。忙しくて更新が遅れるかもしれませんが頑張るのでよろしくお願いします！

今回の名言

「予期しないこと、予期したくなことが起り、と予期するよ
うにせよ」

—マウリス

第13話 飛べ！飛べ！

「左舷前方に『宮古丸』を視認。取り舵30度よーそろう」といふ実験の日、俺はこないだできたばかりの装甲巡洋艦「筑波」に乗っていた。

別に船で見に行かないといけないような沖合いでやるわけではないが、この機会に軍艦というものに乗つてみたかったのだ。

やはり男子たるもの、鋼鉄の浮かぶ城には憧れを持つものである。

「やつぱす」といな、軍艦つてのは、実際に乗つてみると思つたより大きく感じるな」

危ないからと止める朽木（クツキーの人間名）副官を無視して副長に艦を端から端まで案内させる。

しかも急にその辺の水兵に話しかけたりしたから、話しかけられた方は緊張で声がひっくり返つたり声が震えたりしていた。

いつもは明るくてよく「冗談を飛ばす」という艦長も緊張のせいか顔はこわばり、指示を出す以外は全く話さない。

やっぱり天皇の威信といつか権威つてのはす」といもんなど感じた。

さて、実験だが今回は2種類の実験を行うことになつてゐる。

まずは停泊状態での発艦・着艦。

おそらくこれは成功するだろつ。

飛行機が軽いのとスピードが遅いのとで実際離陸するまでにそんなに距離がかからないからだ。

それにパイロットは徳川好敏少尉、彼はおそらくこの時点の日本軍人の中で最も長い飛行時間を持つベテランだ。

もつとも、飛行機自体の飛ぶ時間が短いため後の基準から言つと未熟の部類に入るが。

それでも一つの実験、これは上手くいかどうか分からぬ。
それは航行状態での発艦・着艦である。

発艦に関してはやりやすいだろうが、問題は着艦。
いくらベテランの徳川少尉とはいえ動いている相手へ降りるのは初めてのことだ。

しかも上海の飛行場と比べるとものすごく小さい甲板の上に、である。

下手すれば飛行機ごと海中へ落下、まだ後の飛行機のように浮くようには作られていないため最悪飛行機と一緒に徳川大尉は海の底へ沈むことになる。

そこで万が一に備え駆逐艦4隻と哨戒艇4隻が『富古丸』を取り囲むように配置されているのだが脱出に失敗すれば何の役にも立たない。

「『富古丸』より信号、実験を開始す」

信号兵の報告が入る。

俺は双眼鏡を覗く。

今「筑波」は停止しているため機関科の兵も甲板に上がつてこの様子を眺めていた。

甲板上の飛行機のプロペラが回り始める。

しばらくはその場で回し続けていたが脇に立つていた兵が研究員かが旗を振り降ろすと滑走を始めた。
ものすごくゆっくりに見える。

まずい、このままじゃ落ちるのではないか、そう思つたが飛行機はすんなり艦を離れ大空へと舞い上がつた。

その瞬間、艦全体から歓声が上がつた。

皆実際に飛行機が飛ぶのを目の当たりにして興奮していた。

俺がいるのも忘れて大騒ぎだ。

まあ俺は静まり返つて いるよりは大騒ぎしているほうが好きだけど。その後しばらくして我に返つた艦長があわてて騒ぎを鎮めた。

飛行機は上空で3周くらいすると着艦の体勢に入った。

ゆっくりと高度を下げる。

そしてゆっくりと甲板に降りた。

万が一に備え甲板の前にはネットが設置されていたがそこまで突っ込むことはなくゆっくりとネットの前に停止した。

艦全体で拍手が起つた。

第一の実験は無事終了。

この後1時間の休憩をおいて次の実験に入ることになつて いる。さて、果たして無事に成功するのか。

俺としては最悪失敗してもいいからパイロットの徳川大尉が無事であつてほしい。

ここでただでさえ数の少ないパイロットを失つわけにはいかないのだ。

つたく、俺のほうが緊張してしまつた…。

そして「筑波」の艦橋までもが異様な緊張に包まれるなか、実験は再び始められた。

離艦はなんの問題もなく進んだ。

飛行機は順調に高度を上げ旋回を始めた。

そして前回同様3周した後に「富古丸」の真後ろにしき高度を下げる。

艦橋の緊張も高まる。

水兵たちも自分の持ち場から精一杯顔を出してこの様子を見守る。そして、両者の間の距離がゆっくりと縮まっていく。

1000メートル、500、250、100、50、0。

飛行機は一瞬バウンドしたように見えたが「富古丸」の甲板に乗つた。

そのまま艦の上をまっすぐ進む。

ブレーキをかけているのかどうか分からぬがいまいちスピードが落ちているのかどうかわからない。

そして…、ネットにぶつかり停止した。

艦橋ではふう…とため息が漏れる。

これはがつかりとしたため息ではなく、落ちなくて良かつたといふ安堵のため息だ。

飛行機はネットに絡まっているがパイロットはびりやけり無事の様子。操縦席から自分の足で出てきているのが見える。俺もとりあえず安心した。

「艦長、『富古丸』の近くにつけてくれ。ちょっと『富古丸』に行つてみたい」

それから30分後、俺は「富古丸」の甲板で研究チームのリーダー二富技術少佐、パイロットの徳川少尉らと会った。

二富少佐は凄腕の研究者だが見た感じは失礼だがそうでもなさそう

な感じの人だ。

どこにでもいそうなおじちゃんだ。

一方徳川大尉はごつい。

鍛え上げられた肉体と厳つい顔。

史実の徳川大尉の写真は見たことがあるが同一人物とは思えない。まあいろいろ変わってるし人が一人や二人外見が変わつても別におかしくはないが。

「みんな」苦労だった。実験は無事に終わつて本当に良かった。徳川大尉も怪我などなくて本当に安心している。まだまだ改良しないといけないところがあるようだな。これからも研究に励んでほしい」

俺はねぎらひの言葉をかけた。

「はつ。今回陛下に完璧に成功した実験をお見せできなかつたことは残念でなりません。これより日夜研究に励み今度はしっかりと成功させてみせます」

二宮少佐が言つ。

「陛下から小宮のような者にお言葉を賜るなど、身に余る光栄であります。今後も飛行技術の向上に努めてまいります」

心底緊張している、と言つ声で徳川少尉が言つた。まあ確かに本来天皇に直接会うなんてないもんな。

「ああ。期待しているだ。ただみんな身体には氣をつけてくれよ」

お決まりだが「これからそう思つ。

日本人は生真面目で一生懸命だから平氣で無理をする。

それが日本を支えているのは間違いないがそう簡単に死なれるわけにはいかない。

俺は直立不動で敬礼している研究員らに敬礼し返して「富古丸」をあとにした。

第1-3話 飛べ！飛べ！（後書き）

そういうえばこの後書きで紹介している名言はいろんな本とかから取つてているのですが著作権とか問題になるんですかね？どなたか知つていたら教えてください。引っかかるのなら即削除しますので…。

今回の名言

「総司令官は一日のうちにしばしば自問自答せよ。『もし、いま敵が我が正面に、左翼に、右翼に出現すれば？』と。もし、その自問に答えられなければ、我が部隊の配置が悪いのだ。ただちに修正せよ」

－ナポレオン・ボナパルド

第14話 戦争への道

1910年1月1日、俺は突然南アメリカ合衆国領であるハワイへの呼び出しを受けた。

いや、呼び出されたとは言わないな。

拉致されたも同然だ。

何しろ朝起きたらハワイに居たんだから。

ここに拉致られてきたのは俺だけではなく、今回のゲームに参加している生徒40名・教員5名全員がここに集められた。

みんな起きたらここに居たらしい。

まあそれはさておき久しぶり（この世界の中では10年経っているから）の友との再会にみんな楽しそうだ。

俺も友達と他愛もない話で盛り上がり、本当に楽しいひと時だった。しかし、それはすぐに消し飛んだ。

突然あの出島とかいう男（ルール説明をしたおっさん）が現れ、とんでもないことを告げたからだ。

「皆さん、静粛に。これから私の言つことをよく聞いてください。聞いておかないと大変なことになりますよ。いいですか？では始めます。これから丁度4年後、第1次世界大戦を開始することが決定いたしました」

俺達の間に緊張と動搖が起こる。

「今皆さんのが国の周りには皆さんたちのいすれにも属していない国、

いわゆるコンピューター制御の国と帰属未定の地域があると思います。それらの国・地域は1914年1月1日に隣接、もしくは近くにある国に合併することを宣言します。その帰属をめぐり戦争が始まるわけです。もちろん受け入れさえすれば戦争は起きませんがね

俺はなるほど、と思つた。

そういうえば大抵どの地域にも俺達の支配していない国や地域が満遍なく残されている。

それをめぐつて戦争をしろといつわけだ。

さて、今度もあのおっさんの説明を要約していく。
戦争を起こす理由はおっさんの説明そのままでもいいだらう。

で、概要・ルール等について。

まず、1914年1月1日に自動的に自分が隣接する国、もしくはコンピューター制御の国を挟んで隣合つ国とは交戦状態になる。もちろんその独立国の帰属を双方が認めればその時点で講和成立、戦争は回避できる。

しかし基本的に回避は難しいようにできている。

莫大な資源が眠つていたり、世論が好戦的になるように仕組んでありますからするらしい。

ただ、1対1で戦争をやれば大国が勝つのは目に見えているので、小国どうしが団結して戦うという構図になるようにも仕組んであるということだ。

事実、今回の会合でいくつかの同盟（とは言つても仲良しグループが一緒にがんばろー！と作つただけの簡単なものだが）が成立している。

さて、これにより俺は方針転換をしなくてはならなくなつた。

今まで軍縮を進めてきたが戦争をするにしても平和に外交交渉で終わるとしても、軍備による脅しが必要である。

銃剣外交とまでは言わないが、交渉を上手く進めるには強大な軍隊が背後にあつたほうが絶対有利なのだ。

だから西安に帰つたその日（また同じように瞬間移動で帰らされた）のうちに陸・海軍に緊急軍備拡張計画の策定を開始させた。俺も両方に口出しをしている。

海軍に対しては戦艦の性能や駆逐艦の対潜装備、潜水艦の充実などについて、陸軍には騎兵旅団の全廃や遅れている戦車開発の促進など。

ビ。

また航空機の性能向上こより兵器として十分使えるようになつてきただので、陸上での航空機運用を扱う「空軍部」を新しく国防省傘下に設置した。

これはそのうち序に格上げをしようと思つている。

軍備拡張と同時に周辺国との外交交渉も活発化させた。

別に大した帰属未定の地域もなく、現在安定した外交関係を持つ国とは不可侵条約を結んでおいたほうがいい。

四方全てを敵に回して勝つなんて無理だ。

そこで北のモンゴル・極東ソビエト帝国とは不可侵条約を締結せらる。

カザフスタンに対しては帰属未定のキルギス・タジキスタンなどを平和的に分割する方針で交渉を行う予定だ。

いざとなれば全面的に讓歩して全てをカザフスタンに併合させても構わない。

これといった資源も見つかっていないし、貧しい国々を併合したところで負担になるばかりだし。

しかし、東南アジアに関しては譲るつもりは全くない。

少なくとも現在どこにも属していないベトナム・ラオス・カンボジア・フィリピンは編入する気でいる。

これらの地域は史実と違い非常に豊富な資源があるからだ。

ベトナムとカンボジアは石油、ラオスは鉄、フィリピンはニッケルやクロムなどのレアメタルの宝庫である。

特に国内で未だ見つからない油田を確保するためにも「南進」が必要なのだ。

これの障害となるのがタイ・インドネシア・インド・オーストラリアの4カ国。

これらの国は悪いことに仲のいい女子3人とこれまで彼女らと仲のいい先生が治めている国だ。

一つ一つの国は大したことはないがやはり4つ集まれば脅威だ。海軍力では4つあわせても圧倒しているし、もともと敵の軍艦は大型艦のほとんどが日本製と言う状態でほとんど手の内を知っているようなもんだから問題はない。

問題なのは上陸しての陸戦となつたときだ。

インドネシアやタイはともかく、オーストラリアやインド全土を占領するのははつきり言つて時間と金と人命の浪費というほかない。第一それだけの兵力を召集して攻略したとして果たしてそれに見合う見返りがあるのかどうかは怪しい。

だから戦略としては敵海軍を蹴散らし、敵の重要な拠点を占領して講和に持ち込むというのが基本になるだろう。

俺は皇居の一室で地図とにらめっこをしつつ頭の中で戦略を考えたり、インターネットで第一次大戦の資料を探すなど忙しい日々を送る。

そうして数ヶ月後、陸海軍の緊急軍備拡張計画は始まった。

第1-4話 戦争への道（後書き）

自分の文を読んでいるとあまりのハイスペックで自分でも時々あきれます。投稿してからまだ1ヶ月にも満たないのにもう何度修正したことか…。文章も読みにくいところが多いと思いますがこれからも読んでやってください。

今回の名言

「戦争はほかの手段をもつてする政治の継続にほかならぬ」
—クラウゼヴィッツ

1910年4月1日、予想ではなく予定される第1次世界大戦に備え策定された、陸・海軍の緊急軍備増強計画が動き始めた。

まずは海軍から。

海軍は艦艇の全体的な旧式化が目立っており、早急な近代化が求められている。

そこで戦艦8隻、装甲巡洋艦12隻、一等巡洋艦16隻、駆逐艦56隻、潜水艦64隻を4年間で建造するという途方もない建艦計画が作られた。

もちろん、こんな一度に建造できるはずはないので第1期・第2期に分けられて建造が行われる。

第1期は「安芸」型戦艦4隻と「箱根」型装甲巡洋艦6隻、「美々津」型二等巡洋艦8隻に「山風」型駆逐艦32隻、潜水艦が3種40隻である。

これでも多いが造船業界の活況のおかげで造船所が一気に増えたことでなんとかなるだらうということで行われることとなつた。

戦艦と装甲巡洋艦は海軍工廠で、残りはおもに民間に建造を依頼してある。

民間業者では今まで手一杯といつてはいたが、外国からの受注を断らせたりしてなんとかドックを空けるよしこせた。

これだけ膨大な数の艦艇を建造するとなるとかに効率よく造れるかが力ギである。

日本はその点ではかなり優秀といつてもいい。

数年前から続く造船ラッシュにより工程管理手法が導入され、無駄

の少ない建造が行われているからだ。

他にも俺がブロック工法をアドバイスしておいたが、これはまだ実現されていない。

また、これだけ多数の艦を建造すると当然それだけ多くの乗員が必要になる。

そこで旧式化した「吉野」型巡洋艦を全て練習艦に改造して訓練に当たらせることにした。

また、昨年竣工したばかりの日本初の大型潜水艦（と言つても当時で考えてといふもので実際は500トン強の小型潜水艦）「田一1」型5隻も全て練習任務にあてる。

さて、今度は陸軍だ。

まずは最初の2年間で現在の90個師団・20個後備師団・10個騎兵旅団・24個砲兵旅団から150個師団・30個砲兵旅団に増強する。

騎兵旅団は全廃され、戦車の開発が成功次第「機甲兵旅団」が新設されていくこととなつた。

そしてその次の2年間で30個後備師団が編制される予定だ。

新設の通常師団は2年間みつちり訓練に励み戦争に備える。

後備師団は戦時には基本的に損害を受けた部隊の補充部隊として使用されることになつてゐる。

そのため半年前には召集して本格的な訓練を受けさせることになつた。

そして、戦車の開発状況だが残念ながら上手くいっていない。エンジンが弱かつたり、キャタピラが途中で切れたり……。

何かしら不具合を抱えてしまつて実戦で役に立つよつたものは今のところ出来てない。

俺の構想としては10個ぐらいの機甲旅団が大戦前に作れたらいいかな、と思っていたがそれはこの調子だと難しいだろう。やはりまだまだ技術的に難しいようだ。

ところで空軍だがとりあえず稼働機1000機を目指してパイロットの育成・機体の製造が行われている。

何しろまだ手探りで進めてるのでパイロットの数が非常に少ない。新しく育成しようにも、何を学ばせればいいのかいまいち分からないような状態だ。

今は上海や鹿児島など10箇所に150機が配備されているので、そこへとりあえず基礎だけ教えた新米のパイロットを送り、ベテランから直接教えてもらひようになつていて。

一応来年には練習航空隊が上海に設置される予定だが、練習に使用する機体や教科書が全く決まっていないような状態。こんな感じで空軍は急な増強はまず無理である。

そしてこの航空機がらみのことなのだが、海軍はこの増強計画の前に技術開発庁の研究班が水上機の開発に成功したことを受け、水上機母艦4隻の建造に着手していた。

「知多」「渥美」「室戸」「志摩」と半島名が冠せられる予定の4隻は水上機20機（常用16機・補用4機）を搭載し、基準排水量約1万2000トンの大型艦だ。

速力は艦隊についていけるよう2ノットを發揮できるようになつてている。

ただ14センチ単装砲2基を搭載しているので、単純に水上機母艦というよりは航空巡洋艦ともいいくべき存在である。

これらは当然のことながらカタパルトなんていう便利なものはついていない。

史実の日本初の水上機母艦「若宮」と比べると大型で本格的な4隻

だが、史実どおり海面におりしてから発進させるようになつてゐる。史実で1913年にフランス海軍水上機母艦「フードル」が成功させたような、滑走台を艦上に設けての発進という方法も考えられたが無難な水上発進が選択された。

ただ迅速に発進できるように艦尾がゆるやかに水中に没するようになつていて航空機をレール上を滑らせて次々に海面に降りせるようになつてゐる。

これにより見た田は史実の一等輸送艦か回天搭載艦に近いものになつた。

建造状況は現在一番艦「知多」の船体がだいぶ出来上がつてきたかな、というところだ。

就役はおそらく1年半後くらいだらう。

搭載する機体はあつてもパイロットが間に合つかは疑問だが…。

また、例の「宮古丸」を使って空母の研究も進められている。「宮古丸」は現在エレベーターや着艦制御のための鋼索などの取り付け工事が行われている。

鋼索は史実の「鳳翔」や「赤城」で最初に採用されていた縦索式ではなく、後に主流というか当たり前になる横索式だ。縦索式は摩擦で止めようとするものだが、実際は転倒事故を引き起こしたりして上手くいかなかつたようだ。

さて、あせつていろいろ思いつくままにあれこれ口を出したからいろいろ足りないものもあるかもしけないが、とりあえずこれで進めていく。

ただ、これらの艦艇建造や部隊増強のため増税を行つた。

国民には申し訳ないが来たるべき大戦に備え大規模な軍拡が必要な

のは事実だ。

こうして軍備拡張が始まつていつたが同時に外交交渉も始ました。
最初のお相手は極東ソビエト帝国である。

第15話 緊急軍備増強計画始動（後書き）

「意見」感想お待ちしています！

今回の名言

「多分、余は国内戦も含めて誰よりも長い年月を戦争に費やしたが、余の経験を通して言えれば、どんな犠牲を払っても本国の国内戦だけは身命を賭けて避けたいと思つ」

—ウエーリントン

資料 生徒・教師が治める国一覧

（携帯で読んでくださる読者の方々、大変読みにくくなっていますのでパソコンで読まれることをお勧めします。また、このページはあくまでこの世界の状態を簡単に分かるようにしただけですので面倒だと思われる方は飛ばしてくださいとも全く問題はありません）

史実と全く違った世界となつていいこの世界のうち、生徒と教師が治める国を紹介しておく。

でないとおそらくどの国がどうだか分からないと思つ。俺もまだ地図のあまりの変わつよつに困惑つていいし。

国名の次は国家元首名を表している。また、領土は現在の国で示してある。

アジア州

大日本帝国

小嶋 准一

領土

日本・北朝鮮・韓国・中国

極東ソビエト帝国

川本 純（教員）

領土

ロシアのうち、東経105度より東側

カザフスタン

村田 剛史
カザフスタン

領土

モンゴル帝国

沖 裕子

領土

モンゴル

パキスタン	三島 啓太
領土	パキスタン
インド帝国	宇根 美由
領土	インド・バングラデイッシュ・スリランカ
タイ王国	水島 詩織
領土	タイ
インドネシア	前田 純子
領土	インドネシア・東ティモール・ブルネイ
イラン王国	多田 孝次
領土	イラン
イラク	野島 敦士
領土	イラク・ヨルダン・クウェート
サウジアラビア	三宅 智昭
領土	サウジアラビア・アラブ首長国連邦・バーレーン・カタール
トルコ帝国	月島 麻衣
領土	トルコ・キプロス
オーストラリア	オセアニア州
矢木 恭子 (教員)	

領土 オーストラリア

ニュージーランド 栗山 弘子

領土 ニュージーランド

北アメリカ州

北アメリカ合衆国 小田 和也 (教員)

領土 カナダ

南アメリカ合衆国 北 堅治 (教員)

領土 アメリカ (ただしアラスカ州を除く)

メキシコ合衆国 相田 翔

メキシコ

コスタリカ 伊藤 忠志

領土 グアマテラからパナマまでの中米諸国
キューバ・バハマを除くカリブ海の国々

南アメリカ州

コロンビア 武田 智也

領土 コロンビア・ベネズエラ・ガイアナ・スリナム・
仮領ギアナ

ブラジル

領土 角田 高明

ブラジル

チリ	岡本 慶治
領土	チリ・ペルー
アルゼンチン	小池 祥也
領土	アルゼンチン
ヨーロッパ州	
イギリス連邦	太田 忠行
領土	イギリス・アイルランド・アイスランド・グリ
イギリス連邦共和国	
島田 俊輔	
領土	フランス
フランス共和国	橋本 浩輔
領土	フランス
スペイン王国	高橋 雄樹
領土	スペイン・ポルトガル
イタリア王国	町田 翔
領土	イタリア・マルタ
ユーロスラビア	三原 恵子
領土	クロアチアなど旧ユーゴ諸国・ギリシャ
ウクライナ	黒木 唯

領土	ウクライナ・モルドバ
ポーランド王国	三木 香織
領土	ポーランド
スウェーデン王国	上島 紀美子
領土	スウェーデン・ノルウェー
フィンランド	岩村 美奈
領土	フィンランド
西ロシア帝国	奥田 茜
領土	東経90度以西のロシア
アフリカ州	
北アフリカ共和国	岸野 邦明（教員）
領土	アルジェリア・リビア・モロッコ（西サハラ除く）
エジプト王国	藤田 宏美
領土	エジプト
モーリタニア	深井 綾
領土	モーリタニア・セネガル・ガンビア
チャド	小早川 忠弘
領土	チャド・ニジェール

ギニア

薄田 浩太

領土
ナフアソ含む)

ギニアビザウからベナンまでの9カ国（ブルキ

ナイジェリア

雪野 美鈴

領土
ン・コンゴ共和国

ナイジェリア・カメリーン・赤道ギニア・ガボ

スー・ダン

小野寺 冬子

領土

スー・ダン

エチオピア

高木 梓

領土

エチオピア

ケニア

松下 久美

領土

ケニア・ソマリア

中央アフリカ帝国

荻野 由利子

領土

中央アフリカ・コンゴ民主共和国

アンゴラ

中島 愛美

領土

アンゴラ

南アフリカ共和国

向井 堅次

領土

南アフリカ・ナミビア・ボツワナ・モザンビー
ク・レソト・スワジランド

資料 生徒・教師が治める国一覧（後書き）

今回名言はなしです。今まで紹介してきた名言は松村劭著「名将たちの戦争学」とNHK「その時歴史が動いた 心に響く名言集」から抜き出させていただいています。

軍備拡張が急ピッチで進む中、外務省も慌ただしく動いてい。前も述べたように「南進」する際に背後や側面となる国と平和条約を結ぶためだ。

まずは背後の大国、極東ソビエト帝国からである。専門職である外務大臣に任せようかとも思ったが、ここは俺自らが赴いて平和条約の交渉に臨むことにした。

極東ソビエトの国家元首は川本純先生。

教科担当は数学で、割と好感の持てる人でもあり生徒からの評判は上々。

このゲームでも国民からの信頼はかなり高いようだ。史実のロシアやソ連が力で民衆を押さえつけていたことを思つてしまい違いくらい違うである。

そして軍事力もかなりのものを持っていた。

海軍は哨戒艇があるだけの小規模なものだが、陸軍はすでに戦車が実用化されているし、そのほかの兵器も決して先進国に劣りはしない。

こんなと戦争をすれば「南進」なんてまず無理だ。

そして1910年7月20日、俺は極東ソビエト帝国首都、マガダンに着いた。

マガダンは東経約150度・北緯約60度のオホーツク海沿岸にある街だ。

かなりマイナーな都市を首都にしてあるが、これはおそらく戦争で

首都がいきなり攻撃を受けることを恐れてのことだらう。

極東ソビエトの中には大きな街、例えばウラジオストクやイルクーツクなどがあるがいすれもシベリア鉄道に沿つた、モンゴルや日本との国境線に近いところにあり、戦争となれば攻撃を受けることは必至である。

（その割にマガダンはオホーツク海に面しており、大した海軍を持たない極東ソビエトだと間違いない艦砲射撃の的になると思つのが）

極東ソ連との間にある領土問題は南樺太。

ここは帰属未定となり南サハリン（樺太）自治政府が存在する。国家というほどのものではないが、そこに住むロシア系の人々によりしつかりと自治が行われている。

俺は民族的にも地理的にもここは極東ソビエト領となるべきだと思う。

資源的には南樺太にもあまり大きくはないが、そこそこ産出量のある油田があり欲しい限りなのだが、それを巡つて極東ソビエトと戦争しても差し引きマイナスになるだけなのでそんなことはしない。

マガダンは暖かかった。

冬はマイナス20、30は当たり前のことだと夏はあるらしい。

気温は25度、丁度いいくらいである。

空は雲ひとつない快晴で空気は澄みわたり遠くまでよく見える。

この快晴の空のようすに交渉もスムーズに進んでほしいものだ。

俺は到着早々マガダン市民の大歓迎を受けた。

日の丸と極東ソビエトの国旗（史実のソ連と大体同じ旗のようだ）を手にたくさんの市民が港で出迎えてくれていたのだ。

先生もわざわざ迎えに来てくれていて、俺は先生にガイドまでして

もう一つその日はマガダンの市内観光を楽しんだ。

そしてその翌日外交交渉に入った。

「先生、わが日本としましては貴国、極東ソビエト帝国とは戦争をすることなく平和に共存していきたいと思つています。帰属未定の南樺太についても貴国が領有することに一切異議を唱えません。是非平和条約にご同意いただきたいのですが」

俺がそう切り出すと、先生は笑つて、

「これは私がお願ひするべきことだらう。今のわが国の実力ではどうてい日本に太刀打ちできない。当然平和条約はお受けしよう」

こうして無事に平和条約は締結された。

これにより日本は沿海州付近での漁業権を得るかわりに帰属未定となつていた南樺太は極東ソビエトに譲る。

そしてお互に国境を侵すことなく友好的にすゞしていこうといつことになつた。

この後俺はアジア諸国を歴訪して平和条約の交渉を行つた。

モンゴル帝国・カザフスタン・パキスタンとの平和条約は問題なく締結され、ここに背後・側面の脅威は去ることとなる。

しかし、予想通りタイ・インドネシア・インドとの交渉は失敗に終わった。

タイではカンボジアの譲渡と引き換えに交渉の妥結を図つたがタイはラオス・ベトナムまでもの領有を主張。

小国のかせに生意氣な…と思つたが、これはどうやらタイを治めて

いる水島の主張ではなく、その背後にあるインド・インドネシアがそう言えと言つていいかららしい。

水島はそれらの領主である2人と仲はいいが、その2人に比べおとなしい性格なので逆らえずこうなつていてるようだ。

この調子では他の2国は無理だなと思ったが一応行ってみた。しかし予想通り議論は平行線で、なんら得るところもなく空しく引き揚げることになる。

こうして日本政府の戦うべき相手がはつきりと決まった。

インド・インドネシア・タイ、そしてもしかしたらオーストラリア。負けるとは思わないが勝てるかどうかは怪しい。

軍部ではこれに備えて軍備増強計画の見直しも行われた。

そうそう、言い忘れていたがとうとう待望の油田が見つかった。

場所は秋田県の男鹿半島、油の質も上々で精製すれば航空ガソリンとしても十分使えるとのこと。

また、隣りの青森県で陸奥湾に突き出た夏泊半島でもかなり大きな油田が発見された。

陸奥湾の海底にかなり広がっていると思われるこの油田の石油の質はそんなに良くはないが、現在懸念されている船舶用燃料の不足をカバーしてくれるだろうと期待されている。

こうして戦争への準備は着々と進んでいった。

第16話 外交交渉（後書き）

今回カテゴリを見直し「山」とか全く関係なかつたものを消し代わりに「SF」等を入れさせていただきました。そのため「SF」のカテゴリのところに突如この小説が出現してしまった形になってしましましたがご容赦ください。

今回の名言

「戦争は他の手段をもつてする政治の継続にほかならぬ」
—クラウゼヴィッツ

大戦開始まであと1年を切った。
俺は相変わらず毎日統合作戦本部や国会などで忙しく動き回っている。

そんな中俺にある報告書が届いた。

1913年1月時点での軍部の戦備状況の一覧である。

それによると海軍は新鋭艦が戦艦4、装甲巡洋艦8、一二等巡洋艦8、
駆逐艦32、潜水艦53、水上機母艦4。

旧式艦で現役なのは戦艦5、装甲巡洋艦6、一二等巡洋艦4、駆逐艦32。

建造中なのは戦艦4、航空母艦2、装甲巡洋艦4、一二等巡洋艦8、
駆逐艦24、潜水艦3となっている。

(三等巡洋艦が廃止され、艦種が一等巡洋艦に変わっている)

現在の就役艦を簡単に紹介しよう。

まずは「安芸」型戦艦4隻だ。

主砲に35・6センチ連装砲を4基持ち、速力は27・5ノットを
誇る。

「安芸」型は史実の「金剛」型戦艦の新造時の外観とほとんど同じ
だし、装甲が少し薄いのも変わらない。

しかし兵装は若干変わっている。

魚雷発射管は装備されていないし、副砲も15・2センチ单装砲が
16基から10基に減らされ代わりに対空兵器として7・6センチ
单装高角砲が6基装備されている。

この高角砲は陸軍の76ミリ速射砲などを参考に作られたもので、性能は大したことではないがとりあえず装備されたものだ。

ここ最近の航空機の発達はめざましく、一応何か対抗手段がいるだろうと海軍首脳部も思い始めたのである。

ところでなぜ艦種が戦艦なのかといふと、この世界の日本には巡洋戦艦といふ艦種がないからだ。

どうせ最終的に戦艦も巡洋戦艦も似たようなものになるし。

次は「箱根」型装甲巡洋艦6隻。

主砲は20・3センチ連装砲5基で後の条約型重巡と見た目は少し近いものがある。

速力は29・0ノット。

高角砲は搭載されていないが、代わりに40ミリ単装機関砲が20基も積まれている。

実戦で使えるかどうかの実験をかねてのものである。

そして「美々津」型二等巡洋艦8隻。

34・0ノットといふ高速なのが特徴である。

史実の「天龍」型に若干改良が加えられているもので、速力が1ノット速くなつたことや魚雷発射管の位置が左右両舷に3連装1基ずつとなつてゐる、高角砲が单装2基などが大きく違うところである。

次は「山風」型駆逐艦32隻。

これも史実の艦が少し早くでてきたようなもので、史実の「磯風」型駆逐艦と思つていただいて問題はない。

ただ魚雷発射管が3連装2基になつて、口径が45センチから53センチに上がつたところが大きく違つ点だ。

さらに潜水艦だが4種ほどんど似たようなものなのでそのうちの「呂一41」型を紹介することにする。

もともと「呑一41」型は第2期計画で建造される予定だったが、建造が前倒しされて1911年から建造が開始、13隻が就役し3隻が現在擬装中だ。

水上での排水量が700トン弱の後から考えるとかなり小型の部類に入るが、当時で考えると大型艦である。

性能は速力が水上で15・0ノット・水中で9・0ノット、航続距離は8ノットで7600海里。

武装は50・0センチ魚雷発射管4基、魚雷8本を搭載となつている。

これはドイツ潜水艦「ロー19」型が参考である。

（もちろん俺が調べてその性能を要求しただけで実際にドイツから教えてもらつたりしたわけではない）

それと建造中の艦の中から「鳳翔」型航空母艦を紹介しておこう。例の「富古丸」で行われ続けている実験結果をもとに設計された世界初の航空母艦だ。

基準排水量1万2千トン弱、速力24・0ノット、搭載機数41機（うち補用5機）。

武装は7・6センチ単装高角砲4基、40ミリ機銃が10門ほど。航空擬装もしつかりとしており、「富古丸」同様縦索式ではなく横索式の着艦制動装置が装備されている。

史実の「鳳翔」と比べても遜色ない艦だ。

しかも世界初の新造空母であるだけでなく、空母としても世界初の艦である。

まだ他国では既存艦を改造して造りこつて計画があるだけで設計中のものがほとんど。

日本は「富古丸」で繰り返し行われた実験により空母に関しては世界のトップなのだ。

ちなみにその「富古丸」だが、艦載機の実験などが行われていたが現在は終了し、艦載機の発着艦の訓練にあたっている。

今そこで訓練を受けているパイロット達が「鳳翔」や「興翔」（同型艦）に乗ることになるだろう。

次は陸軍だ。

陸軍は志願兵の不足が大きな問題となつてあり、予定の150個師団・30個後備師団のうち10個師団が未だに編制されていない。編制された師団も兵員が定員に達せず、ある連隊は定数の半分にも満たないという有様。

なぜ10億もの人口を抱えているのに兵員が集まらないか、それは国全体として史実に比べ裕福になつてあり、軍隊みたいなきつい仕事よりも平穏に暮らせるような職業を選ぶようになつてているからだ。貧しい農村では軍人になりたいという青年は多いようだが、一家の働き手がいなくなることを恐れて止める親もかなりいるようである。それに中国ではもともと軍事に従事するものを卑しむ傾向があると聞いたことがある。

嘘か本当かはわからないがそういう影響もあるのかもしれない。

俺はそのうち集まるだらうと楽観していたがあと1年を切つた今、もはやそんな悠長なことは言つてられない。

俺は新聞に声明を出し国民に協力を求めた。

また上海で新鋭艦を集めて観艦式を盛大に行つたり、陸軍の訓練の様子を新聞や雑誌に取り上げさせるなど積極的に軍をアピールした。あまりこういうことはしたくないが戦争が迫つて以上仕方ない。

ただ陸軍と違ひ海軍は有り余るほどの志願兵が集まつてゐる。

土に埋もれ、草の根かじつて戦うイメージの陸軍より海軍に入つて巨大な軍艦に乗り、大海原へ出たいという若者が多いようだ。

空軍は予想以上のペースで数が増えていっている。

現在実戦配備についている航空機は各種あわせて約2千機と、目標の千機の倍まで増えた。

そこで今航空隊の有効な部隊編制が考えられているところだ。

現在航空隊は基地ごとに編制され数はバラバラ、機種はそれぞれ何かに偏っていたり中途半端だったりと極めて非効率的だ。

これをどうすれば上手く運用できるか、今試行錯誤が続けられている。

俺達が様々な問題と格闘をしているうちに時間は容赦なく流れ、あつという間に1年は過ぎていった…。

第17話 陸海軍戦備状況（後書き）

もうすぐ開戦ですが作者は戦術・戦略に関しては「ド」のつく素人です（他のことに関する素人ですが）。精一杯努力しますが皆さんの中にはその幼稚さによつて不快に感じられる方もいらっしゃるかもしれません。ここはこうしないといけない、こんな戦略は成り立たないなどありましたらご遠慮なくご指摘ください。

今回の名言

「戦争は政治の継続ではなく、政治の破壊である」
—ハンス・フォン・ゼークト（ドイツ陸軍大将）

「陛下！陸軍部隊は所定の位置につきました。いつでも攻撃を開始できます！」

「空軍司令部より報告、遅れていた第7航空師団の進出が完了しました」

「連合艦隊より報告、臨時第1支隊目標海域に到着しました！しかし天候が悪化しつつあるようです」

香港の統合作戦本部は今非常に忙しくなっていた。

今日は1914年1月1日、そして現在時計は午前5時すぎを指している。

もう戦争始まってるじゃないか！と思われた方多いかも知れないがこれには訳がある。

本初子午線、つまり経度0度のイギリスが午前0時になつたときに戦争が始まることになつてているのだ。

つまり、日本とイギリスには7時間の時差がある（この世界の日本は東経105度での時間を標準時刻としているため普通の世界の日本とも2時間違う）のだから、このうちでの戦闘開始時刻は午前7時となっている。

開戦まであと2時間となり、所定の作戦に従い各部隊が動きそれらの報告が全てここに集まつてくるので無線は鳴りっぱなしの状態だ。統合作戦本部は軍の指揮系統の最上位にあるものなのでその忙しさ

は半端ではない。

ただそれらを整理するため当然いくつかの部署にわけてある。

主なものは戦域全てを大まかに扱う総合作戦部、東南アジア地域を細かく扱う第1作戦部、オセアニア地域担当の第2作戦部、インド地域担当の第3作戦部。

総合作戦部でおおまかな戦略目標が決まり、それが各地域担当の部で陸・海・空軍が共同で具体的な攻略目標等を決めるよつになつてゐる。

さて、現在の状況だがまずは陸軍から…。

陸軍は各方面隊から師団や旅団を引き抜き「軍」を編制する。ただし、この世界の「軍」は史実の「方面軍」と思つていただきたい。

その下には「軍団」がおかれそれは2個または3個師団から成つており、これが1軍に3個か4個。

つまり1つの軍は大体8から10個師団を隸下にもつてゐる。そして史実と異なり師団司令には少将があつてられ軍団に中将、軍に大将。

これは平時に高給取りの大将や中将の数を減らすためでもある。

今回おかれた軍は以下の通りである。

第1軍（ベトナム方面担当） 華南の部隊を中心に8個師団と3個砲兵旅団

第2軍（ラオス方面担当） 華中の部隊を中心に8個師団と2個砲兵旅団

第3軍（ミャンマー方面担当） 日本列島の部隊を中心に1-10個師

団と4個砲兵旅団

第4軍（フィリピン方面担当） 朝鮮の部隊を中心とした6個師団

現在はこれだけだがタイを制圧した後にさらに軍の数幾つかが増やされインドやインドネシアへ投入される予定である。

第4軍だけ兵力が少ないがこれはスペイ情報によりフィリピンは日本に降伏するらしいので戦闘が発生する可能性自体が低いためだ。万が一降伏しなかつた場合は華北から3個師団、新疆から2個砲兵旅団を引き抜いて軍を編制しなおし、フィリピンへ上陸せらるようになつてゐる。

また、西藏方面軍は部隊を南下させインド軍がヒマラヤ山脈を越えてくるのを警戒している。

もつともその可能性はほんんどない。

ただでさえ標高8000メートルとすさまじい高さがあるのに、こつちの世界では西藏やネパールの標高は約1000メートル下がっており、要するに1000メートル余計に上らないといけなくなつているのだ。

そのため西藏方面軍が警戒しているのは、大部隊が山脈を越えてくることではなく小規模なコマンド部隊が侵入して来ることである。コマンド部隊による跳梁を許せば様々な交通機関が麻痺するのは確実、さらに有効な対策が出さなければそのまま政府への批判へ直結する。

それだけは避けなければならない。

一方海軍だが連合艦隊が編制されている。
編制は以下の通り。

第1艦隊 戦艦8隻を中心とする主力部隊。

第2艦隊 装甲巡洋艦12隻を中心とする前衛部隊。

第3艦隊 空母2隻、水上機母艦4隻を中心とする機動部隊。

第4艦隊 旧式戦艦5隻、旧式装甲巡洋艦6隻を中心とする支援部隊。

第5艦隊 潜水艦64隻を中心とする潜水艦部隊。

このうち現在活動中なのは第1艦隊・第2艦隊から若干艦艇を引き抜いて編制された臨時第1支隊とシンガポール方面へ出撃した第3艦隊、各地へ散らばつて敵艦隊の搜索・敵輸送船への攻撃を行う第5艦隊である。

それ以外の艦艇は台湾で待機中。

なぜ台湾なのかというとオーストラリア艦隊に備えてのものである。オーストラリア艦隊は南洋諸島を通りて日本列島への攻撃もできるし、東南アジア方面に出でることもできる。どちらにも対応できるように大体中間に位置する台湾の基隆で待機しているのだ。

ただ中途半端が一番危険であるのだが…。

それはさておき最後に空軍について。

空軍は航空師団を設置している。

大体1つの航空師団には航空戦隊が6つおかれている。

その航空戦隊は4個分隊編制で1個分隊12機（うち3機が補用機）なので1つの航空戦隊で常用機36機、補用機12機。

航空師団全体では常用216機、補用機72機である。
(史実の航空師団・航空戦隊と編制は全く異なっている)

現在日本には航空師団が10個置かれている。

基本的に航空師団の任務は陸軍部隊の支援である。

爆撃機が他国に先んじて開発され実戦配備されているが、その搭載能力は最新鋭の双発爆撃機「炎龍」でもせいぜい400キロが限度。航続距離も最大600キロだが爆弾を400キロ積むと3分の2ぐらいうまで下がってしまう。

そのためかなり前線に近いところに飛行場が必要だが、戦線はどんどん南下していくためおそらくついていけなくなると思われている。

それを打開するために開発され続けているのが水上機だ。

水上機なら河でも海でも水さえあればどこにでも降りることができ

る。幸い東南アジアにはそれなりの大きさのある河川がかなりあるため降りるところに困らない。

もちろん運動性・爆弾搭載能力は劣るが偵察・軽い爆撃任務は出来

る。

空軍は水上機のみで編制された航空師団を2つ持つており、現在2つとも海南島で待機中である。

「陛下、そろそろ時間です。攻撃許可を出してください」

クッキーが俺を呼んだ。

時計を見るともう6時55分になっていた。

「よし、全部隊に予定通り〇七〇〇を持って行動を開始せよと電報を打つてくれ。みんな、これから長い戦いが始まる。心してかかれ」

「まつー。」

部屋にいる全員が俺に向かつて敬礼をする。
しばらくして7時を告げる時計の鐘が部屋全体に響きわたった。

第18話 開戦（後書き）

ようやく始まりました。戦争の終わり方を考えずの戦争突入で今ものすこく悩んでいます。頑張つていきますが終わらせ方は強引になる、かもです。

今回の名言

「戦場で得られない譲歩を、交渉のテーブルで得られるわけがない」
—ウォルター・デベル・スミス（米陸軍大将）

第19話 燃える国境

イギリス時間1914年1月1日0時0分、本来なら全世界がカウントダウン等で盛り上がっているはずのときだが今年それどころではない。

各国は開戦の時間になると一斉に国境を越え攻撃を開始した。祝いの花火の代わりに砲弾がそれぞれの国へ降り注ぐ。

日本も同じである。

第1軍・第2軍・第3軍はそれぞれ自分の担当地域へ侵攻した。ただし第1軍及び第2軍は戦闘は起きていない。

ベトナム・カンボジア・ラオスはそれぞれ日本に対し降伏を通告してきたからだ。

他にもフィリピン・ミクロネシア・マーシャル諸島・パラオも降伏すると通告してきている。

しかし、ミャンマーはインドに従属すると宣言し、日本軍の侵攻部隊に対し攻撃を加えてきた。

攻撃の規模は小さく第3軍はこれを踏み潰したが、深いジャングルに阻まれ前進は遅々として進まず、統合作戦本部は戦前のジャングルに対する考えがいかに甘かつたかを思い知らされた。

さらにミャンマー軍はゲリラ的に攻撃を加えてきて、現地及び統合作戦本部を大いにいらだたせている。

一方ラオスやカンボジアのタイとの国境では大規模な戦闘が始まっている。

カンボジアではタイ陸軍約20万がカンボジア陸軍の国境陣地に対

し攻撃をかけていた。

カンボジア陸軍国境守備隊5万名は全員戦死の構えで激しく抵抗したが、圧倒的な兵力差はどうしようもなく、2日ほど抵抗した後残兵1万5000は後退。

そのほかカンボジア陸軍は10万ほどの兵力がいたが、統合作戦本部の命令により国境守備隊の残存部隊を収容するとベトナム陸軍と合流するためサイゴンまで撤退した。

その頃ラオス軍は首都ビエンチャンに全部隊12万を集結させ、タイ軍を迎撃とうとしていた。

このビエンチャンはメコン川を挟んでタイと国境を接する街で、メコン川の左岸がビエンチャン、右岸がタイ領となっている。

そのためラオス政府は首都が開戦と同時に攻撃されるのは当然覚悟しており、ビエンチャン市民は1ヶ月前の時点で全員すでに北部へ疎開を完了していた。

ラオス陸軍は川岸に陣地を構え、タイ軍の渡河を阻止して日本軍の来援まで持ちこたえるつもりだったが…。

攻撃してきた敵軍はタイ軍だけではなく、インドネシア軍30万を含む合計45万もの大軍であった。

わずか12万のラオス軍が約4倍もの兵力を持つタイ・インドネシア連合軍の猛攻を防げるはずもなく、あつという間に戦線は崩壊してしまつ。

ラオス軍の陣地は急造のため縦深さに欠ける上に砲台などが全く掩蔽されておらず、攻撃開始から3時間も続いた連合軍の砲撃で陣地がほぼ完璧に破壊されてしまい死傷者が続出。

そのあと一斉に開始された連合軍の渡河に対しラオス軍は散発的に抵抗したが、あつという間に排除された。

ラオス軍の損害は死者・負傷者・行方不明者・捕虜合わせて6万5000。

全体の5割にも及んだ。

この一戦で戦力と自信を完璧に打ち砕かれたラオス軍は、日本軍に助けを求め各部隊バラバラに北上していくこととなる。

統合作戦本部で報告を聞いた俺は文字通り言葉を失った。

俺たちの作戦ではカンボジアの喪失は想定どおりだが、ラオス軍の大敗北は予想外としかいいようが無かつた。

インドネシア軍がタイへ2・30万規模の兵力を投入するなんて思わなかつたし、第一緒戦からこんなに積極的に攻勢をかけてくること自体想定してなかつたのだ。

「第2軍の進軍を停止し、現在位置で防御陣地を構築して待機させよう」

俺は隣りにいた一戸兵衛陸軍大将に言った。

この人は史実では旅順攻囲戦で活躍した人物である。

「そのほうが良いでしょ。第2軍だけで戦えというのは酷でしょ」

一戸が言つ。

「ああ、第4軍を増強してこの方面に投入しよ」

俺と一戸は第2作戦室へ向かつた。

廊下はたくさんの士官が忙しく走り回つていて、書類を抱えて部屋から部屋へ。

歩いている俺らの隣をピューッと駆け抜けていく。

この統合作戦本部では敬礼は省略されることになつていて、彼

らはいちこ立ち止まつたりしない。

「陛下！第3軍から報告です。インド軍がミャンマー領内へ入った模様です。あと1週間もすれば敵の先遣隊と接触があるものと思われます」

「第1臨時支隊より報告が入りました。攻撃には成功しましたが…」

入った途端悪い知らせばかりだ。

「成功したがどうしたんだ？」

俺は不機嫌丸出しで聞く。

結果は本当に困ったものだった。

第1-9話 燃える国境（後書き）

「意見」感想お待ちしています！

今回の名言

「長い駐屯地生活を過ごして、われわれは軟弱になり、快樂を追うようになつて、軍人の特操を失いつつある。全軍人は『逆境という学校』を卒業しなくてはならない」

一グナイゼナウ

それと我が高校文芸部の面々が書いた小説（短編のみですが）がこのサイトに載っています。作者名は「ねこのしつぽ」です。一度読んでいただけるとうれしいです。感想もいただければ励みになると思つので暇なときなどにふらつと立ち寄つてみてください。

第20話 タイランド湾海戦

1914年1月3日、日本海軍第1臨時支隊は天候不良で数日遅れはしたがバンコク港のタイ海軍艦隊へ攻撃を開始した。

日本艦隊の兵力は戦艦「安芸」型2隻を中心に装甲巡洋艦4、二等巡洋艦2、駆逐艦16。

さらに特設水上機母艦「貴陽」が付属されている。

対するタイ艦隊は二等巡洋艦1、駆逐艦13で陸上からの航空機は一切なし。

タイ海軍としてはもともと早くインドネシアあたりに逃げておきたかった。

正面から戦つて勝てるわけはないし、バンコクにいたのでは開戦後逃げるにしてもゲリラ的に戦うにしても難しい。

タイランド湾に敵艦隊が入つて来たら逃げるのはまず無理だ。

しかし、海軍をインドネシアに脱出させたいとタイ政府が同盟国であるインドネシア政府に打診したところ、開戦まではバンコクにいろと語ってきた。

インドネシアやオーストラリアはタイに日本と戦わせて日本海軍の実力を測るうとしたのだ。

タイ海軍司令はこの手前勝手な命令に憤慨したがどうしようもなく、開戦したらすぐに南下してシンガポールへ向つて逃げることにして、その準備をさせていた。

しかし、天候不良で出撃することが出来なかつたため今もまだバンコク港内に残つている。

そして日本艦隊タイランド湾を北上中という知らせを受けたとき、

司令は覚悟を決めた。

むざむざ港内で沈められるのは口惜しい、ならば沖に出て日本艦隊に突入して敵艦をいくつか道すれにしてやるゝ、と。

一方日本艦隊は油断しきつっていた。

どうあがいたところでタイ艦隊に勝ち目はない。

どうせ港内で縮こまつて出て来やしないとたかをくくつていた。

ところがタイ艦隊は一等巡洋艦「バンコク」を先頭に単縦陣で真つ直ぐ日本艦隊へ向かつて来た。

日本艦隊はタイ艦隊の出現に少々驚いたが、何のことはない、チビばつかだと戦艦と装甲巡洋艦部隊を前に出して砲撃を開始した。

戦闘開始わずか10分後、「安芸」が放つた砲弾がタイ艦隊旗艦「バンコク」を直撃、同艦は爆沈した。

もともと高速を出すため装甲がほとんど張られていなかつた上に35・6センチ砲弾が機関室付近に命中したのだ、とても耐えられるはずはない。

司令官はもちろん戦死、乗員もほとんどが艦と運命を共にした。これを見て士気がすっかり落ちたタイ艦隊は我先に逃げ始める。

日本艦隊はこれを追撃、わずか1時間ほどの戦闘で全ての艦を撃沈または拿捕することに成功した。

タイ艦隊は全滅、日本艦隊の損害は皆無。

海戦は日本軍の圧勝ということで終わる……はずだった。

ところが、思わぬ伏兵が潜んでいたのだ。

海戦終了後、拿捕した駆逐艦2隻を護衛して駆逐艦4隻と「貴陽」がひとまずサイゴンへと向かつた。

(ちなみに「貴陽」はこの海戦では波が荒かつたため水上機を飛ば

せず何の役にもたたなかつた)

残りの艦艇は昼過ぎから夕方にかけチャオプラヤ川河口（タイラン
ド湾の一番引っ込んだとこ）付近にあつたタイの港湾施設を攻撃し
輸送船など11隻を撃沈する。

沿岸砲台から反撃が少しあつたが、数も少なく射程も短いため日本
艦隊が損害を受けることはなかつた。

そしてその日の夜、

ドオオオン！

突如艦隊の先頭を行く「安芸」に艦橋よりも高い水柱が上がつた。
さらに数分後2番艦「石見」も大きな爆発を起こし火災が発生する。
敵潜水艦による奇襲だつた。

タイ海軍はひそかにドイツ製の大型潜水艦4隻を購入、訓練してい
たのだ。

日本海軍もタイが潜水艦を手に入れたらしいという情報は得ていた
が重要視せず、今回の作戦においても省みられることはなかつた。

この予想外の攻撃を受け日本艦隊は混乱したものの、水雷戦隊を戦
艦部隊の前に出して敵潜水艦に対する攻撃を開始した。
しかし、なかなか敵の位置がつかめない。

他国よりマシなソナーを積んではいるがこの時代のソナーは信頼性
が低く、実際訓練でさえ敵役の潜水艦を見つけるのは難しかつたの
だ。

まして実戦で見つけるなんてそれこそ奇跡だつた。

（史実の第1次大戦でも捕捉率は1割程度だったといふ）

水雷戦隊が敵潜を探し回つてゐる間に戦艦・装甲巡洋艦部隊はもう

一方の水雷戦隊（一等巡洋艦1と駆逐艦4。拿捕した敵艦の護衛のため4隻欠けている）に守られながら離脱を開始した。

護衛する艦が少なくこれ以上敵潜がいたらどうしようもないがとりあえず現場から逃げようとしたのだ。

幸い、被雷した戦艦は2隻とも自力航行が可能であり、海域に別な潜水艦がいることもなかつたので無事に離脱することができた。

一方日本艦隊奇襲を成功したタイ海軍潜水艦部隊だったが正直困っていた。

さつやとどつかに行つてくれればいいのに敵の駆逐艦か巡洋艦が10隻近くまだ頭の上にいるのである。

しかも悪いことにこのドイツ製潜水艦には灯油機関が使われていて（もちろん水中は電動機だが）、水中性能や航続距離に問題があった。

そのためこの潜水艦は水中にいることができるのは長くとも一日程度とされているのに空気の補給が十分でなく、残量はあと1時間がやっと。

電池も残りわずかだ。

本来夜間に空気の補給や充電をするのに、夜に攻撃をかけるよう命令されたため補給が完了しないうちに日本艦隊と接触してしまったためである。

そのため潜水艦4隻の艦長はそれぞれ悩んでいた。

もちろん水中で連絡など取れるはずもなく各自で今後のことを考えている。

浮上して全速力で離脱する……、無理だ。

このまま水中で敵艦が去るのを待つ……、先に酸欠で死んでしまう。じゃあ降伏するか……、そんなことはできない。だったらやるべきことは一つ、しかしそれは……。

そして1時間後、4隻の潜水艦は次々に浮上しそれぞれ決めた覚悟のもと行動を開始した。

まず浮上したのは「S-2」だった。

「S-2」は浮上と同時に日本艦隊の先頭にいた二等巡洋艦「川内」へ雷撃を行つた。

「川内」では突然の出来事に驚いたが冷静に魚雷を回避、「S-2」に対し砲撃を開始し第2斉射が「S-2」を捉え「S-2」は爆沈した。

続いて「S-4」が浮上を開始、日本艦隊へ体当たりをかける。

しかしそう簡単にあたるはずもなく、さらに悪いことに駆逐艦の真横に浮上する形となつてしまつた「S-4」は集中砲火を浴びあつと、う間に海の藻屑となつた。

残りの2隻は聴音機でこの2隻の結末を知り、これ以上の抵抗は無意味と浮上して白旗を掲げた。

こうして日本艦隊は大きな損害を受けはしたが、一応タイ艦隊撃滅という目標は達成された。

今回の海戦で被雷した2隻の損害は予想以上に大きく両艦ともに修理に半年かかると見積もられ、ここ最近の負け続きで暗くなつていた統合作戦本部の空気をさらに悪くした。

しかし、落ち込んでいる暇はない。

報告を聞き終わるとすぐさま次の報告が飛び込んできたのだ。

第20話 タイランド湾海戦（後書き）

「意見・感想お待ちしています！」

今回の名言

「戦闘は、きびしく、エネルギー消費に戦え！それが戦闘時間を短くし、損害を最小限にする方法である」
——ナポレオン・ボナパルト

第21話 シンガポール奇襲

1月4日、臨時支隊が大打撃を受け後退した翌日早朝のこと。
インドネシア海軍の根拠地であるシンガポールに大きな異変が起つた。

その日、ある陸軍大尉はいつものように自分が砲台長をつとめる砲台の側で兵達が整備しているのを見ていた。

兵達は忙しく動き回りながら整備をしている。

よし、それじゃやめて飯にするかと言おうとしたそのとき、水平線の上に黒い豆つぶみたいなのが目に入った。

兵達もそれに気づき整備の手を休めそれを見る。

5分後、大尉はその物体が何か理解する。

それは飛行機の編隊だった。

しかし、彼の理解は完璧ではなかつた。

「航空隊の連中こんな朝っぱらから訓練飛行やつてるのか。」
「苦労なこつた」

そうつづくとある兵士が、

「いえ、今日は休みだと思いますよ。昨日航空隊にいる友人が、明日は訓練が午後にちょっとあるだけで久しぶりにゆっくりできるつて言つてました」

大尉は笑つて、

「じゃああれは何なんだよ。上の連中が訓練ないとか言つて油断させといて、また緊急出動の訓練でもさせてるんじやないか？俺達もよくあるだろ。真夜中寝てる時に突然たたき起こされちゃ。ま、気の毒な航空隊のことは置いといて、飯にしよつ」

そう言つと兵達は整備道具の片付けを始めた。大尉は砲台を去ろうとしてもう一度空を見る。かなり接近していたその編隊を見て、『ご苦労さん、と心の中で思つたその時だつた。

彼に目に入つた機の翼に描かれていたマーク、それはインドネシア軍のものではなく敵軍である日本軍の日の丸だったのである。

「整備やめ、戦闘用意！」

大尉は兵に叫んだ。
しかし兵は、

「大尉、止めてくださいよ。俺達も今日は緊急出動の訓練やるんですけど？」

先ほどの話からしてジョークだと思つたらしい。

「馬鹿野郎！訓練なんかじゃない、あの飛行機は日本軍のものだ。翼の日の丸を見ろ！司令部へ通報だ、急げ！」

兵達はあわてて砲台へ取り付く。

「第14砲台から司令部へ！敵機来襲、その数100余り。繰り返す、敵機来襲！」

電話口で兵が叫ぶ。

こうして彼らの大変な一日が始まった。

「全機に告ぐ。目標上空に敵機なし。予定通り航空基地への攻撃を最優先で行え。以上だ。攻撃を開始せよ。」

攻撃隊長の徳川少佐の命令を合図に攻撃隊は小隊ごとに散開して攻撃を開始した。

日本側の兵力は戦闘機30機、爆撃機20機、水上機40機である。もちろん陸から飛んできたわけではなくシンガポール沖まで進出した第3艦隊の空母2隻、水上機母艦4隻から飛んできた航空隊だ。世界初の機動部隊であるこの部隊がどんな戦果を挙げるか統合作戦本部は大きな期待をもつてこの攻撃を見ていた。

攻撃は戦闘機隊がインドネシア陸軍シンガポール飛行場に銃撃を加えたことにより始まった。

敵機が舞い上がりてくる様子は全くない。

しかも対空砲火もないに等しく戦闘機隊は悠々と上空を飛び回る。

その後爆撃機と水上機の部隊が到着、滑走路・格納庫・敵機に次々と爆弾を投下していく。

爆弾の搭載量が少ないため1機あたりの攻撃力はかなり低いが、これだけの機数が集まれば大きな攻撃力となる。

史実で航空機の集中投入によつてすさまじい破壊力が生まれることが世界に示されたのは第2次世界大戦における真珠湾奇襲だが、この世界では第1次世界大戦におけるシンガポール奇襲ということになるだろつ。

約1時間に渡つて行われたこの攻撃によりシンガポール航空基地は完全にその機能を失つた。

基地にいた航空機は各種あわせて60機ほどだがこの攻撃を生き延びたのはわずかに4機。

飛行場の隅の方にいたりしてたまたま難を逃れたのだがもはや飛ぶことは出来ない。

滑走路は爆弾で耕されているし、燃料タンクは炎上中。弾薬庫も被弾して今は盛大に炎を吹き上げている。

またつた4機が飛んだところで何の役にも立たないが……。

そして日本機が去つてやれやれと思つたインドネシア軍の頭上に再び日本機が現れた。

第2次攻撃隊の戦闘機16機と水上機32機である。

今回の攻撃目標は港内にいる艦艇だ。

現在シンガポール港には装甲巡洋艦「マカッサル」をはじめ二等巡洋艦2隻、駆逐艦12隻、潜水艦5隻、掃海艇5隻、雑役船10隻、輸送船12隻などが停泊している。

もちろん最優先目標は「マカッサル」だ。

戦闘機隊は港湾施設攻撃のため港内には向かわずその周辺へと散る。60キログラム爆弾をそれぞれ2発ずつ抱えた水上機隊は「マカッサル」へ殺到、停泊中で動くこともできずさらに対空火器など全く備えていない「マカッサル」は一方的に攻撃を受けることとなつたが、たかが60キロ爆弾で沈むほど柔ではない。

命中弾は20発以上、艦橋構造物の大部分が破壊され炎上はしたが、船体はほとんどノーダメージだった。

当然上空から見た航空隊としてはそこまで分からぬが「マカッサル」は明らかに戦闘力を失つていい。攻撃は成功したと引き揚げていった。

しかし、全ての機が「マカッサル」1隻に集中してしまい他の艦艇は全く損害を受けていない。

そのため第1次攻撃隊をもう一度攻撃に出し港内の敵艦や港湾施設を攻撃させた。

最終的な結果は以下の通り。

戦果	沈没	駆逐艦	1隻	潜水艦	3隻	輸送船	2隻	雑役
	船	1隻						
	大破	装甲巡洋艦	1隻	潜水艦	2隻	輸送船	4隻	

そのほか駆逐艦3隻と雑役船2隻が損傷し、港湾施設も被害を受けた。

航空機は地上撃破52機で飛行場施設は壊滅。

損害

未帰還	水上機	2機
破損	戦闘機	1機
	爆撃機	1機

（うち損傷がひどく処分されたものが水上機3機）

損害は少なくはないが、与えた打撃からすれば攻撃は大成功と言つていいだろう。

新聞はこの初めての大勝利に1面全てを裂いて報道し、国民は沸き返る。

統合作戦本部もこのおかげで重くなつていた空気が軽くなり少しリラックスできるようになった。

開戦から誰もが緊張しつぱなしだったがこの勝利のおかげでわずか

4回で少し全員の表情が良くなつたと思ひ。

ただ、この戦いではつきりしたのは水上機の脆さである。

未帰還機がでたのはこの機種だけだし、破損した機も圧倒的に多い。もちろん最も多く参加していたためという理由もあるが、あの大事なことのない対空砲火でこれだけの損害が出たのは必ず理由があるはずである。

また、今の航空機では大型艦を撃沈するには航空機では力不足ということもはつきりとした。

そのため現在研究中の雷撃機開発が一層促進されていくこととなる。このほかにも得た戦訓が多い。

これを生かすかどうかで今後の航空機の運用が変わることになるだらう。

第21話 シンガポール奇襲（後書き）

史実の真珠湾作戦が戦艦8隻を撃沈破していったのと比べれば見劣りしますがこの時期の航空機だとこれが限度じゃないかと思います。第一これでも2年くらいは時代を進めていますが…。

今回の名言

「将来の戦争において、空軍はもっとも重要な軍となるだろう。その分だけ陸軍と海軍の役割は低減する」
—ギウリオ・ドーウ

これは言ひすぎかもしが航空機のもたらす破壊力にはすさまじいものがありますよね。

第22話 カンボジア国境戦

1914年2月14日、今度はベトナム・カンボジア国境で大規模な戦闘が発生した。

カンボジア回復を目指す日本軍と、占領したカンボジアを維持しようとするタイ軍との戦いである。

参加兵力は日本軍約54万名、タイ軍が約45万名。

日本軍の部隊はこの方面を受け持つ第1軍である。

第1軍は華南の部隊を中心に集められた8個師団と2個砲兵旅団、さらに旧ベトナム陸軍の10個師団と旧カンボジア陸軍の8個師団を加えた大部隊だ。

もはや「軍」という単位では收まらなくなつており、この戦いの後それぞれ第21軍・第22軍が新しく編制されることとなる。

戦いは日本軍砲兵隊による一斉射撃から始まった。

カンボジア国境線附近に築かれていたタイ軍陣地は、日本軍砲兵隊の猛射で木つ端微塵に吹き飛ばされていく。

何しろ日本軍の砲は野砲・重砲各種あわせて2000門を軽く超えている。

しかも中には24センチ榴弾砲とかいう化け物まで混じっていたのだ。

野戦築城程度の陣地が耐えられるはずもない。

そして砲兵隊の砲撃が終わると日本軍部隊が全線で攻撃を開始した。一気に突破してやろうと突撃を始める。

最初のうちは順調に敵の陣地（が先ほどまであつたところ）を次々に占領して進んで行つた。

ところが途中で進撃が止まつてしまつ。

大きな河が行く手を阻んだのだ。

この地域にはメコン川をはじめかなり大きな河がいくつも流れている。

日本軍部隊は当然そこを渡らなければならず、水深が浅いところを選んで部隊を進めているのだが、当然タイ軍も日本軍がそこを渡ることは分かつていて、そこに強力な部隊を置いているし陣地も当然堅固に造つていた。

河に入れば蜂の巣にされてしまつ。

歩兵部隊が攻撃を開始してから2時間ほど経つたが日本軍は川を渡れない。

ある大隊は強行突破を試みたが河の中ほどまで進んだところで機関銃を含むタイ軍の猛射を受けほぼ全滅。

この行動は大隊長が独断で行つたものようだがその大隊長も戦死。この部隊の死者は400名にものぼり河は血で一時赤く染まつたといつ。

他の部隊も敵の攻撃が激しく河に入ることなんてとてもできない。河に入れば先ほどの大隊と同じ運命を辿るだけだ。

砲兵隊が再度砲撃を行い、その間に突入しようとしたが敵の砲火はなかなか衰えない。

戦線はこう着状態に陥つたかに思えた。

この状況を開いたのが日本軍航空隊による攻撃である。

ここから100キロメートルほどメコン川を下つたところに仮の水上機部隊の基地が作られていて、そこには第8航空師団の分遣隊約

60機がいた。

この会戦が始まるわずか数日前にここに到着したため不慣れな場所で急に攻撃に出すのはどうか、という意見もあつたが日本軍苦戦という報告が届き、河に沿つて北上していくべいといふことで急遽出撃してきたのである。

この60機は5箇所ある渡河点のうち1箇所のみを狙つて集中攻撃をかけた。

爆撃を受けた陣地のタイ軍は完全に浮き足立ち、爆撃の後弾着観測機により誘導された重砲隊の正確な砲撃を受け大打撃を受ける。

そこへ日本軍が総攻撃をかけたためタイ軍は敗走した。

戦線が1箇所でも崩れると後は脆い。

もともと数・質両面で不利だったタイ軍は日本軍が河を渡つたことを知ると撤退を開始した。

そこへ日本軍航空隊が再び来襲、退却中で全く身を守るすべをもたないタイ軍は爆撃をモロにくらつて大混乱に陥つてしまつ。

そして爆撃の後は機銃掃射。

航空隊は最後の一発まで撃つて引き揚げていった。

そういううちに日本軍が追いついて砲弾や機関銃弾が飛んでき始めた。恐怖心が最高に高まつたタイ兵達は次々に投降し始める。

しまいには大隊ごと集団投降してくるところもありこの戦いでタイ軍は参加兵力の半分以上を失つてしまつこととなつた。

さらにそのわずか1週間後、今度はタイ・インドネシア連合軍のラオス侵攻部隊が日本軍と交戦した。

戦闘の詳細は省略するがビエンチャンに文字通り「背水の陣」を敷いていた連合軍を日本軍の第1・4軍が挾撃、さらにラオス残存部

隊が怒りとともに市外へ突入すると耐え切れなくなつた連合軍は退却を開始する。

ところが背後は河、早いうちに河を渡つた部隊は良かつたが退却援護のため残つていた10万強の部隊は完全に退路を絶たれ3日間の抵抗の後に降伏した。

この二つの戦いでタイ軍は大打撃を受け戦線を縮小、カンボジアを放棄して自国領内へ撤退した。

第22話 カンボジア国境戦（後書き）

「意見」感想お待ちしています。至らぬところがあれば出来る限り直していきたいと思いますので遠慮なく「指摘ください。

今回の名言

「すべての事柄に手落ちのないよう二二だわる者は、何物も得ない。
目標はただ一つ、敵軍だ」
—フレデリック大王

戦争が始まって3ヶ月が経とうとしている。

しかしそのわずか3ヶ月でタイ軍の劣勢は明らかだ。

メコン川会戦と第2次ビエンチャン会戦（前話に出てきた戦い）の両会戦の敗北後、連合軍は敗退に敗退を重ねカンボジアからは叩きだされ、タイ北部はすでに日本軍の手に落ちた。

もはや絶望的な戦況だが、タイ軍の兵士達はまだ勝てる信じている。

それはインドネシアやオーストラリアが援軍を送ることを宣言したからだ。

ただのパフォーマンスかと思えばそうではなく、オーストラリア方面に出ている潜水艦やスパイ情報によるとオーストラリア艦隊が出撃用意をしているようだし、インドネシア軍が陸路でマレー半島を北上中という情報も入ってきてることからどうやら本気のようである。

また、インドネシア艦隊もジャカルタに集結しているようだ。

そこで日本海軍は主力部隊である第1艦隊と第2艦隊をサイゴンへ前進させた。

ただし新鋭戦艦「美作」型は基隆（台湾北部にある港町）に残している。

理由は訓練不足。

「美作」型4隻は開戦直前に海軍に編入されたばかりでしかも擬装工事のやり残しがあつたりして思うように訓練も出来ていない。そのため今回はお留守番ということになったのである。

それにインドネシア艦隊は戦艦を持たないためいなくとも大した問題ではない。

こないだの海戦（タイランド湾海戦）で「安芸」型2隻をやられたのは痛いが、「安芸」型のもう2隻は健在である。

装甲巡洋艦の数でも圧倒しているしそれで十分対抗できると思つたのだ。

そして3月中ごろ、艦隊はサイゴンに到着した。

かなり前線に近いため敵水雷艇等による奇襲を受ける恐れもあるが、ベトナム海軍が軍港として使つていたので防備はそこそこされるようだし大丈夫だらう。

ちなみにベトナム海軍には一等巡洋艦1隻と駆逐艦10隻、そのほか哨戒艇などが10隻ほどいたが現在は第4艦隊の指揮下に入っている。

また、シンガポールを奇襲した第3艦隊もここサイゴンにいた。あの後マレー半島各地を襲撃していたがその後サイゴンに入港して整備と休養を取つていたのだ。

さらに第8航空師団の本隊が到着しておりかなりの数の航空機がサイゴンにいる。

飛行場の整備も行われており2・3ヶ月後には陸用航空機部隊の第3航空師団が進出してくる予定となつてゐる。

そして3月の終わり頃陸軍からサイゴンの艦隊に対し出撃要請が入る。

この頃陸軍はタイ領内への本格的な攻撃を開始しており、タイの首都バンコクまであと100キロにまで迫つていた。

しかし、航空機の支援を受けられる範囲から出てしまつた上に予想

以上にタイ軍の抵抗が激しく、戦線はこう着状態。

砲兵隊が砲弾の雨を降らし、歩兵部隊が肉弾突撃を繰り返して毎日少しづつ前進しているがこのままではインドネシア軍の援軍が到着してしまう。

今はまだマレー半島北部をモタモタと北上しているがあと1ヶ月、遅くとも2ヶ月後には戦場に現れるはずだ。

そうなれば面倒である。

もちろん兵力をさらに送ればいいだけではあるがこれ以上投入するのは避けたいのが本音だ。

ただでさえミャンマー方面に出ている第3軍が未だにミャンマー北部でミャンマー軍の小部隊と毎日ダラダラ戦闘を続けていてほとんど進んでいないのである。

出来れば援軍到着前にタイ軍を完璧に撃滅しておきたい。

で、要するに陸軍はどうしたいかというと艦隊をタイランド湾の根っこにまで入れて、そこからバンコクを爆撃して敵の背後に脅威を与えてほしいというのだ。

そこで海軍は第3艦隊に装甲巡洋艦を編入して強化し、タイランド湾に突入させることにしたが途中でまたも陸軍から新たな要請が入り作戦は大きく見直される、というより根本から変わることになる。

で、その新たな要請とは何かというと陸軍部隊を上陸させたいというのだ。

海軍は驚いた。

上陸作戦なんて考えたこともなかつたからだ。

もちろん部隊を揚陸することくらいは当然やつていてがそれは大体敵の影も形もないような海岸に上陸するとか、味方の勢力圏内で揚げて陸路で攻めるのが主である。

しかし今回は堂々敵の本拠地近くに部隊を揚陸せよつとこつものである。

海軍首脳部には反対意見が多く見られたが連合艦隊司令官山下源太郎大将が「大して考えたこともないの出来ない出来ない言つ」と一喝、サイゴンにいる全ての艦隊を出して支援に当たらせる」とで作戦は動き始めた。

当然インドネシア海軍も日本艦隊が何らかの大掛かりな作戦を準備していることは掴んだ。

ものすごい数の輸送船がサイゴンへ向かっているのである。

その数は50隻以上。

どんなに防諜に努めても秘匿することは出来ない。

そのためインドネシア艦隊は日本艦隊が出撃したのを確認（サイゴンに潜っているスパイや附近に配置してある潜水艦で）したら迎撃のため出撃することを決めた。

シンガポール軍港が先の空襲による被害から完全に復旧していないのは痛いが、まっすぐマレー半島へ日本艦隊が向かってくるならなんとか間に合ひ。

ただ日本艦隊が戦艦を含む場合、インドネシア艦隊はジャカルタでおとなしくしていなければならぬがオーストラリア艦隊が到着すれば十分互角に戦える。

オーストラリア海軍はアメリカ製の戦艦を2隻保有しており、タイランド湾での海戦で2隻撃破されている日本艦隊にとつて見逃せない脅威である。

その彼らはすでにオーストラリア北部にあるポートダーラウインを出港しジャカルタへ向かっていた。

あと1週間もあればジャカルタに着くだろう。

いりしてお互いの海軍は決戦に向かって動き始めた。

第23話 バンコクへ（後書き）

テスト週間にに入りました。さすがに高一になると内容が難しく今までのようすにテスト勉強なしではキツそうなのでそつちを頑張りたいと思います。二週間ほど更新がないかもしれませんがまたその後見ていただけたら幸いです。

もし更新していたらテスト勉強しようと一喝してやつてください。

今回の名言

「敵軍が退却すればそれはわれわれの作戦の失敗だ！敵を捕捉して撃破してこそ勝利と言える」

－アレクサンドル・スヴォーロフ（ロシア陸軍元帥）

1914年4月21日、日本艦隊はサイゴンを出港し南下を開始した。

これを発見したインドネシア潜水艦「M-6」は直ちに通報、敵艦隊動くの知らせはすぐにインドネシア・オーストラリア連合艦隊（以後「国艦隊」）の統合司令部へと伝わる。

ところがこの「国艦隊」の司令を勤めるオーストラリア海軍アーノルド・F・ギブソン大將は日本艦隊は前回同様シンガポールを目指していると判断してしまう。

まあ確かにあながち間違つてはいない判断ではある。

日本艦隊は南下している、だとしたらどこを狙つかといえばシンガポールのほかに見当たらない。

シンガポールを攻撃し、「国艦隊」をあびき出して決戦を挑む、そういう戦略は別に珍しいことでもない。

そう彼は考えたのだが日本艦隊の意図することは違つた。

日本艦隊南下の理由は一つ。

単純に岬を回るには一度南に下がらないといけなかつただけの話である。

サイゴンからタイランド湾に入るにはインドシナ半島から突き出たカマウ岬を回らなければならないのだ。

もちろん艦隊はそのついでにわざとシンガポールへ一直線に向かうようにして擬装航路を取つたのだが相手見事にはまつてくれた。

しかも「国艦隊」には悪いことに、付近に展開する潜水艦がかなり撃

沈されて警戒網に穴が空いていた上、残る潜水艦5隻もうち3隻が日本艦隊追尾に回ってしまい翌日出港した輸送船団に気づかなかつた。

(2隻のうち1隻は気づいたが撃沈されてしまった)
しかも追尾する3隻も1隻を撃沈され、残る2隻も日本艦隊を見失つてしまつ。

スペイもかなり洗い出されて掘まつたりしていて情報を送ることはできなかつた。

輸送船団を伴つてゐるというのが分かれば目標が違うことに気づいただらうが……。

3日後、ギブソン大將は自分の予定決戦海域に到着し、日本艦隊の搜索を始めたが無論見つかるわけもない。

丸一日探したが何の音沙汰もなく、どうしたことだ?といライラしながら参謀達と作戦会議を行つていた。

その彼のもとに突如電報が舞い込む。

しかし、それは偵察機からでも哨戒中の駆逐艦からでもなかつた。

それはタイランド湾沿岸地域の沿岸監視隊や港湾防備隊からの悲鳴だつた。

4月25日早朝、突如現れた日本艦隊はチャオプラヤ川河口付近の陸軍砲台に集中砲火を浴びせてこれを完全に破壊、さらに田に付く軍事施設は航空機による爆撃で徹底的に破壊していく。

鉄の暴風は3時間ほど続いた後小康状態となつたが、砲台などで生存していたタイ兵は驚くべきものを田にすることになる。

日本軍が上陸し始めたのだ。

それも10人や20人じゃない。

海面をびっしりと兵士を満載した舟艇が埋め尽くしているのだ。

砲台兵達はこれを見るとすぐさま駆け出した。

出来るだけ海岸から遠くへと。

この作戦に投入された陸軍部隊は2個師団と1個砲兵旅団。この日に上陸したのはうち1個師団と砲兵旅団で、のこりのもう1個師団は5日後に入る予定の第2陣で送られることになっている。いずれにせよ大した戦力ではないが、敵の主力部隊はすでにバンコクにはいないからすぐさま敵の大軍が押し寄せてくる心配もないし、この部隊の目的はバンコクに脅威を与えることだからこれで十分だ。

もちろんバンコクに進軍すれば大した守備隊もないその街を占領するのはたやすいが、街を破壊して民間人に多数の犠牲者が出るようなことになれば民衆の反発を招く。ゲリラ戦にならどうしようもない。

いくら部隊を出しても足りないし次から次へと敵は出てくる。それは現代のイラクやアフガンを見れば一目瞭然だ。

この作戦の効果は案外大きかった。

首都バンコクから40キロ程度しか離れていないところに敵の部隊が現れたのだ。

しかも大規模な艦隊がその背後にいるし、敵の航空機によるバンコクへの爆撃も始まった。

明らかに敵はバンコクを狙っている。

このままでは首都陥落は時間の問題だ……。

そう思ったタイ陸軍の参謀本部は各地で日本の大軍と戦っている部隊に対し戦線縮小とバンコクへの後退を命令した。

敵に背を見せるのは非常に危険だがすでに両面に敵を抱えてしまっている以上仕方ない。

さらにバンコクに予備として残されていた応召兵達の部隊（約5万）に上陸した日本軍迎撃を命じる。

なんとか戦線を立て直そうとするタイ軍だったが結果は惨憺たるものだった。

まず東で日本軍の第1軍と戦っていた約20万のタイ軍は退却命令を受け夜間ひつそりと退却を開始した。

ところが完璧に動きを日本軍に読まれており、第1軍に所属する第17師団の夜襲を受ける。

本来夜襲は少人数で行うものだが、この1個師団という大部隊による奇襲は見事に成功、タイ軍は夜間で敵も味方も分からぬ状態に陥り同士討ちが多発、潰走した。

翌日部隊を整頓したが兵力は半減。

混乱していたため戦死なのか行方不明なのか分からぬ兵も多い。さらに指揮系統はズタズタで、一体どこから命令を受けければいいのか分からぬという状態となってしまった。

このためさらに戦線を後退させそこで再度部隊の整頓を行つこととなる。

一方北で日本軍の第2・4軍と戦っていた約25万のタイ・インドネシア連合軍は陣地が強固だったこともあり、上手く退却することができていた。

ところが退却先の陣地で日本軍と戦つたところ大敗北を喫してしまった。

退却先の陣地はお粗末の一言で塹壕が少し掘つてある程度。日本軍を迎撃には明らかに準備不足だった。

そして上陸した日本軍迎撃に出た部隊は即撃退された。

ただでさえ応召兵ばかりで年齢が高く戦力的に劣っているのに武器も旧式で、兵力のみが日本軍とほぼ同等。

どう考へても勝てる戦いではなく1万ほどの損害を出し後退した。

一方二国艦隊はタイ救援のためタイランド湾へ突入し、日本艦隊との決戦に臨もうとしたが補給船の都合がつかず、中止せざるを得なかつた。

こうして各地で絶望的な戦況が続く中5月2日バンコクでは御前会議が行われる。

そこでタイ王国女王である水島が出した結論は……、降伏だつた。

第24話 空振り（後書き）

テスト終わつてないのに書いてしまいました…。今日のテストは散々で英語は玉碎、数学は潰走、世界史が唯一戦線を維持しました。明日こそは頑張ります！（とかいう奴がここにいるのはなぜでしょうね？）

今回の名言

「攻撃的な指揮官は、つねに防御的な指揮官を恐れない。そして主導権を握ることができる」
—フレデリック大王

タイ王国女王である水島は決断を迫られていた。

これからのことについて御前会議を開いたのだが、会議は紛糾し收拾がつかなくなっている。

会議で出ている主な意見は次の3つ。

一つ目は残存部隊とともにバンコクを棄て、マレー半島に向かいインドネシア軍と合流しバンコクを奪還するというもの。

これは陸軍が唱えており、勝ち目のない戦いで兵力を失うよりはインドネシア軍と合流して日本軍を叩き、その後国士を回復していくばいいというのだ。

しかしこれでは国民を見捨てて逃げるとのことであり政府官僚は反対している。

第一インドネシア軍と合流して戦つたとして日本軍に勝てるのかどうかはわからない。

北上中の部隊は30万程度と聞いているが、侵攻中の日本軍は合わせて80万くらいまで膨らんでいる。

タイの残存部隊を合わせても3分の2にいくかどうかといふところですよほどの戦略がないと勝てる戦ではないだろう。

そして一つ目はこのままバンコクで戦闘を行い日本軍もろとも玉砕といふものだ。

これは海軍や政府官僚の一部が唱えているもので、インドネシアやオーストラリアが本当に大規模な援軍を送つてくるはずはない、今マレー半島北上中のインドネシア部隊もわざとゆっくり進んでいる

のだ、だつたら撤退して合流したところで彼らにはタイを救う意思はないから撤退しても無駄である、ならばバンコクで日本軍に徹底抗戦しタイの意地を見せてやる、と主張している。

どうもこの国の海軍には玉砕癖があるようだがこの論は水島が一蹴した。

国民を道連れには出来ない、戦争を始めたのは我々であり彼らに罪はない、と。

普段は静かに聴いているだけの水島が発言して制したため全員が驚き、この案はなくなつた。

三つ目は日本に降伏するというもの。

これは政府官僚の大多数が望んでいるものだ。

これ以上犠牲を出したところで何の意味があるのか、独立が失われたとしてもそれは人命には換えられない、国民を守るのが我々の仕事ではなかつたかという主張である。

水島自身はこの案に賛成である。

しかし降伏すればそれは友達を裏切ることになるのだ。

そのことで水島は降伏を躊躇していた。

彼女は議論が続く中1人で悩み続けた。
友か、国民か。

これはただのゲームだ、別に本当に人が死んでいるわけではない。
そもそも考えた。

しかし15年近くこの世界で住んでいるとそれは思えなくなつていた。

彼女の心中で葛藤が続いたが1時間後彼女は全ての議論を打ち切らせて、一つの結論を出す。

そして1914年5月3日、タイ政府は日本政府に対し無条件降伏を宣言した。

水島は自ら国民に対し演説して謝罪する。

嗚咽をかみ殺しての水島の演説に対し国民は深く同情し、異を唱えるものはないなかつた。

軍部、特に陸軍はこれを不満としクーデターを起こして水島を捕まえ、戦争を継続させようと計画していたが国民の圧倒的多数、もうほとんど全員が戦争終結に賛成しているような状態であつたため中止せざるを得なかつた。

タイの国民はもう疲れていたのだ。

わずか半年程度の戦いだつたがそれでもタイは戦場になり多くの被害を受け一般市民の死者もそれなりに出ていた。

また多くの男が戦場へ駆り出され生きているのがどうかすら分からぬといふ状態で、多くの家族は不安を抱えている。

戦争が終われば会える、またみんなで平和に暮らせるとタイ国民は思つたのだ。

しかし、現実は彼らの願いを裏切ることとなる。

まず降伏後オーストラリア・インド・インドネシアに対しでは同盟の破棄が通告された。

交戦中の陸軍部隊には抵抗をやめ、日本軍による武装解除を受けるよう命が下る。

これにより各戦線では戦闘が終結し、その日のうちに日本軍の一部がバンコク市内へ入り治安維持にあたつた。

そして5月5日には正式に降伏文書への調印が行われ、タイは日本の支配下に置かれることとなる。

そのため翌日にはオーストラリア・インドネシア・インドへ宣戦布

告が行なわれた。

タイ国民には氣の毒だがここではない、そ�ですかと戦争から離脱されるわけにはいかない。

もちろんタイ軍を動員して攻め込むといふことはないが（というよりもはやそんな兵力は残つてないので物理的にできないが）、南方へ向かう日本軍の通り道になるため兵站基地としても重要である。

それにバンコク付近にいた約5万のインドネシア軍残存部隊はタイ軍とともに日本軍に降伏したのだが、マレー半島北上中の部隊はタイ南部を占領してしまっている。

また、ミャンマー軍とインド軍の一部もタイ領内へ入つて略奪など行つたという情報も入つてきた。

まだまだタイ領内で戦闘は続いているのだ。

タイの民衆はただ耐えるしかなかつた。

ほんのわずかに日本軍に対する決起を呼びかけるものや、自警団を組織してインド軍などの略奪と戦いだすものもいたが大多数の民衆はただただ耐えた。

微笑みの国タイに笑顔が戻るのはまだ遠い。

第25話 タイ降伏（後書き）

今日もテストは玉砕です。もうここまで来たらどうでも良くなってしましました…。

今回の名言

「戦争のイロハを言えれば、勝利は都市を占領することからではなく、敵軍を撃破して得られる。1812年、ナポレオンはこの原則を忘れていた」

－アンドレイ・－・ゲットマン（ソビエト連邦 陸軍大将）

第26話 ミャンマー方面概況

タイ方面は一段落ついたのでミャンマー戦線についてここで状況を報告しておこう。

ミャンマー方面を担当するのは開戦の時にも説明したように第3軍の10個師団と4個砲兵旅団であるがなかなか思うように前進できない。

原因は何より深いジャングルである。

普通の兵士でもジャングルの中での行軍は体力を消耗するし移動速度も遅い。

この20万を超える大部隊ともなればそれはもう遅い。しかも十分な火力を得るために4個も砲兵旅団をつけているのが邪魔で邪魔で仕方ない。

戦場の神である砲兵部隊も今はただの厄介者となってしまったのだ。分解して簡単に運べる山砲はまだいいが、重砲を抱えた部隊は毎日毎日相当な苦労である。

自動車は当然使えないし馬は熱帯の暑さに耐えられない。

そのため必然的に人力輸送に頼るしかないのだがそれも限界がある。

はじめはなんとか引つ張つて行こうとした司令官だったが、さすがに氣の毒になってきたのとあまりにも遅いので重砲部隊はシャン高原に残すこととした。

しかしそれ以降も進軍は進まない。

しかもミャンマー軍の散発的な攻撃、といつより嫌がらせは毎日のように続いている。

あれだけ苦労して運んでいる砲も役に立たない。

ジャングルの中では真っ直ぐな弾道を描き、直接照準をつける通常の砲では照準が難しくなかなかあたらないのだ。

こんなときに活躍するのは迫撃砲である。

軽量で持ち運び便利、組み立ても簡単ですぐ射撃を始められる、さらに弧を描いて飛ぶ弾道で間接照準と理想的なのが、まだ開発されていない。

史実で初めて迫撃砲が使用されるのは日露戦争である。

旅順要塞攻囲戦のとき現場の部隊がとにかく工夫して使用したとい

う。木製でお手製のそれは射程300メートル程度だったというがこれを見た外国の観戦武官が本国へ持ち帰りヨーロッパ各国で発展させていく。

ところが当の日本陸軍はこの砲のことなどすっかり忘れてしまい、後に逆輸入して開発をしたらしい。

当然この世界の日本陸軍にはそんなものは知らず、戦争直前に俺が思い出して開発を命令したがもちろん間に合わなかつた。

現在開発を急いでいるが結構かかりそうだ。

さて、余談が過ぎたが第3軍はモタモタと進みながらも4月の始めじりにようやくミャンマー中部マンダレーへ進出、同地を守備するイング・ミャンマー連合軍28万と戦闘を始めた。

4ヶ月も猶予を貰えられた連合軍はかなり強固な陣地を作っていたが、ここでようやく苦労して運んだ砲が役に立つ。

4個砲兵旅団、しかも史実と比べても1個旅団あたり2割り増しの火力が与えられているこれらの部隊はジャングルへの憎しみ(?)を爆発させ連合軍陣地へ砲弾のスコールを浴びせた。

重砲を置いてきたのは痛いがそれでも野戦築城の陣地は十分破壊できた。

4ヶ月もありながら永久・半永久築城を施していなかつたのは連合軍の怠慢であろう。

もつとも造ろうにもセメントはインドから運んでくるしかないから大変ではあつたろうが。

日本軍の砲撃が弱まると連合軍は歩兵突撃を開始した。

数で勝る以上押せば勝てると思ったらしい。

しかし大量に配備されている機関銃の餌食となり、さらに砲弾が再び荒れ狂い始め悲惨な状態となつた。

そして連合軍が退却を始めると日本軍は全線で攻勢に転じ連合軍を追撃した。

ところが再度連合軍が攻勢をかけてきた。

どうやら予備隊がいたらしい。

敵情把握が甘かつたようでこの逆襲に日本軍が混乱した。

しかも逆襲してきた敵の数がかなり多い。

退却していた部隊も反転して攻撃をはじめ日本軍は押し戻されていく。

この状態を救つたのも火力だった。

白兵戦となり敵味方入り乱れて戦闘をしていたのだが司令官は砲兵隊に対し砲撃を命じた。

敵は日本軍と入り乱れて戦つてしまえば日本軍砲兵も射撃できないと、戦国時代の日本でいう「付け入り」を狙つたようだがここでは日本軍が構わず撃つってきたため失敗。

無論味方の兵も吹き飛ばされているが敵に与えた打撃は大きく連合軍は再び退却していく。

今度は砲撃による追撃のみ行い戦闘は終了した。

日本側の損害は戦死1万5000、負傷4万2500と参加兵力の4分の1にも及んだ。

対する連合軍側は遺棄された死体だけでも2万5000はあつたため全体の戦死者は4万強、戦傷者は6万に上ると推測される。実際は戦死3万2000、負傷5万1000だつたがそれでも大打撃に変わりはない。

この戦いは初めて日本兵の死傷が5万人を超える大損害を受けた戦いとなり、第3軍は損害の補充と弾薬の補給のためマンダレーでしばらく停止することとなる。

3週間後、第3軍が通つてきたところに造られていた（進軍しながら造つていた）道がかなり狭いし整備も荒いが一応開通し、トラックによる物資の補給・兵員の補充が始まった。ただやはり道が狭すぎたようでなかなか補給ははからずマンダレーで2ヶ月近い滞在を余儀なくされることになつてしまつ。

その間にタイは降伏し、第3軍はインド軍へ備えることとなり印度国境を目指すことになる。

が、こないだの連合軍の敗戦部隊がインド方面ではなくヤンゴン方面へ逃げてしまつていてることが分かり、新たに編制される第5軍がヤンゴンを包囲するまで再び待機命令が下つた。

この長対陣にイライラする兵士も出たが、補給路の整備といつ面では悪くない。

それに開戦以来続いてきた戦いの疲れを取るのにいい休養期間となる。

そうそう、軍の規律は厳しいため婦女暴行事件などは起きていない。もちろんいわゆる売春婦達が集まつてきてマンダレーは微妙な賑わ

いを見せてきてはいるが……。

まあしかたあるまい、人間だもの。
本能には逆らえないのだ。

さて、それはともかくタイが降伏してから3ヶ月ほどは全線に渡つて目立った戦闘もなく平和に過ぎていった。

第26話 ミャンマー方面概況（後書き）

テスト終わりました！結局途中から更新してましたがこれからもできるだけ早い更新を心がけて頑張るのでよろしくお願いします。

今回の名言

「常に代替目標を持つような目標を選べー」ということだ。目的に至る道（目標）は多いが、目的を具現する目標が行き止まりであるときは最悪である」

ーリデル・ハート

両軍とも大きな動きのないまま1914年の夏は過ぎていっていた。
別に兵士が夏バテで…、とかそんな理由ではない。

（当たり前だ。俺じゃあるまいし）

タイが戦線を離脱したため戦略の見直しを迫られている連合軍。
今までの戦いで失った兵員や物資の補給に追われている日本軍。
どちらも動くに動けないのだ。

その間に日本軍は新たに編制した第5軍をバンコクへ揚陸した。
部隊は満州と華南から送られてきた8個師団と2個砲兵旅団。
彼らの任務はミャンマーの首都ラングーンを攻略することだ。
そこには約14万の敵軍がいるようで、インド攻略を前に放つてお
けない勢力である。

ちなみにラングーンは通常の世界でいうヤンゴン。

日本人カメラマンが銃撃され死亡したことで、一時期メディアに連
日のように登場していたことだ。

数年前まではミャンマーの首都だったが現在はネピドーである。

また、根拠地隊2万4000名などもバンコクへ到着し鉄道敷設工
事を開始した。

この世界のタイはインフラ整備が進んでおり鉄道もかなり走ってい
る。

バンコクからサイゴンまでを結ぶ国際鉄道もあるし、北部タイまで
延びる鉄道も整備されていた。

現在開戦とほぼ同時に始まったラオスを通りてタイ北部の鉄道へ連

結する工事が進んでおりあと3ヶ月あれば工事は完了するということだ。

また、戦闘で破壊された鉄道の復旧も各地で進んでおり鉄道連隊が工事の主力となっている。

バンコクへ送られた根拠地隊が造る鉄道はラングーンへ向けてのものである。

まだ陥落していないが今から造つておけばすぐ使えるようになるし、まだインド洋の制海権がない以上陸路での補給路を確保しなくてはインド方面へ攻勢はかけられない。

また、この泰緬鉄道の工事は現地住民を大量に雇用して進められている。

少しでも仕事を与え不満を少なくするためだ。

史実の泰緬鉄道の工事は捕虜や現地住民数万人の犠牲を出し、「死の鉄道」と怨嗟の対象になつたがこの世界では当然そんなことはない。

もちろんそのため工事の進捗は多少遅いかもしだれが、数万人も殺して鉄道を作つて地元民の反乱を招けば元の木阿弥である。

根拠地隊がジャングルをダイナマイトで吹つ飛ばしながら工事を進めている頃、艦隊は整備のため一時香港や基隆へさがつていた。

前線に出つ放しだと機械も人も消耗する。

たまにはドックに入れて整備を受けさせてやらなければならぬのは常識だ。

もちろん全ての艦が一度に戦場を離れるわけにはいかないので、訓練を完了した「美作」型戦艦4隻が代わつてサイゴンへ出撃し、第2艦隊の半分もサイゴンに残してある。

それらの艦艇も現在入渠中の艦艇の工事が終わり次第工事に入る予

定だ。

ところで他の艦艇と違い現在も活動を続いているのは潜水艦部隊だ。敵艦隊の監視はもちろんのこと輸送船への攻撃、連絡・軽輸送任務、果てにはスパイの揚陸までもが彼らの任務である。

常に20隻は外洋で活動しているようにローテーションが組んでおり、非常に忙しく動き回っている。

本来ならもつと潜水艦が欲しかったが、水上艦艇が優先されなかなか予算が確保できず建造が遅れてしまい、現在は大戦前年に追加で建造された艦の就役が始まったところだ。

忙しい潜水艦部隊だが休養はしっかりと与えられている。

例えば2ヶ月以上の作戦行動に従事した大型潜水艦は約1ヶ月の休養・整備期間が与えられることになっているし、2・3週間の任務だとしても1週間から10日。

それは潜水艦という艦種は他に比べて環境が圧倒的に劣悪・過酷であるためで、それだけの艦も人も消耗するからである。

一部の地域では撃沈されてしまった艦艇の穴埋めのため休養期間の短縮があるようだが……。

さて、空軍の状態だが航空基地の設営が予想通り間に合わず置いてけぼりをくつっている。

バンコクの旧タイ陸軍飛行場の修理が完了次第、第3航空師団をサイゴンから再度前進させる予定だが、航続距離の関係から陸軍部隊の支援は難しいだろう。

敵軍が攻撃可能範囲内へ入つて来ない限り出番はなく、まるで基地や都市の防御兵器のようになってしまっている。

ただし水上機部隊のみは河や湖に簡単な基地を築き積極的に索敵・爆撃をこなしていた。

第5軍のラングーン攻撃支援のためタイ・ミャンマー国境付近を流れるサルウェイン川（タンルイン川）河口のモーラミヤインという街に基地を設営し、5・60機の水上機が進出してラングーンへの爆撃を行つてゐる。

ただし航空ガソリンや弾薬の補給が追いつかず、一度攻撃すればしばらくはおとなしくしてなければならぬのが悩みの種だ。悪路をトラック等で無理やり運んでゐるのだ、無理もない。

そのほかマンダレーでは航空隊の進出に備え飛行場建設が行われている。

もはや造るだけ無駄とさえ思われる飛行場だがよりあつたほうがいいのは事実だ。

新型航空機の開発も進んでゐるし、万が一インド軍が南下してきた時の備えにもなる。

それに第3軍はもう何ヶ月も居座つたままとなつてゐるから暇つぶしことなるだらう。

兵士達が不満をダラダラ言つてゐるのは事実だが。

こつじて束の間の休暇（？）は土木工事ばかりが各地で続けられて終わることになる。

第27話 一休み（後書き）

この話はある意味作者である自分にとつても一休みです。戦闘シーンが上手くかけないので……。描写は少ないので、目新しい戦法も目を引く展開もないし……。しかしこれから少しづつ頑張っていきます！

今回の名言

「戦争では、攻撃は最大の防御である。しかし、喧嘩好きでなければ、攻撃は成功しない」
—ジョージ・S・パットン

第28話 休暇はおしまい

1914年11月1日、日本軍は各地で前進を開始した。

まずマレー半島方面軍（第1・2・4軍）は南下を開始、インドネシア軍が陣地を構えるクラ地峡を目指す。

インド方面軍（第3・5軍）は第5軍によるラングーン攻略作戦を開始。

第5軍はラングーンをすでに包囲しておりいつでも総攻撃を行える状態にある。

しかし、作戦開始当日になつても第5軍司令官木越安綱大将は一向に攻撃を始めなかつた。

理由は市街地を砲撃したくないからである。

日本軍はこれまで市街地は極力砲撃せず、敵軍の陣地のみを破壊してきた。

しかし今度の敵軍はそれを利用し市街地のど真ん中に陣地を作りそこに兵員を入れている。

卑怯な真似を……と木越は思い地囝駄を踏むがどうにもならない。とりあえず航空隊の精密爆撃をやらせてみるが、やはり難しいようで周りにかなりの打撃を与えてしまい、民間人に数百人の死傷者を出してしまつた。

これ以上やると住民の反発を招くことになつてしまう。

そのため航空隊は港や外郭陣地などをチマチマと爆撃するが効果は薄い。

こうなつてしまつては物理的に攻めるのは大きなリスクが伴つて彼は心理戦に切り替えた。

航空隊にビラを撒かせたのだ。

そこにはミャンマー語で大体こんな感じのことが書いてあった。

「ラングーン市民の皆さん、ヤンゴンは現在大変危険な状態にあります。ミャンマー軍とインド軍はあなた方市民を盾として使おうとしているのです。市街地に陣地を構えているのはそのためです。我々日本軍は市民の皆さんを傷つけたくありません。我々に投降してください。我々は投降された方々を歓迎します」

他にも兵士向けには、

「連合軍兵士の皆さん、我々はあなた方を完全に包囲しています。これ以上の抵抗は無駄です。多数の市民を巻き込んで戦闘をしたくないのはあなた方とて同じはず、それに皆さんにはあなたの帰りを待つ家族がいる。ここで無益に死んではなりません。我々に投降してください。投降された方は国際法に準じ丁重におもてなします」

しかし、このビラで投降を呼びかけるのはあまり上手くいかなかつた。

ラングーン市民としては逃げ出したいのは山々なのだが軍の監視が光り、投降を許してくれないのである。

ビラが撒かれた翌日から市内には無期限外出禁止令が出されており、家の外にすら出ることは出来ない。

特に先日夜間こつそりと脱出しよつとしていた家族5人が軍にスペイとして射殺されてからは誰も逃げようとはしなかつた。

兵士達は侵略者である日本軍に対し敵意こそあれ、投降する気など

それから効果は薄かつた。

といひが思わぬといひでほひびが出てしまひ。

包囲されてから2週間ほど経つた頃、物資の窮乏から市民の脱出が始まつた。

軍が少ない物資を市民に回すこと嫌がり、配給を一気に減らしたためである。

食べることが出来なければいずれ死んでしまう、ならばまだ体力のある今のうちにと、家族単位で、また地区の住民が協力して脱走をすることがあつた。

これに業を煮やしたミャンマー軍は夜間ある地区から集団で逃げようとしていた住民に対し発砲、脱出を試みた民間人40名を捕らえ翌日公開処刑を行つた。

こつして力で押さえつけようとしたのだが、これによつラングーン市民の感情は急激に悪化。

さらに兵士達の間にも司令部に対し大きな不信感を与えてしまひ。

これ以後兵士達が住民の脱出に協力するよつになり、脱走は収まるどころかますます増えた。

しかも事態はそれだけにとどまらず、兵士たちの集団投降まで發生し軍の士氣は急激に低下していく。

それでもともと大して物資を運び込んでいなかつたため、わずか2、3週間籠もつただけなのに食料の不足は深刻さを増していつている。

このまま籠城しても仕方ない、そう考えたミャンマー軍司令部は日本軍の最も弱い部分を突破して逃げようとした。

ところが逃げるところなどない。

この場を突破してもマンダレーにいる別の日本軍にぶつかってしま

う。

それに食料が不足している以上長期間の戦闘は不可能……。

そこで彼らは海からの撤退を決意する。

彼らがインド海軍に救援を要請。

インド海軍はこれを受け入れ艦隊をカルカッタへ集結させた。

一応ミヤンマーは自分の国の支配下に入っているわけだし、ラングーンには5万ほどのインド兵もいる。

見捨てる訳にはいかないし、開戦以来インド海軍はずっとインド洋でぼさつとしていたのだ。

今回が初陣、インド海軍の威信にかけて成功させなくてはならないと意気込んでいた。

11月24日、インド海軍艦艇35隻と輸送船や商船約70隻がラングーンへ向けカルカッタを出撃した。

日本海軍はこの動きをキャッチしていたが艦隊による迎撃は不可能だった。

まだインドネシア・オーストラリアの連合艦隊は健在だし、マラッカ海峡を突破するには海峡両岸の砲台と交戦しながらとなる。

そんなことをすれば狭い海峡で撃ちあうこととなり味方が大損害を受けることは間違いない。

そこで投入されたのはもちろん彼らである。

深海の暗殺者達約30人は敵艦隊の予想針路上で息を潜めて待っていた。

第28話 休暇はおしまい（後書き）

「意見・「感想お待ちしています。誤字・脱字の指摘、内容や登場人物の希望や本文中に出す話が史実と食い違つて いる等ありましたら是非「指導ください。やはり自分で読むだけでは分からぬことが多いので……。

今回の名言

「先に撃て！強打せよ！撃ち続けよ！」

ージョン・A・フィッシュヤー（英海軍提督）

11月24日深夜、インド海軍装甲巡洋艦「カルカッタ」の見張り員のある若い水兵は当直のため見張り台にいた。

他にも数名が同じようにここにおり、それぞれ別の方を見ている。月の明るい夜だ。

前後左右にいる僚艦の姿が月明かりに浮かび上がりなんともいえない美しさがある。

静かない夜だなと思いつつ見張りを続けていた。

初めての実戦となるこの出撃、少しまだ緊張はしているが出港時に比べればなんのことはない。

軍楽隊の音楽とともに艦が港を出て行くときはちゃんとここに帰つてこられるのかなと不安で一杯だった。

しかし、任務の内容をよく聞いてみれば陸軍の救出、しかも敵艦隊が出て来る可能性はゼロ。

敵の航空機や潜水艦が出て来る可能性があるからしつかり見張れと見張り長が言つていたが、彼は大きな海戦は起こらないと分かり残念のようだ、でも少し安心したような気持ちになった。

彼は大丈夫、大した任務じゃない、訓練どおりやれば全く問題はないと自分に言い聞かせ見張りに集中する。

1時間後、当直の交代時間となり彼が見張り台から降りている時、唐突に彼初めての実戦が始まった。

突如爆発音が静かな空気を破り炎が夜空を赤く染める。

「見張り所より艦橋へ！艦隊後部の輸送船1隻が爆発炎上、ああ、さらにもう1隻に爆発が起こりました。敵潜水艦による攻撃と思われます！」

見張り所から先輩の水兵の声が聞こえた。

彼は急いでラッタルを駆け上がり見張り台に戻る。

戻つて艦尾の方を見ると数隻の輸送船が燃えているのが見えた。

さらにもう1隻に爆発が起き、それを伝えようとした瞬間大爆発を起こし海上から姿を消す。

「輸送船1隻爆沈！」

伝声管へ叫ぶ。

「これはエライことになつちまつた…」

先輩がそうこぼすのが聞こえた。

彼は不安がふつふつと沸いてくるのを感じた。

「前部魚雷発射管室！次発装填はまだか？」

潜水艦「呂一25」艦長春日篤少佐は伝声管へ叫んだ。

「あと3分、いや5分下さい！」

伝声管の向こうからは微かだが重たい魚雷と格闘する水兵たちの掛け声が聞こえる。

この時代装填は人力みたいなものだ、仕方ないと思いつつもいらだ

つてくる。

「聴音！敵艦隊に動きは？」

ヘッドホンをつけた水兵が振り返って、

「特に大きな動きはありません。敵艦がこちらに向かいつづな気配も全く感じられません。どうやらまだ混乱しているようですね」

春日少佐は腕を組む。

予想以上に敵の反撃が遅い。

深夜突然攻撃を受けたとしても魚雷を喰らえば大体どこにいるか分かるはずだ。

そうしたら駆逐艦がそのあたり一体を嗅ぎまわり、スクリュー音を見つければすぐさま爆雷を降らせてくるはずなのだが、敵は一向に向かってくる気配がない。

そのため離脱せずにもう一度攻撃をかけようとしているのだ。

「潜望鏡深度まで上昇」

彼は疑問を解決するべく自分の手で確かめることにした。

1分後、水面に出した潜望鏡は炎上する敵艦を映し出す。

近くには停止した船がいるようだ。

被雷した様子はなく、どうやら炎上する艦の乗員の救助をしているらしい。

「おおお、のん気なもんだな。この状況で止まるか？普通……」

彼はつぶやく。

いぐらなんでも不用心すぎる。

しかもその艦は駆逐艦、溺者救助も結構だがお前の任務は俺らを探すことじゃないのか？

彼は内心敵の行動の不味さに舌打ちをする。

「魚雷発射管室より報告、魚雷発射用意完了。いつでもいけます」

伝声管から声が響く。

「取り舵10度、速力は5ノットまで増速。停止中の敵駆逐艦を狙う」

彼はなんとなく気が乗らなかつたが、狩り易いものから狩るのが当然なのでそれを狙う。

先ほど潜望鏡を上げても全く気付いた様子はない。
卑怯だとは思うがそもそも潜水艦自体がそうともいえるので気にしてはいられない。

「艦長！接近してくるスクリュー音があります。3・4・5隻です。距離8500」

聴音からの報告が入る。

「攻撃中止。急速潜航、深度80メートル」

操舵手が舵を回す。

艦は前方へと傾き海の底へと向かう。
そしてしばらく沈黙が続く。

「本艦上方を敵艦通過中……、爆雷の投下はありません。敵先頭艦通過」

聴音だけでなくおそらく艦内の全員が聞き耳を立てている。
しかし、敵艦から爆雷が投下される気配はない。

「5番艦通過しました。敵艦遠ざかります」

発令所内にほつとした空気が流れる。

「よし、それじゃひとまず下がろ。まだ魚雷はあるからまた明日あたりに攻撃をかけよう。航海長、敵艦隊の予想針路と本艦の針路をすぐに……」

爆発音が響いた。

全員がギョッとして周りを見回す。

「敵艦隊の方から爆発音です。どうやら別の艦が襲っているようですね」

再びみんなが安堵する。

「他の艦も頑張つてこらようだな。俺達も頑張らないとな」

春田艦長は遠くに響く爆発音を聞きながら翌日の攻撃のことを先任将校と話を始めた。

結局翌日の攻撃では輸送船3隻にそれぞれ魚雷1本ずつを命中させて撃沈する。

その後も春日少佐は「呂一-25」を率いてインド洋で通商破壊作戦を続け、10万トンを越える輸送船を海の藻屑とし、日本海軍一の潜水艦乗りと評されるよつにまでなる。

また、彼は潜水艦史上に残る大戦果を挙げるがそれはまた今度といふことで……。

いつになるか分からぬいけど。

第29話 狼の群れ（後書き）

「意見・「感想お待ちしています。より良い作品作りのため皆様の
「指導をお願いします。

第30話 救出不可

「輸送船『ダッカ』より信号、機関故障です」

信号兵からの報告を聞きインド艦隊司令アジャンター中将はため息を抑えきれなかつた。

「これで4隻目か……。大方怖くなつて逃げ出すための口実だらうが、単独でいた方がもつと危ないといつのに……」

もつとも、艦隊にいても変わらないがな……。

彼は内心そう付け加えた。

昨夜は一晩中敵潜水艦の攻撃を受け、すでに駆逐艦1隻と輸送船7隻が沈没している。

また前述の通り逃げ出した輸送船が4隻、そして沈没艦の乗員を乗せて駆逐艦1隻と護衛艦2隻がカルカッタへ一時退避した。

駆逐艦は翌日の日没までには合流すると言つてきているが、護衛艦は旧式で速力が出ないためそのまま戻らない。

こうして着実に戦力をすり減らしているインド艦隊。

果たして何隻が無事にラングーンに着き、またカルカッタまで戻ることが出来るか、それを考へると彼は頭が痛くて仕方がなかつた。

「見張り指揮所より第1艦橋へ！左舷後方、潜望鏡らしきもの発見

！」

伝声管から声が響く。

「真昼間から潜望鏡出されるなんてよほどなめられてんだな。駆逐隊1つを差し向けておけ」

彼はついついぼやいてしまった。

艦橋から艦隊に目をやると4隻の駆逐艦が陣形から離れ敵潜水艦がいるあたりへ向かっていく。

しばらくすると爆雷による水柱が盛大に上がり始めたが、その派手な見た目に合わせ効果は薄い。

場所がほとんどつかめないので。

聴音機は一応積んではいるが潮流音等に邪魔され敵艦を捉えることはまれである。

今回はちゃんと掴んだようだがそれも一時のものだろ。

爆雷を落とせばその音でかき消されてしまう。

一度失探すれば一度目は難しい。

今の攻撃で敵艦が沈んだのを祈るのみである。

その後は何事もなく夕方を迎えた。

「さて、今日は何隻生き残れるか……。損害次第では撤退も考えないとな……」

彼は水平線に沈み行く太陽を見ながらしつこぼす。

結局、彼は撤退を決意せざるを得なくなる。

その日の攻撃は激しく、潜水艦15隻が船団に入れ替わり立ち替わり攻撃をしかけてきた。

まず午後10時頃輸送船3隻が雷撃を受け沈没。

その潜水艦を攻撃に向かつた駆逐艦4隻が逆に別の潜水艦の攻撃で2隻を沈められる。

午後11時30分頃、また輸送船1隻が爆沈。

午後2時前後が攻撃のピークで1時間の間に一等巡洋艦が2隻、駆逐艦は3隻、さらに護衛艦2隻に輸送船3隻が沈められた。これだけごつそりと護衛艦艇を失えばもはやどうじよつもない。彼は司令部に対し撤退許可を求めた。

ところが司令部からの反応は冷たいもので、撤退など言語道断、なんとしてもラングーンの部隊を救出せよと言つてきた。

彼はその返電を読み、落胆と同時に腹をくくる。

「反転180度、本艦隊はカルカッタへ帰投する」

艦長は驚き、命令違反だと中将に再考を求める。

しかし彼の決断は固かつた。

司令部が拒絶するのは分かつていたのだ。

「これ以上進んだところで損害が増すだけだ。たとえラングーンに着いたとしても帰りはどうする？ 何隻が無事に帰れるというんだ。陸軍の兵士を海の上で殺すわけにはいかないし、諸君らの命も大切な。責任は自分が取る。退却せよ！」

こつして艦隊は反転、2日後早朝にカルカッタへ帰港した。

帰港するまでにさらに駆逐艦と護衛艦を1隻づつ、輸送船は8隻も沈められたがあのまま進んでいれば壊滅していたかもしれない。

それにもラングーンへたどり着いても空襲で港湾施設は大打撃を受けているし、入港と同時に敵航空隊の波状攻撃を受け、輸送船は1隻残らず海の底に送られただろう。

この戦いでの損害を比較すると……、

日本軍

沈没	潜水艦	2隻
損傷	潜水艦	1隻

インド軍

沈没	一等巡洋艦	2隻	駆逐艦	7隻	護衛艦	3隻
輸送船	14隻					

潜水艦の攻撃で、しかも輸送船団を組んでいてこれだけの損害というのははつきり言って異常だろつ。

これはインド軍の対潜戦術・対潜兵器がいかにお粗末だったかを如実に示している。

第一70隻を越える輸送船に対し、護衛艦が35隻とわずか半分しかついていないのはどう考へてもおかしい。

これだけの損害で済んだのは（これでも多すぎるが）日本潜水艦の攻撃があくまで個々によるものだったからである。
もし後の群狼戦法のような組織的攻撃を受けていたら目も当てられない惨状になつていたに違ひない。

ただ大勝利の日本軍で問題なのがこの件で潜水艦の威力を過大に評価する将官が出始めたことだ。

航空機万能論ならぬ潜水艦万能論が出ており、海軍に少し広まりつつあり戦艦乗りらとの対立も始まつていての報告もある。

潜水艦が海軍の主力となるのは第2次大戦後の話で、今の潜水艦に

その力はない。

どこかで手綱を締めてやらないといけないな。

といひでアジャンター中将のその後だが軍法会議でインド海軍を糾弾し、上官をも名指しで非難した。

このため会議は大荒れとなり收拾がつかなくなつたため処分は後日と言つことで一時閉会。

そして処分を待つてゐる間に彼は自決する。

軍を非難し、上官を罵倒した彼はいすれにせよ銃殺刑かそれに近い刑を喰らうのは確実、それに言つべきことはみな言つた。
もうこれで思い残すこともない、自分の役目は終わつたと遺書に書かれていたそ�だ。

そして同じ日、ラングーン守備隊は抵抗を諦め投降した。

第30話 救出不可（後書き）

先日累計アクセスが5万、ユニークアクセス数も2万を越えました。連載当初まさかこんなにも多くの方に読んでいただけるとは思っておらず、大変感激しています。今まで読んで下さった読者の方々、本当にありがとうございます。精一杯努力を続けていきますのでこれからも是非よろしくお願いします。

今回の名言

「軍事行動の芸術といわれる戦闘の大部分は、優れた機動が勝利の主要な要因であった。そして、このよつた戦闘によつて、名将が誕生した」

—チャーチル

第31話 良いお年を

1914年も残すところあと2週間ほどとなつた。

陸軍はインドネシア方面のみ動いている。

インド方面軍は航空隊の進出が遅れていることや第5軍の補給が完璧でないこと、インパールのインド軍要塞が思つたより堅固であるとの報告が入つたことなどからマンダレーで未だにたむろしていた。

で、そのインドネシア方面軍だが激しいインドネシア軍及びマレーシア軍の抵抗受け、多数の死傷者を出しながらの前進が続いていた。

まず3週間ほど前、クラ地峡付近に到達したインドネシア方面軍はそこに陣地を構えていた連合軍と交戦を開始した。
しかし驚くほど強固な陣地に阻まれ前進できない。

日本軍はいつものように徹底的な砲撃で連合軍陣地を攻撃するがしつかりと掩蔽されており大した打撃を与えることはできなかつた。

3日間ほど砲撃を続けたが効果は薄く、弾薬の残量が少なくなつてきたこともあり歩兵による肉弾突撃が行われた。

たださすがに昼間にやるのははばかられ、夜間の強襲ということになり歩兵部隊は敵陣地近くまで忍び寄り後はただがむしゃらに前へ前へと突撃する。

敵軍も当然これに気付き、機関銃や砲で反撃してきた。

夜空に無数の曳航弾が走り、砲弾の爆発はあたりをまるで昼間のように明るくする。

光つたとき人が吹き飛ばされているのが見える。

しかし、日本軍は躊躇することなく走った。

もはや作戦云々の問題ではない。

ただ真っ直ぐ駆け、一秒でも早く敵陣地へ乗り込むことが損害を少なくする唯一の方法だった。

翌日朝、陣地には日の丸が翻っていた。

一晩中続いた激戦で兵士達は皆何がどうなっているのか分からなくなっていたが、朝日の中ではためく日の丸を見てようやく占領に成功したと初めて知ったのである。

そして戦場のあちこちで万歳三唱が起る。

しかし、たかが陣地一つを抜くだけなのにあまりにも大きな損害を受けていた。

その日集計された日本軍の損害は死者2万1400名、負傷者3万5000名というとてつもないものだった。
つまり3個師団が丸々消えたことになる。

やはり歩兵の突撃で陣地を抜くのはこれだけ高いリスクをはらんでいるのだ。

インドネシア方面軍司令部はあまりの損害の多さに驚き一時前進中止を考えたほどだった。

しかし統合作戦本部に尻を叩かれそのまま前進を続け、現在はマレーシアとタイの国境付近でまた敵軍陣地にぶつかっている。

軍は一手に分かれたマレー半島東岸をまわる第1軍はコタバルを、西岸をまわる第2・4軍はジットラをそれぞれ攻撃していた。

若干砲弾の量が不足していたがこの二つは大した陣地でなかつたので1日で突破することができた。

ただここでも両方面あわせて1万6000もの死傷者。

さらに弾薬や食料も心細くなつたため日本軍はここで一時的に前進

を停止することにした。

対する連合軍側の損害はクラ地峡の戦いで死者1万500、負傷1万1000と日本軍の3分の1で今回も5000名程度で済んでいる。

もちろんそんなに軽い損害でもないが明らかに日本軍より少ない。

彼らの損害が少ないのは陣地に固執することなくさつと撤退しているためだ。

日本軍に打撃を与えるとさつと次の陣地へ引き揚げる。

そこへ日本軍が迫ると少し抵抗して日本軍に出血を強いてまた次へ。まさにヒットアンドアウェイの見事な戦闘である。

ここからは陣地の数も増えるため、この調子で行けばシンガポールに迫る前に日本軍は出血多量で倒れてしまうだろ。

そのため兵員及び重砲の補給が行われることとなる。

陸路での物資補給を行う予定だったが、あまりにも時間がかかり過ぎるため海路での補給を行うこととなり、海軍に出撃命令が下る。

今回の輸送作戦は2回に分けて送られ、第1回目は消耗した兵員の補充部隊として後備第5師団と後備第7師団、第2回目は新たに第1軍に編入される第82師団と第25砲兵旅団が送られる予定である。

第25砲兵旅団は半年前にシンガポール攻略のために編制された部隊で重砲を大量に配備されているのが特徴である。

この部隊は陣地攻略の大きな手助けとなるだろう。

これらを乗せた輸送船団を直接護衛隊として第4艦隊から旧式戦艦2隻と旧式装甲巡洋艦4隻、そのほか護衛駆逐艦（旧式駆逐艦を船団護衛用に改造したもの）など45隻が守る。

また、間接護衛隊として第1艦隊と空母2隻が出撃しシンガポール

を攻撃する予定だ。

一国艦隊が出てくれば第2艦隊や第3艦隊にも出撃命令を出すがおそらく出てこないだろつ。

第1艦隊は現在「安芸」と「石見」の修理も完了して8隻全ての戦艦がいる。

戦艦が2隻しかいない一国艦隊が太刀打ちできる相手ではない。出てくれば第1艦隊だけでもおそらく一方的な殺戮になる。ここ最近敵艦隊には全く動きが見られないし、おとなしくしていてくれるのではないか。

いひつて1914年最後の艦隊がサイゴンを出撃した。

第31話 良いお年を（後書き）

「意見・感想お待ちしています！」

今回の名言

「故に兵は拙速を聞く。未だ巧みの久しきを^み睹^やぐるなり」

—孫子

1915年元旦、シンガポールにたくさんのお年玉が降ってきた。
しかも朝の5時から。

まだ薄暗い中突如響き渡つた砲声、数秒後に砲台数基が木つ端微塵に吹き飛ばされる。

しかし、この攻撃を予期していたシンガポール港湾防備隊は日本艦隊の出現を確認するとすぐに反撃を開始する、はずだつた。

砲撃が始まつてから1時間が経つてもシンガポール砲台が反撃する様子はない。

次々と破壊されていくなか無傷な砲台も沈黙したままである。
射程が届かないのだ。

シンガポール砲台で最大のものは25・4センチ40口径。
インドネシア軍にはそれ以上の砲の製造能力がなかつた。

当然「安芸」型や「美作」型の35・6センチ45口径のほうが射程は長い。

日本艦隊はそれを分かつてているからわざと要塞砲の射程外から撃つているのである。

もちろん命中率も少し落ちるが所詮相手は動かぬ砲台、動き回る軍艦に比べれば圧倒的に狙いやすい。

砲撃が始まつてから3時間、その頃にはすでに生き残つてゐる砲台はなかつた。

戦艦が砲台を全て潰すと巡洋艦も出てきて砲撃をはじめ、ジョホールバル水道に作つてあつた土手道を破壊、さらに周辺陣地を攻撃する。

土手道を壊したのはマレー半島の敵部隊がシンガポールに撤退するのを妨害するためだ。

日本軍が攻めるときに困ることは間違いないがどうせ日本軍が渡る前に敵が壊してしまつ。

だったら先に壊してしまえといふのだ。

今回の砲撃で攻撃を受けなかつたのは市街地と港湾施設だけである。市街地は一般市民を殺さないため、港湾施設は占領した後使うのに壊すのはもつたいたいからという理由だ。

まあ確かに重油が漏れたりしたら数ヶ月使えなくなってしまうだろう。

こゝは日本人特有（？）のもつたない根性が出たんだろうな。

さて、たっぷりとお年玉をもらつた連合軍も日本軍に『えてやらなければならぬ。

もらいつぱなじじや新年早々気分が悪いし何しろ腹が立つ。まったく手も足も出なかつたのだ。

このままで済むと思うなよ、と意気込むが艦隊を出撃させるわけにもいかず今回も昨年同様潜水艦でお返しをすることにした。

後で思えば昨年のこの時期だ。

昨年この頃タイ潜水艦に戦艦2隻を撃破され長期の戦線離脱を強いられたのである。

あの時は「美作」型戦艦がまだ戦闘に参加できる状態になく、一時期とはいえ連合軍と戦力が拮抗してしまつたのだ。

今年はそれほど危機的な状態にはならなかつたがショックには変わりがなかつた。

その事件は1月2日に起きた。

陸軍支援のため本隊から分離されてクアラトレングヌ（コタバルよ

り少し東に行つたところにある（付近の敵軍陣地に砲撃を加えていた装甲巡洋艦「筑波」「生駒」の2隻が敵潜水艦の攻撃で沈没したのだ。

護衛の駆逐艦は8隻ほどいたが完全に無警戒。指揮官の怠慢としかいよいのがない。

ところがこの事件で一番の衝撃を受けたのは造船屋達だった。何が問題だったのかところの2隻の沈没の仕方である。

2隻は左舷にそれぞれ魚雷を2本ずつ受けた。

しかし船体はたくさんの水密区画に分けられているし、一昨年の改裝で応急注排水装置が装備しており、装甲は若干薄いとはいえそう簡単に沈むような柔な造りはしていない。

そのため艦長は魚雷を受けても沈むとは思わず、とりあえず傾斜を立て直すため反対側の右舷への注水を命じた。

ところが、左舷からの海水の流入は一向に衰える気配はなかつた。しつかり区切られているはずの水密区画も次々と破られている。右舷への注水よりも左舷へ流れ込む海水が多すぎ、傾斜はどんどん大きくなつていく。

傾斜が30度に達したとき、艦長はやむなく総員退去の命令を下したがそれから沈没まで残された時間はわずかしかなかつた。

雷撃を受けてから25分後、まず「生駒」が転覆し数分後には海上から姿を消した。

そのわずか3分後、「筑波」も後を追つ。

生存者は2隻足してもわずかに200名強。

総員退去から沈没までに時間がほとんどなく、機関科兵は全滅、砲員も多数が艦と運命をともにした。

この件に関しては調査委員会が設置され徹底的な調査が行われた。

その結果3カ月後にまとめられた報告によると沈没の直接の原因は左舷への浸水増大によりバランスを失ったことによる転覆だがそれを助長する欠陥が日本艦艇にあることがわかった。

それは「中心線縦隔壁」である。

これは艦の中央を縦に走る隔壁で艦を左右二つに分けるものだ。日本海軍の主力艦艇は全てこれにより船体を二つの区画に分け、さらにそれをいくつかの横隔壁で区切つて缶や機関を1基づつ配置するようにしていた。

（これは史実では第1次大戦の教訓から得たものだが、こちらの世界では「筑波」型建造の際にある海軍技術者が提唱したのが採用され、それが魚雷防衛に理想的とされ「安芸」型等にも採用されている）

ところが今回左舷に受けた2本の魚雷による浸水は縦隔壁により片舷のみに浸水、それが全体へと広がっていき最終的に艦を横転させてしまったのである。

応急注排水装置もあまりに浸水が早かつたため役に立たず、一隻は海へと引きずりこまれていったのだ。

日本海軍の先駆けとして建造され、多くの貴重なデータや経験を与えてくれた両艦はその臨終においても日本海軍へ戦訓を与えてくれたのである。

こうして非対称浸水の恐ろしさを知った日本は計画中の新型戦艦「金剛」型の設計を大幅に変更した。

中央線縦隔壁の廃止、水密区画の見直し、注排水装置の増備、装甲の強化など防御の強化が行われ巡洋戦艦に近くなるはずの「金剛」型は高速の重防御戦艦として建造されていくことになる。

そうそう、忘れていたが作戦の目的であつた輸送作戦は無事成功した。

敵潜水艦の攻撃は2・3度あつたが沈没した船はない。ただしインドネシア陸軍の航空隊の攻撃を受け護衛駆逐艦1隻が沈没し、輸送船数隻が損傷した。

インドネシア軍航空隊の最後の咆哮とでも言つべきもので、各地に残つていた機体をかき集めて攻撃したのだが、空母から飛んできた日本の戦闘機に攻撃され全滅した。

これ以降インドネシア軍航空隊の活動は報告されていない。

船団は1月15日までに全部隊・全物資の揚陸を完了し、1月20日には追加の物資も運んだ。

その間第3航空艦隊の水上機母艦による爆撃作戦も行われ敵の部隊の力を大きく削ぎ、陸軍は2月1日マレーシア首都クアラルンプールを攻略した。

敵部隊は全ての戦線を放棄して後退、シンガポールへと引き揚げる。しかしこの時土手道を破壊されていたため重砲などはジョホールバルにおいていかざるを得ず、さらにインドネシア軍の戦力を下げることになった。

「意見・感想お待ちしています！！

今回の名言

「理屈でわかつてもすぐに走り出せない慎重で臆病な者は、自分を正当化するために他人の足を引っ張る意地悪を発明することの名人だ」

—マウリス（ビザンチン帝国皇帝）

第33話 シンガポール陥落

1915年2月10日、ジョホールバルに布陣した日本軍砲兵隊は一斉に攻撃を開始した。

24センチ榴弾砲をはじめバラエティ豊かな砲弾がシンガポールへ注がれる。

それに対するインドネシア軍の反撃はほんのわずかで、撃つてもすぐさま100倍くらいの砲弾がその砲を潰す。

こないだの艦砲射撃で砲台があらかた破壊されてしまった上、土手道の破壊で重砲が置き去りになってしまっていたのだ。

日本軍はこないだの輸送作戦で重砲部隊が運ばれているし砲弾も十分。

シンガポール島の陣地という陣地は砲弾で掘り返され、あちこちで兵士が吹き飛ばされていく。

彼らはまだ1発の銃弾も撃つてはいない。

ただ日本軍の砲撃で斃り殺されているだけなのだ。

シンガポール守備隊総司令部ではあちこち、とこりよりほぼ全島から入る被害情報に頭を抱えていた。

このままでは日本軍上陸以前に全ての兵士が死んでしまう。

一般市民は避難させているがやはり各地で死傷者が出ている。

降伏するべきか……。

彼らが議論している間にも兵士の命が次々と散つていていた。

一方日本軍だが上陸する気はない。

このまま砲撃を続ければそのうち全滅するか白旗を掲げるだろ

う。

そんな楽天的な見方が大勢だった。
結局その通りになつたが。

砲撃を開始してから三日目、ついにインドネシア軍総司令官ハシム・アシュアリ大将が降伏を決断し、日本軍に対しその旨を伝える軍使を送つた。

そしてその翌日、日本軍総司令官大迫尚敏大将がインドネシア側の司令部まで出向いた。

大迫は今年で71を迎えるご老体である。

史実では日露戦争で第7師団を率いて旅順要塞攻略戦等に参加、戦後自殺した乃木の後任として学習院院長を務めその人柄等から「薩摩の乃木大将」と呼ばれたといつ。

こちらの世界では平穏に過ぎておらず、数年前に年であることから予備役に投入されていたが今度の戦争でインドネシア方面軍が組織された際に引っ張り出されてきたのだ。

本人は老人使いの荒い国だと冗談を言いながらも、老骨に鞭打つて戦場では最前線まで出て督戦し、彼が現れた戦場では士気が爆発的に高まり敵部隊を蹴散らすため兵士達からは仮の「ごとく崇められて」いる。

そこで降伏文書調印に立ち会つたために彼はインドネシア軍司令部の建物まで出向いた。

建物は砲撃で一部崩れていたがそのまま中へ入り降伏文書調印を見届ける。

降伏の手続きが終わると彼らは一緒に昼食をとつた。

そのときに出された料理はインドネシア料理である。

これはインドネシア従兵による手違いで、本来はフランス料理が出される予定でありインドネシア側の参謀らはこの手違いに慌てた。

そのため料理を変えようとしたがそのとき彼はそれを制し参謀になぜ下げるのか問う。

インドネシア側の参謀が負けた我々の料理を出すのは失礼であるしこのような改まった場で広い世界からすれば片田舎のインドネシアの料理など…… というと彼は、

「我々は戦に勝つただけであり諸君らの文化を否定したりはしない。第一世界で田舎も都会もない。自分の国の文化・風物に誇りを持ちなさい」

と言つたらしい。

この態度にインドネシア側の参謀らは感服した。

さらにその後の捕虜の扱いにも古典的な武士らしく、将兵の誇りや名誉を汚さぬように配慮しており、占領政策も申し分なくシンガポールは平穏な統治が行われていく。

一方その頃、ボルネオ島（現カリマンタン島）の北端、コタキナバルに日本軍が上陸しそのまま島を南下していた。

上陸したのは旧フィリピン陸軍の4個師団約7万5000名。

フィリピンもジャングルばかりだからジャングルでの行軍にも戦闘にも慣れており、進軍速度も四苦八苦していた第3軍に比べると圧倒的に早い。

砲が少ないからでもあるが大した兵力もいないこの島なら十分だろう。

実際この日本の2倍の面積を持つこの島に配備されている兵力はたつたの1個師団1万2000名。

しかも上陸したコタキナバルからイラン山脈を越えたところ、直線でも1000キロ近く離れたバリクパンに全ており戦闘などは全くなく、3週間後にはブルネイを占領した。

目的はこのブルネイにある油田であり、施設等は無傷で日本軍の管理に入る。

インドネシア軍部は同地の製油所・油田・パイプライン等を全て破壊するように現地企業に命令したが、先に送り込まれたいた日本の諜報員により企業は日本への協力を約束しており従つことはなかつた。

この部隊はさらに南方にあるクチンへ向け出発する予定だったが取り消された。

実際この作戦自体に大した意味はない。

ただ領土を占領してやることでインドネシア政府の戦意を削いでやるつもりというだけのものである。

いちいち補給の難しいジャングルを行軍させ兵士を疲れさせるのはかわいそつだといつことなくなつたのだ。

もつとも、いろんな理由で作戦止めるのなら戦争止めようと云ふが……。

第33話 シンガポール陥落（後書き）

イエスかノーカと詰め寄らせたかったのですがさすがに安直かな…と思ってやめました。そこであのエピソードを入れたのですが、今思えばイエスかノーカの方が良かったかもしないです。史実では別に詰め寄っていたわけではないらしいですしね。

今回の名言

「注意深く、周到に準備するのは、作戦の基本である。そしてひとつ決断すれば、躊躇することなく、大胆かつすみやかに行動を起こせ！」

—マウリス

第34話 決戦を求めて

シンガポール陥落から2週間後、海軍では敵海軍撃滅のため新たな作戦が発令された。

作戦内容は……、いちいち説明するほどのものでもない。内容は極めて単純、一国艦隊のいるジャカルタを砲撃してやりりつといふものだ。

しかも無線封鎖・灯火管制など全くなし。

堂々とカリマータ海峡（ボルネオ島とスマトラ島の間）を進む。そのうち一国艦隊が現れるだろうといふことだ。

参加艦艇は第1・2・3艦隊、よつするに現役の水上艦艇全てと第5艦隊の潜水艦が約20隻。

潜水艦はこの地域に展開する全てが集められた。

そして今回の作戦の目玉といふか海軍がその活躍を期待しているものが「雷撃機」である。

数年前から研究されており、さらに昨年のシンガポール奇襲で必要性が増した機種だ。

去年の暮れに正式採用が決定され、それから数ヶ月後に「鳳翔」「興翔」の2隻にそれぞれ20機配備されている。

その分戦闘機が減っているが、海上航空兵力を持たない一国艦隊相手なら少々減つても問題はない。

この新機種「十五式艦上攻撃機」がどの程度のものか測る絶好の相手である。

（ちなみに）「十五」というのは昭和十五年といふからき

ている。お忘れの方もいらっしゃると思うが俺が即位した時点で元号が昭和に変わっている)

一方一国艦隊はもちろん日本艦隊の出撃は知っている。

そして今度は目標を誤つたりすることもない。

自分達がいるここ、ジャカルタが狙われていることは疑いようない事実である。

そして連日会議が行われているが全く結論が出ない。

何しろ兵力差が大きすぎる。

艦種別に比較してみると、戦艦は8対2、空母は2対0、装甲巡洋艦は12対8、一等巡洋艦は16対8、駆逐艦は56対32と日本軍が圧倒的に有利。

しかもこれに加え水上機母艦4隻もあり制空権（まだそんなに重要視されてはいないが）は完璧に日本軍のものである。

どう考へても大人対子供の勝負だらう。

しかもついでに言つておく、オーストラリア海軍が保有する戦艦というものはアメリカ製の新型戦艦だと思われていたのだがそれは間違いだつた。

何隻もの潜水艦がその戦艦を見たのに新型艦と間違えている。もちろんそれには理由がある。

その戦艦は旧アメリカ海軍戦艦「ヴァージニア」型2隻である。建造は史実より少し遅れて1908年、それに伴い若干性能は向上している。

が、それを補つても余りある欠点を抱えた艦なのだ、こいつは。こいつの基本データはこつだ。

基準排水量	1万8500トン
速力	20・8ノット

主砲	30・5センチ連装砲	2基
副砲	20・3センチ連装砲	4基
	15・2センチ単装砲	12基
対水雷艇砲	7・6センチ単装砲	12基
	4・7センチ単装砲	12基
魚雷発射管	53・3センチ発射管	4門

確かに旧式だがそんな馬鹿みたいにけなすことはないだろ、と思われた方がいるかもしね。

ご存知の方もいるだろうがこいつの欠点は副砲にある。

実は副砲のうち2基がそれぞれ前後部の主砲の上に乗っているのだ。つまり一階建て砲塔というわけである。

この一階建て砲塔が初めて艦艇に採用されたのは「キアサーージ」型の時。

そもそもその目的は副砲の数を減らしても片舷へ向けられる火力を減らさないためだつた。

それは成功しさらに副砲が移動したことにより、舷側に15・2センチ砲14基を搭載することができた。

しかし大きな欠点を抱え込むことになる。

まず一つ目に副砲が主砲の上に固定されているため、同一方向にしか砲を向けることが出来ないこと。

二つ目、主砲塔の中に副砲の揚弾筒が通つているため装置が複雑になつてしまい、両方の砲の発射速度が大幅に低下してしまつたこと。三つ目は同一目標に射程の異なる砲を向けるため弾着観測や照準が難しいこと。

四つ目、主砲が副砲の爆風にさらされてしまうこと。

そして五つ目に一発の被弾で主砲と副砲が同時に破壊されてしまうことである。

これだけの欠点を抱えてしまい「キアサーージ」は明らかな失敗作だつた。

ちなみに「キアサーージ」はその後クレーン船へ改造され1955年まで使用された。

戦艦としてよりもクレーン船として過ごした生涯の方が長かつたらしい。

さて、それがなぜまた「ヴァージニア」に採用されたか、それは米西戦争の戦訓からである。

低い位置にある副砲より高い位置に副砲が活躍したため、それを受けてもう一度採用したのだが結果はやっぱり失敗。

爆風に関しては工夫されていたがあとの問題はそのままで、史実では1922年ワシントン軍縮で廃艦とされ翌年陸軍爆撃機の標的となり沈められる。

この世界では米西戦争がゲーム開始の前年だったため造られてしまつたのだが、結局使い道が決まらなかつた。

そして世界大戦勃発を告げられた年である1910年の7月、戦力増強を図るオーストラリア海軍から旧式でもいいから戦艦を売却して欲しいという申し出が入る。

その話を渡りに船として同型艦の「ネブラスカ」とともに売却されたのだった。

オーストラリア海軍は不満ではあつたが無いよりはマシと買ったのである。

しかし、新鋭艦ぞろいの日本海軍を相手にするのに、あまりにも淋しい状態であった。

で、どうして潜水艦が見間違えたかと言つと売却の際にオーストラリア側の要請で改修工事が行われ、艦橋のシルエットがアメリカ新型戦艦に類似していることや例の一階建て砲塔が背負い式に見えたためである。

もつとも、しつかりと近寄れば違つことは明白なのだがおいそれと近寄れるはずもない。

結局オーストラリアに入れたスパイが情報を掴むまでは分からなかつたのだ。

しまつた、余談が過ぎた。

とにかくこの建造国からも失敗作の烙印を押されたこの戦艦を中心とした艦艇が日本を待ち受けている……はずだつた。

第34話 決戦を求めて（後書き）

本文にあります、が本当に余談で終わらせて申し訳ないです。別にこの2隻に思い入れがあるわけではないんですけど結構頑張つて調べたんでスルーするのはちょっと…というわけで…。

今回の名言

「珍奇な奇襲は敵を仰天させるが、普通の突発事件には、誰も驚かない」
—ベゲチウス

「どうやつたつて勝ち目なんかない」

一国艦隊総司令ギブソン大将は心の中でつぶやいた。
参謀らは田下論戦中。

迎撃のため出撃すべしとするグループと勝ち目の無い戦いをするよ
り撤退して戦力を温存すべしというグループが激しい論争を繰り広
げていた。

彼自身はさつさと逃げたい。

実際あれだけの兵力差を埋める戦法は思いつかないし無益に将兵を
殺すのは忍びない。

しかし、ここジャカルタはインドネシアの首都である。
ここから逃げるということはインドネシアを見捨てて逃げると言つ
ことだ。

そんなことは軍人としてするべきことではない……。

しかし彼は時間の経過とともに撤退へと傾いていく。
議論もその方向へと行っていた。

戦争全体のことを考えればここで艦隊を失うわけにはいかないのだ。
もし日本軍と戦い艦隊が全滅した場合もはや日本軍を防ぐものはな
くなる。

インドネシア全島は日本軍の手に落ち、オーストラリア本土ですら
直接攻撃を受けるようになるだろう。

もちろんインドネシア側の参謀は猛反対である。

国を見捨てて行ける訳がない。

あくまでここで祖国のため戦うべしと誓つ。

5時間にも及んだ会議で彼は最終的に撤退を命令する。

もちろんただ撤退するだけではインドネシア軍は納得しない。

そこで彼はインド洋と太平洋に艦隊を分け通商破壊戦を行つとした。どちらにしろ逃げることには変わらないがただ逃げるといつよりはこう言つた方がまだ聞こえはいい。

インドネシア軍参謀は泣々ながら従つた。

インドネシア艦隊はインド洋へ出てカルカッタへ向かうそこでインド艦隊と合流、それから通商破壊戦に出る」としオーストラリア艦隊はポートモレスビーへ向かうことが決定。

翌日西艦隊は出撃しそれぞれの方向へ進んでいく。

もちろん港付近に配備されていた日本の潜水艦がこれを発見、艦隊へ通報する。

日本艦隊では当然こつちへ向かつてくるものと思つた。

まだ約500キロ離れたブレトン島付近に日本艦隊はいるが明日にはぶつかる。

そのため前衛に対し警戒を強めるよう指示を出す。

そしてその日の夜は日本艦隊には緊張した空気が漂つ。

兵力の少ない艦隊がやること、それは夜襲などの奇襲であることが多い。

恐ろしいほどやつている以上正面からぶつかつてくる」とまますない。

昨年のタイ艦隊は突つ込んできたがあれは例外だ。

しかし、といつよつ当然敵の奇襲はなかつた。

翌日潜水艦から入った情報を聞いて日本艦隊は愕然とする。

敵艦隊はスンダ海峡を抜けインド洋へ出たというのだ。

連合艦隊司令長官山下源太郎大将は旗艦「美作」で怒りを爆発させた。

「潜水艦部隊は夜盲症とうめいぞろいか！水の中に潜つてばつかいるからモグラみたいな目になつてゐんじやないのか！？」

もつとも潜水艦部隊はスンダ海峡に敷設された機雷原突破に時間がかかってしまったため彼らに非はない。

第一連合艦隊は敵艦隊が逃げると言つてことを全く思つていなかつたのだ。

何人かそういう意見を言つて參謀もいたが、逃げるならもつと早く逃げているだろうと全く相手にされなかつた。

圧倒的に連合艦隊司令部の責任のほうが大きい。

そんなこんなで今度は日本軍が空振つてしまつた。

その腹いせもありジャカルタ港は酷い目にあつ。

まず朝から昼まで日本軍機がかわるがわるやつてきては爆弾を放り投げて帰る。

かと思えば昼からは戦艦が沖合に現れ、空襲ですでにほとんどが破壊されていた軍港に砲弾を浴びせた。

砲撃は3時間ほど続いた。

そしてその後軍港は昨日を停止した、といつぱりそこに何があつたのか分からなくなつていて。

とりえあず目に付く建物全てが破壊され、クレーンはもうろん桟橋までもが一つ残さず破壊された。

しかし港の惨状にも関わらず例によつて市街地は無傷である。

この攻撃にジャカルタ市民はひどくショックを受けた。

首都が直接艦砲射撃の的となるなんてもはやインドネシアは終わりだ、と。

そして次第にそれは怒りとなり攻撃を防げなかつた陸海軍への批判が始まる。

それを助長したのがあれ以降毎日飛んでくるようになつた日本軍機である。

沖合に常に水上機母艦1隻と1個水雷戦隊があり毎日飛行機をジャカルタ上空に飛ばすようになったのだ。

明らかな嫌がらせである。

首都の制空権も今のインドネシアはない、ということを知らしめてやるためだ。

これによりインドネシア国民の厭戦ムードは高まつていつていぐがインドネシア政府はあくまで交戦を続ける構えを崩さない。そこで圧力をかけるためスマトラ島への上陸作戦の計画が始まる。インドネシア方面軍のうち第4軍が侵攻部隊となるが、シンガポールの基地機能回復を待つてからとことなのであと1ヶ月くらい先になるはずだ。

そして離脱した艦隊のその後だが、インドネシア艦隊は北上中思わぬ敵と会つことになる。

「意見」感想お待ちしていますーー

今回の名言

「落雷を受けるよりは、砲撃される方がましだといつのは、戦いの原則である。 勝敗は兵家の常であるが、奇襲を受けることは絶対に許されない」

——ナポレオン・ボナパルト

第36話 アンダマン事件

1915年2月26日深夜のこと。

潜水艦「呂一25」はアンダマン諸島の西方約300キロの海上を航行中であった。

同艦はインド洋での通商破壊戦のため出撃したのだが、一国艦隊が行方不明になつたためその捜索命令を受けていた。

春日艦長は艦橋で当直の兵とともに望遠鏡を覗き敵艦隊の捜索を行つていた。

もし敵がカルカッタを目標しているのなら今日明日にはこのあたりを通るはず、そろそろ出会つてもいい頃だ、彼はそう考えておりそれは見事に的中する。

「艦長！ 左舷前方に敵艦らしきものを発見しました。距離は約30キロ、ゆっくりとこちらへ向かってきます」

見張り員が望遠鏡を覗く方向を彼も覗くと確かに10隻以上の艦艇がこちらへ向かって進んでいるのが見える。

月が明るくて本当に良かった。

「よべやつた。それじゃこれから潜航して……」

彼は艦内へ戻るうとしたが別のまづを監視していた見張り員が呼び止める。

「艦長！ 右舷約40キロにも艦影らしきものがあります」

彼は驚いてその方向を見る。

しかし間違いない、こちらにも10隻以上の艦影があった。

「どうこいつだ？なぜいつも艦隊が……。まさかイング艦隊か？」

驚くべき偶然だが考えられないこともない。

「急速潜航！ 総員戦闘配備！」

彼はもう一度敵艦を一瞥すると艦内へと入っていった。

それから数時間後、最初に発見した南から北上してくる艦隊を攻撃することにした「呂-25」は雷撃体制を整えていた。

攻撃目標は先頭を進む敵大型巡洋艦。

「前部魚雷発射管、発射用意よし」

伝声管から水雷長の緊張した声が響く。

「敵艦の動き変わらりません。距離1000メートル」

順調順調、あと1分後には射点へ獲物は自ら飛び込む。あとはよく引き絞つて矢を射るだけである。長い1分が過ぎていく、そして……、

「1番、撃え！」

圧搾空氣により艦から放たれた魚雷は敵艦へ真っ直ぐ向かう。続いて一拍遅れて撃ちだした一本目の魚雷も後をついていく。艦全員が当たれ、当たれと祈る。

数十秒後、爆発音が響き渡った。

「魚雷命中と認む！」

聴音の報告を待つまでもなく艦全体に轟びを爆発させた声が響く。敵艦はどぎゅやら轟沈したようだ、すさまじい爆発音が響く。しばらくして「四一二五」内の爆発音は消えたが一向に静かにならなかつた。

「聴音、あれは何の音だ？ 艦砲の射撃音のようだが……」

春日少佐は不思議に思いたずねた。

上方から大砲を撃つような音がたくさん聞こえてくる。潜水艦に向けて大砲を撃つ馬鹿はいない。だつたら一体何を狙つているのか。

彼は聴音の報告を待つ。

「ええ、艦砲の発射音に間違いありません。砲弾が水に着弾する音も聞こえます」

そう答えた水兵も不思議そうな声を出す。

「まさか撃ちあいしてんじゃないだろうな……」

まさかとは思うが今の攻撃で敵は味方同士で撃ちあいを始めているのではないか。

彼はそう思つがいくらなんでもそれはお粗末すぎる。

しかしこの海域に味方艦隊が……？

そんなわけはない。

堂々通りの思考が続く。

その間も海上では何かに向け必死に撃つている音がこだましている。

「よし、潜望鏡深度まで上がれ。少々危険だがあれが何か分からん。それによつてはこれから取る行動も変わつてくれる」

春日艦長は思い切つて見てみることにした。

敵がこちらに向かつてくる様子もないし何よりあの音は気になる。艦は後ろに傾き、だんだんと海面が近くなる。

「潜望鏡上げ」

すつと潜望鏡が上がつていく。

潜望鏡が水を切る。

そしてそこで見たものは……、

「何やつてんだか……」

春日艦長は呆れた。

想像は見事に的中、インド艦隊とインドネシア艦隊がお互いを攻撃している。

まだ命中弾は出でていないようで火災が起つてている様子もないがとりあえず言えるのは両方ともアホだということだ。

どつちか気付けよ……、彼はそう思いつつも次の敵艦を狙うため魚雷の再装填を命じた。

その頃海の上ではお互い相手は日本艦隊だと思い必至に戦つていた。

インドネシア艦隊からすれば自分たちの北上を防ぐためマラッカ海峡方面から出てきた日本艦隊、インド艦隊からすればインド洋へ出て通商破壊か都市襲撃を企てる日本艦隊。

意思疎通が上手く出来ていなく、お互い味方艦隊がこの海域にいるとは思わなかつたのだ。

情報伝達ミス、初歩中の初歩のことである。

特に複数の国家がまとまって戦争をしているのだ。
連絡・報告・相談、これらは必須事項である。

その後も撃ちあいを続けていたが2・30分後、再びインドネシア艦隊に魚雷が迫る。

疑心暗鬼となつてゐる彼らは本物の敵潜水艦がいるなんて全く思つておらず、この魚雷は気付いた時には元2番艦の装甲巡洋艦「マカッサル」の舷側を突き破つていた。

その爆発により副砲が誘爆、大火災が起つてゐる。
それから数分後、その後ろを行つていた装甲巡洋艦「バリクパパン」にも大きな水柱が立つ。

インドネシア艦隊は大混乱に陥つた。

これにもつと驚いたのはインド艦隊である。

命中弾がないのに突如敵艦が大爆発、一体どうしたのかと考えているうちに見張り員がとんでもないことを言つて來た。

「か、艦長！今炎上しているのはインドネシア海軍艦艇です！艦尾にインドネシアの旗が掲げられています！」

インド艦隊旗艦の艦橋は文字通り凍りついた。

「撃ち方やめ！全艦に通達、すぐさま砲撃を中止せよ。我々が撃つていたのは友軍だとな。インドネシア艦隊にも発滅信号を送れ！ 我インド海軍装甲巡洋艦『セイロン』なり、砲撃を中止されたし！」

事態に気付くのが遅かつた。

すでに魚雷を受けた装甲巡洋艦2隻はかなりの大傾斜で沈没寸前。さらに砲撃で命中弾を受けた艦艇もお互いにいくつかいる。しかもこれを引き起こした当事者には結局気付かず、「呂一-25」は悠々と戦線を離脱した。

一つの艦隊が混乱から完全に立ち直つたのは翌朝のことである。水兵達はお互いの所属を確認しようやく安心できた。

今回の原因是「呂一-25」による攻撃を前方の艦隊からの攻撃と勘違いしたこと。

日本艦隊の襲撃を受けるという噂が艦隊中に広まっていたことも手伝い、目の前の艦隊が発砲していなにも関わらず撃たれたような気分になつてしまっていたのだ。

また、潜水艦「呂一-25」は装甲巡洋艦3隻を立て続けに沈めるという大戦果を挙げシンガポールへ帰還した。

この功績により春日少佐には勲章が授与され、「呂一-25」の水兵全員にも特別ボーナスが支給される。

これにより潜水艦は大型艦が撃沈可能なことが立証され、潜水艦万能論はさらに高まりを見せる。

なんとかしないといけないが……。

第36話 アンダマン事件（後編）

「最近他の作者様の小説にはまつてしまいなかなか自分の執筆が進みません…。1,2週間はほとんど前に書き溜めておいたのをアップしただけで執筆はわずか…。そろそろ気合入れなおして書こうと思います。」

今回の名言

「軍人にとって、眠っている敵を打撃することは自慢にならない。
それは単に打撃されたものの恥に過ぎない。」

—山本五十六

1915年5月21日、連合軍艦隊が追い払われ、インドネシア近海の制海権を握った日本軍は悠々とスマトラ島中部への上陸作戦を開始した。

投入された部隊は第2・4軍で、スマトラ中部を一気に縦断、敵部隊を一分させる作戦である。

対するインドネシア軍はせいぜい10万多名程度と見られており、今回は一方的に叩き潰して終わりだと誰もが思った。

兵力は十分、シンガポールにはまだ後詰として待機中の第1軍がいるし火力も圧倒している。

航空支援も受けれるし補給にも不安はほとんどない。さらに兵士は戦争開始から各地を転戦してきた歴戦の兵士ばかりだ。もちろん補充兵も混じつてはいるが彼らの多くもマレー半島での戦いは経験している。

ジャングルの行軍でも問題はない。

負けるはずがなかった。

作戦は順調だった。

第2軍がまず上陸し島の反対側にあるパダンを目指して進軍を開始、第4軍も続いて上陸し少し南下したあたりにあるレンガットという町を攻略する。

それまでの間インドネシア軍との戦闘は全くなかった。

恐くなつて逃げただろう、そういう楽観的な観測をする参謀もいたが多くの参謀は首をかしげる。

全く攻撃をしてこないということは兵力を温存している、つまりど

こかで日本軍を待ち伏せしているかもしくは奇襲をかけてくるんじやないか……。

暗い観測が頭をよぎるがではど」「でどれくらいの規模でどうやって」と言つてはまつたく分からぬ。

それがはつきりしたのは6月12日、レンガットの日本軍に対しインドネシア軍が砲撃をしかけてきたときである。ここでようやくお出ましか、しかしそれにしても通常の攻撃で奇襲ではない。

普通に白昼堂々と砲撃をかけてきたのだ。

一体何がしたいのだろうか……、再び参謀達が首をかしげる。

しかしその攻撃は普通ではなかつた。

日本軍の陣地付近に砲弾は着弾してはいるが下手くそなのが命中弾はほとんどない。

兵士達は陣地からそれを眺めインドネシア軍など大したことないなと安心した。

しかし、しばらくしてその兵達は突如苦しみだし、次々と倒れる。

後方にいた衛生兵はその様子を見て何事かと陣地へ急いで向かつた。

いわゆる匍匐^{ほふく}前進で進み、10分くらいかけてようやく陣地の塹壕に入る。

そしてすぐさま手当てをしようと包帯類を取り出した。

しかし、兵士達に田立つた外傷は無い。

ゆすりても反応なし。

どうしてだ、そう考へてゐるうちに彼の身にも魔の手が伸びる。

「ゴホッ、ゴホ。なんだ、この息苦しさは……。田もチカチカするし……。うう、気分も悪くなってきた……」

彼は塹壕から出ようとしたが息苦しさが増し、その場に倒れてしまった。

そして、そのままゆっくりと目を閉じる。

彼が一度と起きることはなかった。

「第46師団より報告！前線の兵士が突然倒れだし、多数の死者が出ています！退却許可を！」

「こちら第55師団、敵の策略にはまりました。敵陣地付近にあつた堀のようなどこりへ入り込んだ兵達が次々に倒れています、退却許可を！」

「第13師団です！兵士が相次いで倒れています、敵部隊の動きも活発になりこちらに向かってくるようです。このままでは支えきれません、増援部隊を派遣してください！」

第4軍司令部に突如無線が大量に入りだし、それも全てが悲鳴。しかし軍司令部ではその悲鳴の意味が分からなかつた。

何にもないのに兵士が倒れだす？

敵には魔術師でもいるのだろうかとそんな疑問まで思い浮かぶ。

「こちら第13師団、マスクのようなものをつけた敵兵が突入、我が部隊と交戦を開始しました。我が部隊の戦力はわずか、すぐに救援部隊を！」

ガスマスク……？

ならばまさか敵軍は……！

「司令！毒ガスです！敵は毒ガスで我が軍を攻撃ししているのです。

前線の兵士が倒れだしたのは敵軍が毒ガスを撒いているからに違いません。すぐに部隊に撤退命令を！早くしないと手遅れになります！」

ガスマスクと言われてピンときた参謀の一人が叫ぶ。

全く同じことを同時に思つた軍司令官はすぐさま部隊に撤収を命令した。

全部隊が倒れた戦友を肩にかつぎ、ジャングルの中を撤退し始める。しかしこれに対するインドネシア軍の追撃はすさまじく、満身創痍の日本軍はジャングルを敗走。

小部隊ごとに追撃してくるインドネシア軍と交戦しながらの敗走は多くの日本兵の命を奪うこととなる。

5日後シンガポールの対岸へたどり着いたのは第4軍約20万のうち10万強だつた。

砲兵部隊は無事に撤退できたのだが最前線にいた歩兵で生き残ったのはほんの一握りに過ぎず、その彼らも咳や嘔吐が止まらない。

重症兵から優先してシンガポールへ撤収、3日後にはパダン攻略を中止した第2軍も引き揚げてきてとりあえずスマトラ島からは完全に撤退した。

この戦争開始以来の大敗北に日本国内は衝撃を受ける。

株価は急落、国民全体が大きな不安を感じるようになつた。

そして何よりショックを受けたのは陸軍だ。

半分ほどの兵力しか持たないインドネシア軍に敗北したばかりか、第4軍の兵の半分を失つたのである。

何より開戦以来負けたことのない陸軍は若干浮かれていたこともあり、この敗北は堪えた。

セイジがセイジの作戦についての会議が召集され、反省とこれから
の作戦について話し合うことになった。

第37話 毒の霧（後書き）

とうとう毒ガスの登場です。実際毒ガスについて良く知らないので調べながら書きましたが実際にどのように使われたのかマイマイ分かつてないです。おかしいところなどがありましたらご指摘ください。すぐに訂正します。

それと「安芸」型戦艦の主砲を36センチと誤って記述していました。正しくは35・6センチです。訂正してお詫びします。

今回の名言

「同じ戦い方を繰り返すな」
リチャード・ハート

「さて、今回諸君に集まつてもらったのは今回のレンガット戦での敗北について話し合い、今後の作戦に生かしていくためだ。なぜ敗北したのか、どうすればこれから勝てるのか、諸君らの忌憚のない意見を聞かせてもらいたい。ではまずは報告を」

俺も正直今回の作戦の失敗には驚き、そしてなぜこんなことになってしまったか不思議に思っていた。

毒ガスをばら撒いてきたという話も聞いたが詳しい報告はまだ聞いていない。

「はつ、簡単に報告しますと今月の5月21日にまず第2軍が上陸、島の反対側にあるパダンを目指し行軍を開始しました。翌日、続いて上陸した第4軍がレンガットへ向かい1週間後同地を占領しました。そこで第4軍は第2軍のパダン攻略を待ち、その後南下する予定でしたが6月12日に敵軍の攻撃を受けました。その際敵軍の使用した毒ガス攻撃により前線の兵士の多くが戦死し、さらに追撃を受け大きな損害を受けてシンガポールへと引き揚げました」

参謀の一人がおおまかに説明を入れる。

そしてその後戦闘の詳細に対する報告が入った。

報告の後、まず一番最初に口を開いたのは一戸大将だった。

「使われた毒ガスは何か分かっているのかね？」

一戸大将が問うと参謀の一人が立ち上がりそれに対し説明を入れる。

「はつ。兵士の症状などから塩素ガスによる攻撃の可能性が高いと思われます。砲弾に入れられていたのではないかということです」

塩素は原子番号17、いわゆるハロゲン元素の一種である。常温・常圧では黄緑色の氣体で、特有の臭いを持ち毒性と腐食性がある物質だ。

現代では洗剤や水道水の消毒剤としておなじみのものではあるが、非常に危険な物質なのである。

「混せるな危険」は本当なのだ。

で、塩素を吸つたらどうなるのか？

まずある一定以上の濃度の中に入るとそれだけで皮膚の粘膜を刺激する。

特に目は危ない。

吸つてしまえば呼吸器系に障害を与え、咳や嘔吐を催し重大な場合には死に至る。

今回は大量に、しかも液体の状態で砲弾にいれられて飛び散らせたらしくそのため多くの兵が命を落とした。

史実でも人類初の化学兵器として使用された塩素だが、この世界でもちゃんと登場してしまったわけである。

日本では毒ガスの研究などしていない。

民間人を巻き込む大量破壊兵器の研究など俺が絶対に認めないからだ。

しかしその対策としてガスマスクの開発をさせてなかつたのは俺の失策である。

開発・製造して前線の兵士にいきわたるまで前進を中止しなくてはならなくなってしまったのだ。

長ければ一年くらい足踏みをしてしまうかもしない……。

「とりあえずガスマスクが早急に必要だ。技術開発庁は全力を挙げて開発に取り組んでくれ」

俺は後ろのほうにいた技術開発庁の研究員に言った。

しかしそれに対する反応は薄く、それに彼の動作がなんとなく変だ。

拳動不審というか妙にオロオロしている。

どうしたんだ?と聞いてもあいまいな返事を言つだけ。

他の陸軍のメンバーもなんとなく怪しい。

「おい、一体どうしたんだ?」

しかし返答はなく、俺はある確信を抱く。

この話の流れからすればこうだ。

「お前ら、毒ガスの研究を続けていたんだな」

一時期大戦前に陸軍の間で毒ガスの研究をしようと叫ぶ声が様々なところで聞こえてくる時があった。

毒ガスは少ない代価で大きな戦果を得ることができる。

ガスマスクさえつければ味方兵士に損害はほとんどないが敵兵士を皆殺しにだつてできるのだ。

確かに便利な兵器だが俺は民間人を巻き添えに殺してしまうことや、その殺し方があまりにも惨いことからそれに反対し研究を中止せた。

しかし、俺の知らないところで研究は続けられていたのだ。

「どうなんだ?黙つていては分からぬ。どこまで研究は進んでいるんだ?」

問い合わせていくうちに研究者達はもはや言い逃れは出来ないと思つたのだろう、全てを話した。

やはりかなり前から極秘に進められていたらしくすでに10種類以上の毒ガスが研究されておりうち3種類はすでに実用可能の域に達しているという。

開発されたものの一部にはそれに対する解毒剤・防毒マスクなどもあるらしい。

「なるほどな。で、陸軍で関与していたのは誰だ？技術開発庁が単独でやるはずはないよな。正直に言えば処分も軽くしてやろう。今隠して後からばれたら命令違反で軍法会議行きだ。銃殺刑も考えるぞ」

この俺の脅しは効いたらしい。

ぞろぞろと出てきた。

この会議参加者だけでも10人近くいる。

その後の調査で若手の参謀を中心50人ほどもいたことが分かり、それぞれ減給や謹慎などの処分が下された。

さて、それはさておき今回の作戦会議で陸軍部隊の前進は停止されたが海軍による敵艦隊掃討作戦が行われることになった。

もちろん豪本土にいるオーストラリア艦隊を攻撃するのはさすがに見送られたがインドに逃げ込んでいるインドネシア艦隊とインド艦隊は十分攻撃できる。

そこで第2・3艦隊による攻撃が行われることになった。

これに平行して第1艦隊から「安芸」型戦艦2隻を出してニューオーリテン島攻略作戦も行われる。

オーストラリア艦隊が太平洋へ抜けるのを警戒してのことだ。

別にそこを占領したからといって全てが見張れるようになるわけではないが脅しにはなるだろう。

それにもオーストラリア国民には日本軍に包囲されたという心理的打撃を与えることにもなるし。

このことで海軍による太平洋・インド洋両面作戦が始まった。

「意見」ご感想お待ちしております！

今回の名言

「勝敗は兵家の常である。激戦にせり負けた將軍は不運であるが、敵から奇襲されたり、敵の罠にはまつたりした將軍は弁解の余地はない」

—レナタス

第39話 カルカッタ沖海戦・前編

1915年7月3日、第3艦隊は作戦通りカルカッタ沖合い約10キロへ進出し、攻撃隊の発進用意を始めていた。
「鳳翔」艦上でも航空機が所狭しと並べられエンジンを回し始めている。

パイロット達は皆つきつきしていた。

航空機は新型のものが配備されている久しぶりの対艦攻撃である。腕が鳴るぞとばかりに発艦命令を待っていた。

しばらくして信号旗が振られる。

待つてましたと前の機から次々に空へ舞い上がっていく。
新鋭機である十五式戦闘機、十五式艦上攻撃機が艦を離れ上空で編隊を作る。

今回は艦爆を全ておろし艦攻のみが搭載されていた。

本当ならどつちも積みたいのだが搭載機数が一隻足しても常用機は70機強しかないのだ。

どつちかに絞つたほうがいいだろうとこじりこじりで今回は戦闘機を40機、艦攻を30機積んだのだった。

第1次攻撃隊は空母2隻の航空機全力を使って行われる。

水上機の部隊は敵機による攻撃を受けた場合鈍いので、先に艦上機の部隊でそれを潰してしまおうというのだ。

そのため艦攻30機のうち10機ほどには陸用爆弾が搭載されていて、カルカッタ航空基地の滑走路を攻撃する予定となっている。

編隊を組んだ航空隊は一路北上、インドネシア艦隊とインド艦隊が

ねぐらにしているカルカッタを目指し雲の上を飛ぶ。

今日ばかりは雲が多いし、その高度も少し低いらしい。

編隊は雲の中に入らないように気をつけながら飛行を続けた。

しかし途中、彼らは思いもよらぬ光景を目にすることになる。艦隊を離れて50キロもいったかなといふところである戦闘機パイロットがたまたま雲の切れ目から海面を見た際のことだつた。

彼は隊長機に無線で報告を入れると雲の下へ降り確認する。

「おいおい、敵さん全部！」といふぜ……」

彼は攻撃すべきインド艦隊とインドネシア艦隊が全てここにいることを確認した。

装甲巡洋艦5、二等巡洋艦4、駆逐艦18。敵艦隊は4本の縦陣を作つて南下していた。中央に装甲巡洋艦と二等巡洋艦が列を作りそれに平行して左右に駆逐艦が1列ずつ。

旗艦と思われる商船の横には馬頭船がそれそれ、隻々一往き添つて
いる。

「こちらカルカツタ攻撃隊、敵艦隊発見。その数大型巡洋艦5、巡洋艦4、駆逐艦約20なり。目標の艦隊と思われる。カルカツタ港攻撃を中止し敵艦隊に攻撃を行う」

攻撃隊は無電で報告すると攻撃を始める。

もちろん狙いは一番大きな装甲巡洋艦、でかい団体の腹めがけて魚雷を投下した。

雷撃隊は一機の落伍もなく全機が投弾に成功、およそ20本の魚雷

が敵艦めがけてすすむ。

必死に逃げようとする敵艦、しかし魚雷から逃げるにはあまりにも
その身体は大きすぎた。

やつた、轟沈だ、パイロット達はそう確信したが……。

ドオオオオン！

大爆発が響き渡り海や空を震わせる。

しかしそれは狙つた敵艦のものではなかつた。

それは敵旗艦の側にいた駆逐艦のうちの1隻のものだつた。
もはや旗艦はよけ切れない、そう思つた瞬間に速力を上げ魚雷と旗
艦の間に割つて入り、轟沈したのだ。

その勇敢な駆逐艦に命中した魚雷はなんと8本。

1000トンにも満たないその駆逐艦は魚雷の水柱が崩れ落ちたと
きにはもう影も形もなかつた。

パイロット達は一時攻撃をやめその駆逐艦に対し追悼の意味も含めて敬礼した。

敵とはいえその勇敢な行動に胸を打たれたのだ。

そして数分後まだ投弾していない爆装の艦攻が今度こそと敵旗艦を
狙う。

陸用爆弾とは言え当時最大の250キログラムの爆弾を搭載してい
る。

当たればただでは済まない。

艦攻隊は爆撃航程を開始、水平爆撃に入る。

そして距離100メートルを切つた時爆弾を次々に投下した。

海面にすさまじい水柱が林立し、一時敵艦は視界から消える。
しかし水柱が崩れた後、敵艦は無傷でその姿を再び現す。

命中ゼロ。

しかもそればかりか対空砲火はほとんどないにも関わらず、不幸な艦攻一機が対空砲火の直撃を受け撃墜されてしまう。

結局この攻撃では駆逐艦1隻を撃沈して敵艦隊の士気を高めただけで終わってしまった。

その頃艦隊では……。

「第3艦隊は早く後方に下がれ！ 敵艦隊は田と鼻の先まで来ている。このままだとまずいぞ」

装甲巡洋艦「白根」で艦隊司令吉松茂太郎大将はいらだつていた。敵艦隊が出てくることはある程度予想していたが偵察機を常に飛ばしていたし、こんなに近くにいるとは思わなかつたのだ。

第一つい2時間ほど前に航空隊の出撃に先立ち水偵を飛ばしている。一体そいつらは何をしに飛んでいたのだ？

（ただし彼はカルカッタ港偵察を命じていなかつた。そういう面で言うと重要な偵察目標を偵察させなかつた彼の責任も大きいが）

「第1次攻撃隊より報告です。我駆逐艦1隻を撃沈せり、です」

さらに彼の神経を逆なでする報告が入つた。

「たかが駆逐艦1隻撃沈したくらいで報告してこんでいいわ！ ったく、巡洋艦の1隻や2隻は沈めるもんだと思っていたが……」

彼は悪態をつく。

どちらかといふと大鎧巨砲主義の彼は航空隊の連中があまり好きではない。

そのためさきほど参謀から弾着観測のため水偵を出したほうがいいのではないか、という意見具申があつたときも即却下した。

まあ確かに巡洋艦ぐらこの撃ちあいで弾着観測機は不要かもしけないが。

「艦長！最大戦速に上げて第3艦隊の前に出でくれ。あれを抱えてたんじや戦闘が出来ん」

1時間後、第2艦隊は3本の縦列を形成して第3艦隊前方に展開を完了した。

艦隊前方の水平線にはすでに敵艦隊のマストのようなものが見えている。

「装甲巡洋艦部隊は『白根』について來い。水雷戦隊は事前の通達どおり。第3艦隊には航空隊の発進を急がせろ。敵艦を沈めなくてもいたぶるくらいはできるだろ。我々の邪魔にならん程度に働けといつとけ」

彼は水平線を睨みつける。

来るなら來い、俺はこの手で叩き潰してやる、彼は心の中でつぶやいた。

（注）「白根」とは軍備緊急増強計画の第2期計画で建造された装甲巡洋艦4隻のうちの1隻。「白根」型装甲巡洋艦のネームシップである。主砲は前級の「箱根」型と同じく20・3センチ連装砲5基10門。新型の10センチ連装高角砲を搭載しているのが特徴。最大速力も32・5ノットと高速である。

第39話 カルカツタ沖海戦・前編（後書き）

吉松茂太郎大将は実在しますがキャラ・能力ともに全く違うと思います。あまり架空の人物を出さない方が良いと思って名前だけ拝借しました。

今回の名言

「戦争は敵対する両軍の激突である。強者は弱者を擊破するだけでなく、その『戦勢』が弱者を押し流す」
—クラウゼヴィッツ

「敵艦隊発見！距離、3万5000メートル」

見張り員の声が伝声管を震わせる。

吉松大将はふんと鼻で笑つて、

「雑魚共が……。1隻残らず海に沈めてくれるわ。総員戦闘配備だ。水上機部隊には出撃命令を出せ。少しでも敵の邪魔をして来い」

と言つて双眼鏡で敵艦隊を見た。
そこには煙をたなびかせながら一いつぢらへと向かつてくる敵艦隊がいた。

10分後、水上機部隊が全機発進し敵部隊攻撃に向かつ。
もう距離がほとんどないので敵艦上空までさほど時間はかかりない。
すぐに上空へと到達すると一手に分かれて攻撃を開始した。

まず一隊が敵旗艦へ向け爆撃を行う。

敵の指揮系統を混乱させるためである。

もちろん急降下爆撃などできないので水平爆撃。

真上へ到着した機から次々と爆弾を投下した。

たくさんの水柱が立ち、爆発音が響く。

20機ほどの水上機がよつてたかつて攻撃すればさすがに1発くら
いは当たる。

命中弾は5発。

艦中央部に3発、後部に2発で後部主砲が使用不能となり副砲も何基か粉砕されたが、艦橋はノーダメージで別に艦隊指揮に差し支えがでることはなかつた。

一方もう一隊は艦隊外郭にいた敵駆逐艦へ攻撃を行つた。
なぜ駆逐艦かというとどうせ巡洋艦を狙つたところで水上機の搭載可能な爆弾では沈めることは出来ない。

ならばなんとか沈めることのできる駆逐艦を狙おう、駆逐艦が艦隊に向かつてこられるのも厄介だし……ということである。

結局この攻撃で3隻が沈没、4隻が大破してうち2隻は洋上に停止してしまつた。

要するに片方の水雷戦隊は壊滅したことになる。

何隻かは残つているが彼らも溺者救助で動けなくなるだろう。

「敵艦隊との距離、2万1000メートル！ 敵先頭艦射程内に入りました！」

見張り員の声が響いた。

しかし、吉松大将は一向に攻撃を命令しない。

「敵艦斉射！」

再び見張り員が声を張り上げる。

次の瞬間敵の砲弾が「白根」の前の方で大きな水柱をあげた。

「大将、射程内です。砲撃命令を」

艦長がしびれを切らした。

しかし、大将はうんといわない。

「まだ待て、しつかりと引き寄せるんだ。どうせこの距離だ、敵の砲弾は当たりはしない」

まあ確かにこれだけ遠距離なら撃つてもなかなかあたらないだろうが、敵をなめてかかっているのは問題である。

そしてその後もしばらく撃たれ続け、距離1万4000でようやく射撃を開始した。

さすがに初弾は命中しなかつたが少しずつ至近弾を得始める。しかし着実に味方も撃たれていた。

「敵2番艦沈黙、3番艦も被弾して炎上中！」

「『飯豊』より信号！我被弾、損害軽微にあらず離脱許可を求む」

「『新見』より信号！我が戦隊戦力十分、命令一下突撃せん」

戦闘開始から2時間、各艦からの悲鳴や見張り員の報告が飛び交う。「飯豊」は「白根」型装甲巡洋艦2番艦で、「白根」のすぐ後ろを走っているため敵の攻撃が激しく、先ほどからかなりの命中弾を浴びて黒煙を吹き上げており、艦隊からも若干遅れていた。

「新見」は水雷戦隊旗艦の一等巡洋艦である。

「『飯豊』に信号、離脱を許可する。ただちに離脱せよ。『新見』にはまだ待てと送つておけ！」

吉松大将が怒鳴る。

予想以上に多い損害と予想以上にあたらない味方の攻撃両方にいら

だっているのだ。

「白根」もかなり撃たれている。
すでに10発以上の大小の砲弾を受けており死者も出ている。
艦長も必死に右へ左へと敵の砲弾を交わす。
しかし再び艦を大きな衝撃が襲う。

「被害報告！」

まだ揺れが収まらないうちに艦長が怒鳴る。

「1番主砲被弾！振動で旋回不能、射撃できません！しかし火災の
発生はありません！」

「艦中央部にも命中弾、右舷機銃座3基喪失！」

「2番高角砲大破、射撃不能！」

「右舷中部兵員室損壊！火災発生！」

あちこちで怒号と悲鳴がこだまする。

「取り舵一杯！消火班は艦中央部の火災消火急げ！救護班も負傷者
搬送に行くんだ。2・3番主砲は発射用意！」

艦長もすさまじい砲声の中でも聞こえるよつ声を張り上げ、矢継ぎ
早に指示を出す。
しばらくして力強い声が返ってきた。

「主砲射撃用意良し！」

「撃え！」

生き残っている前部主砲2基4門が咆哮する。今までなかなかあたらずイライラしていた砲員の気合がこもつていだのだろう、4発の砲弾は寸分違わず敵旗艦に命中、艦橋を吹き飛ばした。

もちろん敵司令は戦死、指揮官を失った敵艦隊はもはや艦隊ではなくなり逃走を図るものも出始めてしまう。

これに対し日本艦隊は事前に待機させていた水雷戦隊を突撃させるとともに巡洋艦部隊も追撃を開始した。

「敵巡洋艦2隻、こちらに向かってきます！」

見張り員からの報告に吉松大将はその方角を望遠鏡で見る。

「刺し違える気か……、あの2隻をまず叩け。これ以上損害は出すわけにはいかない」

すでに日本艦隊は装甲巡洋艦3隻が大破して戦線を離脱している。他の艦も大なり小なり損害を受けていてこの「白根」も50人を超える戦死者が出ていた。

しかし集中砲火を浴びてこれだけで済んでいるのは奇跡に近く、それは艦長の練艦技術があつてはこそものだ。

敵巡洋艦に日本艦隊は集中砲火を浴びせて沈黙させる。

「白根」はどどめを刺そと近寄つた。

その瞬間敵艦は魚雷を発射、魚雷は「白根」へと迫る。

「面舵一杯、機関最大戦速！」

迫る魚雷に対し「白根」は身をよじるよじしてこれを避ける。

数分後、魚雷は艦の真横を通り過ぎていった。

そして避けると同時に砲撃を再開し2隻は洋上に停止、1時間ほど後に沈没する。

結局この海戦の結果は以下の通りとなつた。

日本	沈没	駆逐艦	2	
大破	装甲巡洋艦	4	一二等巡洋艦	1
中破	装甲巡洋艦	2	一二等巡洋艦	1
			駆逐艦	2

そのほか小さな損傷はほとんどの艦艇が受け、航空機も5機の損失。この戦いで行動可能な装甲巡洋艦は数隻のみになってしまった。ただ沈没艦が駆逐艦2隻だけだったのは救いである。

連合艦隊

沈没	装甲巡洋艦	3	一二等巡洋艦	4	駆逐艦	1
大破	装甲巡洋艦	1	一二等巡洋艦	1	駆逐艦	2
中破	装甲巡洋艦	1	駆逐艦	2		

この戦いでインド洋には行動可能な大型艦はいなくなつた。

結果インド洋の制海権は日本に移り、連合側の残存艦艇はムンバイまで後退せざるを得なくなる。

またこの頃、太平洋方面でも戦いが起きていた。

第40話 カルカツタ沖海戦・後編（後書き）

この「いろいろ様々な方からアドバイスを頂き、本当にありがとうございました。自分のような未熟者だけでは到底作品を作り上げることなど不可能なので、読者の皆様のお力を借りしたいと思つています。お気付きになられたことやこうしたらしいといふアドバイスがありましたら是非ご指導をお願いします。

今回の名言

「どんな事業でも、実行の機が熟すまで秘匿できなかつたものは成功しない」
—マキアヴェリ（イタリア・フィレンツェの政治思想家）

第41話 ラバウル上陸戦

インド洋での戦いと同じ頃に、偶然に太平洋でも大きな戦いが起つた。

場所は現パプア・ニューギニアのビスマルク海。英語ではビスマークと発音し、ニューギニア島・ニューブリテン島・ビスマーク諸島に挟まれた海域である。

日本軍はニューブリテン島を占領しよつと艦隊をこの海域に送り込んだ。

編制は戦艦「安芸」「石見」に一等巡洋艦2隻と駆逐艦24隻。そのほか陸軍部隊を乗せた輸送船40隻とその直接護衛隊の旧式戦艦2、旧式装甲巡洋艦2、護衛駆逐艦21がいる。

これらの艦隊はトラックを出港してから10日ほどでラバウルへ到着、上陸を開始した。

陸軍部隊は臨時編成の第101軍団。

2個師団から成る部隊で軍団長は梅沢道治中将。史実では日露戦争で活躍した将である。

彼のことは有名でほとんどの方が知つてゐると思うが、近衛後備歩兵第1旅団を指揮して沙河会戦でロシアの大軍を撃退し名声を得た人だ。

彼もシンガポールにおける大迫同様かなりのご老体だが、史実と違ひリューマチの持病もないし何より元気である。

そのため何とか中将まで昇進して現役を保っていた。

彼自身は大戦がなければ引退するつもりだったらしいが、大戦勃発

でもはや希少価値となつた実戦経験のある（といつても戊辰戦争のものだが）将官の一人のため慰留されたのである。

そして今回、戦争の裏舞台のよつたラバウル攻略戦を他の将官が嫌つて受けなかつたので彼が任命された。

7月2日、艦隊は無事にラバウルに到着し部隊の揚陸を始めた。

先遣隊の報告によると敵部隊は存在しないとのこと。

梅沢中将は安心し、彼もその日の午後に上陸した。

しかし全部隊の揚陸が完了した5日の午後、上陸して陣地構築作業を視察している際に彼は異変を感じる。

「これはまずい……、敵の部隊が来るぞ。全部隊に通達して陣地構築をやめて部隊を集結させるんじや」

参謀は首をかしげた。

先遣隊は上陸地点から10キロ離れた地点まで出て敵部隊の搜索をしているが、そこから何の報告もない。なぜ敵部隊が来ると分かるのかと問うと、

「『いくさの匂い』がするんじや。先遣隊は敵に襲われるとかも知れん。無線で呼び出せ」

と言つた。

そんな馬鹿な、と彼は思つたがとりあえず通信兵を呼びにいひつとした。

ところが少将の従兵が駆けてきて驚くべきことを口にする。

「梅沢中将！先遣隊から救援要請です。我敵部隊の襲撃を受けつあり、救援求む！」

参謀は驚きを通り越して睡然とした。

一体どんな特殊能力の持ち主なんだ、あのじいさんは。

戦場の経験がある人は常人とは違う何かを持っているのか……？

「他の先遣隊をすぐにその場所へ向かわせるんじゃ。わしらも行くぞ。参謀、全部隊に進軍命令！」

参謀は我にかえつて命令を出すため走り出した。

それから5時間後、日没まであと少しとなつた頃に日本軍部隊とオーストラリア軍部隊の戦闘が始まった。

もはやあたりは薄暗く、豊富に配備された砲兵隊が使えないためそのまま白兵戦に突入する。

しばらくして日は完全に沈み辺りは真っ暗になつてしまつた。

日本軍は照明弾を打ち上げるが性能が良くないため大した効果はない。

そこで梅沢中将は砲兵隊に対し戦闘しているところより奥のジャングルへ砲撃するよう命じた。

砲兵隊や参謀らはそれに何の意味があるのか分からなかつたが、とりあえず命令であるため砲撃を開始する。

夜空に砲弾が舞う。

その砲弾は敵を碎くことはなく、ただジャングルの木々をなぎ倒す。

そのうち木が燃え始め夜空を明るく照らした。

異変が起きたのはそのときだつた。

次々に敵部隊が退却しあじめたのだ。

自らの背後でジャングルが燃えているのは日本軍が退路を絶つためにやつしていることだと思ったのである。

これにより敵部隊は一気に士気が下がって我先に逃げ始めた。

梅沢中将はこの報告を聞くと部隊に兵をまとめて引き揚げるよう命令した。

参謀らは追撃を主張したが彼はそれを聞かない。

今ここで追撃しても味方の損害が増えるだけだ、こんな暗闇で敵味方が区別できない、同士討ちが起こるに決まっている。

というのが彼の言い分であった。

結局その通りになった。

日本軍が追撃を中止しても銃声が鳴り止むことはなく、あちこちで銃撃戦が起きているようである。

朝まで続いたその銃撃戦でたくさんの兵が命を落とした。

朝になつて部隊を整頓してみると日本軍も4000人の兵士が戦死、または行方不明になつていた。

他にも負傷兵が5000人弱おり、いかに戦闘が激しかつたのかを物語つている。

オーストラリア側の損害は不明だがそれなりに打撃を与えているはずだ。

今回ばかりのくらいの敵がいるかも分からずに戦闘に突入してしまつたのである。

これはかなりの大問題だが梅沢はせいぜい5万くらいだらうと思つていた。

事実戦後調べてみるとその通りであつたのだから驚く。

ただこれは「匂い」ではなくオーストラリア軍の総兵力から想像してのものだそうだが。

一方陸での戦いが一段落したあと、海でも大きな戦いが起こる。

まず敵が見つかったのは7月6日の午後。

敵艦隊出現に備えて本隊から分派され、ビスマルク海まで警戒に出ていた護衛駆逐艦「檜」が最初に発見した。

「敵艦見ゆ、ラバウルの西南西約400キロ一兵力は戦艦2隻を含む30隻余り、ラバウルに向かつている模様。繰り返す、敵艦……」

本来こんなに遠くまで来る予定はなかつた。

しかし敵艦隊は必ず出てくると思っていた「檜」艦長が少しでも早く見つけたほうが味方のためになるとかなり遠くまで哨戒に出ていたのである。

この報告を打つた後も詳細な敵艦の報告を続け、そして「檜」は撃沈された。

当然である。

旧式で速力も低下している護衛駆逐艦が逃げ切れるはずもない。しかし艦長以下決して降伏せず敵艦に向かつて突撃したといふ。集中砲火を浴びて爆沈した同艦の生存者はいなかつた。

日本艦隊はその仇を討たんと艦隊を集結させ全速力で向かつ。

敵艦隊と出会つたのは翌日の朝、ここに第1次世界大戦太平洋戦線最後の艦隊決戦が始まった。

（注）ここでの護衛駆逐艦「檜」は史実の第1次大戦時実際にいた駆逐艦「檜」とは別物です。史実の「檜」は「桃」型駆逐艦3番艦で1917年舞鶴海軍工廠で完成、地中海遠征にも参加しています。こつちの「檜」は史実の初代「神風」型（1904年建造開始）あたりを少し大型化したものを、改造して改名したという感じでお願いします。ちょっと小さいので外洋航行には難がありますが……。

第41話 ラバウル上陸戦（後書き）

当たり前ですが史実の梅沢中将に敵の攻撃を察知する特殊能力がありませんわけではありません。筆者が勝手につけました。「いくさの匂い」が分かるというのはあつたらしいですけど…。

今回の名言

「警戒は『盾』であつて、致命的な武器ではない。しかし、攻撃機能を備えていない警戒は自殺の時期を遅らせるだけだ」

フラー

あと自分も今日から試験週間にに入ります。今度こそ勉強を頑張ろううと思います。ただ更新は備蓄があるのでそれでやつていこうとは思いますが途絶えたら申し訳ないです。2週間後には完全に終わりますのでそれまでしばらくお待ちください。

第42話 ピスマルク海海戦

1915年7月4日朝、海戦の火蓋は切られた。

午前7時過ぎ、敵艦隊は日本側の特設水上機母艦「樺原丸」「福原丸」「高原丸」の3隻が搭載する計18機の水上機の索敵網に引っかかった。

「『樺原丸』偵察3号機より報告。我敵艦隊発見せり、艦隊の南西約120キロ。戦力は戦艦2、装甲巡洋艦4、二等巡洋艦3、駆逐艦24。針路は北東、我が艦隊へ向かっている模様」

偵察機からの報告が入ると日本艦隊は速力をあげて敵艦隊へと急ぐ。敵艦隊も真っ直ぐこちらへ向かっている。

距離はぐんぐん縮まり1時間半後には水平線の向こうに敵艦隊を捉えた。

「敵艦隊視認、距離3万1000メートル！」

「『樺原丸』水偵より報告、敵水雷戦隊展開を開始。我が艦隊を包囲しようとしているようです」

敵艦隊はどうやら水雷戦隊で日本艦隊を挟み、両翼からの雷撃で撃滅しようとの魂胆のようだ。

艦隊司令大村中将は味方艦隊の不利を感じた。個々の艦艇の性能では明らかに日本艦隊が有利だが艦艇の数を見れば不利は避けられない。

戦艦2対2、装甲巡洋艦0対4、一等巡洋艦2対3、駆逐艦16対24。

戦艦はあまりにも性能が違うし数も同じだから問題にはならないが、装甲巡洋艦以下の艦艇では日本艦隊が劣勢だ。

開戦以来初めて日本艦隊が敵より少ない兵力で敵にぶつかる。

もちろん戦艦の砲撃力は絶対だし、その堅固な防御力は敵の砲弾を跳ね返すだろう。

しかし全てが全てではない。

装甲は全面に張つてあるわけではないし、魚雷を喰らうればそのうち沈む。

しかし逃げるつもりなど毛頭ない。

ラバウルには輸送船団と5万近い陸軍兵達があり、彼らを何がつても守りとおしてみせないといけないのだ。

それに撤退など大日本帝国海軍の誇りがそれを許さない。

圧倒的に不利というならまだしも今回は少し船の数が少ないというだけだ。

この程度でいちいち逃げ帰つていたのでは世界の笑いものになるだけである。

「『美々津』より信号、水雷戦隊突入許可を求む！」

血氣盛んな奴らだ。

中将は苦笑しながらも他に手はなくそれを許可する。

しばらくして駆逐艦達はそれぞれ一等巡洋艦の後について離れて行つた。

両翼に展開した敵水雷戦隊へそれぞれ日本側も1個水雷戦隊ずつ向かう。

「よし、戦艦部隊もやるや。距離2万5000から砲撃を開始する。前部主砲射撃用意！」

中将がそう言つとすぐさま伝声管から力強い声が返ってきた。

「前部主砲塔射撃用意はすでに出来ています。射撃命令を待ちます」

こいつらもやる気十分だな、頼もしい限りだ。
彼はそう思い不安な気持ちが少しくなった気がした。
そうだ、俺が弱気になつてどうするんだ。
彼は気合を入れなおし敵艦隊に向き直つた。

「射撃開始まであと2000…、1500…、1000…、500…、0…！」

「撃てえ！」

艦長の声とほぼ同時に「安芸」主砲が火を噴いた。
しばらくして後ろを進む「石見」もこれに続く。

「砲弾着弾！ 敵艦前方に落ちました」

見張り員から報告が入る。

その報告に少し落胆したがすぐに気を取り直す。

まあ初弾は距離を測つたりして照準を修正する「試し」であるため
あたるわけはほとんどなく、いちいち落胆しても仕方はないが少し
期待してしまつたのである。

「初弾からあたるわけないか……。よし次発装填急げ！」

彼は艦橋から下の砲塔を見る。

砲が少し旋回し、その後上下に砲門が動く。

「1番主砲、射撃用意良し」

「2番主砲、射撃用意良し」

力強い報告が入る。

「撃てえ！」

再び砲が吠える。

これがこの後ずっと繰り返される。

もちろんこれだけではない。

時間が経つにつれて敵の砲弾が届き始める。被害報告も出始めた。

「左舷高角砲指揮所被弾、指揮不能！」

「敵先頭艦に砲撃命中！敵艦炎上！」

「一等巡洋艦『美々津』、被雷した模様！左舷に傾斜して炎上中」

次から次へと報告が入る。

艦長もめまぐるしく動く事態に対応していく。

「衛生兵は負傷者の収容急げ！応急班、左舷中央部の火災の消火はまだか？はやく消し止める。砲術長、今のは良かつた。その調子で頼むぞ！」

「艦長！砲術長より意見具申、後部主砲射撃許可を求む。目標は左舷前方の敵水雷戦隊！」

従兵が叫ぶ。

「許可する。面舵一杯、後部主砲射撃用意！目標は前方敵水雷戦隊先頭艦、射撃時期は砲術長に任せる！」

艦長も怒鳴り返す。

「一等巡洋艦『美々津』沈没！」

中将や艦長らが一斉にそつちの方角を見る。すると「美々津」は艦首を持ち上げ艦尾から沈んでいくといひだつた。

「後部主砲射撃用意急げ！『美々津』の敵討ちだ！」

中将が沈み行く艦を見ながら言つ。しばらくして後部主砲が咆哮した。

「敵先頭艦に命中！爆沈！」

艦橋で歓声が上がる。

命中したのは敵水雷戦隊旗艦だろう。

せいぜい一等巡洋艦、35・6センチ砲弾に耐えるはずがない。にしてもこれは後部主砲からすれば初弾、よく当たつたものである。

「味方水雷戦隊、魚雷発射！」

浮き足だつたのを見て取つた水雷戦隊はこじぞと雷撃、その魚雷はさらに数隻の敵艦を撃沈しそうかり士気の下がつた敵部隊は撤退を開始した。

旗艦の「美々津」をやられていたためなかなか統一的な雷撃は難しかつただろうが、2番艦の艦長が上手く指揮をしたようだ。

しかし未だに敵の本隊は踏みとどまつていて、旗艦は炎上していくすでに沈黙しているが2番艦はまだ健在のようだ。

一方装甲巡洋艦は4隻中2隻は海底に逝つた。これは「石見」は戦艦ではなく装甲巡洋艦を狙つていたため、その砲撃を喰らつた敵艦は当たり所次第では一発で沈んだ。

「右舷前方の敵水雷戦隊、変針。戦線離脱を図る模様です！」

さきほどとは逆側で戦つていた敵水雷戦隊は日本側の見事な雷撃により旗艦以下5隻を失つており、もう一方の水雷戦隊が逃げ出したことで戦意を完全に喪失、敗走を開始した。

「味方水雷戦隊へ信号！追撃はせず、敵本隊へ雷撃を敢行せよ」

大村中将は今こそ敵を殲滅するときだと思った。
大型艦を1隻でも討ち漏らすと後がややこしくなる。
それにもうこいつやって外洋で撃ちあうこともなくなるだろ？
今を除いて沈める機会はない。

「艦長！我々も敵艦へ向け突撃だ。だいぶ距離は近づいているが至近距離でとどめをとしてやる！」

「安芸」はにわかに速力を上げ敵艦へと向かう。

もはや距離は1万5000程度。

かなりの至近距離で敵の砲弾も味方の砲弾もお互いに良くあたっている。

近づけば被害も受けるが敵は満身創痍、それに士氣もすっかり落ちているはず。

とにかく逃がさないことが大切だと彼は判断したのだ。

それからじばらぐ後のこと、「石見」の放った砲弾が敵装甲巡洋艦の1隻に命中、爆沈させる。

これで完璧に戦意を打ち砕かれたオーストラリア艦隊は戦線離脱を試みる。

しかし速力が圧倒的に違つため逃れることは出来ない。

そうしたら取れる行動は一つしかなかつた。

「敵艦マストに白旗を確認!…さうに敵艦から信号、我降伏す、砲撃を中止されたし」

見張り兵が少しうれしそうな声で報告した。

「よし、撃ち方やめ。敵艦に信号、戦闘配備を解き艦を停止せよ。全員まだ氣を抜くなよ、最後まで何があるか分からんからな。艦長、敵艦を受け取りに行くから護衛の兵を何人か出してくれるか?」

大村中将は自ら敵艦へ乗り込み、降伏に関する手続きを行つた。

手続きは順調に行われ目立つた混乱もなく、降伏した3隻（旧式戦艦2、装甲巡洋艦1）のうちすでに浮かぶ廃墟となつていた「クインズランド」（旧「ヴァージニア」）は雷撃により処分されることになる。

その際には各艦の甲板に水兵達が整列、艦が沈没するまで見送つた。そしてその際、大村中将の命令でオーストラリア国歌が演奏される。

軍樂隊は正直ほとんど吹いたこともない曲で焦つたがなんとか演奏、沈み逝く「クインズランド」を送った。残りの2隻は午後に到着した護衛駆逐艦4隻に付き添われてひとまずトラック諸島へと向かつた。

結局この海戦では日本軍は一等巡洋艦1隻と駆逐艦3隻を撃沈されたが、代わりに敵艦隊の大型艦を全滅させることに成功。日本艦隊から逃げ延びた艦艇も潜水艦に襲われ一等巡洋艦を全て撃沈され駆逐艦もさらに4隻を失った。

結局この戦いは日本側の大勝利で幕が下りる。

この戦いを日本はビスマルク海海戦、オーストラリアはニューブリテン沖の悲劇と呼ぶ。

第42話 ピスマルク海海戦（後書き）

恐らく初めて1話で3000文字を超えるました。少し詳細な戦闘描写を頑張ろうと思いましたがなかなか難しいです。これからしっかりと頑張りたいと思います。

今回の名言

「どんな状況であつても、揺るぎない一人の権威が公共のために必要である。一瞬の協議が好機を逃し、小さな失敗が血の償いを求めるることは常識である」

－ルイ14世

それとカルカッタ沖海戦のところで旗艦の名前が「白根」になつたり「箱根」になつたりしてましたが正しいのは「白根」です。失礼しました。

第43話 講和へ向けて

太平洋・インド洋での大勝利の後、トラック島を1隻の潜水艦が出港した。

その潜水艦とは「呂一5」、ついこないだまで練習艦任務についていた艦だが今回の特別任務に駆り出されたのである。

その特別任務とはある人物を送り届けること。
極秘の任務であるため通常艦艇は使えなかつた。

今回の出撃も遠洋航海演習といつ名目である。

「呂一5」は10月1日の夜明け前にトラックを離れた。
送り届けられる人物は艦橋で朝日を眺めている。

「艦長、いい朝日ですね。この辺りでいつもこうなんですかね?長安の山の中で見ると比べれば格別です」

その人物、佐上准一はのんびりと言つた。

彼は天皇補佐官という肩書きである。

忘れた方のために言つておくと第3話で登場したアシスタントの1匹、ジョンだ。

「ええ。いいもんですよ。戦争中じやなけばいつまでも眺めておきたいもんですな」

来島総一郎艦長ものんびりと言つた。

これから危険な任務に出るとこつのに、それに対する危機感や緊張

は全く感じられない。

「もつ何十年も海の上で過じて來たのだ。

潜水艦との付き合にも長いし、潜航中に事故を起こして沈没寸前の潜水艦を操って港まで帰港させた経験があるらしい、他にもいくつかの修羅場もぐぐりぬけてきたようである。

今更何を恐れることがあるか、彼からすればやうにうつものだひつ。

「分かっています。必ず私が終わらせてみせますよ。そのためにも私をちゃんと目的地まで送つてください」

来島艦長はびんと胸を昂いて、

「任せとこいださー。ちょっと艦も私も田くはありますがまだまだ現役、もし敵さんがやつて来れば沈めてみせますわ

」そう言つて笑う。

ジョンも微笑を浮かべ、

「あなたとはもつ長い付き合いです。信頼しますからね

」そう言つて艦の中へ入る。

艦長もそれに続き、その後艦は海の中へと潜つていった。

「田 - 5」が田描しているのは「ニュージーランド首都、オークラン

ド。

オーストラリアの同盟国だが対日参戦はしていない。

第一次大戦にも参加せず、中立を保つてゐる数少ない国の一つである。

元首同士の仲がいいためでもある。

俺と栗山（ニュージーランド国家元首）は幼稚園の頃からの付き合いだ。

お互い戦火を交えるつもりは全くない。

今回ジョンがニュージーランドに向かつている理由は、ニュージーランドにオーストラリア等との講和の斡旋を頼むためだ。講和を結ぶ際に斡旋してくれる国の中には必要不可欠である。もちろん完璧に敵を滅ぼしてしまえば必要はない。

しかしそんなことは到底無理だ。

必ずどこかで線を引き講和を結ばなくてならない。

本来ならアメリカなど大国に講和を斡旋してもらう方がいい。そのほうが相手も講和に応じる可能性が高くなる。

しかし今は世界大戦の真っ只中。

どこの国も自国のこと忙しい。

よその戦争に口出しできるほど余裕はないものだ。

そこで中立を保つてゐるニュージーランドに頼むのである。幸いニュージーランドとオーストラリアの関係はかなり良好。民間レベルでの交流も活発だし経済的な関係も緊密だ。もちろんそれだけではオーストラリア寄りの講和をしてしまうことになりかねないが、そこは前に述べたとおり俺とは幼馴染、お互いの気持ちは大体分かり合えている。

俺は栗山が上手くやつてくれるものと信じてゐる。

そしてニュージーランドに講和の斡旋を行う使者としてジョンを選んだ。

本来なら正式な外務省の人物を派遣しないといけないが、オーストラリア政府に知られるわけにはいかないので俺の身内のよつたものである彼を送ることにした。

もちろん彼を大きな危険にさらすことになるが背は腹には変えられない。

信用できる人物でないとこの大役は任せることとはできないのだ。

このことを知っているのはほんの一握りの人間だけで防諜には最大級の警戒を払っている。

もし漏れたら講和を快く思わないようであるオーストラリア軍部は残存艦艇全てを投入しても「呂一五」を沈めようとするだろう。ここでジョンを失うわけにはいかないし、戦争を終わらせるためには是が非でも成功させなければならない。

もつとも、ならば無電でも打つて伝えればいいという案も出た。しかしどうやら日本側の暗号は若干解読されている節があるというスパイ報告もあり、信頼できないことから却下されている。下手にオーストラリア政府を警戒させると講和がしにくくなるのだ。慎重に慎重を重ねて進めていかなければならない。

そのため今回の派遣前にもわざわざ潜水艦を1隻送り、ジョンを行かせるということを伝えさせている。

そうそう、どうでもいいことだがジョンと来島艦長が仲がいいのは彼らは同郷という設定になつていてかららしい。

ただ来島艦長はもう50歳近いがジョンは未だに20代。

これはアシスタント及びプレーヤーは歳を取らない設定になつているためだ。

もちろん周囲がそれに違和感を持つことがないようになつていてるらしい。

「呂一五」はトラックを出港してから約1ヶ月半後、「呂一五」は無事オークランドの軍港へ入港することが出来た。

7000キロを超える大航海である。

途中暴風雨に巻き込まれたり、ニューカレドニア島沖では敵哨戒艇に発見され袋叩きにあつたりしたが艦長の巧みな操艦や、備品を魚雷発射管から出したりして艦が沈没したと見せかける機転などに助けられ無事に着いた。

ジョンは到着の翌日、早速講和斡旋のお願いのため宮殿へ向かい女王栗山との謁見に望んだ。

これは見事成功し、栗山は講和への協力を約束してくれた。これに伴いジョンはニュージーランドに残り、講和に関する助言や日本側からの要望などを伝える窓口的な役割を果たしてもらうことになる。

彼のここでの活躍はその後に大きな影響を与えることになる。

第43話 講和へ向けて（後書き）

テストが始まりました。が、今日も昨日もプロ野球に見入ってしまつて…、結果は結構ヤバイです。今回の絶対国防圏は60点としますが、今日だけでもサイパンが大空襲を受け航空基地がやられた、という感じです…。

今回の名言

「戦争において何が重要か把握しているのは、指揮官のみである。二人の良将より、一人の凡将のほうがましである」
——ナポレオン

1915年10月25日、日本海軍は対インドネシア戦で最後になるであろう作戦を発令した。

作戦名は「終号作戦」、文字通りインドネシアを降伏させることが目的だ。

参加艦艇は第1・2艦隊から選抜され、「美作」型戦艦4隻をはじめ装甲巡洋艦4、二等巡洋艦2、駆逐艦24。

他にも第3艦隊が全兵力を上げて参加、第5艦隊からも潜水艦が10隻ほど参加している。

第4艦隊は旧式戦艦4、旧式装甲巡洋艦4など船団護衛に従事しているものを除き動ける艦艇をみな連れてきた。

このような大兵力を連れてやる」ととは……、インドネシア首都ジャカルタの占領である。

インドネシアには今まで何度も降伏を勧告してきた。

しかしインドネシア政府、といつより元首である前田は全く応じようとはしない。

未だにインドやオーストラリアが助けてくれると信じているのだ。

そんなことは無理なのは誰もが承知している。

素人でも普通に分かりそなものが前田は少なくともそつは思っていない。

もちろん根拠などありはしない。

ただそう思い込んでいるだけである。

インドネシア政府・民衆・軍部のほとんど誰もが降伏を望んでいる。

たまたまこないだはスマトラで日本軍を撃退したが、次はそうはいかないことは分かつていて。

島国インドネシアを守るべきインドネシア海軍はもはや存在しない。このジャカルタだって連日日本の飛行機が上空を我が物顔で飛んでいる。

その飛行機を撃ち落すことさえできないのだ。

そして、今回の作戦は今までの日本軍の戦い方とは大きく異なる面がある。

今まで市街地に対する攻撃は最小限に抑えていたが、それを今回はなくしジャカルタ市街への砲撃も許可されているのだ。こうでもしないとインドネシアは降伏しない、そういう危機感が出ているのである。

もちろん下手すれば逆に戦争が長引く可能性もあるがこれくらい猛烈なパンチを与えないと前田は折れないだろう。

市街地・軍用地を問わず焦土としてから陸軍部隊を揚陸、ジャカルタを攻略する……。

俺もしたくはないがダラダラと戦争を長引かせてこれ以上日本兵を殺すわけにはいかない。

日本兵10万を助けるなら敵国の兵、いや民間人であっても100万人殺したつていい、そんな平時でが考えられないことが今ではかなりの重みを持つてのしかかる。

それが戦争。

どんなに立派なことを言つても、戦争に大義もクソもない。あるのは破壊と殺戮だけだ。

10月4日、日本艦隊はジャカルタ沖合いに到着した。

ここに第3艦隊の空母2隻から艦載機40機が出撃する。

行き先はジャカルタ市街。

ただしこの40機は爆弾を搭載していない。
この40機が搭載しているのはビラである。

このビラはまさに犯行予告ともいいうもので、3日後に徹底的な砲爆撃を加えるから早く脱出せよというものだった。

ビラを撒いたのはさすがに突然市街地を攻撃して民間人を殺傷するのはどうかという意見が大勢を占めたからである。

ただこうして民間人に対する配慮が行われるのはこの戦争が最後になるだろう。

次からは戦略爆撃機が敵地上空を舞い、無差別に市民を虐殺するようになるのだから。

翌日、偵察機からの報告によると多くの市民が攻撃を恐れてジャカルタを離れようとしていた返しているといふことだった。

軍部も、もはやそれを止めようとせず、むしろ手伝った。

彼らには日本軍の攻撃を止める力はないのである。

国民を守るという本来の存在意義からすれば、今は一人でも多くの市民を逃がすことが彼らの任務なのだ。

そしてその次の日、ジャカルタ市内で最後となる御前会議が開かれていた。

政府も軍部も、降伏やむなし、これ以上犠牲を出すのは忍びないという意見で一致している。

しかし、一部の青年将校と女王前田のみが徹底抗戦を主張して譲らない。

国土全てを焦土にしても日本軍と戦い続ける過激な青年将校達は、降伏を勧めようとする軍上層部や政府官僚を國賊と糾弾、一步も引こうとはしなかった。

陸・海軍首脳や政府高官はその日の午後、首相官邸に集まりとうとう

うその日が来た、とかねてから計画していたことを実行に移すことを決意する。

その日の夜、その計画は実行に移された。

海岸線防備に当たっていたインドネシア陸軍第21師団及び第22師団はその夜ひそかに移動を開始、1時間後には宮殿を完全に包囲する。

さらに内陸防備に当たっていた第11・13師団も首都市街地へ入り、そのうち1個連隊が降伏反対派の青年将校らが宿舎としている建物を取り囲む。

そして日付の変わった午前0時、首都に銃声が響き渡った。

クーデターの始まりである。

これはかなり前から計画されていたことで、各師団の師団長らもすでに了解していたため、全く混乱もなく各部隊は配置につき一斉に行動を開始した。

まず宮殿を取り囲んでいた部隊は女王を逃がさないように完全に包囲してから、精銳1個大隊が実際に突入する。

ここでは全く銃撃戦は起こらなかつた。

女王の親衛隊もすでにクーデター計画に賛成しており、外の部隊が行動を開始したのにあわせて女王を拘束、部隊に引き渡したのである。

一方、青年将校宿舎を襲撃した部隊は青年将校らの抵抗により銃撃戦となり、5名を射殺し8名を拘束した。

また、投降を嫌つて4名が自決しており、逃亡した数名も市内で他の部隊に発見され射殺されている。

これにより反対派はほぼ消滅、一夜にして政権を奪取することに成功した。

その後暫定政府により市内には戒厳令が出され、厳重な警備体制が敷かれた。

万が一これに対する反乱等が起ころのを恐れたのである。しかし市民はほとんど脱出した後で残っている人数は少なく、第一何が起こったのか理解できていなかつた。

一方そんなことは知らない日本艦隊は早朝に第1次攻撃隊80機（水上機との混成）を出して爆撃を開始しようとしていた。攻撃隊は午前5時に出撃し、その20分後にはジャカルタ上空へ到達、爆撃航程に入る。

それを見てあせつたのはクーデターで政権を奪つた暫定政府である。まさかこんなに朝早くから来るとは思つておらず、降伏文章の起草を行つっていたところで彼らはもはや手続きにこだわつてゐるときではないと首相官邸の屋上に白いテーブルクロスを広げて降伏する意思を示した。

しかし攻撃隊は氣付かず第1派は攻撃を開始、市街地に爆撃を開始してしまう。

まず第1波の先陣20機がジャカルタ中心部に爆弾を投下、複数の建物が倒壊しその地区の警備に当たつていた兵士数十名が瓦礫の下敷きとなつてしまつた。

さらに港湾施設（といつてももはやほとんど残つてないが）にも爆撃を行い火災が発生する。

爆撃成功、攻撃隊長はそう確信し上空を旋回する。

彼が異変に気付いたのはそのときだつた。

官庁街の上空を飛んだとき、何かの建物の上で白い布のよつなものを広げて一生懸命こちらに何か叫んでいる人影が目に入つたのだ。彼は咄嗟に何か判断できず、旋回してもう一度その建物に近づく。そして彼はその意味を理解する、白旗を掲げている……つまり降伏したのだと。

しばらく彼はよつやく終わったと胸をなでおろし、今まで長かったなあと感慨に浸つた。

シンガポール奇襲、マレー作戦、カルカッタ沖海戦……。

様々なシーンが彼の脳裏をよぎる。しかしまだインドやオーストラリアが残つてゐる、もう一踏ん張りしないとなと彼が思ったそのとき、彼はなぜ自分がここにいるのかを思い出し狼狽した。

「全攻撃隊に告げーすぐさま攻撃を中止せよー繰り返す、攻撃中止ーー！」

第44話 三振（後書き）

余裕、余裕と油断していたら日本史のテストがまさかの壊滅…。さすがに半分は切らないとはおもいますが大打撃を受けた模様です。平安時代のところはやつぱりきつかったです…。

そして先日上げた前話ですけど8月1日から10月1日へ日にちを変えました。あらすじの方に書いていたのも1917年になつてたので1915年に訂正しました。これは今後の話と辻褄が合わなくなるので直しました。「ご」承ください。そんなに大きな変化ではないですが…。

今回の名言

「会戦計画を貴官にゆだねるのではない。その実行を任せるのでいかに実行するかは貴官のまったく自由だ」

—ユリシーズ・S・グラント（南北戦争時の北軍大将で後大統領）

第45話 インドネシア降伏

攻撃隊が攻撃を中止した後、艦隊司令の大村大将は果たして敵が本当に降伏したのかどうか怪しんでいた。

隊長は敵が白旗を掲げているのを見たというがそれもちゃんとした旗ではなくただの白い布のようなものであつたといつし、市街地には多数のインドネシア兵がいたという。

今から降伏しようとする国が兵を集結させるか？
いや、そんなことはあるまい。

事実インドネシア政府からは何の通告もない。

国際法上未だインドネシアと日本は交戦状態にあるのだ。
攻撃を再開するべきか、それとも攻撃を中止するか……、彼は悩んでいた。

しかし本当に降伏する気なら下手に突付いて気が変わつても困る。
特に女王が国家権力を握る国なのだ。
彼女の気まぐれで事態はどうちらにでも転がる。

結局彼がとつた選択は待機。

もつとも無難なものを取つたわけだ。

これならどちらに転げても問題はない。

敵が何かたくらんでいるとしても戦局全体に大きな影響を与えるようなものではないだろう。
もはやそれだけの力はインドネシアに残されていないのだ。

ただし艦載機部隊を出して偵察は行う。

一体ジャカルタでは何が起こっているのか、それを掴まないと何も

始まらない。

そして偵察に出た機から報告が入る。

「敵大部隊市街地に集結せり。完全武装している模様なれど対空砲火は皆無」

「宮殿付近にかなりの兵力が集結している模様」

「海岸付近に敵兵力確認できず」

次々と入ってくる報告。

しかし降伏に結びつくような報告はない。

やはり敵部隊が集結しているのは上陸させて迎え撃つためではないか。

海岸線に兵力がいないのは上陸させて十分ひきつけてから攻撃するためだろづ。

そんなことを大村大将が思つてゐるうちに事態がよつやく動いた。

「「ひちり」『渥美』15番機。インドネシア首相官邸の掲揚台に白旗を確認。降伏せるものと認む」

その報告を聞き、「美作」艦橋では安堵のため息が漏れた。

これで少しは戦争が楽になる。

皆そう思つたのだろう。

「インドネシア政府より通信！我日本国に対し降伏す、攻撃を中止されたし。全て平文です。これが繰り返されています」

通信兵からの報告で全てが確認された。

大村大将は胸をなでおろし、

「分かった。ではすぐに統合作戦本部に対しそのことを伝えてくれ。それと我々の攻撃中止許可もな」

と言つてジャカルタの方を見た。

戦いの名残のような煙があちこちから立ち昇つていた。

一方その頃統合作戦本部では緊急の会議が召集されてこれから対策について協議が行われていた。

突然の降伏に皆驚いたがすぐに頭を切り替えて議論を始める。

「陸軍部隊を各島々に配備して治安維持に当たらせてる」ことは必要です。万が一反乱がおきたときに対処できません」

「これ以上陸軍部隊は割けん。まだインドやオーストラリアが残つているんだぞ。治安維持なら武装警官隊でも送ればいいだろ?」

「武装警官隊? そんなにたくさんは送れませんよ、数が少ないんですから。第一我々はあなた方と違い戦闘訓練など受けてはいません。警官はあくまで犯罪の取り締まりが仕事ですし」

講和文書の調印についてや手続きについての話はさつと終わり今論議されているのはインドネシアの統治について。

軍事占領ということで部隊を送つて完全に支配下に入れてしまおうという政府に対し、これ以上兵力をインドネシアに送りたくない陸軍は猛反発。

ただでさえレンガット会戦で大打撃を受けている上、インド方面は

これからもつと増派しないといけないのだ。

治安警備なんてやつている暇はないと言つのが彼らの言い分である。

それはもつともな意見で、そこで俺は旧フィリピンや旧カンボジアの陸軍部隊を送つたり後備兵でこまかしたりしてとりあえず現役兵部隊は前線に出られるようにした。

さて、そんな細かいことはいい。

まあとにかくインドネシアが降伏、肩の荷が少し下りたということである。

まだ重たいのが一つ残つてはいるが。

それから1週間後、インドネシア政府と日本政府の間で降伏文書調印式が行われ、正式にインドネシアは日本に対し降伏した。インドネシア陸軍の武装解除も抵抗なく進んでおり、あと少しで完了する見込みだという。

ただしインドネシア海軍艦艇についてはインドへ脱出した後なのでインド海軍に接收されてしまった。

もつとも、カルカッタ沖海戦でほぼ壊滅し駆逐艦や潜水艦が少し残つてはいるだけだが。

まあそんなに気にすることもあるまい。

そしてその後国防省ではインドとオーストラリアどちらを先に攻略するかを決める会議が行われた。

会議は紛糾し、5日間も続いたためいちいち書いているとキリがないので割愛するが、最終的にはインドが選択された。

理由は日本に近く、兵站上の負担が軽いからということとインドを放つておけば日本国内になんらかの攻撃を行つてくる可能性がある

からといふことである。

さらに新型爆撃機の開発で本土からインド北部が爆撃可能となつたり、インドネシアの降伏により海路からのインド攻略が可能となつたことも大きかった。

今まで陸軍は東洋一と目されるインド軍のインパール要塞攻略を避け、にらみ合つだけで全くインドには侵攻しようとなかつた。無視して迂回しようにもパトカイ山脈・アラカン山脈に阻まれる。海岸線沿いという選択肢もあるが道路が整備されておらず大部隊の行動に適さないのだ。

インパールはこの世界のインドがミャンマーとの交通の要地と位置づけており、しつかりとした道路も整備されている。だから占領したかったのだが、犠牲を恐れて手出ししてこなかつたのである。

ところがインドネシア降伏により艦隊をインド洋まで入れることが出来るようになった。

これによりインパールを迂回して兵員をインド本土へ送り込むことが出来るのだ。

兵站上でも泰緬鉄道が突貫工事プラス人海戦術であと2・3ヶ月もすれば完成ということで、ラングーンまで鉄道で物資を運べることとなり、輸送船はマレー半島を迂回したりする必要もなくなつた。

その他いろいろあつてインドに落ち着いた。

そして新型爆撃機配備が急いで行われ、慣熟訓練もそこそこに印度の空を舞うことになる。

第45話 インドネシア降伏（後書き）

さきほど、累計アクセス数が10万を突破いたしました！多くの方に読んでいただき本当にうれしいです。まだまだ稚拙な文章で、内容も至らぬところが多いですがこれからもよろしくお願ひします。気になつた点がありましたら遠慮なくご指摘ください。

今回の名言

「指揮官は成功で得意満面のとき、警戒を手抜きして栄光の果実を失う」
フレデリック大王

1915年12月2日午前、西藏西南にあるガルヤルサと言ひどいところにある飛行場では整備兵達が慌ただしく動き回っていた。そこには新型爆撃機「呑龍」21型100機以上が駐機しており、出撃用意を整えている。

他にも万が一の敵戦闘機出現に備え、戦闘機50機余りがいつでも出撃できる状態で待機していた。

まあ、敵機がわざわざこんな片田舎まで出てくる可能性は限りなくゼロに近いし、どうせ航続距離が足らないのだが、念のためである。

ヒマラヤ山脈の麓ののどかな田舎町には似つかない光景である。もともとここに住む人々は農業をやつたり山羊を飼つたりしながらのんびりと暮らしていた。

日本国内で進む近代化などどこ吹く風といった感じで昔ながらの暮らしが続いているのである。

豊かではないが、そこには古き良き時代の生活があった。

しかし、第1次世界大戦はそんな片田舎にも影響を与えていたのである。

インドに近いという理由で航空基地が造られ、農地はそれに伴つて一部接收されるなど農民達の暮らしに打撃を与えていた。

もちろんそれに対する補償は行われたが問題は金ではあるまい。彼らの平穏な暮らしはもはや崩壊してしまっていたのだ。

戦争で被害を受けるのは彼らのような一般の人々ばかりである。

さて、感傷に浸っている場合ではない。

上記のようなことは何もここだけで起きている問題ではなく、世界各地でいくらでも行われていることだ。
だからといってそれを賛美するわけではないが今は戦争中、我慢してもらうしかあるまい。

今回爆撃機がこの田舎に集結しているのはインドの首都、デリーに対する爆撃を行うためである。

参加兵力は「呑龍」108機、ようするに3個航空戦隊。
他に戦闘機が50機ほどいるが、航続距離が足らないので彼らはヒマラヤ山脈辺りまでついていてその後引き返すことになっている。
裸の爆撃隊を出すのは気が引けるが、インド戦線に刺激を与えるためこの作戦は決行された。

そして同じ日の午後、デリーに突如警報が響き渡った。

「敵機、デリー方面へ飛行中！その数100以上、市民は至急退避せよ。繰り返す、敵機接近中！市民は急ぎ避難せよ！」

市民は大混乱に陥った。

まさか首都に敵の飛行機が入ってくるなんて思いもしなかつたからだ。

大体どこの国でも首都は最後の砦である、だから最も安全なものだと思うものである。

もつとも、大して関係のない場合は多いが……。

一方航空隊の方は……。

「これから第3分隊、異常なし。これより予定通り目標に向かう

「 」から第4分隊、我が分隊も第3分隊に続く

「許可の電信を打つてやれ。それと早く行つて帰つて来いと付け加えといてくれ。敵機が上がつてくるかもしけんからな」

航空隊指揮官小林三郎中佐は第1分隊分隊長機の中にいた。周りの機から入る電報に答えつつ、常に窓から外を見ている。

外を見ると航空基地攻撃の任務を受けている第3・4分隊が離れていった。

しかし、そういう間も敵機がいつ現れるか分からぬ。監視の目は一つでも多いほうがよく、中佐も常に外を警戒しているのだ。

もしこの機が敵機に襲われればひとたまりもない。

足は遅いし、動きも鈍く、さらに防御火器も1つの機に2挺程度機関銃がついているくらいのもの。

機体自体も大して強固なわけではない。

敵地上空で護衛戦闘機もいない中この爆撃が成功するか、中佐も不安だった。

そのためとにかく早く爆弾倉を空にして帰るつもりだ。

「目標まであと少しです。目標上空に敵戦闘機確認できず。これより爆撃航程を開始します」

機長が操縦席から振り返つて言つ。

目標のカルカッタ近郊の工場地帯はすぐそこにある。

その工場はほとんどが軍事関連のものばかりと諜報員からの報告が事前にあつたらしい。

あそこを叩けばしばらくインドの軍事生産に打撃をうつれるだろつ。

「ちやんと狙うんだぞ。都市に爆弾落としてみる、俺たちが殺されるや」

そう言つ中佐に機長は、

「間違いないです。第一あれだけ工場が広がってるんです。少々ずれても街まで飛んではいけはしませんよ」

都市爆撃は厳禁されている。

もし禁止されてなくとも普通好き好んでやる奴はそういうない。工場だらうが市街地だらうが爆撃すれば人が死ぬには変わりないが、やはり無抵抗の市民を殺すのは気が引ける。

工場ならその工場で作ったものが日本人を殺すのを防ぐ、と言い訳が出来るのだ。

それが何の意味もないことは皆分かっているが、そうでもしないとやつてられない。

「爆弾投下用意、投下地点まであと30秒

機内に緊張感が漂つ。

それはそうだ。

この瞬間にために何時間もかけて飛んできたのだ。

これを失敗すれば全ての苦労が水泡に帰してしまつ。

「……3・2・1、投下！」

機長が爆弾投下レバーを引く。

するとヒューという甲高い音を立てながら爆弾が落ちていった。後続機もそれぞれ投下していく。

しばらくして大きな爆発音が響き、航空機を揺らす。

「あたつたか……？」

中佐は窓から精一杯のぞく。

「爆撃命中と認む！」

力強い報告が入り、中佐も笑みをこぼす。

「みんなよくやつてくれた。これで任務は終了だ。さあ早く帰ろう。敵機の来ないうちにな」

航空隊は反転、帰途に着く。

しかし帰り始めて数分後、悲痛な報告が入る。

「第3分隊2番機より報告です！『我敵機の攻撃を受けつつあり。分隊長機は撃墜されり。我が機も被弾、帰投は困難なれば敵航空基地に突入、自爆す』」

電信を聞き彼は咄嗟に救援に向かう！と言いつこうになつた。しかし爆撃機が救援に向かつたところで損害を増やすだけ。彼は断腸の思いにかられながらも機長に言う。

「機長、悔しいが爆撃機では救援には行けん。戦友を見捨てる形となるが我々は退避しよう。それと返信を打つてくれ。自爆は許さん、機体を放棄して機から離脱せよ、捕虜となつてもいいから再起を待てとな」

その後、彼らは真っ直ぐとガルヤルサへ向け飛んでいった。

敵機の追撃はなかつたが、敵機に襲われた第3・4分隊の爆撃機が帰つてくることもなかつた。

今回工場地帯への爆撃に成功、さらに発生した火災の延焼を食い止められなかつたことで被害が拡大し工場多数が炎上、インドの軍需生産は大打撃を受けることになる。

また爆撃とは別の被害だがパニックを起こした市民らが一斉に逃げ惑つたため、一切爆撃を受けていないにも関わらず将棋倒しとなつたりして5歳の子供を含む15名が死亡、21名が重軽傷を負つた。こんなことは全く予想しておらず、いかに戦争は予期しないことが起こるのかを思い知らされる。

ただこのことは後に微妙な影響を「えるが……。

しかし相手の航空基地に打撃を「えることには失敗。

投弾に成功したわずかな機と、自爆機3機、墜落した2機が飛行場設備の一部や航空機11機を破壊したが大した影響はなく、その日のうちに復旧は完了している。

残りの13機も残らず撃墜されうち5機は不時着に成功してパイロットは無事、そのほか離脱に成功したパイロット約10名が生き残りインド軍に身柄を拘束された。

(ここだけの話であるが、この航空基地攻撃は敵機をひきつける囮の意味もあつた。酷い話だが、少しでも迎撃機をひきつければ本隊は逃げれるという算段であつた。分隊長には伝えたがパイロット達には伝えられていない)

「生きて虜囚の辱めを受けず」

「このような訓示はもちろんない。

西洋同様戦つて捕虜となつたのは決して不名誉なことではないのだ。

彼らは戦後無事帰国し、テリー爆撃の英雄として迎えられた。

第46話 テリー空爆（後書き）

テストはようやく昨日終わりました。予想したよりはマシな教化が多かつたのでホッとしております。今のところ絶対防衛権は死守されていますが、音信が途絶したところもあるので…。

今回の名言

「戦いの術は、美しく、かつ簡単である。それは、まさしく『シン・フル・イズ・ザ・ベスト』である」
ナポレオン

年は明け、戦争が始まつて2年が経つた。

戦況は現在小康状態となつてゐる。

インド軍にも目立つた動きはないしオーストラリア軍も動かない。というより正しくは動けないのだ。

オーストラリア軍は海軍が壊滅したためオーストラリア大陸から出られないし、インドとしても北はヒマラヤ山脈、東はパトカイ山脈を境に押し込められている。

そしてインド軍の頼みであるインパール要塞は現在日本軍の重圏に陥つていた。

インパール要塞はイギリス人の設計によるもので、1910年から3年半かけて大戦直前に完成した。

初めから日本軍を意識して造つたもので、ミャンマーからインドへ入る唯一の幹線道路の通るここに要塞を築くことで日本軍がインドへ入るのを防ごうとしたのだ。

日本軍からすればあまり縁起のいいところではない。

もちろんこの時代の人たちは知らないが、我々現代人からすれば太平洋戦争で陸軍が大敗北を喫したところということで有名である。時代も違うしここでは全く関係ないが、ここを攻撃することに俺はなんとなく気が進まない。

日本軍の大部隊がこの要塞を包囲したのは昨年11月頃。

インド軍はこの最新鋭と言つてもいいであろうこの要塞で、日本軍

に痛撃を『えてやう』と意氣込んだが、日本軍は一向に攻撃していない。

増援でも待つてはいるのかとインド軍は怪しみだがその様子はなく、ただ時間だけが過ぎていく。

日本軍は海路で陸軍を揚陸するための陽動としよつとしていたのが……。

包围から約2ヶ月たつても田立った動きはない。

インド軍としては救援部隊を差し向かなければならぬが、それがなかなか出来ないで困っている。

なぜ出来ないか、それはインド軍の組織と国の構造そのものに問題があつた。

インドは日本軍同様地域ごとに軍区を設け、戦時にはその軍区から部隊を抽出して軍を編成して戦うようになつてている。

しかし、日本軍の方面隊とは異なり各軍区に強大な権限が与えられ、一種の軍事政府のようになつてしまつてしているのだ。

そのため部隊の抽出を求めてもなかなか応じなかつたり、さらには拒否することすら起つていていた。

国を守るべき軍隊なのになぜ兵を出し済むか、それは軍が今の政府に不満を持っているからである。

なぜか、それは宗教と密接に結びついていた。

インドはもともと仏教発祥の地ではあつたが、現在は仏教ではなくその国民の8割はヒンドゥー教徒である。

それに対し現在の政府はイギリスの侵略がなかつたためムガール帝国（史実では1526年に建国、1858年のインドの大反乱で滅亡）の流れを汲んでおり、その官僚は大半がイスラームの信者（ムスリフ）である。

これに対し軍部はアーリーを中心とする軍区を除き、残りはほとんど

ヒンドゥー教信者（兵も徵兵のためほとんどヒンドゥー教徒）であるため中央政府をなかなか良しとしないわけだ。

ただムガール帝国はもともと異教徒に対し弾圧を加えたりしてきたわけではない。

強制改宗されることもなく、制限つきではあるものの一定の生命・財産・宗教的自由を認めている。

ただその代わりイスラームの信者以外には税金を重くした。ジズヤ（人頭税）がそれである。

これは非ムスリフにとって大変厳しいものとなる場合が多く、そのため仕方なくイスラームに改宗するものも結構いたらしい。実質強制改宗みたいなものではあるが、火あぶりだの魔女狩りだとやつたわけではないのだ。

これに対し異民族・異教徒に寛容であった第3代皇帝アクバルはこれの廃止に踏み切り、自身も様々な宗教に関心を寄せ、それを尊重した。

そのこともあってか彼は北インドの大部分を併合して全盛期を築いていく。

この頃のムガール帝国は強国であり、インド制服をもくろんでいたイギリス東インド会社も断念せざるをえなかつた。

その後を継いだジャハーンギールもその政策を受け継ぎ、さらにその次のシャー・ジャハーンの時にはイスラームとヒンドゥーなどが融合したインド＝イスラーム文化の全盛期を迎えた。

その文化の代表建築である「タージ・マハル」は世界遺産にもなつており有名である。

しかし第6代の王アウラングゼーブの頃から次第に悪化していく。敬虔なイスラームの信者である彼は異教徒を厳しく弾圧した。

さらに度重なる外征による財政の悪化もあり、非ムスリフに対するジズヤを復活させる。

そのためヒンドゥー教徒やシク教徒が離反、帝国は次第に衰退していく、彼の死後帝国は分裂。

さらにイギリスの介入により事態は悪化、滅亡への道を進んでいく。

今回のゲームではムガール帝国は生き残り、その後議会などが出来て民主制に移行し、国名をインド帝国に改称したことになっている。議会はヒンドゥー派の政権が第一党を取り、政治は滞りなく行われているのだが官僚らはムガール帝国時代の名残が強く、軍や政府の上級幹部はまだかなりムスリフが残っていた。

平時には大きなざこざはなかつたが戦争という非常事態になり、なおかつ戦況が悪化していくとそのほころびが出始めているのだ。

さて、余談が過ぎたがとにかく軍部内での対立が激化してなかなか部隊が集まらない。

ただでさえ大国を相手に戦っているのだ。

こいついうときこそ一致団結しなくてはならないが、宗教・民族といふものが絡んでくると問題の解決は容易ではないのである。

俺にはややこしすぎてわけがわからない。

今のだつてクッキーが言つたのをほとんどそのまま流しただけだし。だから世界史は嫌いなんだよ……。

こつして特に動きのないまままた1ヶ月が過ぎた。

その間インド陸軍では中央軍の幹部が一生懸命説得に回り、部隊の抽出を求めている。

他国からすれば全く滑稽な光景ではあるが、外から見ただけでは分からぬものがその国にはあるものだ。

そして十分な兵力が集まつたのは2月下旬、これでようやく救援に行けると中央の軍幹部は胸をなでおろしたが好期は去つていた。

インド軍救援部隊が現れないことから、日本軍は海路によるインド侵略から陸路による侵攻に切り替え、要塞攻略を開始することになったのだ。

援軍が着く前に要塞はすでに日本軍のものとなっていたのである。

第47話 内患外憂（後書き）

「意見」感想お待ちしています！

今回の名言

「戦争には、勝利を保証する決定的な地点がある。その価値は、そこを保持することで戦いを原則を縦横に適用できる」とある」
アンリ・ジエリー

第48話 インパール要塞攻囲戦

さて、話は戻つて前の年（1915年）の11月。日本軍第3・5軍はインパール要塞へ向け行軍を開始していた。ただし彼らの目的は要塞の攻略ではない。

彼らの任務は敵をひきつけること。

要塞を包囲すればインド軍は要塞を救援に部隊を送つてくるだろう。そうしたら彼らは戦わずにさつとミャンマー領内に戻り、そこまで敵がついてきたらそこで戦うことになつていて。

ついてこなければにらみ合つただけでいい。

今回基本的には要塞に触らない予定だった。

そして敵軍が出てくればその隙に現在シンガポールで待機している第1・2軍がインド南部に上陸を行い、慌てて退却するインド軍を第3・5軍が追撃し壊滅させる。

第1・2軍が南から、第3・5軍が東からインドを追い詰めるのだ。そうそう、第1・2軍は部隊が入れ替えられ内地から新鋭部隊が送られている。

今までの部隊は歴戦ではあるがだいぶ消耗しているし、彼らだけ戦うのでは不公平だ。

さらに後詰として第6軍も編制されて陸路でマンダレーへ向かっている。

第6軍は8個の通常師団と4個の後備師団からなり、万一のインド軍の侵攻に備えることになつていた。

第4軍も部隊の再編が終わり次第、インドへの上陸に加わることに

なっている。

さらに本土では第7・8軍の編制が行なわれており、前線へ進出準備に入っていた。

実際にインド軍が食いつけば戦史に残る大規模な戦いとなっていただろう。

11月の終わりには第3・5軍はインパール要塞を完全に包囲、兵糧攻めに入った。

時折小部隊が出てきて夜襲をかけたりすることが初めの頃はあつたようだが、日本軍に察知されほとんどが待ち伏せにあつて壊滅し、次第に夜襲もなくなる。

それに予想されていた敵救援軍も姿を現さず、兵士達は一体俺たちは何しに来たんだと不満をこぼした。

結局何の動きもないまま年を越してしまった。

敵は一体何をしているのか、早く救援に行つてやれよと参謀達もイライラがだいぶたまつてきている。

そしてようやく敵に関する情報が入ってきたがそれは期待とは全く異なるものだつた。

その情報は敵軍内部で対立が起きており、そのせいで兵が集まらず敵は救援軍を遅れないでいる、というものであった。

統合作戦本部ではこれはある意味好機であるとしてインパール要塞直接攻略が決定され、第6軍にはインパールへの前進を命じ、さらに坑道戦の訓練を受けている工兵隊を1個旅団と攻城砲、それも馬鹿でかい24榴（24センチ榴弾砲）が送り込まれることになり、日本軍は本格的に攻略に乗り出す。

ここで突貫工事で整備した泰緬鉄道が大活躍した。

工兵旅団を迅速にミャンマーへ送ることが出来たし、24榴もこれ

を使ってミャンマーに入ったのである。

他にも大量の重砲が積まれ、ラングーンに運ばれてそこからトラックなどの輸送でインパールまで運ばれていった。

ちなみに24榴の輸送には一門につき1-5両ものトラックが必要だつたことからこの砲の巨大さが伺える。

まだトラックの数がそつ多くはない日本軍にとって結構負担になるが、重砲なしで要塞攻略などできはしないから仕方ない。

そして2月初めからは攻略戦が開始された。

まずマンダレーに進出した第10航空師団の爆撃機が毎日爆撃しにくるようになったのである。

いくら要塞とはいえ全てが全て掩蔽されているわけではなく、掩蔽されていない陣地に大きな被害が出始めた。

さらに爆撃機は徹甲弾を使用して高高度からの爆撃も行い、掩蔽されていいる陣地でも当たり所によつては破壊されることも起り始めている。

これに対しインド軍は反撃できずにいた。

近くに航空基地がないから無護衛の爆撃機といつ格好の餌食にも関わらず迎撃することはできないし、航空機に襲われることなんか全く考慮していなかつたので対空火器は配備されていなかつたのである。

第一インド軍の持つ戦闘機はどんなにかき集めても50機を超えない。

それらは全て首都防衛にあたつており、とてもこいつを守るような余裕はなさそうだ。

そのため連日爆撃を受けてもただ打たれっぱなしであり、兵の士気は日々に低下していく。

そして2月中旬、T-兵隊による掘削が要塞真下まで進み、あちこち

で胸壁の爆破が進んだ。

これはインド軍も手をこまねいていたわけではなく、防御坑道を掘つたりして対抗した。

しかしその方面の訓練が出来ておらず上手く防御できなかつたばかりか、途中でかち合つた日本側の坑道とインド軍の坑道から日本軍が要塞内部へ侵入して外郭陣地がいくつか落とされてしまふなど事態を悪化させることとなる。

2月下旬に入ると砲兵隊による砲撃も始まる。

24榴の威力は凄まじく、着弾地点に地震かといふような揺れを引き起こした。

ただし掩蔽陣地は案外堅く、主要な陣地のものはほとんどがこれを跳ね返している。

一方歩兵による総攻撃も行われることになった。

当初は砲撃と掘削・空襲で痛めつけて兵糧攻めにすればそのうち降るだらうと思っていたのだが、インド軍の予想外に粘り強い抵抗でなかなか降伏してこないし、諜報部隊によるとどうやらそろそろ援軍がこちらに向かってくる様子だとのである。

これ以上チントラ出来ないということで2月25日、日本軍は総攻撃を開始した。

まず早朝、砲兵隊による徹底的な砲撃と航空隊による爆撃から始まつた。

凄まじい数の砲弾と爆弾を贅沢に使用したこの集中砲爆撃で敵陣地は大きな打撃を受ける。

さらに砲撃終了後工兵隊による爆破が行われ、あちこちの陣地が盛大に吹き飛んでいく。

強力な爆薬が使われており陣地は木つ端微塵になつた。

そして歩兵による突撃が行なわれた。

大きな損害を受けることを覚悟していた軍司令部だが、あれだけ派手に壊せば彼らを待ち受ける陣地はそつ多くない。

さらにインド軍が次々と投降してきたことから大部分はほぼ無血で占領することができた。

しかし士気旺盛な部隊も中にはいるものである。

中央陣地の守備についていた1個大隊は降伏するそぶりも見せず日本軍に果敢に攻撃をしかけてきたのだ。

これを沈黙させようと全砲兵隊が集中砲火を浴びせるが一番強固に造つてある陣地のようでなかなか黙らない。

3日間に渡つて彼らは抵抗し続けたが弾薬が尽きたらしく、最後は日本軍に銃剣突撃をかけて全滅した。

降伏を嫌い、最後の一兵まで日本軍に抵抗した彼らの奮戦は日本兵に大きな衝撃を与える。

この大隊の全滅によりインパール要塞攻略は完了、日本軍はこちら向かつてくるインド軍部隊の迎撃用意にかかつた。

第48話 インパール要塞攻囲戦（後書き）

とつとつうらの部分までやつてきました。予定なりにここまでに戦争は終わつてなくてはらなかつたんですねが、戦争といつもの戦い通りにはいきませんね。

第1次大戦が終わつても、小説はまだまだこれから長く続きますが、是非最後までお付き合いください。

今回の名言

「戦場では、恐怖から逃れようとする行動が反射的に起きる。そして、失敗してから考える」
ツキディアス

第49話 インドの大反乱

インドの大反乱。

別名セポイ（シパーイー）の乱。

前話でも述べたがムガール帝国の滅ぶ、恐らくインド史上最大級の反乱である。

発端はイギリス東インド会社のインド人傭兵の反乱だつた。

その頃イギリスは同社を通じてインドほぼ全土を征服していた。しかしインド人の宗教慣習を無視したことなどからインド人は反感を強めており、これが原因となつて1857年5月にシパーイー（前述の傭兵ら）による武装蜂起が起こる。

これにインドの商人や農民が参加、反英独立闘争と化していくことになつた。

2年の長期に渡つて反乱は続くが反乱軍の不統一によりイギリス軍に次第に押され、1859年7月に鎮圧された。

これによりインドはイギリスの直接支配下に置かれ、力は失つていたものの形式上は存在していたムガール帝国が滅亡する……。

というのが我々の歴史におけるインドの大反乱だ。

しかしこちらの世界で起きたのはかなり違う。

きつかけはシンガポールに送り込んでいたインド諜報員が送つてきた情報だつた。

「輸送船を含む日本艦隊がシンガポールを出撃、インド洋へ向かつた

これに慌てたインド陸軍はセイロン軍区に警戒を発令し、インド最南端のマドゥライ軍区に対し全部隊をセイロン島に転進させよと命令した。

現在セイロン軍区の兵は4万5000程度。そこにマドゥライ軍区の1-2万を送り防御を整えさせよとしたのだが、もともと中央政府に対し不信感を募らせていた同軍区の司令アブダル・シン中将は中央政府の陰謀だと思った。

全部隊を送り込め？

軍区を完全に空にせよといふことか？

向こうも我々のことを疎んじているのだ、セイロンに送り込んで日本軍に我々を殺させ邪魔者を消そうとしているのだろう、と。

そこまで話が飛躍してくかな……と傍から見れば思つが、疑心暗鬼になつてゐる彼はそう信じる。

そして彼は熱心なヒンドゥー教徒でもあつた。

イスラームを信仰する中央政府は彼にとつて許せるものではなく、それも理由の一つとなつたのである。

そしてその翌日、マドゥライに集結した兵士らを前に彼はこう宣言した。

「中央軍は我々を邪魔者扱いし、このたびセイロンへの進出を命令してきた。これは明らかに我々を死地へと送り込み、厄介者を殺そうとする中央政府の企みである。もはや敵は日本軍ではない、我々の敵は中央政府だ！よつて私は栄光あるインド帝国の未来のためにこの悪しき中央政府を倒す。勇敢なるインド兵士の諸君、私に続け

！」

この演説、案外効いたようでマドゥライ軍区のほぼ全兵力がこの反

乱に参加することになる。

また、シン中将は他の軍区にも協力を呼びかけた。

すると南部4軍区とセイロン軍区がこれに呼応し中央軍と戦つことを決意したのである。

これによりハイデラバート以南は反乱軍が制圧するところとなり、隣接する軍区はこの突如の離反に動搖はじめた。

一方中央政府としては北と東に日本軍、南に反乱軍を抱える形となつてしまいもうどうすればいいか分からなくなつた。

パキスタンに援軍を求めたが対日平和条約を締結しているパキスタンは動けず（もつとも、パキスタンは現在アフガニスタンでカザフスタン軍と交戦中で兵を送れる状態ではない）、中央政府の手元にある信頼できる兵力はデリー軍区の10万余のみである。インドは追いつめられた。

そしてこの事態になつてどうすればいいか分からなくなつているのところがもう一つあつた。

日本である。

実はセイロン上陸作戦など計画してはおらず、スペイが見たのはバングラアチヨ（スマトラ島最北端の町）への通常の輸送船団であり、それもかなり小規模なものだつたのだ。

そして何があつたのか分からぬが突然交戦国であるインドの南部で軍が反乱を起こして内戦を始めているのである。

ある意味日本は蚊帳の外に置かれ、ただ見守るような形になつていた。

この機会に付け込まない手はない、一気に大軍を送り込んでインドを占領してやるつ。

そう言う参謀もいたが戦況はどうなるか分からぬし、下手に住

民の感情をあおると取り返しのつかないことになる。特に宗教が絡むこの問題は複雑なのだ。

反乱から一週間ほどして反乱軍から日本に対し要請が入った。カルカッタ以東のインド領土を割譲するから我々を支援して欲しい、というものである。

この要請は国会・統合作戦本部・ちまた巷で非常に激しい論議を巻き起こした。

まず国民の半数はこれに対し積極的に介入せよという意見だった。政府内でも陸軍参謀らや一部の海・空軍参謀らはこれを主張する。一応構図としては厳しい支配に耐えかねた反乱軍側が民衆の協力を得て戦つてることになっていたので正義は反乱軍側にある、我々は彼らの味方をすべきだ、というのである。

残り半分と政府官僚の大半を占めるのは静観せよ、というものである。複雑なインドの国内事情に入り込んでゴタゴタに巻き込まれるのは真っ平御免だというのだ。

軍部も海軍の大半と陸軍の上級将官はこの意見を支持する。まだオーストラリアも残っている以上インドとは講和でもして早く戦争を終わらたいのだ。

そして超少数派なのは反乱軍・中央政府両方を倒してインドを完全に占領せよというもの。

二つに戦わせ、双方疲れ切つたところで大軍を送り込んでやればインドを完全に征服することができると彼らは主張した。

しかしこの火事場泥棒を狙つた論を支持するものはほとんどいないし、インド全土を占領する労力に見合つだけの見返りがあるかといえばそうでもない。

そのため早々にこの意見は消えた。

さて、残る一つの意見は激しく対立、各地で集会が行われるなど加熱していっている。

俺はこれに歯止めをかけるべく声明を出し、自分の考えを伝えた。

今回の声明で俺は後者の意見を取っている。

これ以上戦争を長引かせるのは得策ではない。

まだまだ国力に余裕はあるが次第に国民生活が苦しくなっているのはだいぶ感じるようになってきた。

ついこないだ来年度予算に目を通したが再び増税が行われることになつていたのである。

戦争に突入してからもう3度目の増税だ。

近頃は物価の上昇、品不足が目立つ。

貧しい家庭はかなり打撃を受けているはずである。

早く戦争を終わらせ、国を安定させなくてはならない。

この声明後、議論は沈静化に向かい政府も対インド講和のため動き始めた。

第49話 インドの大反乱（後書き）

ここ最近やたらと早く更新してるな、と思われた方いらっしゃるかもしれません、それはテスト週間に減るはずのストックが逆に増えたため起こつた現象です。それが何を意味するか…皆さんお分かりですよね？

絶対防衛圏（60点）陥落の報が今日入りました。ライティングという一つに分かれた英語の教科の片方ですが、60どころか50割つてました…。

学生でもしテスト前なのに読まれている方、是非テスト勉強をしましょう。でなければ本土空襲が始まりますよ？もう始まつての方もいるかも知れないんですけど…。

今回の名言

「天才は1%のひらめきと99%の汗」
トーマス・エジソン

ちなみにこの名言、本人は「1%のひらめきがなければ99%の努力は無駄である」と言つたらしいですけどね。

インドとの講和会議は西藏のラサで行われた。

日・印双方ともに国家元首自らが出席してのものである。

そのほか外務大臣や元首の副官（アシスタント）も来ていた。どうでもいいが向こうのアシスタントはもともとチワワらしい。

若干クッキーがイライラしていたが何なんだろう？

かわいいチワワに嫉妬？

まさかね……。

まあそれはおいといてこの会議には日・印政府だけでなく反乱軍の將軍も何名か出席していた。

これは日本側の要請によるもので、あわよくばインドの内戦も終わらせてやろうと思ったからである。

そう簡単に終わるはずもないけどな……。

さて、講和条約締結は日本側の超寛大な処置によりスムーズに締結された。

領土割譲・賠償金請求は一切なし。

戦後FTA（自由貿易協定）を締結することや東南アジアにおける日本の優越を認めること等本当に大した内容ではない。

インドは賠償金や領土割譲があるものとビクビクしていたらしいが、肩すかしを食らったような感じだつたようだ。

まあこれは今後を考えると日本とインドが対立するのは好ましくない、とうこともある。

しかし第一はいまだ貧困層が多いインドの領土を組み込めば面倒な

ことが多いのと宗教対立などとは無縁でいたいこと、中途半端に領土をもらつても仕方がないことなどを要するに戦後統治が面倒くさいという点に及きた。

それに今占領している地域はほとんどない。

内戦でこれからじつた返すインドから火事場泥棒みたいな真似して金や領土をとつても国際社会から反感買つだけだし。

そんなこんなで穩便に片付いた講和条約である。

で、引き続き行われた反乱軍とインド政府軍の講和交渉だがこつちもあつさり片付いてしまつた。

インド元首である宇根がほとんどあつさりと反乱軍側の要求を呑んだからである。

反乱軍側が要求したのはイスラム教徒の官僚の追放、ジズヤの廃止、議会権限の強化や国王・宇根の権力縮小など10項目である。

宇根はこの要求をイスラム官僚の追放以外は全て認めた。

官僚追放の点は全員が悪いわけではないという理由だ。

そのためこの後内部調査を行い、汚職などがある者のみ追放ということでおち着く。

俺は宇根が要求を呑んだことに若干驚いた。

結構プライドとかそういうのがあるタイプで自分の負けを認めるのが嫌いなんだが、元首の権限縮小にも反対しなかつたのである。日本との講和に素直に出てきたのは負けを認めたのではなく反乱軍を封じ込めるためにだと思っていたがこの様子だと違うよつだ。戦争を続けることに嫌気がさしたのかもしれない。

実際は後で向こうのアシスタントに聞いた話によるところないだのデリー空襲が彼女に決断をさせる大きな要因だったらしい。

あの日彼女はたまたま市内に出ていて爆撃の際の大混乱に遭遇、そ

の混乱の中で親とはなれた子供がひとりでいるのを見つけ助けようとしたのだが、そのときその子とぶつかった人たちが将棋倒しになるのを目撃してしまった。

その後彼女は慌てて子供を探したが、倒れた人の中から救い出した時にはもうすでに息絶えていたという。

この後彼女はふさぎ込むようになり食事もしばらく細くなっていたらしい。

どうやらあの子が死んだのは自分のせいだと思っていたようである。そして戦争を終わらせなければならぬと決意したとのことだ。

戦争って本当に酷いものですね、そう締めくくったアシスタンントの子に俺は何も言えなかつた。

実際あの空襲を命令したのは俺なのだ。
そう、殺したのは俺である。

宇根が責任を感じる必要はない。
彼女はそれを分かつていてるだろう。

が、責めずにはいられないのだ。
目の前で消えた小さな命に自分ができることはなかつたのか、と。

俺はこの話を聞いていたたまれない気持ちにはなつたがこれが戦争と割り切ることにした。

端から見ればかなり冷たいように思われるが今も戦争は続いているし、これからもなくなりはしない。

第1次世界大戦が終わっても、第2次世界大戦は起ることがすでに決まっている。

俺のすべきことは日本国民にそのような惨禍を「えない」と、それだけだ。

さて、インドのその後だがこの後しっかりと内部調査が行われ、議員32名・官僚116名など大量の首切りが行われた。

予想されていたよりはるかに多く、大量の官僚が抜けた各省庁はその補充が間に合わなかつたため宇根は日本に人員の派遣を要請。俺はそれに応じ財政や行政に関する顧問団を派遣、さらに資金的な援助も行うことを決定し、日印友好の醸成にも努めた。

もちろんついこないだまで交戦国だつたわけで、そう簡単に向こうの一般人の感情が良くなるわけはないが……。

ただこれがせめてもの償いである。

これでインドは片付いた。

次はオーストラリアだがこつちはちょっとやそつとじやなさそうだ。

海軍は壊滅させたが陸軍は無傷。

オーストラリア本土にはまだ一発の銃弾も撃ちこまれてはない。

あの先生が降伏することを決断させたのはどうすればいいか。結構根に持つようなタイプだからあんまり追い詰めて降伏させると後がマズいかもしれない。

つかず離れず、いつも賠償金・領土割譲なしでの講和を進めるしかないか……。

しかし賠償金も取らない、領土も取らないだと、逆に国内での反発が懸念されるようになる。

日比谷焼き討ち事件はこの世界では起こつていないが、講和条約の内容次第では反発する国民達が暴徒と化すことも十分ありうるだろう。

さて、どうすればいいか……。

幸い俺は支持率とかを気にして政治をしないといけないわけではないし、天皇という半ば神格化された立場にいる。

俺が国民に呼びかければ収まるか？

いや、そんなに上手くはいかないかもしれない……。

まあ、そんなことよりまずは相手を講和のテーブルにつかせないと
な。

第50話　日印講和会議（後書き）

無理矢理ですが、なんとか講和で交戦国はあと一つだけになります。オーストラリアも同様に強引な形ですが講和へ持ち込みます。

今回の名言

「最も完全で巧妙な勝利は、わが損害がほとんどなく、敵が目的を放棄した場合である」

ベリサリウス

1915年2月10日、オーストラリア帝国首都キャンベラ。

「女王陛下、ニュージーランド政府より国書が届いております」

侍従官が手紙を差し出す。

オーストラリア帝国・国家元首、矢木恭子はそれを受け取りさつと目を通す。

彼女の教える教科は英語、まだ教師になつて数年で駆け出しの部類に入る。

教え方は下手だが若くて美人といつことで男子からは割りと人気が高い。

ただ、提出物関連に關してうるさい・なんかねちっこい・色っぽさが足りないなどの否定的な意見もある。

俺は後者のほう。

あんまり好きじゃないな。

「日本に対しても講和……、なぜ栗山さんが突然そんなことを言い出すのかかしらね。彼女は今回の戦争でも私たちを応援してくれていたはずでしょ？」

彼女は隣りに控えていた自分のアシスタントに手紙を渡す。

それには要約するとオーストラリアはこれまで十分に戦つた、こころ辺りで日本と講和をしたほうが良い、そのためにニュージーランドが仲裁をしましょうということが書いてあつた。

「日本から何か働きかけがあつたのでは……？もともと栗山様はあちうと仲が良かつたと聞き及んでおりますが」

手紙を読みながらアシスタントは答える。

「やうかもしれないわね。なくともここ最近あれだけ負ければ心配してくれるのも分かるけど」

同様に側に控えていた海軍のハワード中将に嫌味を言つ。

「はい。申し訳ござりません」

彼はそれ以上言葉は続けなかつた。

本来なら次は勝つて女王陛下を「安心させます、とでも言つがもはや次がないのだ。

こないだのニューブリテン沖の悲劇、つまりビスマルク沖海戦で海軍は壊滅しており駆逐艦が10隻弱残るのみなのである。ある程度工業は育つておらず巡洋艦以上の艦艇は建造できない。駆逐艦だって今も建造してはいるが本当に細々としたもので、ペースも非常に遅く戦争が始まつて2年も経つのに完成艦はわずかに4隻のみである。

「陛下、私の意見を述べさせていただいてよろしいでしょうか？」

アシスタントが一步前に進み出で言つた。

「いいわよ、どうしたの急にかしこまつちゃつて」

そう笑いかけるがアシスタントの子は笑わない。

「陛下、私はそろそろ潮時だと思います。我が国とともに参戦したほかの3カ国はすでに日本に対し降伏または講和条約を締結しました。残るは我が国のみです。しかし我が海軍はすでにほとんどの艦艇が海の底……、もはや日本軍を止めるとはできません。もちろん内地戦を行えば勝てるかもしませんが、多数の国民を巻き込んでの悲惨な戦闘になります。それに我が国は今まで堅実に経済成長を続けてきました。ここで内地戦になればたとえ勝つたとしてもそれらの大半は失うことになります。これ以上戦争を続けても我が国の利益になりません。是非講和をしてください、お願ひします」

この発言はかなり勇気のいるものだらう。
となりには軍人がいるし、まだ誰も講和しようと言ひ出せないこのときにも言つのだ。
下手すれば殺されるかもしれない。

「貴様、我が軍を愚弄するか……！我が軍は日本軍になど負けはない。海軍は不甲斐ない戦いをしおつたが陸軍は違つ。奴らにこの神聖なる帝国の土は踏ません。断固としてな」

ハワード中将のとなりにいた陸軍のウィルソン中将が色をなす。まあ、どこの国でも海軍よりは陸軍にこいつキャラが多いらしい。「ウィルソン殿、陛下の御前ですぞ。言葉に気をつけられた方がよろしいかと」

ハワード中将がたしなめる。
彼も心のうちでは講和しろ、と思つてゐるのだ。
もぢりん思つてゐるだけ声には出せないが。

「陸軍もすでにニコーブリテン島で敗退したではありませんか。しかも数は相手のほうが少しけなつたと聞いております。にもかかわらず負けたということはやはり相手は我が國より強いということではないのですか？第一制海権がない今、敵はどこから上陸してくれるかわかりません。どうやつて防ぐのですか？それに今回ニージーランドからの講和の斡旋は日本が後ろで必ず絡んでいます。そしてこれを逃せば日本軍は本気でオーストラリアに攻め込んでくるはず……、今ならまだ講和の際の条件も軽くできます。講和のチャンスは今しかないのです」

アシスタントが反撃する。

これにウィルソン中将は殴りかかりそつた勢いで反論をしようとしたが矢木に止められた。

「はいはい、そこまで。明日の朝に御前会議を開いてみんなの意見を聞くわ。2人でいがみあつてもしょうがないでしょ？」

2人は素直に引き下がる。

彼女はそう言って自室へと戻った。

ふう……。

自然とため息が出る。

生徒相手に負けるとは思わなかつた。
確かに少々相手の国は大きい。

しかしこちらは4力国が束になつてあたつたのだ。
そう簡単に負けるはずが……。

彼女はそう思つたが実際のところ戦力を単純に比較すればどちらが

有利かは明白だつたはず。

それに生徒相手といつても実際に戦いを指揮しているのは軍人なわけだ生徒ではない。

実際教師・生徒など関係はないのだ。

まあ、生徒の国に負けるといつのは教師側としてみれば屈辱ではあるだらうが……。

「どうしようか……」

このまま戦つてもクー（アシスタントの名前）の言つとおり勝ち田はないだらう。

しかし負けを認めたくない。

生徒に屈るのは嫌だ。

けど単なる自分の意地で周りを巻き込んでいいのか……？

「 もうやめた」

彼女はそう呟いて全ての思考をとめた。

明日会議をやるんだからそこでみんなと考えればいい。

しかしそう簡単に思考が止められるはずもなく、結局その日一田中悩み続けることになる。

そして翌日、陸海軍及び政府官僚を集めた御前会議が行われた。

第51話 オーストラリアの葛藤（後書き）

「意見・感想お待ちしております。」

今回の名言

「戦略において本当に大切なことは、第一に敵軍を撃破することであり、ついで敵国民を苦しめて、政治指導者に対し戦争をやめるよう圧力をかけさせることである」

フィリッピ・H・シェリダン

補足：ただしこれはその後間違いとされ、敵軍を撃破して敵の政治権力者を国民から切り離すことが効果的であるとされていいるらしいです。

「戦闘を継続して何の利益があるといつのですか！国民はもはや疲弊しています。昨年度の大幅な増税及び徴兵により国民の生活は非常に苦しい。もはや戦争の大勢はつきました。講和するべきです」

「我が軍に全く勝ち目がないわけではない。上陸してくればこっちのものだ。敵は地理に疎い上に兵站上大軍を投入するのは大きな負担になる。地上戦になれば必ず勝てる」

「地上戦に持ち込む？国内で戦えば国民多数を巻き込むことになります。それに我が国の人団の大半は海岸近くに住んでいるのです。内側は砂漠……、国民は一体どこへ逃げればいいのですか？」

「南部に避難させておけばいいではないか。そもそも貴様らが……」

果てることのない議論。

非常にヒートアップし続けており、このままいけば最後は取つ組み合ひの喧嘩になりそうだ。

「だめか……。

矢木先生はため息をつく。

会議でどちらかに意見がまとまってくれはしないか期待していたがさすがに甘くはなかつた。

徹底抗戦を唱えるのはどこの国でもおなじみの陸軍のお偉いさん方。彼らからすれば日本軍とはほとんど戦っていないわけで、戦わないうちに降伏などできないというのだ。

そして国民生活を考えそれと真っ向から対立するのが政府官僚ら、とりわけ大蔵省と内務省の方々である。

莫大な戦費の捻出に苦労を重ねてきたがもはやそれも限界といふことを肌で感じているのだ。

それに国民の中に漂う厭戦ムードも日増しに強くなっているのも分かつていてる。

ニコージーランドからの講和の斡旋があつた今こそチャンス、これを逃したらもつと大変なことになると彼らは必死だ。

一方沈黙しているのは海軍の方々。

徹底的に叩かれもはた戦力の残つていない海軍に発言権はほとんどなく、また発言することもなかつた。

戦うなら艦をよこせ、でなければ戦争やめろ、といった感じか。

激論が展開されるなか彼女はその議論を呆然と眺めていた。
よく喋る……。

彼女が持つた感想はそれだけ。

どうするかなんて全く考え付かない。

しかし」のまま聞いているだけでは埒が明かない。

「はい、じゃあもうそこまで……これ以上やつても結論なんてでないわ。」これはもう国会で審議してもううことにします。それじゃあ解散

彼女は突然立ち上がって言った。
そしてそのまま会議室を出て行く。

残された將軍や官僚らはそれをただ呆然と見つめるしかなかつた。

そして2日後、国会審議が始まった。

彼女は出席して議論を眺めてはいるが議会に丸投げしてしまつており、軍部と政府がそれぞれ各議員に裏工作で自分を支持するようと言つてまわつた。

当初は政府側の議員は過半数を割り込んでしまつて不利な立場に立たされたが、ジョンの指示を受けた工作員らも講和に賛成するよう様々な面から圧力をかけたり、ときには賄賂で議員らを買収していつたことから最終的には圧倒的に講和派が有利に進んだ。

そして会議が始まつてから8日目に行われた採決で、344対56（棄権20）で対日講和が承諾された。

本当にジョンを送り込んでおいて正解だつた。

彼の指揮によつてニュージーランドから送り込まれた諜報員達は本当に細かいことまで伝えてくれたし、今回の国会審議のところでもオーストラリア側はかなりの防諜体勢を如いていたのだ。

しかしづかん期間にもかかわらずかなり深く食い込んでいた日本の諜報網はこれをキャッチし、積極的な働きかけを行つて講和へと上手く導いたのである。

と言つてもこれにはもともと諜報網を作り上げていたニュージーランドの支援があつてのものだが。

あとは外交交渉。

これさえ上手くいけば戦争は終わるのだ。

それから1週間後、オーストラリア政府から正式に講和へ応じるとニュージーランドへ返書が送られ、ニュージーランド政府は直ちに

それを転電して日本へ伝えてきた。

日本側はそれを受けて各地に展開している部隊に警戒を厳にして積極的な攻撃は控えよといつ命令を出し、外務省には交渉に当たらせる外交官の人選を行わせる。

そして1915年2月24日、ニュージーランドのウェリントンで講和交渉は始まった。

日本政府はニューブリテン島への軍事基地建設、マーシャル・ギルバード・カロリン諸島などオセアニアの島々の日本の領有を認めることや、自由貿易協定の締結などを引き換えに賠償金請求権を放棄するという案を提示した。

かなり寛大な案でありオーストラリアはすぐに呑むものと思われていたが予想外に難色を示す。

どこが気に食わないかといふと自由貿易協定締結のところでの工業力が飛躍的に伸びている日本から大量の製品が流れ込み、自国経済を悪化させると思つたらしい。

さらにニューブリテンの軍基地によりオーストラリアは事実上日本に囲まれてしまうわけである。

しかしどちらも勝手な言い分、負けた方であるためこれくらいは呑んで当然であろう。

いくら相手が生徒とはいえなめすぎてないか？
どんな条件で講和しようとしてたんだ、一体。

上手く進展しない中それを救つたのはニュージーランドであった。オーストラリア全権を必死に説得したり、本国にいる矢木先生に説得の電報を打つたりして日本のソロモン諸島領有権放棄と引き換えにそれを認めさせたのである。

そして1915年3月1日、条約は発効され第1次世界大戦・太平

洋戦線での戦いは終結した。

第52話 戦争終結へ（後書き）

ここ最近拙作が原因で議論が起こり、読者の皆様や数名の意見を出してくださった方に不愉快な思いをさせてしましたことを深くお詫び申し上げます。その部分に関しては明日削除いたします。

皆様にはご批判は作者にのみ行なつていただきますよう切にお願い申し上げます。この小説に関するものは全て私に責任があります。不甲斐ない私の作品で他の方に不愉快なお思いをさせるのは大変遺憾であります。

これから気分を新たに再出発の思いでこの小説の執筆に取り組んでまいります。未熟者が書く稚拙な作品・文章ではありますが完結まで書いていきたいと思っております。これからもどうかよろしくお願い申し上げます。

4月1日午後8時、大日本帝国首都・長安にある皇居では戦争終結を祝ったパーティが開かれていた。

パーティ、といえば聞こえはいいがどちらかというと宴会だ。陸海軍首脳と政府官僚が集まつたのだがなぜか酒飲みがやたらと多く、俺が無礼講だ、と言つたらその後皆大騒ぎとなり、大量に酒を飲み一部は潰れていた。

「陛下、ようやく戦争が終わりましたな。苦しい戦いでしたが我が国はこれに勝利することができました。これはやはり陛下のお力でしうなあ」

若干酔つて赤くなつてゐる一戸大将が俺に話しかけてきた。手には一升瓶が握られている。

「いやいや、前線の兵士の奮闘と後方でそれを支えた国民達の力があつてこそものだよ。俺はとくに何もしていないしな。一戸大将も司令部につめて頑張つてくれた。本当にお疲れ様」

俺がそつとえらいく上機嫌になり、

「わしも老骨に鞭打つて戦いに出たかったですがな。しかしながらかそもそもいませんでした。しかしこの戦いで日本軍の強さはしつかりと見せていただきました。これでようやく安心してあの世へ逝けるといつもの」

とこつて手酌で一升瓶から酒を注ぐ。

おいおい、そういうえば一升瓶なんてこのパーティじゃ用意されてなかつたる。

まさかの持込み？

「うううう、そんなに飲むと本氣での世に行くぞ」

と俺がたしなめるが効き田はなし。

「酒は百薬の長であります。これなしでは生きて行けませんからなあ。やめるわけにはいかんのです」

と黙つてふらふら他のところへ行つてやうでまた飲み始めた。

「陛下、いくらなんでもこれはやりすぎではありますか？全然戦勝祝賀会とこつた様子ではなんですけど……」

側にいたクッキーが黙つ。

「まったく同感だな。天皇の前だからみんな縮こまつて全然盛り上がらなかつたらまずいと思つて無礼講だつていつたんだが、まさかここまでなるとはな。いくら無礼講でも天皇の前で潰れるまで飲むか？」

俺はため息が出た。
まあ、でもいいか。

みんな戦争が終わつて本当にうれしそうだし。

「普通はしませんね。陛下の『威厳が足りないのでは？』

さうと失礼なことを言つ。

「悪かつたな。まあ、なめられててもそれだけ身近な存在にいるつてことでいいじゃん」

俺がそうこうと「ものは言つですね」と言つて笑つた。
久しぶりだな、こういうの。

2年半以上も続いた戦争は本当に長かつた。
ただ俺たちがこうしている間もまだ兵達は前線に残つてゐる。
銃弾が飛び交つことはなくなつたが皆家族を恋しがつてゐることだ
ら。

「さういえばまだジョンはニュージーランドか。帰つてきたら結婚
するんだつてな。まだ早いが先に言つておこう。おめでとう」
そうこうと若干顔を赤らめて、

「ありがとうございます。しかしながら先になるかもしれませんね。
まだ戦後処理など忙しいですから……。うつ、ゴホッゴホッ」

突然口を押さえて咳き込んだ。

「おい大丈夫か？」

俺は侍従を呼ぼうとしたが彼女はそれを止めて、

「いえ、大丈夫です。つわりですから」

と言つた。

が、周りがうるさかったので良く聞こえず、

「水割り？おいおい、調子悪いのに酒飲むのかよ」

と、言つと彼女は若干ため息をついてもう一度言つた。

「違います、『つ・わ・り』です」

「えへ、やうなんだ……、つてつわりー？」

「もう子供できたんのかーー！」とせできりやつた姫なのが

そうこうと彼女は再び顔を赤らめて、

「声が大きいですよ。でもそういうことになりますね。ですから出来るだけ早く式をあげたいんですけど……」

確かに。

子供が出来てから結婚式つてのはなんともいえないな。
でもさ、もう無理じゃない？

だってジョンが「コーディーランド」に行つたのは昨年10月。
んで今はもう4月。

ということは短くとも妊娠6ヶ月。
妊娠6ヶ月つてもうだいぶ終わりぐらいじゃないか？

「いや、そのまま行けば絶対先に生まれやつでしょ。予定日につ

彼女は少し考へた後言つた。

よ？

「確か今年の12月」ひのはずです」

12月?

ちょっと遅くないですか?

「だいぶ遅いんだな。 それ本当にジョンの子か?」

すると彼女はさらに一層顔を赤くして（もう本当に真っ赤）少し怒つて言つた。

「いくら陛下でも今のは失礼ですよ！ちゃんとジョンの子です。私もともと犬なんいろいろ設定が突付かれててこうなっているんですよ。文句があるならこのゲームを仕組んだ方に言つてください」

なんかややこしいな。

このゲーム作つたやつ何かいろいろいい加減じやないか？

「いろいろ大変なんだな。 そうだ、何なら産休に入つてもいいぞ。田舎の方にでも行つてゆつくりしてこいよ」

赤ん坊を腹に抱えたまま働くのは相当きついだらう。

俺は男だから分からないが、世の妊婦さん達は毎日大変なご苦労のはず。

そんな彼女を働かせるのはものすごい悪い気がする。

「私がいなくて陛下は大丈夫なんですか？ ジョンも今いませんし、一時的にアシスタントが完全に不在になりますが……」

本当に心配そうに言つ。

確かに心配と言えば心配だが、そんなに心配されなくても大丈夫だ。

一応子供じゃないんだし。

「大丈夫、大丈夫。半年や一年くらいなんとかなるって

俺はそういうが彼女は納得しない。

「いえ、やっぱり心配です。どうしましょ……、あ！アシスタントを増やせばいいじゃないですか！陛下のご家族が動物好きで助かりました。フレーラさん呼んでおきますね」

友達を呼ぶような感覚でさりとて言つ。そしてもひ行動に移さうと動き始めた。

「ちょっと待て。当事者は俺なんだが。一人で納得して話を進めるなよ。ってかそう簡単に連れてこれるのか？」

すると振り返つて、

「大丈夫ですよ。緊急時にはアシスタントの増員・補充などが認められていますから。出産つてかなりの緊急時ですよね。だから大丈夫です」

そう言つてもうどんとかへ歩いていってしまった。

「やっぱりいい加減だ……」

俺はこのゲームを作ったアホと彼女両方を思つて呟いた。

それからわざか数日後、マジでアシスタントがやつてきた。

しかもなぜか2匹。

うちで飼っているのはメスのフェレット1匹だけなのだが、じゃあもう一匹はどちら様だ？

とりあえず今は2人とも人間の格好をしているが男女一人づつ。じゃあ女の方がチョコってわけか。

「初めまして。チョコと申します。人間名は太田千代子です。これからよろしくお願いします」

まずはチョコから自己紹介を始めた。

赤目にメガネ、髪後ろでピシッととめている。結構真面目そうなタイプ。

口数も少なそうだ。

「えっと、ダルビッシュユウって言います。人間名は……、あれ？何だつたつけ……。ああ、そうだ。大場有だつた。あ、よろしくお願いします」

見た目は結構スマートで、頭の切れそうなタイプなんだが……。こいつ大丈夫か？

「よろしくね。ところでダルビッシュユウさんはどなた？」

「聞いたことがあるようないよつな、そんな感じだ。でもうちで飼ってはない。

「えっと、重光とかいう人の家でお世話になつてたるフェレットです。チョコ一人では大変だろうということでクッキーさんに連れてこらされました」

ああなるほど！

重光というのは母さんの兄、俺から言えば伯父にあたる人である。

そういえば重光伯父さんはフェレット飼つてたな。

それに確かファイターズの大ファンだったはず。

けどだからつてダルビッシュねえ……。

しかも苗字だろ、ダルビッシュは。

俺ならジェフか、アーロムあたりをつけるけど……って話がずれるからもうやめとこ。

その後しばらく仕事の話をしてみたが、今までの2人とはやはりかなり違う。

小説での出現頻度は低かったが、クッキーとジョンは年齢は俺よりもちょっと上くらいの設定になつていて、キャラ的には俺の兄と姉妹的な感じで結構いろいろフォローしてくれていた。

が、チョコは必要以上に喋らないし、ダルビッシュは必要以上に喋る（いろいろよく分かつてないから）。

仕事もチョコはさつさとこなすがダルビッシュは結構手間取る。

こんな正反対の組み合わせで大丈夫なのか若干不安だが、意外なことに二人の仲はいい。

仕事が遅いダッシュをチョコが無言で手伝つたりしてる姿をその後結構見かける。

案外出来るのかもしれないな。

まあ、でも二人のおかげでその後の煩雑な戦後処理などは割合スマーズに進んでいった。

第53話 これからのこと（後書き）

戦争は完全に終結しました。しかし、話はこのまま第2次大戦まで進めていこうと思いますのでこれからもよろしくお願ひします。
戦後処理・他国の状況については次の話や資料として挟んでいきますので少々お待ちいただけたらと思います。

あと、どうでもいいことですが途中で出てきた二人の外国人の名前はジェフ・ウェイリアムス投手、アーロム・バルディリス三塁手で、二人とも阪神タイガースの選手です。私は生糸のH県民であり、本来コイを応援するべきなんですけど小さい頃（野村さんの時代ぐらい）からずっと虎を応援しております。別に家族は何ファンということもなく、なぜかはよく分かっていないです（笑）。

今回の名言

「いつも対立的な国家よりも、狡猾な国家のほうが恐ろしい主敵である。いつもたてつく国家は、企んでいることに秘密はない。一方、狡猾な国家は本当の狙いを見せず、それは油断のできない『見えざる敵』である」

マウリス

4月3日、戦後処理のための業務が始まった。本来なら昨日から始まる予定だったが一日酔いの奴らが余りにも多く、仕方なく一日休みをとらせて今日からすることになったのである。

まず現在の占領地域について。

タイ・ベトナム・ラオス・カンボジア・マレーシア・インドネシア・フィリピン・ミャンマー、そして太平洋の島々（史実の南洋諸島にグアム等が加わったもの）が現在日本の占領下にある。

これら全てを直接領土に組み込んでもいいのだが、さすがにそれはどうかということと、それぞれの地域には自治権をもたせ、日本国憲法内での立法権・司法権・行政権を「える自治区」とすることにした。

当然それらの自治区には、それぞれ政府・国会・裁判所が持たされていいる。

しかし、日本政府の法案には基本的に従わなくてはならない。政府の法案に不満がある場合はまず自治区の国会でそれを審議して、3分の2以上の議員の賛成があつた後日本の国会にそれを提出することになつてている。

ただしこれでは自治区側が余りにも立場的に弱くなつてしまつので、自治区にも日本の国会の選挙区が設けられ、本国の国会にて自治区から議員を送れるようになつてている。

それでもかなり立場が弱いということには代わりがないが……。

当たり前だが自治区の外交と安全保障は日本が担当する。

そのため陸軍には新しくインドシナ方面軍とインドネシア方面軍、フィリピン・南洋諸島方面軍が新設され、地元の兵士を招集して各方面の防衛に当たらせることとなつていた。

(ただし比・南洋諸島方面軍は日本本土からいくらかは部隊を送る)

翌年にはそれぞれの自治区の政府等が発足し、機能し始めるだろう。各自地区の総選挙は大体3月頃行なわれる予定で、それまでは日本が派遣した人員が内政にあたる。

今回の戦争でかなり損害を受けている地域には日本政府が多額の経済援助を行なう。

ついこないだまで敵であったとはいえ今は日本国民。今度は守つてやらなければならぬのだ。

ところで地元民達の日本に対する抵抗は起こらなかつた。予想外の寛大な处置で自治権が自分らにあるということが分かつたのと、しつかりとした支援が行なわれていてことと彼らの感情が和らいだためである。もちろんまだ和らいだだけであつて、日本支配に対し反感を持つ輩は多いだらう。

これから統治次第ではまだどうなるか分からぬ。大切なのはこれからで、慎重に進めて行く必要がある。

また、今回日本が占領しなかつたパプア・ニューギニアやソロモン諸島は独立を維持することとなり、日・豪の緩衝地帯となる。

ただし日本はパプア・ニューギニアと部分的な安全保障条約を締結、ニューブリテン島に軍事基地を設ける権利を得た。

これを受けてラバウルには港湾施設及び航空基地の建設が行なわれることとなり後に航空師団が進出する。

また、南洋諸島方面隊傘下にラバウル防衛軍が置かれ2個師団ほど常駐するようになり、ラバウルは南太平洋の日本の軍事的な要衝となつた。

それと外征していた日本軍部隊の引き上げも始まつた。

インド方面の部隊はすでに国内へ引き揚げているし、インドネシアなどに駐屯する部隊も引継ぎの部隊の到着を待つて日本へ凱旋する。香港には各地から引き揚げてくる兵達を乗せた輸送船が次々と到着し、わざわざ香港まで出迎えに来た家族らでごつた返した。

波止場で夫・父・兄・子供・恋人を見つけた家族は皆抱き合い喜びの涙を流していた。

久しぶりの再開、彼ら陸軍の兵士は病氣で送還されるか、部隊が再建等のために内地に戻されるかしない限りは国に戻れるとはない。数年行つたら行きっぱなしで、家族には月に一度手紙がくればいいほうであり、それが途切れると不安でたまらなくなる。

そして今日無事な姿を見れみんな本当にうれしいのだ。

もちろん中にはそうでない人もたくさんいる。

実際この戦争で日本は数十万の戦死者と数十万の戦傷者を出している。

撃沈された艦艇の兵士などは遺骨が戻つてくることはない。南方での戦いで戦死した兵もほとんど同じで、遺骨が戻つてくるのは極めてまれである。

また、地雷や砲弾で手足を失つた兵士らもたくさんおり、とりあえず生きてはいるもののこれから的生活に不安を抱えていた。

そのため日本政府は戦死・戦傷者がいる家族には毎月生活費の援助を行なうことにしている。

史実の日露戦争では遺族らに対する補償が少なかつたため、家族は

非常に苦しんだといふ。

しかし、彼らは国のために犠牲となつたのである。その彼らの家族を放つておくのは人としてどうかと思ひ。予算的には苦しいが絶対にやらなくてはならない。大切な人を失つた苦しさは他の人には絶対にわからないし、金なんかでケリはつかないがこれは最低限度の国からの謝罪と感謝でもあるのだ。

このような平時への移行が進む中、都市では講和反対のデモが起きていた。

インドとオーストラリアから領土も金も取つていない、ビリビリヒトだ、といふのである。

まあ、起きて当然であるが一応あれだけの領土がとれたのだ、多少は遠慮してもいいんじゃないかと俺は思うのだが、そこが俺の甘いところなんだろうな。

弱肉強食のこの時代、食わなきや食われるということか。まあ、一人濁りに染まらず生きていいく、って手もあるが。あれだけの国を占領しといて今更濁りもクソもないか……。

さて、それはいい。

デモは主に中国本土の諸都市で起き、北京や上海では5万人が参加する大きなものとなり、一部は警官隊と衝突、けが人を出す事態となつた。

死者が出なかつたのは幸いである。

もし出していたら悪化するだけだろうし。

ただ、比較的おとなしいデモで参加者も当初の予想より少なく、ほとんど暴徒化することはなかつたし、衝突もあの二都市以外ではほとんど発生しなかつた。

対策としては各新聞に対し政府から要請を出して報道協定といつこ

とで助長するような記事を出すなよつてさせ、国民に対し冷静になるよつ繰り返し声明を出した。

もちろんこれ以上拡大の気配があれば、厳しく対応していかなければならない。

が、デモの参加者は次第に減り、ほぼ自然消滅となつた。

新聞に乗つた戦争で息子を失つた母親達からのメッセージが功を奏したとも言われるが、真相はよく分からない。

ただ、毎日デモをしていたのでは自分の生活が成り立たない。

特にまだ日雇いでその日暮らしの生活をしている労働者は多いのだ。まずは自分の生活と思つたのだろう。

また、その年の暮れには日本全土を喪中とさせ、犠牲者に対する式典を各地で行なつた。

戦争中激戦地となつたところでは仏教・イスラム教・キリスト教・ヒンドゥー教などあらゆる宗教合同の慰靈祭が行なわれ犠牲者の冥福を祈る。

来年は良い年になりますよつてこの國民の祈りの中、年は明けていった。

第54話 戦後処理（後書き）

平時になつてからの執筆の進みがどうも遅いです。まだストックがあるのでしばらくは更新できますが、やたらと資料を挟んだりして誤魔化すようになると思います。ネタ切れ状態があるのでご容赦ください。夏休みゆっくりと考えながら進めていきます。気長にお付き合いくださいませ。

今回の名言

「同盟国は巧みに利用すれば、頼もしい友人であるが、同時にフランスの自由と独立を制限しようとする悪意ある友人でもある」
シャルル・ド・ゴール

第55話 大好き！ つねちゃん

年は明けて1月5日、長安市内にある長安総合病院。

その廊下で一人の男が行ったり来たりしながらうつむいていた。

「陛下、彼女は大丈夫ですかね？ 予定日よりも1ヶ月近く遅れて…。ああ彼女に何かあつたらどうしよう…」

「大丈夫だ。大丈夫。きっと大丈夫」

心配しそぎて落ち着かず立つたり座つたり歩き回つたりをしているのがジョン。

若干顔は青い。

昨年末ニュージーランドから帰国してきたが、その後仕事に復帰してもいつ産まれるかものすごく心配していて、仕事が全く手につかなかつたので仕方なく休暇を取らせていた。

今も絵に描いたような心配症のお父さんである。

そして大丈夫を連呼しているのは俺。

何が大丈夫だ、こっちがおかしくなりそうだよ。

つていうかジョン、少し落ち着いてくれ。

お前のせいだ俺が不安が何倍、何十倍にも膨れ上がっているのだが。しかし、その後もジョンが落ち着くことはなく、この二人の情けない姿はその後3時間近く晒されたままであった。

そして分娩室にクッキーが入つてから4時間後、ようやく赤ん坊の鳴き声が聞こえてきた。

そうそう、彼女は人間の状態で出産をしている。

生まれてくる子も人間の状態で生まれてくるらしい。

年末に出産が近くなってきた彼女に獣医と産婦人科医びいきを呼べばいいかと聞いたらひどく怒られた。

でもさ、普通分からないでしょ。

だって一応彼女は犬なんだし。

それはさておき、とりあえず泣き声が聞こえてきたってことは大丈夫なんだよな？
良かつた、良かつた……。

その後20分ほど経つた。

しかしそまだ俺たちは入れてもらえない。

まさか、何かあつたのか……。

そういう暗い予想が頭をよぎった。

が、実際はそうではなかつた。

「なあ、なんか泣き声が増えてないか？」

俺は廊下を隣りで立つたり座つたりしているジョンに聞いた。

「え？ あ、でも確かに。まさか双子……？ もしそうならうれしいです！」

彼は本当にうれしそうだ。

そして部屋からは元気のいい赤ちゃんの泣き声が響いてくる。
けども、これ絶対一人や一人じゃないぞ。

「お父さん、赤ちゃん生まれましたよ。母子ともに無事です。おめでとうござります！」

急に扉が開き、中から看護婦が出てきてジョンに言った。

「本当にですか！…良かつた……」

そう言つてベンチに座り込んでしまつた。

「おい、座り込んでないでほら、早く赤ちゃんと奥さんと一緒に行つてやれよ」

すると彼は飛び上がるように立て中へ入つていつた。

「とにかく、男の子？ それとも女の子？」

俺は看護婦に聞いてみた。

「えつと、確か男の子が5人と女の子が3人ですね。みんな若干体重は低いですが健康に問題はありません」

つてかさ、今さらつと言つたけど8人つてなんだ、8人つて！
8人年子で産むのも大変なのにつぶんにこんなに産めるわけないだろ。

昔流行つたドラマでも5人だつたぞ。
それにプラス3人……。

第一どうやって腹ん中入つてたんだよ。

一人3000グラム計算でも24キロだぞ。
どう考えたつて無理だろ。

「ははは……。本当にみんな元気か？ 特にお母さんやっぱそうだけど
さ」

しかし看護婦は事も無げに、

「みんな全く問題ないですよ。何なら入って見られます?」

「俺はさすがに自分の田で見ないと信じられないの、中に入らせてもらひて見てみる」とした。

「陛下、わざわざ来てくださったんですね! 本当にありがとうございます!」

入るとクックキーが起き上がりとしたので、

「いやいや、そのまま。無理しちゃいけんからね。にしてもお疲れ様だな。マジでよく産んだよこんなに……」

彼女の隣りには小さなベッドが10個ほど並んでいて、そのうち8個にそれぞれ赤ちゃんが納まっていた。

10個つともともとそれぐらいの予定だったのかよ。
普通の産婦人科医なら今頃腰抜かしてるぞ。

俺は一番近くにいた赤ちゃんの顔を覗き込んでみた。
しかし別にこれといつて変わったところのない、普通の赤ん坊。
その隣りの子を見て同じ。
本当にちゃんとした人間だ……。

「いえ、多い犬は1-2匹は産みますよ。これくらい大丈夫です」

「これぐらい、ですか……。

つてかそこだけ犬にあわせるのかよ。

普通の人間なら絶対今頃あの世行きだつたし。

「そもそも旦那のジョンは隣りで呆然として突っ立てるだ。夫婦なら教えといてやれよ。

「子供の数は犬に合わせてあるのかよ。つてかどうやつて腹に納まつてたんだ？」

「俺はとりあえず気になるので聞いてみる。

「さあ？ これも設定した人に聞いてみてください。私も明らかにおかしいと思うんですよ。絶対に人間の姿なら入りませんから」

彼女も肩をすくめて言う。

「いいのかよ、こんないい加減で。

全然リアリティが感じられないぞ。

「まあいいか。とにかくおめでとう。今はゆっくり休むんだぞ。それじゃ俺はこの辺で引き揚げるよ。後は家族水入らずでゆっくりすればいい。じゃあな」

俺はそう言って病室を後にした。

この出産後2ヶ月ほどして彼らは結婚式を挙げる。

俺はその日は子供達（みんなベビーベットに収まっている）の隣りに座っていた。

初めはすやすや眠つていたが新郎新婦が誓いを言う有名なシーン、あのところで丁度ほぼ全員が泣き始めたのでほとんど聞こえなかつた。

あれ一度生で聞いてみたかったのにな……。

といひで再び疑問。

このゲーム、アシスタンントは年取らないんだよな。
だったらあの赤ちゃん達はそのまんま?
いや、いくらなんでもそれはないかな。
おい、どうなんだ作者?

第55話 大好き！ つむぎちゃん（後書き）

駄文失礼しました。正直これもあつてもなくとも良い話だったのですが、割と前からこの話の構想があつたので、とりあえずいれちゃえと挟んでみました。ただ、子供達には活躍してもらう予定です。

今回の名言

「戦略は、時間と空間を有効に使用する科学である。余は前者の使用をより重視する。なぜなら、空間は奪回可能だが、失った時間は永遠に取り戻せないからだ」

グナイゼナウ

1916年4月、統合作戦本部で会議が行なわれ陸海空軍の平時体制への移行が決定された。

まだ世界では戦争が続いているところもあるがアジア地域では終結し、だいぶ平穏さが取り戻されている。

戦争終了後の各地の地域情勢の変化については戦争が全て終わってからまとめて説明するので少々お待ちを……。

とりあえず海軍の現有艦を紹介しておこう。

海軍はこの戦争で多数の新造艦があり、かなり数が増えている。

まず戦艦が旧式艦を含めて13隻。

「美作」型4隻と「安芸」型が4隻、それに「朝日」などの旧式艦が5隻いる。

旧式戦艦はこの大戦では主に船団護衛に従事していた。
戦艦で沈没した艦はない。

航空母艦は練習艦となつた「富古」を含めて5隻。
数が増えているが、これは終戦間に商船改造空母「蓬龍」型2隻
が完成したためである。

無論実戦には参加していない。

「鳳翔」よりも若干大きい空母だが搭載機は逆に少ない。
商船改造だったためであろう。

空母も沈没艦はなし。

装甲巡洋艦は16隻。

「箱根」型が4隻、「白根」型と「出雲」型がそれぞれ6隻である。数々の実戦に参加、傷つきながらも戦い抜いた艦が多い。特にカルカッタ沖海戦は装甲巡洋艦が中心となつて戦い勝利を掴んだ。

今後も期待のかかる艦種である。

今回の大戦では潜水艦の雷撃で「筑波」「生駒」の2隻が戦没。

次は二等巡洋艦。

現在保有している数は16隻。

内訳は「天龍」型8隻、「美々津」型6隻、「対馬」（史実の「新高」型）型1隻と「笠置」型1隻である。

戦中は水雷戦隊旗艦、船団護衛、哨戒など様々な役目をこなした。あらゆる戦域に投入され活躍、多くの戦果を上げる。

当然その分戦没艦も多く、「美々津」がビスマルク海海戦で、「揖斐」「美々津」型が敵潜の雷撃で戦没。

他にも「壱岐」（「対馬」型）が蝕雷、「笠置」が敵駆逐艦の雷撃で沈没している。

「笠置」が戦没したのは1915年4月、アンダマン諸島沖。

単独で哨戒任務についていたところ、たまたま現れた敵駆逐艦4隻と交戦し1隻を撃沈したが残りの艦の雷撃で沈没した（アンダマン諸島沖海戦）。

そして駆逐艦だが、彼らは5種94隻もいる。

戦争開始後も船団護衛に従事する護衛駆逐艦が追加で建造されたためだ。

彼らもあらゆる海域であらゆる任務をこなしている。

敵艦隊への雷撃、船団護衛、哨戒に加え掃海や溺者救助までが彼らの仕事だ。

まさに便利屋として活躍するが戦没艦が絶えなかつた。

戦没艦は合計18隻。

その内訳は、敵艦との交戦が7隻と最も多く、次いで敵潜の雷撃4隻、蝕雷2隻、座礁1隻、航空攻撃1隻、衝突事故1隻、防波堤とするため自沈したもの2隻である。

ちなみに航空攻撃は1915年1月のマレー半島への兵員輸送作戦の際のものだ。

もはやすでに戦力を喪失していたインドネシア軍の航空隊だが、残存機全てをかき集めて（といつても水上機とあわせてもたつた15機だったが）日本の船団を攻撃したのである。

そのときの話では簡単にしか触れていなかつたがこの攻撃で護衛駆逐艦「楠」が沈没、輸送船1隻が損傷した。

「楠」の沈没原因是小型爆弾が魚雷発射管に命中したことと搭載魚雷が誘爆したためだ。

しかし、敵機は対空砲火で7機撃墜され、残りも駆けつけた間接護衛隊の空母艦載機により全て撃墜されている。

「楠」は日本海軍初の航空機の攻撃で沈没した艦艇となつた。

最後は潜水艦。

本大戦では装甲巡洋艦などの大型艦艇をも葬るなど大手柄を立てた。もちろん通商破壊、哨戒、港湾監視などでも彼らは八面六臂の大活躍である。

終戦時残存艦は5種71隻。

開戦時に56隻、その後24隻が追加で建造され大戦後期に竣工している。

戦没艦は9隻。

沈没原因是潜水艦の性質上不明であるが、大体は敵哨戒艇や駆逐艦に発見され爆雷攻撃を受けたが、浮上中に砲撃を受け沈没したもの

がほとんどだらう。

ソナーがまだお粗末であることからまだ後者だと思われる。潜水艦自体もまだ潜つていられる時間はそれほど長くないし。

さて、大体こんなところである。

他にも旧ベトナム海軍などの東南アジア諸国海軍が保有していた艦があつたが、それらは全て武装を減じて海上警備隊（戦時は海軍の指揮下に入るが、平時は警察の組織の一部）の警備艇となるか除籍されて解体された。

日本海軍で運用しようにもすでに旧式化していたり、同型艦がいくつで戦隊がくめなかつたりしたのである。

それで今回の軍縮で廃棄の対象となつたのは以下の艦艇。

戦艦	「朝日」以下5隻
装甲巡洋艦	「出雲」以下6隻
一等巡洋艦	「対馬」「明石」
駆逐艦	護衛駆逐艦を中心に30隻
潜水艦	15隻

他にも雑役船なども旧式艦が除籍されることとなり、かなり海軍はすつきりとする。

ただし海軍には現在も建造中の艦艇がいくつかあつた。

それらも軍縮により建造が中止されたり、計画を変更して民間の輸送船として就役することとなる。

とりあえずそのうち主な艦艇は以下の通り。

装甲巡洋艦	「磐梯」型	6隻	起工中止
二等巡洋艦	「黒部」型	4隻	建造中止
駆逐艦	「峰風」型	24隻	起工した8隻はアルゼンチン海軍へ売却。残りは起工中止。
兵員輸送艦	「富島」型	4隻	起工した1隻は客船へ改造後日本郵船へ売却。残りは起工中止。

また、現有艦の中にも他国海軍に売却されるものがあった。

空母「逢龍」型は、ブラジル海軍が空母のノウハウを身につけるために購入したいという要請があつたので売却している。もともと商船改造空母であり、艦隊型のものでないため速力も遅いし搭載機も多くはない。

技術的には多少新技術が流出することになるが、その分高く購入していただこう。

ブラジルの元首の角田は、友情割引はないのかと、ねていたが、これは商売だからな。

そして次は陸軍。

陸軍は新しく設置されるインドネシア方面軍などのために逆に部隊を増強しなくてはならなくなつたが、新設部隊はあくまで現地の兵を使うということにして、いるため本土の部隊がかなり削減された。これにより既存の8つの方面軍から30個もの師団が順次削減されしていくことが決定、しかしそれとほぼ同じだけ東南アジア各地で新設されているので大した効果はなかつた。

しかし、現地で兵士を集めるのでそこで雇用を生み出すことにはなり、それにより多くの若者が職を得ることができた。

それと空軍だが、これは多少1個航空師団あたりの定数を削減しただけで大した変化はない。

むしろ新たに領土に入った地域の防空のため数を増やすねばならず、これも軍縮どころではなかつた。ただ、例の「とく急には増やせない」のチマチマとしていくしかないが。

さて、この軍縮や各企業の生産縮小などにより大量の失業者が発生する「ことになつたが、その対策は大量の土木工事を起しすことである。

まだインフラの整備が出来ていないとこるが非常に多い。さらにダム建設などの大型事業も計画されていく。

そしてその事業の一つにクラ運河建設計画があつた。

第5・6話 再び軍備縮小（後書き）

「…最近本当に暑いですね…。甲子園で頑張る球児達はあの炎天下の中本当によく試合をやっていると思います。昨日中国勢がいきなり2校もやられてしましましたが、我が県代表の広陵高校には是非優勝して欲しいものです。頑張れ、広陵！」

（全く関係のない話ですいません。しかも皆さんそれぞれの県を応援していらっしゃるというのに…）

甲子園に熱中して更新が滞るかもしれません、お許しください。ストックはあるので忘れなければ更新はできますが。

今回の名言

「山あいの町の子供たちに一度でいいから大海を見せてやりたかつたんじや」

鳴 文也（徳島県・元池田高校監督）

我が県の広島商業は彼のチームに決勝で見事に粉碎されたようですね…。

クラ地峡……。

普通の世界で言えばタイ領マレー半島の北部にあつミャンマーとの国境に近いところである。

地図を見ればチュムボン、スラーターニー、ブーケットといった地名が近いところに乗っていた。

それらの都市がどんなものか俺は良く知らないけど。

今、そのクラ地峡に運河建設の話が持ち上がっている。

クラ地峡にはこの世界だけでなく、普通の世界でもクラ地峡に運河を造ろうといつ計画があった。

ご存知の方も多いだろ？

クラ地峡に運河開発計画が初めて持ち上がったのは17世紀の頃だとう。

その計画はフランスによるものだが、結局構想だけで終わつたらしい。

19世紀になつてイギリスも計画を立てるが資金不足で断念。

そしてスエズ運河を造り終えたフランスが再び造ろうとしたのだが、今度はイギリスがシンガポール港の優位を維持するためにタイと協約を結んだため実現できず。

日本も1934年にシャム大運河事業組合というのが結成され、宝くじを発行してその資金で運河を造ろうとしたが、当時大陸進出を

活発に行なつていた日本を警戒した英・仏等の反発で流れてしまった。

太平洋戦争中にも軍が造ろうとしたらしいが、造れるわけもなく結局実現せず。

そして1973年、米・日・仏・泰の4カ国での計画が立てられたが、核爆弾を使用した掘削に対する反発等が激しく断念せざるを得なかつた。

ではそもそもなぜ運河なんぞ造ろうとしているのか。

第一の理由は距離の節約である。

普通ならマレー半島を迂回し、マラッカ海峡を通つてこないといけないのである。

それがこの運河が出来れば距離なら800キロ、時間にして一日が節約できるのだ。

もちろんスエズ運河やパナマ運河と比べれば大した差ではないが、そこそこ短縮できる。

ちなみに古代のこの地域の人はわざわざマレー半島を迂回せず、船（といってもジャンクのような大型は無理だが）をそこで棄てるか、引きずつて山を越えたらしく。

その手の話は民話の中にあるとか。

そして第一の理由はマラッカ海峡を通らなくて済むということである。

マラッカ海峡は「海賊海峡」、「魔の海峡」と呼ばれることから分かるように治安が悪く、海賊事件が絶えない。

何年か前に日本船が襲われる事件もあり、一時期話題となつた。

といつてもこの世界では割と治安はいいので、その手の事件は今のところ少ない。

ただ、この海峡は案外浅瀬が多いのが問題なのだ。

幅は一番狭いところで60キロほどしかなく、両岸にはマングローブ林が広がっている。

そのマングローブは土地造成をしながら、だんだんと海のほうへ広がつていつてしまう。

結果船の通れるところは年々減つていいくわけだ。

（と言つても1年に何メートル、何十メートルといつて進むわけではないが）

しかももともと浅いのであちこちで船が難破したりして航路をふさいでしまっているところもあるらしい。

そのため普通の世界では年々タンカーが大型化していくことから、一部のタンカーはマラッカ海峡を通れなくなつて、わざわざ大回りしてロンボク海峡やスンダ海峡を通るものあるらしい。

現在でも浚渫が欠かせないとこりなのである。

他にもタイ南部の開発促進などのメリットもある。

ただ問題は莫大な建設費用だ。

果たして運河建設によるメリットはその費用に見合つのか。

どつちかといふと運河事業はマイナスにつくかもしねりない。

莫大な建設費用はもちろん、タイ南部の発展の代わりにシンガポールの方が廃れる恐れもある。

また、いちいち金を払つて運河を通るよりも普通にマラッカ海峡を通つたほうがいいとして運河が利用されない恐れだつてないわけではない。

しかし、長期間にわたつて大量の雇用を生み出せるし、1日短縮できるのはわりと魅力的である。

軍隊輸送の面では1日短縮できるのは大きいだらう。（もつとも、将来インド洋方面で戦いが起きなければ関係ないといえば関係ないが）

国会審議では反対意見が多く出たが、結局与党の賛成多数で可決された。

ルートや設計には丸1年を費やし、実際に着工したのは1920年2月1日。

これだけ遅くなつたのは、議会での議論が長引いたことや、第1次世界大戦の終結を待つたためでもある。

試行錯誤の結果、ルートは、サトゥンから標高100メートルほどの山を迂回してソンクラへ抜ける、全長102キロのルートに決まつた。

運河の形式はパナマ運河同様閘門式である。

閘門式とは、閘室と呼ばれる前後を扉で仕切り、そこへ船を入れて扉を閉じて逆側の扉の水路の開閉によつて水位を昇降させて船を上下させる形式のことだ。

その設計・建設にはパナマ運河建設に携わつた、青山士^{あおやまあきら}らが参加しており、その経験を生かして活躍している。

今まで日本が造つた運河とは比較にならない大事業であつたが、彼らのおかげでなんとか上手くいきそうだ。

(今まで日本で造られた運河では琵琶湖疊水や利根運河などがそこそこ有名だが、いづれも10キロに満たない小規模なものであるため、今回のものとは比較にならない)

工事には東南アジア各地や日本本土から数十万人の労働者が送り込まれ、最終的には述べ150万人が働いたといつ。

この建設の最中にその現場近くには町ができ、工事関係者らで賑わつた。

他にもタイ南部はその田論見どおり、工事に必要な道路等のインフラ整備も進んだし、それぞれの街は活気に満ちる。

特に開発が著しいのは運河の端と端であるサトウンとソンクラ。
それまではそんなに大きな町ではなかったのに、運河開発のおかげ
で毎年ものすごい人口増加率を記録している。
さらに港湾施設等の建設も当然行なわれ、運河完成を待たずして港町
として発展していく。

こうして様々な効果はもたらしているが、この建設費用のは国家財
政にとって結構大きな負担となっている。

軍備縮小が進んでいくといつてもすぐに出費が減るわけではないし、
今回の大戦で被害を受けた東南アジア各地の復興や開発のため出費
はつなぎ上り……。

今更だがもう少しあとでも良かつたかも知れない。

後悔先に立たず。

後の祭り。

まあ、なんとかなるわ。

こうなつたら宝くじでも売つてかせぐか？

うちの親父みたいな貧乏人で夢見がちな奴はすぐ飛びつくぞ。

一攫千金を夢見て毎年のようにサマージャンボだのグリーンジャン
ボだの……。

「買わなければ当たらない」をモットーに買ひ続けるがどうせ3
00円、よくて3000円だというのに（1万円すら当たったこと
ないつて一体どんだけ運から見放されてるのか……）。

夢見るのは悪いことじゃないけど、俺からすればその金で寿司でも
食いに行きたい。

それにいざとなつたら国債でも発行して……。
別にどつかの国みたいに600兆も抱えているわけじゃないし。

第57話 クラ運河建設計画（後書き）

今日は皆さんが存知の通り広島へ原爆が投下された日です。戦記小説を書いている者が書いたのも変かもしませんが、広島県民として原爆で亡くなられた全ての方のご冥福を心からお祈りします。

今回の名言

「誰かが私に銃口を向けても、私が微笑みながら銃口に向かうことできたなら、そして、銃弾を受けても、心に神の名を唱えることができたなら、その時こそ私は、祝福に値するものとなるでしょう」
マハトマ・ガンディー

1918年10月2日、北アフリカ軍に最後まで抵抗していたモーリタニア軍部隊が全滅し、第1次世界大戦は終結した。今回の大戦で多くの国が併合・吸収され、世界の様相は様変わりしている。

『アジア・太平洋地域』

【太平洋戦争】

交戦国　　日本　　VS　　オーストラリア・インドなど

詳細は省略。

【アフガニスタン戦争】

交戦国　　カザフスタン　　VS　　パキスタン

アフガニスタン・トルクメニスタン・ウズベキスタンなどを巡つての戦い。当初は戦力的に圧倒的に優位なカザフスタン軍が中央アジアを席巻、パキスタン側についたアフガニスタン軍を粉碎した。しかし、カンダハル会戦でパキスタン軍が形勢を逆転させカザフスタン軍は敗走。パキスタン軍がカブールを奪還した後に講和条約が締結された。

結果 キルギス・タジキスタン・ウズベキスタン・トルメクニスタンはカザフスタン領に、アフガニスタンはパキスタン領になった。

【イラン・イラク戦争】

交戦国 イラン VS イラク

イラクのシリア占領に反発したイランが宣戦布告して始まった戦い。もともとイランとイラクはクウェートを巡っての国境問題も抱えていたし、国家元首同士の仲も良くはなかつた。イラク側は軍事衝突までなるとは全く考えていなかつたが、今回の大戦でシリアがイラクに併合されるとイランは突如イラクへ侵攻。イラク軍は戦争準備をある程度は整えていたものの、戦力的に優位なイラン軍に圧倒され国境陣地は次々と破られた。開戦わずか一週間で、首都バクダットは陥落。国家元首は脱出に失敗し、捕らえられ国としての戦争は終結した。イラク陸軍部隊の一部はその後も抵抗したが、1年以内にイラク全域がイラン支配下に入った。

結果 イラク・シリア・レバノンがイランの支配下に入る。

【その他変化】

- ・イエメン・オマーン・パキスタン・ヨルダンがサウジアラビアに併合された。
- ・アゼルバイジャン・アルメニア・グルジアがトルコに併合された。

【南北戦争】

交戦国　南アメリカ　VS　北アメリカ・メキシコ

帰属未定のアラスカをめぐる南北アメリカ軍の戦争。圧倒的に国力で勝る南アメリカ軍は戦争序盤から各地で北アメリカ軍を撃破、3ヶ月で首都モントリーオールは陥落した。しかし北アメリカは首都をイエローナイフ（現カナダの地名で「黄色いナイフ」という意味ではない）に変えて粘り強く戦い、起死回生を図つてメキシコに参戦要請を出した。メキシコ元首の相田は南アメリカの北先生が嫌いなのと北アメリカの小田先生が自分の部の顧問であることから参戦。ところがこれは南アメリカの罠で参戦後数ヶ月して起きたエルパソ会戦で主力を撃破され米軍に国土を蹂躪される。その後一年間抵抗を続けたが、両国軍ともに殲滅され戦争は終結した。

結果　北アメリカ・メキシコが併合され、南アメリカ合衆国はアメリカ合衆国と改称した。

『南アメリカ地域』

戦争は全くなく、平和的に領土の分割が行なわれた。

パラグアイはブラジルに、ウルグアイはアルゼンチンに、ボリビアはチリに、エクアドルはコロンビアにそれぞれ併合された。

『ヨーロッパ・ロシア地域』

【東西ロシア戦争】

交戦国 西ロシア帝国 VS 極東ソビエト帝国

中央ロシアを巡る戦争。当初は装備も優位で、体力的にも屈強なソ連軍が有利と思われていたが、西ロシア軍に史実にはいない名将が現れていて各地でソ連軍を敗走させた。戦闘は極めて順調で中央ロシア占領は目前であつたが、フィンランドとも戦争を始めるに至った（後述）西ロシア帝国は急遽講和路線に転換、ほぼ中間線である東経98度線を境に分割することを提案した。極東ソビエト帝国はこれに同意、戦争は終結した。

結果 中央ロシアが98度線を境に分割され、それぞれ併合された。

【北欧戦争】

交戦国 西ロシア帝国 VS フィンランド王国

東西ロシア戦争の真っ最中である1914年5月にフィンランドがロシアに併合されたバルト三国へ侵攻して始まつた戦争。対ソ戦に忙しいロシアの背後を突いたわけだが、侵攻当初からスウェーデン軍は各地で撃退され、バルト三国占領に失敗。にもかかわらずこれを重大な脅威としたロシアがソ連とわざわざ講和をしてフィンランドを総攻撃、1915年3月には完全に支配下に入った。

フィンランドが勝ち目の薄い勝負をしかけたのはスウェーデンなどが支援を約束したためとされていたが、スウェーデンの思惑はロシアの目をソ連からそらすためだったとされる。理由はソ連元首にスウェーデン元首が恋をしていたためとか噂されている。ただ結局スウェーデンは武装中立を明記してある自国憲法のため参戦できず、結果としてフィンランドは見殺しとなつた。また、フィンランド政府や軍に無能が揃っていたことも原因のようだ。

結果 バルト三国・ベラルーシ・フィンランドが西ロシア帝国に併合された。

【ユーゴ紛争】

交戦国 ユーゴスラビア VS ウクライナ・ユーゴ内の独立過激派

大戦勃発に刺激を受けたルーマニアの分離独立を求めるテロ組織「ルーマニア独立革命軍」が起こした内乱に隣国ウクライナが介入して発生した戦争。反乱は各地に飛び火する気配だったがユーゴ軍が事前に防ぐことに成功し、ルーマニア独立革命軍は窮地に立たされる。そこで成功後領土を見返りに与えることでウクライナに介入を求め、ウクライナはこれに応じ国境を越えて攻め込んだ。しかしキシニョフ（普通の世界ではモルドバの首都）の攻防戦でウクライナが敗退すると革命軍内部で分裂が起き弱体化。革命軍は殲滅され、ウクライナも気付いた時にはユーゴ軍が領内に攻め寄せており、3ヶ月の抵抗の後ウクライナは降伏した。

史実ではユーゴスラビアは「1つの国家、2つの文字、3つの宗教、4つの言語、5つの民族、6つの共和国」と言われた程複雑な国だったが、今回は設定の時点で民族がスロベニア人に統一されている。そのため国としての結束が高かつたので独立運動が飛び火しそうでしなかつたのだ。

結果 ウクライナがユーゴスラビアに併合された。

【イタリア戦争】

交戦国 イタリア VS オーストリア・ハンガリー帝国

注) オーストリア・ハンガリー帝国は史実と違い領土はオーストリア・ハンガリー・リヒテンシュタイン・チェコ・スロバキアのみ

この大戦唯一、コンピューター制御の国家が生徒の国家に侵攻した戦争。史実と違い弱体化どころが強大になつていてオーストリア・ハンガリー帝国が突如イタリアに侵攻。第一次大戦では中立を予定していたイタリアはこの侵攻にほとんど抵抗できず、北イタリアが敵の手に落ちた。が、イタリア軍が起死回生を図つて行なつたベネツィア上陸作戦が大成功、史実と違い内陸国であるため海軍力を持たない帝国軍側は当然この上陸を防げず、背後を突かれて動搖した帝国軍はフィレンツェでイタリア軍の反撃を受け敗退。侵攻軍はイタリア軍に降伏した。

結果 オーストリア・ハンガリー帝国がイタリアに賠償金を支払うことで講和した。

資料 第一次世界大戦結果 その1（後書き）

ご覧の通り、史実では起こり得ない戦いばかりです。ただこれは今回の大戦が領土問題により自動的に起こされた戦争ということですのでご承知いただきたいと思います。英・仏・独などの戦いはその2の方で触れますので少々お待ちください。

今回の名言

「良将は戦わずして勝つ」

楠正成

【歐州戦争】

交戦国 イギリス・フランス VS ドイツ・スペイン

ベネルクス三国の支配権を巡る戦争。当初はドイツ・フランス・イギリスが三つ巴の戦争をすると思われていたが、イギリス・フランスが密約を交わしてドイツに宣戦。これに対しドイツは（元首同士が）仲の良いスペインに参戦要請を出し、スペインが参戦。こうして激しい戦争が展開されていく。

大戦初期はハーグにイギリス軍が電撃的に上陸、オランダの大半を占領した。フランスもベルギーとルクセンブルクを攻略。これに対しドイツ軍は反撃を試みるが、決定的な損害を双方与えることができず、いたずらに損害だけを重ねることとなる。東部フランス戦線（独仏国境）では史実と異なりフランスに攻め込んだりせず、あくまで攻めてきたフランス軍を迎撃する方針だったため睨みあいが続く。スペイン軍の戦争準備が遅れたことからフランス西部戦線（仏西国境）も膠着状態。

ドイツ海軍はヨーボートによる商船攻撃を開始した。これはイギリスの鉱業生産の大半を占めるグリーンランド（）からの船団を狙つたものでこれは大成功。輸送船団方式を採用しているにもかかわらず、対潜兵器が史実とさほど変わらないことや大戦前に大量に建造されていたヨーボートの集団攻撃で護衛艦艇から次々に沈められていき、イギリスにたどり着く前にほとんどが撃沈されてしまう。

大戦中期になるとドイツ軍が航空隊を本格的に投入、損害が急増した。イギリス軍も航空隊を進出させドイツ各地へ爆撃を行なつた。やられたらやり返すの爆撃が行なわれ、ドイツ西部の都市やオランダ・ベルギーの諸都市は壊滅した。激しい空襲でオランダ・ベルギーの空軍基地の機能が低下するとイギリス本土への渡洋爆撃も始まり、イギリス南部に大きな被害を与える。フランス軍はドイツ領内への侵攻を計画していたがスペイン軍の攻撃が予想以上に激しく、ピレネー山脈の防衛線が破られてしまった。フランス軍は兵力をそちらにまわさなければならずドイツ侵攻計画は延期された。

一方海では新型ソナー等の対潜兵器の充実から次第にユーボートの損害が増大していつている。それ以外で両海軍に目立つた動きはない。

大戦後期は講和に結び付けられる大戦果を求めて双方が活発に攻撃をかけた。ドイツ軍はアルフォンジーノ作戦を発令。作戦名はキンメダイというなんとも間抜けた名前だが攻撃は苛烈を極め、150万ものドイツ軍がオランダへなだれ込んでイギリス軍を敗走させた。イギリス軍は全ての武器を棄ててブリテン島に引き揚げる。スペイン軍もエンシエロ（牛追い）作戦を発令してフランス軍を総攻撃。しかしフランス軍はこの攻撃を跳ね返し、皮肉なことにスペイン軍がフランス軍という牛に追い回される事態となり、ピレネー山脈の向こうまで逃げることとなつた。

一方フランス軍は戦力を東西に一分されながらもドイツ領内への侵攻を目指し、シユバルツバルト（黒森）の突破を試みる。しかし、強靭なドイツ軍陣地に阻まれ損害が急増。さらにアルフォンジーノ作戦でのイギリス軍敗退、ベネルクス三国失陥が伝わると士気も急速に低下し作戦中止が命令された。後にベルギーを取り戻そうと攻撃をかけているがこれも失敗している。

陸での勝利を確信したドイツはここでようやく海軍をだしてのイギ

リス攻撃に出た。イギリス軍も上陸支援以外でほとんど艦隊を動かしていなかつたので最初で最後の大海戦が行なわれる。場所だけ史実どおりにコトランド沖で発生した海戦は史実と大きく違つた結果になる。

参加した主な艦艇は史実より少し減つてイギリスが戦艦・巡洋戦艦あわせて31隻、ドイツが21隻（旧式戦艦含む）。ところがドイツが決戦前夜に残存ユーボートのほとんどを投入して戦艦部隊を襲撃。多数のユーボートが犠牲となつたが、かわりにイギリスの戦艦3隻、巡洋戦艦4隻と装甲巡洋艦2隻などを道すれにし、戦力差を減らすことに成功した。

そして翌日の海戦はまさに死闘となつた。真正面からぶつかつた両艦隊は一步も引かずお互いを撃ち続けた。駆逐艦から戦艦まで全ての艦艇が撃ち合い結局共倒れとなる。英軍は戦艦4、巡洋戦艦4をはじめ21隻が沈没。ドイツは戦艦2、巡洋戦艦3など16隻。ドイツ艦隊は港が近かつたのと、優秀なダメージコントロールシステムが効果を發揮して沈没は若干少なかつた。

この海戦後、大戦継続に嫌気がさした両国が講和条約を締結して戦争は終わつた。結局ベネルクス三国は占領したドイツが領有することになる。この戦争で戦場となつたオランダやドイツ西部・フランス西部は荒廃、その爪あとは深いものであつた。結果からすればドイツの一人勝ちのようだが、それらの地域はあまりにも派手に破壊されていて、結局荷物を背負い込んだようなものとなり、戦後復興に大きな労力を要することになる。

結果 ベネルクス三国はドイツへ併合された。また、デンマークもドイツに併合されている（これはデンマークが宣言したためで、他国はデンマークまで手は出せなかつた）。

この世界ではグリーンランドは非常に豊富な資源を持ち、さらに気候も少し暖かくなつていて普通の世界のグリーンランドより暮らしやすい土地となり開発が進んでいた。石油も産出するなどイギリスにとって大変重要なところで、グリーンランドからの航路はまさにイギリスの生命線といえる。

『アフリカ地域』

【北アフリカ戦争】

交戦国 北アフリカ共和国 VS エジプト王国・モーリタニア王国

北アフリカのしかけた一方的な侵略戦争。領土問題などは一切なかつたのに大戦開始と同時に北アフリカ軍が突如両国に侵攻、両国は全力で迎撃にあたつたがあえなく防衛線を破られ、1915年の終わりには両国の組織的抵抗は終わつた。陸軍の残存部隊はその後も各地でゲリラ的に抵抗したが、北アフリカ軍の徹底的な掃討作戦で殲滅され終了した。

結果 エジプト・モーリタニアは北アフリカに併合された。

【中部アフリカ戦争】

交戦国 中央アフリカ・チャド VS ナイジェリア・ケニア・エチオピア

この二つのグループの対立から起きた戦争。第1次世界大戦勃発によりタンザニアがケニアに併合されたことが直接の引き金となり、全面戦争となつた。国の数も多いナイジェリアらが有利と思われた

が、工業化に成功していた中央アフリカの兵器の質が他国に比べ圧倒的に高かつたため各地で敵軍を撃破していった。まずチャドと挟み撃ちにあつたナイジェリアが降伏、続いてケニア、そして最後まで抵抗したエチオピアも1916年5月に降伏して戦争は終了した。

結果 北ナイジェリアはチャドへ、南ナイジェリアとケニア、エチオピアは中央アフリカに併合された。

【南アフリカ戦争】

交戦国 南アフリカ共和国 VS アンゴラ

北進を進める南アフリカの侵攻によつて起きた戦争。第1次世界大戦勃発時にボツワナやジンバブエを併合した南アフリカはアンゴラの征服を目論み、国境で紛争を起こして侵攻した。もともと政策のまずさから工業化に失敗していたアンゴラの国力は非常に弱く、さしたる抵抗も出来ぬまま降伏した。

結果 アンゴラは南アフリカに併合された。

そのほか

ボツワナ・ジンバブエ・マラウイ・マダガスカルが南アフリカに併合された。

資料 第一次世界大戦結果 その2（後書き）

しばらく更新が遅れ申し訳ありませんでした。我が家が誇るボロパソコンの不調が原因です。なぜかインターネットに接続できない状態が続き、昨夜ようやく復旧いたしました。なぜ昨日更新しなかつたのか？と思われるかもしませんが、昨夜は他の作者様の一読者になつていただためです。いやいや、本当に面白い作品が多いです。虜になつてました。ついでにハリポタの新刊も昨日から読み始めたもので…。

若干モチベーションも低下しております。更新が遅いのはそのせいか、ボロパソコンのせいでありますのでどうかご容赦ください。それと本日は皆さんご存知、第2次世界大戦が終わつた日です。戦争でなくなつた全世界の方に深く哀悼の意を表します。

第1次世界大戦終了後、日本は大きく成長しようとしていた。インドネシア等領土の拡大やインド・オーストラリア等との自由貿易協定締結により市場が拡大したためである。

この経済成長の中で一番伸びた分野が自動車工業である。この分野では政府の保護のもと性能の面では歐米車に負けないものができつつあったが、大量生産が出来ずに価格が高かつたことから当初は伸び悩んでいたところであった。

しかし、コンベア方式の採用による大量生産が始まり価格は急激にダウン。

経済成長のおかげでだいぶ懐に余裕の出来ていた中流層以上の国民がこれに飛びつき、自家用車を持つようになった。

さらに低価格になっていくといわゆる庶民も自家用車を持ち始め、毎年自動車の生産量は飛躍的に伸びていくことになる。

さらに外国への輸出も開始され、戦争の傷の浅いオーストラリアへの輸出は好調。

人口が史実よりも少し多いことや経済的に割合発展しているためだらう。

敗戦国の中で唯一本土を攻撃されていないところだし。

日本もオーストラリアも広大な国土を持つため移動・輸送に自動車は欠かせない。

低価格になつたことでトラック運送業も本格的に始まり、それまではほとんど走つていなかつた車があちこちで見かけるようになった。

この恩恵を受けたのが建設業とエネルギー業である。

エネルギーは言わなくてもいいだろうが、車を動かすには当然ガソリンが必要だ。

そのガソリンを提供するのが彼らである。

大都市にはガソリンスタンドがどんどん造られていった。

建設業が恩恵を受けたのは道路の整備のためである。

まだ日本の道路のほとんどは舗装も何もされていない、ただの土の道だ。

自動車の普及にともない道路の整備は急務となり、大規模な予算があてられて日本中で整備が始まった。

これにより建築ラッシュも始まっていた建設業界は人手不足が深刻化。

どこの建設業者も手一杯の状態となり、大量の雇用を行なつて工事をこなしていく。

これが生み出した雇用は非常に大きく、多くの失業者が職を得ることができ失業率の改善につながった。

そのほかの分野も発展が著しい。

重工業はインドやオーストラリア等への鉄鋼の輸出が好調だし、自動車工業の発展は鉄鋼の需要を急激に拡大させた。

造船業も好調。

多数の輸送船を大戦で沈められたインド・オーストラリアなどからの注文もだが、南アメリカ諸国やアフリカからの軍艦・商船の受注が最も多かつた。

これは自国に満足な造船設備を持たないブラジルなどが、軍備拡張の一環として海軍力の整備を始めたためである。

史実ではイギリスに注文していたが、第1次世界大戦で大量の商船

を沈められた上に造船業も大きな被害を受けたイギリスは自国の船舶だけで精一杯となり、とても輸出どころではなかつた。

そのため日本に注文が回つてきており、軍縮で暇になりつつあった日本の造船業を活発にしたのである。

小売業では女性の進出が著しい。

景気の拡大に伴つて国民の消費意欲が大幅に伸び、大都市では次々とデパートが建てられ週末は多くの家族連れなどでごつた返した。その中で接客などを担当するのはほぼ女性。

ファッション業界でも女性デザイナーの活躍が光りだした。

史実の時代的には大正デモクラシー、といったところなんだろうがすでに普通選挙、しかも女性にも認められている、が施行されるためその手の集会等は少ない。

医療制度や年金制度等に関しては現代から考えればかなり不備ばかりといった状態があるが、それが普通と考えている国民達からは特に目立つた運動も起きていない。

この好景気のおかげで一人あたりの国民所得も大きく伸びている。貧富の差が広がるというマイナス面もあるが、政府としても低所得者への減税を実施するなどある程度は格差是正に努めているところだ。

また、農村からの人口流出が始まつていても大きな課題となつている。

農業は天候によって年収が大きく左右される。
干ばつや洪水、冷害……。

天災は人の力ではどうしようもない。

さらに公害が発生して収穫量が激減した地域も報告されている。

そのため農業よりも都市に出て賃金労働者となつたほうがいいとし

て田舎から出て行く若者や、家の生活のためと出稼ぎにて親達は後を絶たない。

彼らは安い賃金できつい労働をさせられたり、危険な労働に従事させられている。

労働基準監督局などが監視の目を光らせているが隅々まで行き届かないことが多い。

インドネシアなどの新領土でも各地で積極的な開発が行なわれている。

本土に比べればかなり遅れている経済発展だが、それは仕方がない。大戦での被害が大きく、復興するだけでも一苦労だったのだ。

今は鉱山開発、港湾・航空基地整備、農業への支援が主である。

一次産業への支援が主だが、企業の中には労働力が本土と比べれば安い東南アジア地域への進出を検討しているところもあり、まだまだ発展していくだろう。

港湾施設の整備が終わつたブルネイなどでは、重工業や石油化学工業の進出が早くも始まっておりその地域に産出する資源などを生かしての発展が始まった。

石油の見つかっている場所では、本土でほとんど石油が採れないの急ピッチで精油所が造られて生産を開始している。

自動車の本格的な普及が始まった本土では石油が不足気味でその確保が急務なのだ。

政府の支援を受けながら石油会社が次々に油田の開発・パイプラインの整備を進めていく。

ただこちらも発展が進んでいるのはほとんどが海に面し、なんらかの資源を産出ところばかりである。

ジャングルの奥までは当たり前だがなかなか手が届かないのだ。

特にボルネオ（カリマンタン）島は広大な面積を持つが、開発されているのは島の周囲だけで、中央部は深いジャングルに覆われ、そこに何があるかすら分かつてない。

探検家がジャングル奥地に入つて行方不明になつた事件もある。現在は川に沿つて政府の調査団が少しずつ調査を始めたところだ。

そうそう、クラ運河の建設作業は順調に進んでいる。大戦で大量に余つた火薬がここで使われ、毎日のようにあちこちで発破が行なわれていた。

砲兵隊が出て砲撃をして吹き飛ばそうという案も出たぐらいだが、不発弾が出る恐れが高いので見送られている。

ただでさえこうした大工事は殉職者が絶えないのだ。出来る限り建設作業員を危険にさらしたくはない。

とはいへ、死者はすでに200人を超えている。

岩盤の崩落、滑落、火薬の爆発など建設現場はまさに戦場だ。実際その手の事件はほぼ毎日起きているようなもので、けが人の数もかなり多い。

建設ラッシュに沸く本土でも様々な工事現場で多くの男達が命を落としている。

過労なども目立たないだけでかなり深刻だ。

この労働者の大変な苦労が経済成長を支えているのである。

ただし政府としては、ただこれを見ているわけにはいかない。

そのため労働災害防止法、労働災害補償法などを出して事故に対する政府や企業からの補償が決められた。

公害など経済成長には裏の面も多い。

政府と企業の癒着に関しては厳しい法律があるため少ない方だとは思うが、やはりこれだけ国も組織も大きくなると端から端まで目が

届かない。

先日も企業から賄賂を受け取り、公害をもみ消そうとした地方公共団体の幹部が摘発されたが、あくまで氷山の一角に過ぎないのだ。こういった企業と政府の癒着が国民に悪影響を与えてはいるのである。それも含め様々な害から国民を守るのが政府であるが、なかなか上手くいかないなと思う今日この頃である……。

第58話 経済成長（後書き）

「意見」感想お待ちしています！

今回の名言

「武者は犬ともいへ、畜生ともいへ、
勝事が本にて候事」
朝倉教景（宗滴）

1922年3月11日、俺は戦艦「金剛」艦上にいた。

現在「金剛」はイギリス・ポーツマス沖。

前方にはイギリス駆逐艦2隻。

海上に砲声が響き渡る。

当然だがこれは礼砲。

「金剛」はまずイギリスの軍艦旗を掲げて、イギリス国旗に対し21発の礼砲を打つ。

すると今度はイギリス駆逐艦から同数の礼砲が打たれる。

そしてポーツマスには英國家元首がいるためはもう一度21発。で、イギリス側からも同数だけ打ちかえされる。

5秒に1発の割合で礼砲は打たれる。

なかなか面倒だが、外国の港に入るときは打つ決まりなのでこれを欠かすと外交問題になる恐れすらある。

掲揚に手間取つて礼砲の数が足りなくなつたりしてもアウト。

そのため大急ぎで旗を掲げ、万が一故障等があつてもいいように礼砲も複数用意する。

これは重要な海軍の儀式なのだ。

で、なんでこんなところに俺がいるのか。

それは明日、イギリス国王である太田の誕生日の記念として行なわれる観艦式に参加するためだ。

太田と俺は同じ野球部に入っている。

奴はまさにチームの要で、2年にもかかわらず試合に出ているしボ

ジショーンはキャッチャード、打順は4番である。

来年はキャプテン間違いなし。

若干うらやましくもあるが、あいつは本当に頼りになる。

俺もいろいろ教えてもらつたし、チームのことを本当に良く考えている奴だ。

そうそう、俺は外野手だ。

なんとかベンチに食らいついてはいるが、出場機会は代走くらいしかない。

さて、余談が過ぎた（いつものことだが）。

今回この観艦式に参加するのは最新鋭戦艦「金剛」型4隻（とその護衛の駆逐艦8隻）。

「金剛」型は世界に誇る日本海軍最強の戦艦だ。

基準排水量	3万5500トン（公称3万2000トン）
速力	28・0ノット
主砲	40・6センチ連装砲 4基
高角砲	10センチ連装砲 4基
機関砲	40ミリ単装 20基

史実でいう「長門」型にあたる艦である。

砲の製作には多少手間がかかつたが何とか成功、搭載できた。

防御も当然対40・6センチ砲防御である。

ところで戦艦なのになぜ山の名前を冠しているのか。

本来の命名基準なら旧国名を冠すべきだが、個人的に史実の「金剛」型が好きな俺が無理やりつけさせたためである。

「金剛」型の名前がないとなんか抜けてる感じがして嫌だし……。

世界に40・6センチ砲を搭載した艦は他にない。

名実ともに世界最強の戦艦であり、今回観艦式にわざわざ太田が4隻全部連れて来いと指名してきたのである。

ただ、軍縮の動きは当然起つていた。

特にアメリカが軍縮条約を今年の夏に開こうと呼びかけている。

史実同様40センチ砲搭載艦が引き金となつたわけだ。

ただし、なぜ夏なのかというのは自國で建造中の40センチ砲搭載艦の完成を待つてということらしい。

アメリカはかなり早くから40・6センチ砲搭載艦を建造しようとしていたみたいだが、主砲の製造に手間取り日本に遅れを取つてゐるようだ。

これらは少し日本に有利に働くだらう。

史実のような対米6割といつた屈辱的条件は絶対に呑まない。そもそも国力では比肩しうる国になつてきているはずだ。

数は同数、性能はアメリカよりもいいものを保有したい。

そのため「金剛」型4隻の次に建造されている（この軍縮を見越して「金剛」級の完成を待たずして建造に入つていた）40・6センチ砲搭載艦の「伊勢」型4隻は軍縮前に全て完成させるべく突貫工事が行われており、現在「伊勢」「日向」はほぼ完成している。が、「扶桑」「山城」の2隻は擬装中でギリギリ間に合つかどうかといったところ。

ただ本来なら軍縮の会議を早くから始めて日本の「伊勢」型の竣工を防ごうとするだらう。

が、アメリカは特に急いだとしない。

軍縮で棄てさせるつもりなのか、それともそれを利用して何か自國に有利な条件を引き出そうとするのか……。

あの教頭は一体何を考えているのだらうか？

にしてもついこないだ軍縮、軍縮つて言つて艦艇の整理をしたばかりなのにそれからもう8隻も戦艦を造つてゐる。

しかも戦艦だけ造るわけにはいかないだろうに……。

巡洋艦や駆逐艦もそれに応じて必要になるはずだが、現在はほとんど建造されていない。

まあすぐに戦争が起つてゐるわけではないだらうから、ゆっくり造つていけばいいけど。

おつと、話がずれてゐる。

まあとにかく全世界から注目されている「金剛」に俺は乗つてゐるのだ。

結構いい気分。

「指定された錨場まであと5マイル」

艦が入港に備え慌ただしくなる。
機関科はボイラーの火を落とす準備に入り、砲術科分隊もテッキで活動を始めた。
投錨用意、係船桟と舷梯の出し方用意、デリック（揚艇機）の準備等。

航海科は水深を測る側鉛線の準備をする。

「おも～か～じ、速力は原速（12ノット）に落とせ」

航海長の指示が出る。

「入港用意！」

当直将校の号令とともにラッパが鳴る。

といつてもすでに準備は始まつてゐるけどな。

しばらくして操艦は航海長から艦長の手に移る。

距離があと4000メートルといつといひで速力は半速（9ノット）に落とされた。

さうにあと3000メートルになると微速になる。

「ふたじゅうふた（22メートル）、定質砂」

投鉛手から水深と海底の状況の報告が入る。
その後、航海長が艦長へ助言する。

「艦長、錨位500（メートル）前です。…200前、100前、50前、錨位です！」

「錨入れ！後進減速！」

航海長が錨位と言つたのと同時に艦長が号令する。
デッキでは錨が落とされた。

錨鎖は通常高潮時の水深の3倍（プラス90メートル）が出される。

「ふたじゅうふた（22メートル）行きました」

この報告で入港は完了した。

なかなかこういうのを見るのも面白いな。
つと、ぼやぼやしてはいられない。
早く上陸しないと太田が待つてゐる。

上陸すると俺は迎賓館に案内され、そこで太田と会つた。

「久しぶりじゃん！元気にしどつたか？」

「まあな。お前はどうだ？」

「見ての通りだよ。お前も全く変わつてないな」

その後立つたままで軽く1時間ぐらい喋つた。

気付いたら時間がやばくてお互いに焦つたが、それでもやはり久しぶり（前に会つたのはハワイの時だから、10年近く会つてないとになるな）に会えてうれしかつたのだ。

そして翌日、観艦式は盛大に行なわれた。

参加した艦艇はおよそ160隻。

イギリスは戦艦「ロイヤル・サブリン」を筆頭に120隻と、海軍の大部分の艦が集結した。

まあ本来なら、「クイーン・エリザベス」あたりが向こうの旗艦になるのだろうが、第1次大戦で「バーラム」1隻を残して戦没してしまつていて。

「フッド」級は史実よりも遅れて現在建造中だ。

これも軍縮に間に合わせるべく突貫工事が行なわれてゐるらしい。

外国艦は日本だけでなく、いろんな国の軍艦が集まつていた。

フランスやロシアの戦艦、イタリアや南アフリカの巡洋艦、スウェーデンの駆逐艦、第1次大戦では敵国だつたドイツやスペインの巡洋艦もいる。

しかし外国メディアの注目はなんと言つても「金剛」に集まつた。史実の「足柄」同様、獰猛だ、飛び掛つてきそつだ等の感想が飛び交う。

確かに4隻並んだその光景は壯觀だつた。

（史実の方はただ褒めたわけではなく、害獸である狼にたとえたの

はけなしていいる要素もあるかららしいが、……。今回はどうなのだろうか？さすがにこれは人の心まで読めないので分からぬが）

「あれは？」

「イギリスの新鋭駆逐艦『スカウト』であります。いわゆるS級の駆逐艦です」

「S級？ そんだけす」¹¹のか？」

「いえ、そうではなくて頭文字が全て「S」の駆逐艦といつてあります。アドミラルティS級とも呼ばれてあります」

「へえ～。さすが物知りだな。やつぱエリートは違つな」

「お褒めの言葉を頂き、身に余る光榮です」

一日中こんな会話が「金剛」艦上で繰り返された。

外国艦艇はほとんど知らない（特にこの時期の軍艦なんてほとんど知らない）ので、俺についている従兵にずっと聞いていたのである。この従兵はこれあるを予期していたのか、もともと勉強していたのかその質問全てに答えてくれた。

彼は海軍大学校の生徒らしいがその中でもずば抜けて優秀だとかで連れてこられたらしい。

もちろん、ただ艦型を暗記しているわけではないだろう。
もしかしたら未来の連合艦隊司令長官か海軍大臣？
まあ、まだわかんないけどね。

それはさておき、その日一日中続いた観艦式は大成功に終わる。

夜にはイギリス艦が夜間電飾をし、サーチライトが夜空を照らした。俺は陸からその光景を眺めていたが、本当にうつとりするような光景である。

今度は日本で派手にやつてやろう。

この観艦式で注目を集めた「金剛」型4隻を苦々しく見る国が一つあつた。

アメリカである。

両国は後に軍縮で激しく衝突した。

第59話 観艦式（後書き）

明日から学校です……。宿題が終わらない……（泣）

あと更新は恐らく1週間程度途絶えます。短期入寮があつたりして忙しいですし、次の話が出来てないんです……。どうか見捨てないでお待ちいただけると幸せです。

今日の名言

「後悔、先に立たず」

現在の主要海軍国の艦艇を説明しておく。
でないと史実とは全然違うから多分話が伝わらないし……。
第一この時代では植民地のはずの国が戦艦持つてるのがそもそも違うしな。
といつこと「超簡単」……。

【日本】

戦艦	16隻
航空母艦	3隻

他国と異なりすでに旧式戦艦が除籍されている日本は16隻全てが近代戦艦。「伊勢」型4隻も全て完成し、40・6センチ砲搭載艦8隻を持つ。

航空母艦は「鳳翔」型2隻と練習空母の「富古」。ただし「富古」は飛行甲板を延長したため瀬戸内海等の波の静かなところ以外は航行不可。

史実と異なり軍縮の結果かなりすつきりした状態。16隻全てが近代戦艦で、空母もすでにそれなりのものを保有している。史実と比べれば桁外れの国力を持っているためこれでも予算に対する海軍費の割合は少ない。戦艦の建造は「伊勢」型でとりあえず終了、航空

母艦や巡洋艦の整備計画が始まっている。

【アメリカ】

戦艦	35隻
航空母艦	2隻

戦艦35隻のうち近代戦艦は18隻。史実よりも同型艦の多いものが多く、「ペンシルヴェニア」型が4隻、「テキサス」型2隻、「オクラホマ」型2隻、「ニュー・メキシコ」型4隻、「カリリフォルニア」型2隻、「メリーランド」型4隻。このうち40・6センチ砲8門を積んでるのが「メリーランド」型4隻。

航空母艦は「ラングレー」型2隻。給炭艦「ジュピター」と「ネルウス」から改装された。

史実よりもかなり数が多くなっている。アメリカも現在は北アメリカ大陸丸々一個を持つようになつておらず、まだまだ多くの艦を造つてくるだろう。現在「レキシントン」型巡洋戦艦5隻の建造を議会が承認し、建造を始めようかといふところである。ただしこれは史実と違い、重装甲・高速の40・6センチ砲搭載艦。

【イギリス】

戦艦	25隻
航空母艦	4隻

史実と比べ第1次大戦で多数の沈没艦を出したのと植民地の数が少ないので近代戦艦は数が減り、「アイアン・デューカー」型の生き残り2隻に「クイーン・エリザベス」型の残存艦1隻、「ロイヤル・サブリン」型4隻など。巡洋戦艦で主なものは「ライオン」型の残存1隻、「タイガー」型1隻、「レナウン」型2隻。

航空母艦は「アーガス」型1隻、「グローリアス」型2隻、「ヴィンディクティヴ」型1隻。「フューリアス」型巡洋艦の建造が行なわれなかつたため「フューリアス」は存在しない。「ヴィンディクティヴ」は一応空母と名前がついているが、巡洋艦の前後に飛行甲板がついているもので搭載機数も一桁。史実では後に巡洋艦に戻される艦だ。

史実と異なり、植民地がほぼないことから多少懐が寂しい状態。そのため史実なら5隻造られる「ロイヤル・サブリン」型も1隻少ない4隻。ただ大戦後旧式戦艦の一部除籍を条件に議会は「フッド」型戦艦4隻の建造を承認。これも予算不足から建造が遅れていたのだが、そのため主砲は40・6センチ砲搭載となっている。

【ドイツ】

戦艦	11隻
航空母艦	0隻

大戦で多数の艦を沈められ再建もまだ進んでいない状態。近代戦艦は生き残りの「バイエルン」型2隻（史実と違い4隻全て完成し、2隻戦没）など。巡洋戦艦は「ザイドリッヒ」型1隻と「デアフリンガー」型2隻などが主なもの。

航空母艦は建造計画だけで現有艦も建造中の艦もない。

史実と違い大戦で降伏したわけではないため、スカパ・フローでの自沈による悲劇もなく、そことこの艦が残っている。ただ大戦の傷跡はやはり大きく海軍再建は後回しにされている。ここ最近はだいぶ復興も進んでいるため景気は上向き、海軍は「マッケンゼン」型戦艦の建造を計画している。史実とは違い、ドイツも植民地が少ないとためか「マッケンゼン」型の建造は行なわれていなかつた。そのため史実のそれとはだいぶ異なる戦艦になりそうだ。

【フランス】

戦艦	13隻
航空母艦	0隻

思つたより大戦での戦没艦が少なかつたためそとこの数の戦艦が残つてゐるが、旧式艦が多い。近代戦艦は「プロヴァンス」型戦艦3隻のみ。「クールベ」型2隻（2隻戦没）も新しいといえば新しいが主砲は30.5センチ砲である。

航空母艦はドイツ同様計画だけ存在するが、手付かず。

フランスは現在「ノルマンディー」型戦艦4隻を建造中。大戦で受けた傷が思つたより浅かつた（ドイツの目が主にイギリスに向き、爆撃の回数も割りと少なかつた）ためドイツよりも比較的早く海軍再建に取り組めたので「ノルマンディー」型の建造が行なわれた。1番艦「ノルマンディー」は現在擬装中である。

【イタリア王国】

戦艦	15隻
航空母艦	0隻

イタリア海軍も旧式艦が多い。近代戦艦としては「ダンテ・アリギエーリ」型1隻と「コンテ・ディ・カブール」型2隻（1隻は大戦で蝕雷して沈没）と「カイオ・ドゥイリオ」型2隻。ただし全て主砲は30・5センチ砲。あとは前弩級戦艦も混じる旧式艦ばかり。

航空母艦は計画はあるが、空軍の空母不要という声が強いためもあり設計段階でストップ。

イタリアとしては地中海の霸権を握りたいので戦艦はある程度欲しい。しかしオーストリアとの戦争でかなり工業などがダメージを受けたためそれどころでないのが実情。現在「フランチエスコ・カラツチヨロ」型4隻の建造計画はあるが、計画だけである。

【ロシア帝国】

戦艦	14隻
航空母艦	0隻

戦艦は数はそこそこ多いものの旧式艦ばかりで史実でいう日露戦争頃の艦も入れての14隻である。一応近代戦艦としては「ガングード」型4隻と「インペラトリツツア・マリーヤ」型3隻があるが両方とも30・5センチ砲搭載艦。大戦では相手が海軍をほとんど持

つてないと北極海では動けないとほとんど出番はなかった。そのためか大戦後の海軍の軍備拡張も思うように進んでいない。

航空母艦は現在保有する計画はない。

史実と異なり領土は狭くなっているが、工業が発達し史実よりも国力が良くなっているのではないかと思われるような状態である。ただ海軍に関して言えばさほど先進国であるとはいえない。しかし、「極東」はないし黒海にも面してはいないので、バルト海を守れるだけの海軍があれば良いのでそこまで熱心にしていないのだと思われる。

【ソビエト連邦】

戦艦	2隻
航空母艦	0隻

戦艦は「ブリヤート」型2隻。この2隻はアメリカに発注して建造されたものでほとんど「ペンシルヴァニア」型のコピー。ただ副砲が14センチ砲に換装されているのが違うところだ。日本を意識しての戦艦購入だと思われるが、この話はアメリカが持ちかけて安く売ったとかそんな噂がある。日本に対する牽制のようだ。

航空母艦の建造予定はない。

史実のソ連は今頃ロシア革命やら何やらで忙しいことだがそれもなぐいたつて平和。ただ西半分を持つロシアと違い海軍にはさほど重きを置いていないようだ。ただ陸軍に関しては世界トップレベルの

装備を誇る国である。正直どこからあれだけの技術が湧いてくるのか分からぬ。

【北アフリカ共和国】

戦艦	4隻
航空母艦	0隻

史実と比較しようがないのだが戦艦4隻はとりあえず近代戦艦。4隻は「アルジエ」型と呼ばれ30・5センチ連装砲7基を搭載する艦で、イギリスの「エジンゴート」のような艦。建造は2番艦まではアメリカで建造されたが、3・4番艦は自国で建造。技術力と国力の急進を内外にアピールした。

航空母艦はアメリカに設計協力を依頼しており、4隻を建造予定。

大戦で広大な新領土が手に入り、そちらの整備が先であるため海軍は後回しになつてゐる。しかし、40・6センチ砲搭載艦建造を計画するなどやる気は十分である。もちろん建造計画の浅い同国での建造は難しいと思われるため外国へ発注しようとしているが、予算がとれず上手くいっていない。

【南アフリカ共和国】

戦艦	2隻
航空母艦	1隻

戦艦は「ケープタウン」型2隻で、自国ではなく日本で建造された。半年ほど前に引き渡されたばかりで主砲は35・6センチ砲3連装

3基。大戦前までは巡洋艦主体の海軍だったがこれにより戦艦を保有する国の仲間入りを果たした。

航空母艦は「アガラス」型1隻。これも建造国は日本。空母のノウハウを身につけるための艦で実験艦的要素が強い。航空機自体の保有数の少ない南アフリカでは運用が難しいので日本の軍事顧問を招いたりして現在訓練・研究が進められている。

現在は日本に協力を依頼して自国での建造を計画しているところ。ただ新領土の開発が最優先のためなかなか予算がとれず先延ばし状態。ちなみに俺とこここの元首である向井は小学校の頃からのダチだ。

【ブラジル海軍】

戦艦	8隻
航空母艦	2隻

戦艦は旧式艦を含むが割と新しい艦が多い。若干旧式化してはいるが「ミナス・ジエライス」型も近代化改装を受けているためまだ使えるし、自国で初めて建造した（イギリスの技術支援を受けて）戦艦「リオ・デ・ジャネイロ」型2隻は35・6センチ砲連装4基を搭載し、速力は28ノットを発揮する優秀艦。ブラジルの工業力の進歩が世界に示された。

航空母艦は日本から購入した旧「逢龍」型。海軍航空隊の建設のため現在は様々な実験やパイロットの訓練にあたっている。

史実よりも強力な国となつており、自國で戦艦を建造できるまでになつた。アルゼンチンなどとの対立はないが代わりにアメリカと対立氣味である。現在は「ブラジリア」型戦艦2隻の建造が進む。38・1センチ連装砲を搭載し、重装甲が施されている上に30ノットを超える高速を発揮できるといつ。無論イギリスの技術支援を受けてのものであるが。

資料 主要海軍国保有戦艦（後書き）

更新遅くなり申し訳ありません。今回の資料も急いで作成したので後から勝手に内容が変わるかもしれないです。……。

また内容でこれは変だというのがありましたらいつ指摘いただけるとうれしいです。かなり突付いてるので史実とはだいぶ違つとなつましたが……。

「陛下。 ブラジル連邦共和国の大使、 アイルトン・フィット・ティバル
ディ様が陛下に会談を求められておりますが……」

夕食を終えて部屋で「ひるひる」としていた俺に副官が厄介な問題を持ち
込んできた。

「またか……。 例の件なら日本の立場は伝えてある、 日本は参加す
るつもりは全くないと伝えよ」

俺が不機嫌にそういうと副官はすっと部屋から出て行った。
副官が出て行った後、 今度は部屋の前で控えていたジョンが入って
きて、

「陛下、 ブラジルは我が友好国です。 あのよつに無碍^{むが}に扱われては
外交に響きます」

いや、 それもそつなんだけいい加減にしていいでさ……。
もう何回目だよ?

夏の初めから終わりまで軽く20回ほりこは言つてきている気が
する。

「それと私は思うのですが我が国も参加されではどうですか? ブラ
ジルのみならず多くの国から要請も入つてあります。 それに参加す
ることにメリットもあります」

ジョンがため息交じりに言ひ。

あいつもいい加減うんざりしているんだるつな。
応対してきたのはほとんどジョンだし。

「日本も軍縮に参加しようとやなこつた。うちの海軍は軍縮してこ
れ以上削る艦はねえよ。むしろ足りないぐらいだ。太平洋だけでも
馬鹿みたいに広いのに、インド洋もあるんだぞ。巡洋艦の建艦も思
うように進んでないし」

あの「伊勢」型以降議会は海軍の予算増強に非常に消極的になつて
いる。

選挙で与党が大敗を喫し政権が交代した（もちろん俺の立場は全く
変わらないが）ことも一つの原因だが、アメリカとの建艦競争を始
めるのではないかという不信感も議員の間では強いようだ。

ただ現状を考えればアメリカはかなりの数の戦艦を持っているし今
も造り続けている。

あまり差が開くのは好ましいことではない。

「そうではありますが、アメリカなどと建艦競争になつては困りま
す。かといってアメリカが戦艦を続々と増やしていくのを座視する
ことは出来ません。軍縮に参加してアメリカがこれ以上戦艦を建造
できぬように条約で封じるのも……」

別の副官が入ってきてジョンの話をさえぎった。

「陛下。アメリカ大使ジョン・F・ヘルバウンド様が陛下との会談
を求められておりますが……」

噂をすればなんとや、
アメリカもしつこい。
噂をすればなんとや、
アメリカもしつこい。

あいつらは夏前から何度も何度も……。

つて言うかなんでアメリカが条約をもちかけてくるんだ?

今日は議会がハト派が並んでることは分かつてゐるだろうに……。

ほつとけば日本とアメリカの間にはすごい差が出来るのにな。

ただ今回のアメリカは第一次大戦でイギリスを助けたわけでもなければイギリスと仲が良い訳でもない。

両方と対峙しようとすれば必然的に莫大な艦艇が必要となり、大国アメリカとは言えどもそれなりに負担になつてゐるようだ。

アメリカ議会も過度な建艦に不信感を募らせつつあるとの情報もあり、造るだけ造つた今、日本やイギリスに戦艦を新しく造らせないよづにしたいのかもしれない。

「陛下、顔だけでも出されてはいかがですか? 内容が日本にとって不利なら会議から抜ければいいのですし……」

結局その後ジョンとの論戦に破れ、ブラジルなどの南アメリカ諸国の強い要請を受け日本はついに軍縮会議への出席を決定した。

南アメリカ諸国も必死なのだ。

アメリカが軍備を増強すれば今南アメリカ諸国に対してかかつてる圧力はさらに増す。

コスタリカなどはパナマ運河をアメリカに売却もしくは貸与せよとアメリカから恐喝まがいの要求を受けてゐる。

南ア諸国やコーロッパ諸国の反発で今のところ売却などは防いでいるが、あそこの国家元首が氣の弱い女子だつたら屈してたかもしないな。

1922年9月11日、アメリカ合衆国首都ワシントンD.C.で海軍の軍備縮小に関する会議が始まった。

参加国はアメリカ、日本、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、ロシア、ソ連、北アフリカ、南アフリカ、ブラジルの計11カ国。

この会議は言いだしつではアメリカ、最終的に本気で進めたのはブラジルといった形で始まり、それぞれ様々な疑惑があつてこの会議に参加している。

アメリカはだいぶ財政的に大きな負担になつてている戦艦の建造を停止しつつ、この会議をアメリカ主導で行い全世界にアメリカの威信を示そうとしているらしい。

ブラジルはアメリカが軍縮を言い出したのをこれ幸いとし、なんとか圧力を軽減したいようだ。

北アフリカなどは会議自体に参加することで自国も世界の強国の仲間入りをしたことを世界や国民に示そうとする狙いもあつてのこと。この他にそれぞれ各国ただ軍備を削減するだけではなく、なんらかの狙いがあつて参加している（当たり前だが）。

史実との相違点は数え切れないが、特徴的なのは史実では歩調を揃えるアメリカとイギリスの仲が今回はあまり良くない」とや、全体的に反米の国が多いことだ。

これは単にアメリカの国家元首の教頭の人柄によるものである。

生徒からは最悪の評判をとる彼はとにかく嫌やつだ。

厭味つたらしいというか、なんというか…。

いちいち細かいところにうるさいしねちつこいし。

教員の間でもあんまり評判は良くないみたいだな。

ただ教頭という地位にあるため誰も反抗できないのだ。

教頭のくだらない演説で始まつた軍縮会議は大波乱の様相を呈した。原因はアメリカの出した軍縮案だ。

1隻を3万5000トンで計算すると以下のようになる。

米	20隻
日・英	12隻
独・仏	10隻
北ア・蘇	8隻
伊・露	6隻
南ア・ブ	4隻

備考

日本が40・6センチ砲搭載艦4隻を廃棄しなければ、アメリカは同戦艦4隻の新造を認められる、しかしそれ以外の国は口径が35・6センチを超える砲を搭載する艦の保有は認めない。

旧式戦艦を廃棄し、枠が余る場合は戦艦の新造を5年以内なら認める。

廃棄される戦艦のうち2隻は武装を減じて練習艦として保有を認める。

ただし廃棄される戦艦は必ず解体処分でなければならない、など。

なめどんのか？

俺達を素人の集まりと見くびっているのか、それとも奴の方が素人なのか。

いくらなんでもこれは酷い。

「先生、あまりにもアメリカに有利過ぎる条約ですか？確かにアメリカは強国ですが、これでは世界のパワー・バランスが崩

れます。それに我が大日本帝国は1隻たりとも現有の戦艦を廃棄するつもりはありません。日本は第一次世界大戦後、全世界に先駆け軍縮に取り組んでおります。これ以上削ると広い海洋を防衛することができなくなります」

俺が口火を切ると次々に生徒側から次々に非難の声が上がる。

「我がイギリスとしても当然のめるものではありません。保有数はもちろん、イギリスはすでに40・6センチ砲を搭載する『フッド』型戦艦4隻の建造をほぼ終了しております。これを廃棄しようと國民にどう説明すればいいのですか！ あれだけ莫大な金と労働量を使つたものを……」

イギリスの太田が怒りをあらわにする。
あいつが怒るのは部活中ならよくあるが、それ以外で怒つたことなど見たことがない。

「いくら相手が生徒だからとは言え、これは余りにも傲慢な振る舞い……。我がロシア帝国としてもこのような提案は受け入れることはできません。國家の威信を傷つけることになります。もしアメリカがこの提案を押し通そうとするならロシアはこの会議から抜けさせていただきます」

ロシアの奥田がきつぱりと言い切つた。

喋り方とか内容とか真面目なあいつらしいな。

今回軍縮に参加した唯一の女子だが、さすがに物怖じすることもなく堂々とした発言だ。

その後も相次いで反対意見が飛び出し、教頭案に賛成したのは北アフリカ（国家元首はゴマすり教員）のみで、同じく教員が治めるソ

連は沈黙を貫いた。

賛成する気はないが表立つて反対はしないといふことじつ。

まあ相手が上司だからこいつなのか、ゴタゴタに巻き込まれるつもりはないのかどうかはわからないが。

そんなこんなで軍縮会議初日は何の合意も得られないまま終わった。

第60話 ワシントン海軍軍備縮小条約・前編（後書き）

更新が遅くなり大変申し訳ありません。運動会で応援団に入つたため、あまりに忙しくなかなか続きを執筆できませんでした。一応備蓄はあつたのですが、この軍縮の内容を大幅に変更したためこのように遅くなりました。運動会は昨日終わりましたが、今後も以前のように3日に一回のペースの維持は難しくなると思います。しかし1週間に1回は最低でも更新したいと思っておりますのでどうかよろしくお願ひいたします。

会議が全くの物別れに終わった翌日、俺達は宿舎として用意されたホテルにある大きな部屋を借りて今後の対策を協議した。

「あのハゲ俺達をなめてやがるぜ。あんな要求がおかしいことくらい分かるし。そりや初めてこの世界に飛ばされたときは政治とか軍のこととか全然知らんかったけど、20年もこっちにいればいい加減分かるようになるつづの」

そう不満をぶつけるのはドイツの島田。
こいつは服装やら校則やらで教頭にグダグダ説教されたことが何度もあるらしく、教頭嫌いは筋金入りだ。

まあ、規則を守っていないうつが悪いのは間違いないが、奴の顔から奴のネクタイの色まで全てが気に食わないらしい。
まあ、坊主憎けりや袈裟まで憎いってことか。

「確かに。ふざけんなってんだ。こんな会議やめちまおうぜ。いくらアメリカが軍隊を増やし続けても、俺達全員が組んで奴と戦えば勝てるや。軍縮なんかしなくても大丈夫だ」

今度はフランスの橋本。

まあ確かにいくらアメリカ言えど世界と戦争は出来まい。

「ちょっと待てよ、アメリカがこれ以上軍隊を増やせば俺達南アメリカの国はアメリカの属国みたいにされちまつ。それを止めるためにも今回の軍縮は必要だ。俺達でまとまって一つの案を出せばアメリカ

リカだつて飲まざるを得なくなるはず、それを詰合せへ

必死な面持ちの角田。

「 ブラジルの国家元首だ。」

アメリカの脅威を間近で感じてゐる「 ブラジル」としてはこれ以上は耐えられないのだろう。

その前に角田の神経も細いからなあ……。

心配しそぎな氣もするが、それは俺のところが当事国じやないからそこはなんともいえないが。

「 けどよ、あの教頭の性格考えてみろよ。俺達の案なんかのむキャラか？ 絶対無理だつて」

「 やつてみなければ分からぬいじやない。男がやりもしないつちから無理無理言つんじやないわよ」

「 奥田、お前なあ……」

「 ガタガタ言わないで案を考えなさい。どうすれば教頭があとなしく飲むか」

「 分かつたよ。みんな、奥田様がこのようにたまわれておいでだぞ。頑張つて考えろよ」

「 お前も考えろよ」

ロシアの奥田を中心に話しあつてが半強制的に進められ、生徒達の国
計8カ国はまとめて一つの提案を出すことになった。

そして翌日、再開された会議で生徒は次のよつに提案する。

【各国戦艦保有数】

米	20隻
日・英	16隻
仏・独	12隻
伊・露・蘇・北ア	8隻
南ア・ブラジル	6隻
1隻3万5000トンで計算	

【捕捉】

- 1、建造中の戦艦の建造継続を認める。
- 2、現有艦、及び建造中の艦以外の戦艦に口径35・6センチ以上の砲搭載は認めない。
- 3、各種艦艇の定義を明確にし、それぞれ基準排水量と備砲口径に制限を加える。
- 4、現在艦齡が20年を超えている艦もしくは大戦で激しく損傷し現在も著しい障害が発生している艦については代艦の建造が認められる。ただし軍縮調印後4年以内に建造を完了すること。
- 5、航空母艦についても別に保有数の制限を行なうことなど

俺達はこう提案した後、多少の修正は行なうが大幅な変更はしない、もしアメリカが拒否するというなら生徒側はこれ以上軍縮会議に協力することは出来ないと通告し、アメリカの出方を窺つた。
教頭は副官ひしき男とじばらべ話していたがこひらに向き直り、こう言つた。

「私の負けだ。我がアメリカ合衆国は国際社会での孤立を望まない。

合衆国はハ力国の提案を大筋では認める。ただしいくつかの修正・留保条件を要求する「

あの教頭が俺達の提案をすんなり飲んだ……？
俺達はお互に顔を見合わせる。

奴のことだ、無理難題を要求してくるものだと思っていたが、こうもすんなり飲むとは……。

奴は人が変わったのか？

「ありがとうございます。では、その留保条件といつのは何でしょ
うか？」

俺は恐る恐る聞いてみる。

しかし、その後帰ってきた返事は別にそれほど大きな問題があるものではなかった。

一体何をたくさんでいるのだろうか？

単純に国際社会での孤立を恐れたのかもしれないが、奴の性格上孤
立なんて恐れそうにないが……。

相手が何か企てているのかどうかはわからないが、俺達はアメリカ
の要求を受け入れ具体的な話し合いに入つていった。

ただこの後の話し合いは専門職にほとんど任せることとなつたが、
若干手間取るところもあり、条約が調印されたのは会議が始まつて
から1ヶ月近く経つた後のことである。

さて、それはさておき決まつたことの概要を列挙しておく。
主なものは以下の通り。

【戦艦保有数】

米	20隻
日・英	16隻
独・仏	12隻
伊・露・蘇・北ア	8隻
南ア・ブラジル	6隻

1隻3万5000トンで計算

【戦艦の基準・制限・備考】

- 1、主砲口径が20・3センチを上回るもの
- 2、基準排水量3万6000トン以下（ただし例外あり）
- 3、主砲口径35・6センチ以下（ただし例外あり）
- 4、航空機搭載5機以下
- 5、建造中艦艇の建造継続は認める
- 6、新規建造は10年間禁止
- 7、艦齡15年以上の艦、もしくは大戦で著しい損害を受けた艦艇の代艦建造は認める
- 8、廃棄される戦艦の空母への改装は可
- 9、廃棄される戦艦のうち1隻は武装を減じて練習艦とする事は可
- 10、その他廃棄される艦は必ず解体もしくは沈没処理で完全に廃棄することなど

【航空母艦保有数】

米・日	6隻
英	4隻
独・仏	2隻

伊・露・蘇・北ア 1隻

南ア・ブラジル 1隻

1隻3万2000トンで計算

【航空母艦基準・制限】

- 1、基準排水量3万2000トン以下（戦艦を改装するものは若干上回るのは認める）
- 2、備砲口径20・3センチ以下
- 3、条約の対象は基準排水量1万トン以上の艦のみ（ただし例外あり）
- 4、新規建造は5年以内に完了させること

【重巡洋艦に関する制限・基準】

- 1、備砲口径12・7センチ以上20・3センチ以下
- 2、基準排水量2千トン以上1万トン以下

【軽巡洋艦に関する制限・基準】

- 1、備砲口径12・7センチ以上15・5センチ以下
- 2、基準排水量2千トン以上8千トン以下

【駆逐艦に関する制限・基準】

- 1、備砲口径12・7センチ以下
- 2、基準排水量2000トン以下
- 3、魚雷発射管8門以下

【潜水艦に関する制限・基準】

- 1、備砲口径15・5センチ以下
- 2、基準排水量2千トン以下

【そのほかの艦艇に関する制限・基準】

- ・基準排水量600トン以上1万トン以下のものについて
- 1、備砲口径15・5センチ砲4門以下
- 2、速力24ノット以下
- 3、魚雷発射管搭載不可
- ・1万トン以上の艦艇は新規建造禁止
- ・600トン以下の艦艇は無制限

【例外について】

- ・日本の航空母艦「富古」は外洋航行が不可能なため排水量が1万トンを越えるが条約対象外
- ・現有艦、及び建造中の艦は主砲口径や排水量の規制対象外 など

長々と書いたが、条約の内容はざつとこんな感じである。
少々流して読んでくださつても全然構わない。
定義なんかはそれぞれの国の軍人が出てきて長々と討論してたが、
俺なんかは途中で寝てしまっていたぐらいだし。
まあ、あとから聞けばそんなに史実とは変わらないみたいだし。

第6-1話 ワシントン海軍軍備縮小条約・後編（後書き）

運動会が終わったと思つたら今度は模試、そして模試です。他にも特別講座があつたりしてほとんど毎週のように土曜日にも勉強しに学校へ行かないといけない状態です……。昔野球部にいた頃はもちらん土曜日や日曜日にも学校に行きましたが、やっぱり気分が違います。週休二日制はどこにいったんだろう……？

「だから私は行きたくなかったのよ！別にカザフスタンとの交渉なんて私が出るまでもなかつたでしょう。陛下に頼まれたから仕方なく行つたのに、それで帰つてきてみればいつの間にかあんな条約を飲まれて……。あなたはアメリカの回し者ですか！？」

「なんだと！？俺は日本のためを思つてあの条約調印に賛成したんだ。なのにお前は俺をアメリカの回し者呼ばわりするのか！」

「あんな屈辱的な条約が日本のためになると？あなたはよくそれで陛下の副官が務まつてますね。日本の威信を地に落としたのですよ！」

もう一時間は続くのかな、このやり取り。

しかもだんだんと内容も語氣もヒートアップしていつて、かなり凄まじい言葉の応酬が始まつてる。

正直あの一人がこんなに激しく喧嘩するとは思わなかつた。

あ、もちろん一人というのはジョンとクックキーのことだ。
原因はこないだ締結された軍縮条約について。

クックキーはカザフスタンとの国境付近で発見された油田の利権配分や国境線の確定などの交渉のためアスタナ（カザフスタンの首都）まで行つていたのである。

彼女が長安を発つたのは軍縮会議参加が正式に決定する少し前。

しかしカザフスタンには航空基地が未だ未整備で（現在日本の支援を受け航空機の導入を開始しているところ）、陸路で行くしかなかつたのだがそれが大変な難路だった。

新疆やウイグルでは交通網の整備が非常に遅れており、鉄道は計画中の路線ばかりで実際に開通しているものは一つもない。
華北から鉄道が延ばされているが西寧^{シニン}の辺りが今のところ精一杯。
とりあえず彼女はウルムチにある空軍基地まで飛行機で向かい、そこからは自動車に切り替えてアスタナを目指した。

（シベリア鉄道を使って、という案もあつたが新疆方面の視察も兼ねてこっちのルートを彼女が選択した）

未舗装の道路で途中何度もパンクしたりエンストしたりを繰り返してようやくアスタナ入りしたのは出発してからおよそ1ヶ月も経つた後のこと。

着いて休む間もなく会談を行い、巧みな誘導で日本有利の条件を飲ませて交渉を纏め上げた。

そして再び難路を乗り越え帰ってきた頃には軍縮条約は締結されてしまっていたのだ。

田舎ばかりを通ってきた彼女に軍縮条約締結は寝耳に水で、対米ハ割という保有比率を聞くとこれを不満どころか屈辱として激怒。俺も30分くらい怒鳴られ、さらに彼女の怒りは軍縮参加を進めた上に条約締結に賛成したジョンに向き今に至る。

正直クツキーがここまで怒ったのは初めて見た。

国に対する誇りや忠誠心が強い分今回の件は許せないのだろう。

ただ彼女が一番怒っているのは俺達生徒側がアメリカの策にはまつてしまつたことだ。

彼女に言われて気付いたのだが、教頭が最初に突きつけた無理難題

は俺達から最大限の譲歩を引き出そうとした教頭の罷だつたのである。

まず俺達が飲むことのない条件を出せば、生徒側は条約をアメリカが飲むように条件を緩和してくる、向こうはそう考えたのだろう。それにまんまと引っかかり、俺達は単独ではアメリカに立ち向かうのが困難な状況にあるのだ。

まあ、とはいってもこの世界では単独でアメリカと戦うことはないだろう。

生徒側の国は反米、といつより反教頭派ばかりで誰も奴の側につきはしないだろう。

他の教員にしても北アフリカのゴマスリを除けば、あまり奴を好きなことはなさそうだ。

それにもし教員対生徒で戦争が起きても、生徒側を合わせた面積・人口と教員側のそれでは圧倒的に生徒側の方が大きい。まず負けはしまい。

ただ次の戦争がどうなるのか分からぬ。

そのためやはり今回の条約は失敗というべきだろうな。

クッキーが怒るのも仕方のないことだ。

しかし、ジョンはジョンで日本のことを考えていたのは間違いない。アメリカと日本が建艦競争を繰り広げれば海軍予算は凄まじい勢いで膨張、国家財政を圧迫し国民生活を脅かすことになるのは目に見えている。

ジョンはそれを防ぎたかったのだ。

国民あつての政府・国家。

それが彼のモットーだから。

さて、まだ喧嘩が収まらないようだから新造空母を紹介しておいつか。

今回の軍縮では日本は3万2000トン×6、つまり19万2000トンの保有枠が与えられた。

現有の「鳳翔」型2隻を差し引きくと、日本の残りの保有可能な空母のトン数は16万8000トンである。

（ちなみに「鳳翔」型は公称1万2000トン、実際は改装によってプラス1000トン強ある）

練習空母の「富古」は1万トンを少し越えているが、外洋航行が不可能なため対象外となつた。

そこで「赤城」型空母4隻の起工が決定された。

艦名は「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」の予定。

これも「金剛」型に続き、命名基準を無視してつけたものである。そもそも山、国、飛ぶものが混ざついているため、軍人達は皆なぜ陛下はこのような名前を……、と思っているだろうが史実を「」存知の皆様には理由を分かつていただけるだろう。

一応力タログデータでは基準排水量3万一千トンで速力は30ノットとなつてている。

ただこれでは保有枠が余るので2万トン級の空母2隻の建造が決定された。

これは「赤城」級同様4隻建造予定だった、中型空母「飛鷹」型の図面を流用して設計しなおされたもので、そのまま「飛鷹」「準鷹」と命名される予定だ。

基準排水量は2万2000トンで速力は30ノットを発揮できるよう設計されている。

うへん、まだ喧嘩が続いてるなあ。

じゃあこないだできた日本の対米作戦について話しつくか。

日本海軍は当然アメリカを仮想敵国としている。特に軍縮以降は対米作戦を専門に扱う部署が極秘で設置され、現在案を練つてゐる。

ただ今のところこれといつのはないな。

例えば史実どおりの迎撃タイプの作戦。

史実ならフィリピンやグアムを占領しておびき寄せるのだが、今はそれなし。

アメリカ艦隊がマーシャル諸島にやつてくることを前提に迎撃作戦が立てられているが、別にアメリカの針路はマーシャルだけではあるまい。

アメリカがマーシャルではなく真っ直ぐマリアナ諸島や小笠原諸島へ突っ込んだ場合、その時点で作戦が崩壊してしまつ。まあ、これは後にハワイを占領して、に変わつたが、今度は兵站の問題が出てくるなど非常に難しい。

史実でも自分達はこうだからアメリカもこうだらうみたいな考えで作戦を立てていたとか聞いたが、この世界でもどうやらそんな偏つた見方をする奴がかなりいるようだ。

ということで、対米作戦部署の人材をきれいに入れ替えた。

今までは古参の参謀や司令などを中心にした人材で構成されていたのをすべて若手に切り替えたのである。

古参の参謀は経験はあるが、どうも保守的で柔軟な思考に欠ける。

その点若手は経験はないが発想が自由だ。
凝り固まつた頭から良案は生まれない。

彼らならきっと良いものを造ってくれるだろ？。

ただ経験不足はどうにもならない。

それにまだ知識も足りない。

なので今回新しく対米作戦部署に配置された若手参謀を皆アメリカに送り込むことにした。

まずは敵を知れということである。

史実の世界でもアメリカ留学を経験した将官と、そうでない将官の考え方は大きく違っている。

この経験は彼らにとって非常に貴重なものとなるはずだ。

他にも士官学校生には卒業研修として他国への短期留学を行なわせている。

外国へ行くことで広い見聞を持つことができるとともに、多角的に物事を見る力を養うのが目的だ。

行き先は本人達の自由。

イギリスが一番人気だが、アフリカや南米、中東といった言い方は悪いが少しマイナーな国を希望する生徒もいる。

ただ単純に修学旅行程度の考え方で行く者もいるが、大部分は何かしら自分で考えて国を選択しているようだ。

だから華やかな欧洲とは違う地域を選ぶ者がいるのである。

この短期留学制度だが、希望者には長期留学も認めている。もちろん何かしらの研究をしたいとか、そういうきちんとした理由がある者のみだが、毎年10人程残留希望者が出ている。出世コースから少し外れてでも研究をしたい、そういう心意気のある生徒がいるのは心強いことだ。

さて、喧嘩は收まらないが今日はこの辺にしどくか。
多分明日にはお互の機嫌は直るだろ？。

第62話 教頭の仕掛けた罠（後書き）

先週今までの話の誤字脱字チェックをしましたが、結構出てきました。文章 자체がおかしいのも混じってましたし。気をつけているのですが、なかなか減りませんね……。

1922年暮れのある日、俺はドイツのベルリンに居た。
別にこれといった理由があつてのことではない。

軍縮会議の後、島田に暇ができたら俺んどこ来いよと言われてたら
らちよこいつと顔出しに行つただけだ。

まあ「ちよこいつ」とって言つ距離じゃないけど、たまには良いだろ
う。

どこの首相も外遊、外遊つて税金で遊びに行ってんだから。

まずベルリンまでは飛行機で行つたがそれはもう大変だつた。
何しろ今みたいにジャンボジェットで真っ直ぐドイツまで行けるわ
けじゃない。

けど船でのんびり行くのも時間を浪費してしまつ（前回イギリスに
行くときも大変だつたし……）ので飛行機で行つた。
しかし航続距離の関係上途中で給油が必要で、途中にある国の飛行
場に着陸させてもらつて給油を受けたりと何かと大変だつた（まあ
それを事前に各国に頼む外交官も大変だらうが）。

まあそんなこんなでようやくベルリンのドイツ軍基地に着くと島田
の親衛隊の兵士が出迎えてくれていた。

直立不動、まさにその言葉が当てはまる。

捧げ筒も全く隣りとズレがない。

まあ、どこの国も「いつこうのはきつちつしてんがドイツは特にす」
いな。

「よひ、小嶋。はるばるいき苦労さん」

島田が親衛隊の後ろの方から歩いてきていた。

「おー、わざわざ出迎えに来ててくれたのか」

俺も島田の方へ歩いていき握手を交わす。

「早く行こうぜ。みんな待ってるや。」

そう言って斯塔スターと歩き出す。

みんな？

誰か来てるのか。

「おー、ちよつと待てよ。みんなつて誰だよ」

しかし島田はそれには答へず、

「まあ来れば分かるつて」

と言つて車に乗り込んでしまった。

俺も用意されていた車に乗りどこに行くのかも分からぬまま連れて行かれる。

1時間程車で走つた後、車は大きな屋敷へ入つていった。

ただ不思議なことに……、めっちゃ和風の屋敷。

ここドイツだろ？

どう見ても不釣合いでしょ。

カコーン、カコーン、つてなんかししおどしの音も聞こえるし。つてかあつちの方のあれ、なんて言うんだっけ。

ほら、あの寺とかによくある砂利を敷いたところになんか丸い模様

をつけていくあれだけど……。

枯山水だつて……、まあいつか。

「こりで俺は車から降ろされた。

島田が俺にこいつち来いよと合図をす。

「こりはだよ、島田」

俺が尋ねると島田は由々戸をついて

「俺の別荘だよ。なかなかよく出来てんだ。ほらあの屋敷だつて苦労したんだぜ。わざわざ日本から大工を呼んでさ」

そう言って屋敷を指差す。

そこには超立派な日本屋敷があつた。

「確かにすこいけど、お前にこんな趣味があつたとは知らなかつたな」

俺がそつと、

「いや、やっぱり和つて良いだろ。着物が似合つ女子とか俺もう大好きだぜ」

誰もそんなこと聞いてねえ。

まあ意外な奴の趣味はおいといて前置きが長くなるのでこの辺りで切るか。

屋敷の中に入り、俺は案内された部屋でくつろいだ。

いやなかなか飛行機の長旅は疲れた。

こういうときなんかこの和室は落ち着く……。

結構良いもんだな。

俺は結局時差ぼけもあり、そのまま寝てしまった。

そして翌日、俺が起きると着物のきれいなお姉さんが朝食を持ってきた。

ドイツの人みたいだけどよく似合つてる。

俺が若干見とれていると、向こうが不思議そうにこっちを振り向いたので俺は少し顔を赤くして慌てて視線を逸らした。

「お食事が終わられましたら、この鐘を鳴らしてください。お食事の後皇帝閣下が陛下をお待ちです」

そう言って着物美人は部屋を出て行つた。

そして食後、鐘を鳴らすとさつきの人に入つてきて俺は案内されるままついていった。

しばらく屋敷の中を歩いてある部屋に入る。するとそこは大きな会議室だった。

もう結構人が入つてゐるようだ。

ん?

つて言うかどれもこれもよく見た顔だ。

とりあえずヨーロッパのほぼ全員と南アフリカ、ブラジル、アルゼンチン。

一体何の集まりだよ?

「よし、これで全員集まつたな。今日はサミットと称して同窓会や

れうと思つてお前らを集めたんだ。それじゃ早速」れからの一ひとつこで話しえね」

島田が会議室の前に立つてしゃべりだす。

「島田君、回収部と称してサミニットじゃない？意味がつながつてないわよ。それどどれだけアバウトなの？これからのことって一体何よ」

奥田が突っ込む。

「どつねでも良いだる、変わんねえよ。で、何か議題はあるか？」

「こいつ事前の準備なしでサミニット始めやがつたな。普通議長を務める国はそれなりに準備してるだろ。つてか俺はここの遊びに来たつもりだったんだが。だからクッキーもジョンも連れてこなかつた。ま、サミニットと言つても井戸端会議みたいなもんだな、第一ほとんどの奴が隣りの奴とのおしゃべりに夢中だし。

とりあえず雑談会が展開されていったが1時間ほど経つてそれは収束に向かい、ちゃんとした国際問題に関する話へと動いていった。

「なるほど、俺たちは教頭な罠に見事にはまつてたわけだ。野郎、やつぱ油断のならねえ奴だ」

橋本が吐き捨てるよつて言へ。

「ああ、まつたぐだ。けど俺たちが結束してアメリカと戦えば実際

その程度の戦力差は関係ない。俺達が束になつてかかれば絶対に負けはしないさ。ただ問題なのはこの中の誰かが奴の攻撃を単独で受けたりする」ことだ。特に角田、お前ら南アメリカは危険だぜ」

俺がそつと角田は、

「分かつてゐよ。だから今は中南米の5カ国全部で同盟を組もうとしてるとい。けどこれだけじゃ力不足だよ。そもそも海軍なんどこの国も貧弱そのものだし……」

「もつともだ。

戦艦を保有しているのはブラジルのみ。

しかもこないだの軍縮で戦艦は6隻に限定されている。

「まあ領土とか経済の状態を考えるとコロンビアやコスタリカに強い海軍を造れと言つても無理だろ? な。特にコロンビアは今忙しいみたいだし」

太田が諦めたように言つ。

今コロンビアは治安が非常に悪い。

反政府武装勢力が政権転覆を狙つて各地でテロを起こしているのだ。麻薬の横行や政府組織腐敗など多くの問題を抱え込み、武田（元首）も苦労しているらしい。

しかし奴は決して無能ではなく、なんとか国を維持しているし治安の改善にもきつちり取り組んでいる。

それにコロンビアはこの治安の悪さや麻薬が際立つて有名だが、経済は安定しているのだ。

豊かな農業生産、豊富な鉱産資源、それに加えて花も有名である。花の「蘭」はこの国が原産らしい。

「まったく。でもアルゼンチンやチリは十分な国力があるだろ。史実よりだいぶ成長したらしいじゃん。あいつらにしつかりと海軍造らせればそこそこアメリカにも対抗できる海軍ができるんじゃないか？」

と言つのはスペインの高橋。

なるほど、そういうえばあの2カ国は軍縮にも参加していないからフリーダ。

これはいいかもしね。

「高橋、お前今良いこと言つた。それぞれ4隻持たしても南米で固まれば14隻、かなりの戦力になる。どうだ、角田？」

太田が息を吹き返したように言つたが、角田は首を振つて、

「無理だよ。あの二つの国には戦艦を造れるような技術も造船所もない。巡洋艦だって輸入に頼つてるんだぞ。なあ、小嶋」

確かに。

あの二国には巡洋艦などを日本が輸出している。

史実からすればかなり成長しているが、造船技術に関しては三流と言つしかなく、鋼鉄製の船舶を建造できる造船所すら多くはない。陸軍の整備が最優先で海軍の整備は遅れ、輸入物で我慢と言つ状態が続いているのだ。

いくら技術支援をしても難しいだろ。

「そうだな……。それじゃあ、お前らのところで不要になつた旧式戦艦を近代化改装した上で売却するのはどうだ？これなら安くあがるし、お互に損はなくないか？」

我ながら良い案だ、そう思つたが奥田に突つ込まれた。

「ダメよ。廃棄される戦艦は完全に廃棄しなければならぬといつていう条項があつたでしょ？」

そんな条項あつたか？

しかし、調べてみると本当にあつた。

第10項に「廃棄される艦は必ず解体もしくは沈没処理で完全に廃棄すること」とある。

くそつ、教頭に先を読まれていたのか。

ううん、とみんなが頭を悩ませる中一人だけ頭を抱えていなかつた奴がいた。

「だったら俺のところで建造したらどうだ？俺の国は軍縮に参加してないが戦艦は造れないことはない。技術支援さえしてくれたら何とかなるとは思うが……」

そう言つたのは再び高橋だつた。

第63話 井戸端会議・前編（後書き）

何か話が途中で切れてる感じがありますが、それは修正を加えてい
るとえらい長くなりそうだったので無理やり切ったためです。今度
は後編が短くなりすぎそうで怖いのですが……。

あ、次週は更新がないかもしれません。作者はテスト週間に突入い
たしました……。

高橋がスペインでの戦艦建造を持ちかけると俺達は渡りに船と飛びついた。

「スペインで戦艦を建造……。いいかもしけん。スペインは造船所もあるし、それなりの建造経験もある。それに軍縮にも参加していない……。丁度いいじゃん」

太田がうとうとうんとうなづきながら言ひ。

「全くだ。俺達が多少技術提供すればなんとかなるだらひ。よし、そりしそり」

橋本もそり言ひ。

他の奴も異存はなかつた。

「よし、それじゃ決まりだな。とりあえず南米とも話合わないとなるともいえないが、こつちとしてはそれで進めよ」

島田がそり言ひて次の話題に行こうとしたが、

「ちょっと待つて。高橋君とこに戦艦を今すぐに建造できる造船所つてある? 一昔前の戦艦なら2万トンくらいのドックで建造できるけど、今のは4万トンクラスに対応できないと正直厳しいと思ひ。造船所を造るところから始めたら時間がかかり過ぎるわよ」

奥田が島田を止めて叫ぶ。

「うーん、奥田の言つことももつともだよな。南米に迫る危機はかなり差し迫つた問題だからな……。あんまり悠長なことは言つてられない。何かすぐに戦力を増強できる手立てはないか?」

確かにあまりのんびりしてはいられない。

俺達のこの動きを知ればアメリカはなんらかの行動を起こす可能性も否定はできない。

国境で紛争を起こすとか、相手国の港で船を自爆させるとかアメリカは戦争の口実を作るのには慣れている。

もし今戦争になれば少なくとも海では南米が蹴散らされるのは間違いない。

全員がしばりく惱んでいたが、突然島田が大きな声で叫んだ。

「俺良いこと思ついたぜ!俺たちのところの旧式戦艦の解体を南米に任せると、ということにして売ればいいんじやないか?それで向こうがリサイクルして戦艦を造つたつてことにしてれば条約にも引っかからない。その上で向こうが俺達に戦艦の改造を依頼、という形で近代化改装すれば十分な戦力になる。どうだ、俺頭良くね!?」

『屁理屈だろ……。

まあ確かに引つかからないけどいろいろ問題あるくない?

「それ良いーそうしようぜ」

「島田君、意外と頭冴えてるじゃないーそつしましょ

「そつすが島田。見直したぜ」

あら?

皆さんそれで良いの?

まあ、みんながそれで良いなら別にいいか。

国際社会なんて屁理屈ごねていろいろやつてるだけだしな。
これぐらいやっても当たり前か。

俺ももう少ししたたかにならないと。

その後本当にこれは実行され、例えばイギリスの戦艦「ライオン」
はこのよつた形で売却された。

まずイギリス国内の造船会社に屑鉄として売却。

そこで武装のみ撤去され、船体はその会社の子会社へと売却される。
その子会社はフランスの造船会社へ船体をそのまま売却。

そのフランスの会社もドイツの鉄鋼関連企業へ……。

こんな感じで「ライオン」はイギリスにいたまま書類上で所有者が
2・30回ほど変わった後アルゼンチン海軍に売却された。

その後主砲などは堂々とイギリスから輸出されてアルゼンチンに到
着、取り付けのみアルゼンチンで行われることになる。

戦艦は造れないが、この取り付け作業くらいはなんとかアルゼンチ
ンでもできるはずだ。

まあもし無理でもじつせ後から他の国で改造されるから関係ないけ
どな。

さて、話は再びベルリンへ戻る。

この戦艦の件の後俺達が話しているのは大恐慌対策についてだ。
当然起るのかどうかは定かではないが対策は考えておく必要があ

る。

それに大恐慌が起きなくても戦争前にはアメリカ資本が各国から撤退を始めるのは間違いない。

それぞれの国の産業にアメリカの資本はかなり深く食い込んでいる。俺達は引き抜かれたとき対応できる力を蓄えておかなくてはならない。

「なるほどね。俺達の足元にはアメリカの手が入ってるわけね」

俺がアメリカ資本の話をすると島田が床を足で小突きながら言つた。
「じゃあアメリカの会社を俺達の国から締め出せばいいじゃん。手
つ取り早く今から」

そう簡単に済めば誰も苦労しないよ、島田。

「アホ。そんなことすれば本当に大恐慌になるぞ。第一そんなこと
済むんなら俺はもうやつてやる」

全くどうすればいいのやら。

俺も経済とかそこまでよく知つてるわけじゃない。
まあ素人なりに考えて今思いつくのは金を貯めておくことぐらいか。
あとは少しすつ重要企業の株を純粋な日本企業に買わせるとか?

「まあ、金を貯めておく」とが一番だつ。後は実際に起きたとき
いかに早く対策をとれるか、だ

「対策つて?」

奥田が聞いてくる。

「うーん、俺に聞かれてもな。まあ素人の考えだけど一番は自国の通貨の価値を安定させることじゃないか？それ次第で物価が変わるものだから。ま、その方法と時期が難しいんだろうけど。俺が知っているのは現代社会の時間に聞いた、公定歩合操作・公開市場操作・預金準備率操作ぐらいしか知らんけどな。他の対策としては潰れそうな銀行を国有化して乗り切るとか、公的資金を投入して助けるとか。まあ、そういうことは俺わかんないから自分の国の人とした人に聞いてくれ」

説明は不要かもしれないが一応簡単に。

公定歩合操作というのは中央銀行が一般銀行に貸し出す際の金利（マネーサプライ）を増減させることで通貨供給量を操作するもの。これにより民間金融機関の資金量が影響され、当然それに伴つてマネーサプライも影響を受ける。

公開市場操作は民間金融機関が保有する国債などの売買を通じてのもの。

当然それを中央銀行が買い上げれば金融機関の資本は増すし、逆に買わせれば資本は減る。

預金準備率操作は、金融機関が預金を受けた際にその一定額を中央銀行に預けることを義務づけられている支払い準備金の率の操作のこと。

準備率が上がればマネーサプライは減るし、下がれば増える。

詳しいことは高校一年で習う現代社会の経済を参照。
だいぶ復習になつたよ、これ……。

「あ、そういうえばこんなことも習わなかつたっけ？日本は戦後金融危機を一度起こさないために何か対策をとつてたつて……。ええ

と何だつたたかな?」

向井（南アフリカ）があたまを抱えて一生懸命思い出そうとしている。

が、その隣りの町田（イタリア）がさうと答えを言つ。

「護送船団方式。銀行すべてを丁寧に保護して、どんなに小さい銀行も破綻させないように、どんな小さい銀行でも利益が出るように大蔵省、つまり現在の財務省が守つてたんだよ。利息はどこも同じ、都市銀行と地方銀行で役割を分担、銀行と証券を区別してな。けどこれば競争力を低下させちまつて日本はエライことになつちまつたやつだが」

さすが秀才。

記憶は完璧だ。

けどなんだ、失敗作かよ。

「へえ、それ案外使えるかもしれんよ。だつて日本は戦後ずっとそうしてきて90年代までもちこたえんだろ? だつたらあと10年か20年しかない俺らは使っても大丈夫だと俺は思うけど」

太田が言つ。

「けどさ、競争力が落ちればいろいろ問題出でくるのは間違いないんだろ? だつたら他の方法探そつや」

これは橋本。

「ま、使うかどうかは自分の国に帰つて相談しな。それより他の方法も考えとこうぜ。対策は多ければ多いほうがいいしな」

島田が議論をさつと打ち切り話を進める。

なんだ、ちゃんとリーダーシップ取れてるじゃないか。

しかし、俺達にそつ簡単に解決策が見つかるはずもない。

その後1時間ほど悩んだが妙案はなかった。

そのため一旦この会議はお開きとなり、1年後また会議を行つ」とで各国は合意しそれぞれの国へ引き上げた。

俺はその後ドイツ観光を1週間ほど満喫した。

その間キール軍港も見せてもらい、新鋭戦艦「マッケンゼン」にも乗艦させてもらつ。

38・1センチ砲連装4基を搭載し、速力は29・5ノットを誇るドイツ最新鋭の戦艦だ。

まだ同型艦が3隻ほどできるひじく、4隻揃えばさぞかし壯觀だろうな。

その後俺はドイツを発ち、日本への帰途に着いた。

いやいや、今回はなかなか疲れた……。

第64話 井戸端会議・後編（後書き）

更新が遅れ申し訳ありません。テストは無事（とは言い難いですが）終了しました。しかし、今週末は両方とも模試があり、その次の週も忙しいため更新は困難と思われます。

ただそれを乗り越えれば作者は修学旅行というビックイベントが待つております。なんと行き先はハワイ！！いや、ここ最近のガキは贅沢になつたもんですね。

是非とも「アリゾナ記念館」や「ミズーリ」を見たいもんですが、学校では作者は基本的に「こういう軍事系に興味大有りなことは伏せており、ただの阪神の熱狂的ファン」ということで通しているので見れそうにもなく……。自由時間が半日くらいあるんでミズーリくらいは行けないことはないのですが、他の班員に迷惑かけても仕方ないですね。

更新は修学旅行までにもう一回はするよつと努めます。

1923年9月1日午前11時58分、関東の大地が波を打つた。相模湾沖で発生したその波は数分以内に関東全域へと広がつて行き、多くの建物を破壊する。

さらに時間帯が丁度昼時だつたこともあり各地で火災が発生。折り悪く能登半島沖に台風がいたため関東全域では風が強く火災は瞬く間に燃え広がつていった。

完全に鎮火したのはそれから2日も経つた3日のこと。それまでに官公庁のや帝国劇場をはじめ44万戸もの建物を燃やしつくし、多くの命を奪つた。

死者・行方不明者10万人以上。

負傷者10万人強。

全半壊した建物20万戸以上。

悪いことに加藤友三郎内閣総理大臣がわずか8日前に急逝していたため、首相不在という状況での大災害で、噂やデマも飛び交い大混乱となつた。

その騒ぎの中で中国人や朝鮮人、さらには方言のきつい地方出身者まで殺される事件が起ころ。

首都には戒厳令が敷かれ、罪もない人々が多数逮捕された。

未曾有の大災害は日本に大きな打撃を与えた……。

ところが史実の「関東大震災」である。

しかし、俺は恐らく起こるであろうことは分かっているのだ。地震の被害拡大を防ぐために1920年ごろから全地方公共団体に地震発生時の行動マニュアルを作成させて住民に配布したり、災害時に救助に当たる災害対策部隊を消防庁の下に発足させるなど様々な対策を講じてきた。

そして地震が起こる予定の1ヶ月前に関東地方で強い地震が起こる可能性があるからその日は安全のため他の地方へ避難しておいた方が良いという情報を発表することも検討したが、それによる混乱を恐れてそれは中止。

まあ万が一起きなかつたらそれはそれでエライ事になるしな。

しかし数年前からプレート型地震が発生しやすい地域というのを公表してその地域の住民には特に地震発生時を想定した訓練をさせるなど対策は進めていた。

パソコンから現代の地震対処法などを引っ張ってきて、小学校や中学校で教えさせたりもしている。

それでもこれは日本国民からすれば、いや世界の人々からしても全くうかがわしいものであった。

地震がいつ、どこで、どのくらいのものが起こるかなんて神のみが知り得るものである、というのが一般的だからだ。

まだ当時はウェゲナーの大陸移動説が信じられてはいなかつた（彼の説は証拠もなかつたし、大陸を動かす原動力となるものも分かつていなかつた等々から）し、プレートテクトニクスだの、マントル対流だのといったことはさっぱり知られていたなかつた時代である。信じるというほうが無理だ。

もちろん今でも「いつ」起こるかは分からぬし、「どこ」とか「どのくらい」を正確に予想することは不可能である。

しかし、小学校の時から地震というものについてそれなりに知らされてきた。

やはり全く知らないのと、知っているのとではいろいろ違つてくる。だから様々な形で国民に注意を呼びかけてきたのだ。

運命の日の10日前、消防庁災害対策部隊は山梨へ移動を命じられ、在関東の陸軍部隊で被害が大きいと予想される地域にいる部隊は被害の少ない地域への移動を命じた。

さらに海軍には横須賀などの艦艇を駿河湾へ移動させたし、空軍部隊も関東から移動させている。

そして東京湾の真ん中には物資や陸軍の救援用部隊を搭載している海軍の輸送艦を停泊させた。

そのほかにも災害対策本部の設置、空軍機を利用した物資輸送計画（（といつても搭載量が少ないのが難点だが）や被害を把握するための偵察飛行の計画などが極秘裏に進められている。

マスコミ（と言つても新聞と始まつたばかりのラジオぐらいしかないが）の一部はこの軍の移動を不思議に思つて取り上げたものがあつたが、軍部は関東地方対中部地方の陸海空軍による特別大演習を陛下が急にお命じになつたためと発表してごまかした。

輸送艦はトラック諸島などへ向かう輸送船団が足止めを喰らつているとか、そんな適当なことが言われている。

しかし、一部では近々関東で大規模な地震が起こるという噂が流れているようだ。

どこから漏れたのか知らないが、やはり人の口に戸はたてらないらしい。

まあ、それで人が避難して被害が少なくなるならいいけどな。

運命の日が刻一刻と迫る。

初めは全く信じていなかつた部隊の面々の間にも緊張が高まつていく。

そして、その日は訪れた。

「ひづら『鳳翔』12番機。現在相模湾上空を飛行中。予定時刻1時間前、異常は認められず。引き続き、偵察を続行す」

俺は西安に設けられた政府の対策室にいる。

各地から報告が入つてきている。

今のは聞いての通り空母「鳳翔」が出した偵察機からのもの。

「鳳翔」は東京湾にいた輸送船団とともに大島の南を航行中だ。

「陛下、果たして本当に起きたのでしょうか? 地震が起こりそうな様子など何一つありませんが……」

加藤友三郎首相が俺に話しかけてくる。

「わかんないよ。でも可能性は高いはず……。でも君に言われるとなんとなく自信がないな……」

首相は「はあ……」と怪訝な様子で返事を返した。正直なところ地震は起こらない気がしてきている。

なぜなら、今話しかけてきた加藤首相がまだ生きていていたことがそもそも史実と違う。

もちろん、史実と違うといひなど五万とあり逆になぜ起くるのか、と自分自身疑問だ。

まあ、実際起こらなければ起こりないでいいんだけど。

しかし、1920年12月16日に中国で起きたのはずの寧夏・海原地震はちゃんと起きていた。

死者・行方不明者は史実と違ったため救助がきちんと行なわれたことや、マグニチコードが8・7から7・1に下がつていたこともあり、史実の22万人から7万人まで減っていたが、それでも大きな爪あとを残している。

そのほかの地震も史実と多少食い違う部分もあるものの、ほぼ「予定通り」に起きてきた。

（ただしほとんどは後から史実どおりだと知ったものばかりだが）これまで防ぐことなどまったく思いつかなかつたが、今度こそは被害を最小限に抑え国民を一人でも多く救つてやりたい。

「予定時刻10分前です」

クッキーがそう告げると室内の緊張感はもうこれ以上ないと叫びへり高まる。

身動き一つするだけでも大変な空氣だ。

そして長い長い沈黙の末、そのときはやつてきた。

「予定時刻です」

クッキーの声が妙に響いた。

全員が報告に聞き耳を立てる。

しかし報告は入つてこない。

揺れが伝わるのに時間がかかるからか……？

「いちら『鳳翔』5番機、現在新宿上空なれど異常なし」

現在時刻は午後0時5分。

とつぐに揺れが伝わっていないとおかしい。

ということはなかつたのか？

「東京都知事から連絡です。揺れは全くない。現時点で地震と呼べるものは起きていないということです」

受話器を持った職員が全体に聞こえるよう大きな声で叫びつ。災害対策本部内に安堵の声が聞こえた。

「良かつたですね、陛下の杞憂で。実際に起きたら大きな犠牲者と損害が出たことでしょう」

心底ほつとした、という声で話しかけてくる。俺もなんか残念なような気持ちがしているが、とりあえず良かつた。誰も地震なんて来て欲しくはないしな。

しかし、それからしばらくしてその安堵を吹き飛ばす報告が入った。

「大阪管区気象台より報告。震度4、強震を観測し、なおかつ神戸や淡路島の方角で煙が上がっているとのことです」

その報告に皆は一体何を言つているんだ?と報告者を見つめた。

報告者は自分は今おかしなことを言つたか?と手元の電文を読み直す。

しかしその通りであつたようだ。

「陸軍岸和田通信隊より報告!『我、強い揺れを感じず。淡路島洲本市方面に煙を確認し……』

「呉鎮守府より報告!『神戸港湾防備隊所属艦艇より報告を受く。神戸市街壊滅との報告あり。神戸港湾防備隊司令部、応答なく……』

「境燈台からも同様の報告が……」

次々に舞い込む報告。

皆ようやく理解し始めた。

関東大震災ではなく、関西大震災が起きていることを……。

第65話 地震大国（後書き）

毎回毎回遅くなり申し訳ないです。それに加えて架空戦記なのに戦争に関係ない出来事ばかり……。まだまだ戦争までは時間がかかります。気長にお付き合いください。

今思えばこの話は60話あたりの予定で書いていたのになぜ5話も遅くなつたのだろう……？まあ、理由は思いつきで話を次々に投げ入れたためですが。

それでは明朝ハワイに出撃いたします。攻撃目標はアラモアナS.Cを始めとする観光地！できれば戦艦ミズーリとアリゾナ！「この木なんの木、気になる気になる」の宣伝で有名なモアナルアガーデンやカメハメハ大王像も見逃さない！しかしながらモンドヘッドの道路は工事中なんだ？楽しみだつたのに……。（おかげで登れないんです。泣）

すいません、テンションが変になつていています。まあ、とにかく行つてきます。

今ならどこで何が起こるかほぼすぐに情報が入ってくる。

マスコミが飛び回り、政府も様々な形で情報を収集するし、自衛隊や消防隊はすぐに現地に入れるからだ。

救助活動にも瓦礫の中に埋まっている人を探り出す機械だの、瓦礫を掘る機械だのいろんなものが使われている。

ハイパーレスキュー隊とかいうのが埋もれた車から小さな子供を助けたニュースも皆さんご存知だろう。

ところが俺が今いる時代は1923年だ。

ヘリコプターもなければコンピュータもない。

情報は生き残っている人が生き残っている機械で送ってくれたり、近くの航空隊が偵察機を飛ばして直接見るのがせいぜいだ。

さらに鉄道などインフラ整備も今とは訳が違つ。

近くの陸軍部隊などには被災したと思われる地域への移動を命じ、被災者の救助や安全な地域への誘導などをさせるのだが、一番近くにある大阪や姫路の部隊でも現地に入るのに1日はかかった。

周辺地域の消防隊にも至急現地へ入って消火活動をするよう指令を出したが、道路が埋まつたりしているところもあり現地に入るのが遅れてしまう。

結果火災による被害は甚大だった。

神戸や洲本などでは丁度昼飯時だったことからいたるところで火災が発生、地元の消防隊や消防団には消火優先を指令して（無線等でつながつたところだけだが）消火に当たらせたが、火災発生場所が

あまりに多いのと消防隊自体に被害が出ていたことなどから初期消防に失敗。

火災は広がり数日間にわたって街を燃やし続けた。

火が完全に収まつたのは地震発生から2日後の9月3日のこと。

ただし神戸の火災は2日の午前中にはほぼ鎮火している。

これは必死の消火活動のおかげももちろんあるが、1日の夜に強めの雨が降つたことが大きい。

そしてこの雨は多くの命を救つた。

もし雨が降らず火災が広がり続けていれば瓦礫の下敷きになつた人や怪我をして動けなくなつたりした人達は助からなかつただろう。しかし雨のおかげでそれを防げた上に、瓦礫の中に埋まつた人の中にはその雨水を飲んだおかげで助かつたという人もいたようだ。

一方各地から応援に駆けつけた陸軍部隊や消防隊はすぐさま救助を開始した。

瓦礫に埋まつた人を一軒一軒探し、けが人の手当をし、住民に水や食料を提供したり……。

もちろん瓦礫を掘るにしても、道に出来たひび割れを直すにしてもほぼ手作業。

重機を使いたいところだが、もともと数が少ないため遠くから呼び寄せなければならないため時間が非常にかかりてしまう。復興には役立つたが、救助などの面では役に立たなかつた。

9月1日の深夜には大阪に空輸された消防庁の災害対策部隊も現地に入り大きな力を発揮した。

重機を装備した部隊もあつたが上のようく輸送に時間がかかってしまっているが、救助を専門に訓練されたこの部隊は目覚しい活躍を見せる。

現地には全5個中隊のうち関東大震災に備えていた2個中隊が派遣されたが、両中隊あわせて213名の人を救出することに成功した。

そしてそのうち160名は子供である。

倒壊した小学校の校舎の下敷きになっていた子供達がそのほとんどだ。

この小学校は全校児童421名のうちほぼ半分の214名が下敷きになっていたが、うち152名が救助されている。

しかし、これだけ必死の救助活動が行なわれたにもかかわらず死者・行方不明者は膨大なものであった。

それから半年後に出された被害調査報告書によると、

死者	1万7453名
行方不明者	9702名
負傷者	4万1200名

だつたそうだ。

関東大震災に比べれば少ないが、阪神淡路大震災に比べるとかなり多い。

時代の差かもしれないが非常に多くの犠牲者が出た。

救助に当たつていた軍や消防隊にも余震等で死傷者が出ている。

住宅や工場などの被害も大きく、それらが与えた経済への影響は国力の違いから関東大震災ほどではないにせよ、非常に大きなものであつた。

神戸は史実にない新興の企業が多く進出していったところでもあり、それらの企業の中には独力での再建が不可能なほど打撃を受けたものもある。

政府はもちろん支援するが、これから伸びようとしていた企業を停

滞させてしまった原因ともなつた。

ところで、この大地震は海軍にも大きな打撃を「えた」となつた。この付近の造船所で建造中だった空母の「飛鷹」と「隼鷹」が被災、キールが破損するなど大被害を受けたのである。

「飛鷹」は田坂重工業神戸造船所、「隼鷹」は木村造船明石造船所で建造されていたのだ。

どちらも新興の企業で、今回の発注により両企業に大型軍艦の建造を経験させておこうとしていたのだが、この予想もしない災害でそれが頓挫したばかりか空母が建造できなくなつてしまつた。

軍縮条約により空母の新規建造は5年以内に行なえとこられた。

ところが今回の地震で両艦は進水まであと少しといつまでいつていたにもかかわらず、建造再開は困難、解体を余儀なくされる被害を受けている。

つまり新しく建造しなおさなければならない。

ところが残された時間は条約が締結された1925年9月17日までだからあと2年ほど。

さすがに2年で中型空母を完成させることは困難、いや不可能だ。

日本の「雲龍」型は起工からほぼ2年で完成させているが、今から資材やら造船所の選定やらしてたら間に合わない。

それに20年前の技術力でなんとかなるものではないだろ。

アメリカのインディペンデンス型は1年くらいで完成させられるが、それはあくまでアメリカの工業力と巡洋艦の船体を流用していることだ。

実際起工からは1年半くらいはかかっている。

新規で建造したわけじゃないのだ。

ん？

巡洋艦から改装……？

そういうえば今日本は「古鷹」型重巡洋艦が進水を始めたところだつたな。

排水量は1万トン強で足も速い……。

おまけに4隻も同型艦が建造されている。

これはもしかしたらいけるかもしれないな。

俺はすぐさま海軍の建造責任者やら技師やらを呼び寄せて「古鷹」型を改装するとしたらどの程度かかるか聞いてみた。

突貫工事を行なえば1年半ほどで完成させることは出来る……、かもしれないという返事が返ってきた。

そこで4隻を建造する企業に対し、すぐさま設計を行なわせてみる。3ヶ月後、それぞれの造船所から設計案が示されて、それから最も良かつたものを選びそれをもとに各造船所は突貫工事に入った。

各造船所の死に物狂いの努力の結果、1925年9月までに全ての艦の建造は完了。

「祥鳳」「瑞鳳」「栄鳳」「名鳳」と改名され、日本海軍に編入された。

これは裏話だが、実は「栄鳳」と「名鳳」は若干未完成だった。

高角砲や機銃、航空機の一部などが未搭載のまま完成と発表され海軍に編入されていたのである。

そのため翌年2月に機関不調を理由にドック入りし（実際突貫工事の影響で不調だった）、そのときに未搭載の機器が装備された。他の2隻にしろ、様々な不調があり毎年のようにドック入りしてはいろんなところを突付かれているようだ。

まあ、完成しただけマシか。

注) 改装された重巡洋艦は史実の「古鷹」型とは無縁。基準排水量1万1000トン余、速力33ノット、主砲20・3センチ連装砲5基10門などを予定していた新型重巡洋艦。

第66話 関西大震災と海軍（後書き）

遅くなつて申し訳ありません。ハワイから帰還したものの忙しくてなかなか更新できませんでした。これからもちょっと忙しくなるので更新はマチマチになつてしまつと思います。戦間期のネタも少なくなつてきますし……（泣）。

また、他の作者様の小説を見るなどしていると自分の勉強不足を痛感しております。戦略・兵器・政治・外交など知らないことが多すぎてこれでは第一次大戦も満足に書けそうにないです。いろいろ勉強しながら書き、皆様に満足していただけるものを書きたいので更新速度の低下にはじく理解していただけたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986d/>

クラスで世界大戦！？

2010年10月15日21時43分発行